

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第200集

枚方市

津田遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月

財団法人 大阪府文化財センター



調査区遠景（南から）

津田08-1・2調査区は道路建設用地の右手前 平成21年4月撮影



第1面3建物遺物出土状況







62 墓出土灰釉陶器四耳壺



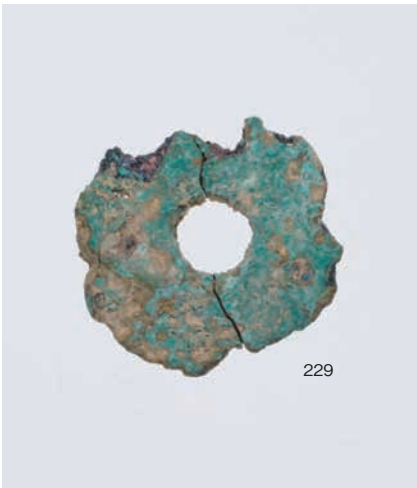
119 墓出土灰釉陶器長頸壺(瓶)



114 墓出土遺物



埴仏



青銅製品



鋳型



須恵器



灰釉陶器



緑釉陶器





序 文

生駒山地は大阪のことに河内の地からは常に間近な山なみである。その山なみが淀川流域の平野に寄り付く北河内の地に、大阪と京都を結ぶ新たな道—第二京阪国道(緑立つ道)—が築かれようとしている。

それに先立ち財団法人大阪府文化財センターは、国土交通省と西日本高速道路株式会社の委託を受けて、北東から南西にかけて、枚方市の杉中責谷、杉、津田城、津田、交野市の東倉治、倉治、有池、上私部、私部南、交野市と枚方市にまたがる上の山、茄子作、交野市の平池、寝屋川市の寝屋東、寝屋南、奥山、打上、太秦・太秦古墳群、大尾、高宮、小路、寝屋川市と門真市にかけての讃良郡条里、四条畷市の砂、門真市の巢本、三ツ島の各遺跡において、平成8年度から確認調査を、平成12年度からは本格的な発掘調査を実施してきた。その延長は実に13kmに及ぶ。

星霜ここに十数年。委託者も建設省が国土交通省に、日本道路公団が分割され西日本高速道路株式会社に、そしてわが財団法人も大阪府文化財調査研究センターから大阪府文化財センターに変わるほどの歳月を経た。この平成22年3月の道路供用開始を控え、その予定地の発掘調査も終盤を迎えたのである。

その掉尾を飾る津田遺跡の地には、古代に津田寺なる寺院が営まれ、その後の円通寺につながるという伝承がある。一方、近年の厳密な史料批判に基づく研究により、その抛りどころとする文書の信憑性に疑問符が付いていた。

調査では、山裾にしがみつくようにその存在を主張する礎石群、墓、鍛冶工房が見つかった。薄紙をはがすようにそれらを掘り出し、記録した。加えて、山上から流れ来たり、あるいは置かれた位置に踏みとどまった多量の瓦や土器、輝きを秘めた埴仏と懸仏、そして並んでたたずむ石仏がわれわれの眼前に姿をあらわした。これらを取り上げ、検討した。

つまるところ、伝承や文書を鵜呑みにはできないとしても、この地が古代から中近世にいたる人びとの祈りと悼みの場であったことが明らかになったのである。

津田遺跡の発掘調査および整理作業では、国土交通省、西日本高速道路株式会社、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会をはじめとする方々に多大なご理解とご協力を賜った。衷心よりお礼申し上げますとともに、今後ともなおいっそうのご支援をお願いするものである。

平成22年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府枚方市津田南町1・2丁目他に所在する津田遺跡（津田遺跡08-1・08-2）の発掘調査報告書である。
2. 調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所ならびに西日本高速道路株式会社関西支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査および報告書作成にかかわる受託契約と契約期間、工事請負契約の名称、期間は以下のとおりである。

平成20年度（08-1 調査）

受託事業名【国土交通省】第二京阪道路（大阪北道路）津田遺跡発掘調査（その2）

【西日本高速道路株式会社】平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡その2）

委託期間 平成20年6月1日～平成21年3月31日

調査期間 平成20年6月20日～平成20年12月26日

平成20年度（08-2 調査）

受託事業名【国土交通省】第二京阪道路（大阪北道路）津田遺跡発掘調査（その3）

【西日本高速道路株式会社】平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡その3）

委託期間 平成20年10月1日～平成21年3月31日

調査期間 平成20年10月29日～平成21年3月31日

平成21年度（08-2 調査・整理作業）

受託事業名【国土交通省】第二京阪道路津田遺跡発掘調査

【西日本高速道路株式会社】平成21年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡）

委託期間 平成21年4月1日～平成22年3月31日

調査期間 平成21年4月1日～平成21年5月29日

3. 調査・整理は以下の体制で実施した。

〔調査〕平成20年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰、主査 上野貞子〔写真〕、
調査第一係長 三好孝一、主査 村上富喜子、副主査 本間元樹、副主査 森本 徹、技師 河端 智、
技師 湯本 整、技師 内田真雄

〔調査・整理〕平成21年度

調査部長（兼調査課長）福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査グループ長 寺川史郎、
主査 上野貞子〔写真〕、京阪総括主査 三好孝一、副主査 本間元樹

4. 金属器などのX線撮影およびその保存処理については、調査グループ主査 山口誠治・専門調査員 橋本俊範が行った。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、枚方市津田南自治会をはじめとし、下記の方々にご指導、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)
平尾政幸・網 伸也・南 孝雄(京都市埋蔵文化財研究所)、久保智康・尾野善裕(京都国立博物館)、大脇 潔(近畿大学)、安部みき子(大阪市立大学大学院医学研究科)、奥田 尚(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)、三宅俊隆(財団法人枚方市文化財研究調査会)、馬部隆弘(枚方市立中央図書館市史資料室)、横田 明(大阪府教育委員会)
6. 本書の編集は本間元樹が担当した。執筆分担については目次に記載したとおりである。
7. 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面 (T.P.) を使用している。
2. 遺構平面図の座標値は、世界測地系 (測地成果2000) に基づく国土座標第Ⅵ系で表記する。報告書内での単位はkmである。
3. 本書で用いた北は国土座標第Ⅵ系の座標北を基準とし、磁北は西に $6^{\circ} 54'$ 、真北は東に $0^{\circ} 10'$ 振っている。遺構実測図等に付す方位針は、全て座標北を示す。
4. 発掘調査及び整理作業の実施に際しては当センター制定の『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年8月)に準拠した。
5. 本書で用いた土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
6. 遺構番号は、08-1 調査区・08-2 調査区とも遺構種類に関わらずそれぞれ通し番号とした。なお、検討の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。
7. 掲載図面の縮尺は、調査区平面図 $1/400$ 、遺構図 $1/10$ ・ $1/20$ 、土器 $1/4$ 、磨製石器 $1/2$ 、打製石器 $2/3$ 、石仏 $1/8$ 、青銅製品 $1/2$ 、鉄製品 $1/3$ を基本とするが、適宜縮尺を変更したものがある。個々の縮尺については各図のスケールバーを参照されたい。
8. 土器類の断面は、須恵器を黒塗り、瓦・瓦器・瓦質土器をアミフセ10%、その他を白抜きとした。土器表面に付着した釉や赤色顔料はアミフセ5%、油の炭化物は実物に即して濃淡をつけて表現した。転用硯の磨られた範囲もアミフセ5%とした。図上復元できない土器の小片は、「内面-断面-外面」と配置した。打製石器の新欠部分は黒塗りとした。遺構断面図にかかる遺物や石は右上がりの斜線、基盤層はアミフセ10%とした。
9. 本書における遺物番号は実測図、写真図版とも一致する通し番号とした。
10. 各報文作成者による見解の相違や文章表現法については敢えて統一していない。
11. 写真掲載遺物の縮尺は任意である。

目 次

| | |
|-----------------------|------------|
| カラー写真図版 | 1～8 |
| 序文 | i |
| 例言 | ii |
| 凡例 | iv |
| 目次 | v |
| カラー写真図版目次 | vi |
| 図目次 | vi |
| 表目次 | ix |
| 写真図版目次 | ix |
| | |
| 第1章 調査にいたる経緯と経過 | (本間元樹) 1 |
| | |
| 第2章 位置と環境 | |
| 第1節 地理的環境 | (本間) 3 |
| 第2節 歴史的環境 | (本間) 3 |
| | |
| 第3章 調査・整理の方法 | (本間) 6 |
| | |
| 第4章 08-1 調査区の調査成果 | |
| 第1節 概要 | (三好孝一) 9 |
| 第2節 層序 | (三好) 9 |
| 第3節 遺構 | (三好) 9 |
| 第4節 遺物 | (村上富喜子) 18 |
| | |
| 第5章 08-2 調査区の調査成果 | |
| 第1節 概要 | (本間) 25 |
| 第2節 層序 | (本間) 25 |
| 第3節 第1面の遺構と遺物 | (本間) 34 |
| 第4節 第2面の遺構と遺物 | (本間) 72 |
| 第5節 第2-2面の遺構と遺物 | (本間) 91 |
| 第6節 第3面の遺構と遺物 | (本間) 96 |
| 第7節 包含層出土遺物 | (本間) 101 |
| 第8節 まとめ | (本間) 124 |
| | |
| 第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地 | (奥田 尚) 129 |

| | |
|-------------------|---------|
| 土器・瓦等観察表(表5)..... | 132～146 |
| 写真図版..... | 1～48 |
| 報告書抄録..... | 巻末 |

カラー写真図版目次

| | |
|----------|----------------------------|
| カラー写真図版1 | 調査区遠景 08-2調査区 第1面3建物遺物出土状況 |
| カラー写真図版2 | 08-2調査区 第1面3建物出土青銅製品 |
| カラー写真図版3 | 08-2調査区 第1面2墓出土遺物 |
| カラー写真図版4 | 08-2調査区 第2面62・114・119墓出土遺物 |
| カラー写真図版5 | 08-2調査区 出土埴仏、青銅製品、鋳型 |
| カラー写真図版6 | 08-2調査区 出土須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器 |
| カラー写真図版7 | 08-2調査区 出土青磁、青白磁 |
| カラー写真図版8 | 08-2調査区 出土褐釉陶器 |

図目次

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| 図1 | 遺跡分布..... | 2 |
| 図2 | 周辺地形..... | 4 |
| 図3 | 地区割り..... | 7 |
| 図4 | グリッド配置..... | 8 |
| 図5 | 08-1調査区 西壁断面..... | 10 |
| 図6 | 08-1調査区 第1面..... | 11 |
| 図7 | 08-1調査区 第1面1溝、2土坑..... | 12 |
| 図8 | 08-1調査区 第1面3・4土坑..... | 13 |
| 図9 | 08-1調査区 第1面5井戸..... | 14 |
| 図10 | 08-1調査区 第2面..... | 16 |
| 図11 | 08-1調査区 第3面..... | 16 |
| 図12 | 08-1調査区 第3面50溝遺物出土状況..... | 17 |
| 図13 | 08-1調査区 出土石器..... | 18 |
| 図14 | 08-1調査区 出土弥生土器..... | 18 |
| 図15 | 08-1調査区 第3面50溝出土遺物..... | 19 |
| 図16 | 08-1調査区 第3面20・50溝出土遺物..... | 20 |
| 図17 | 08-1調査区 第3面51流路出土遺物..... | 20 |
| 図18 | 08-1調査区 第3面出土五輪塔空風輪..... | 21 |
| 図19 | 08-1調査区 中世洪水砂出土遺物..... | 22 |

| | | |
|-----|--|----|
| 図20 | 08-1 調査区 第1面1溝、耕土層、近世洪水砂出土遺物 | 23 |
| 図21 | 08-2 調査区 調査前地形 | 26 |
| 図22 | 08-2 調査区 A断面 | 27 |
| 図23 | 08-2 調査区 B断面 | 29 |
| 図24 | 08-2 調査区 C断面 | 30 |
| 図25 | 08-2 調査区 D断面 | 32 |
| 図26 | 08-2 調査区 E断面 | 33 |
| 図27 | 08-2 調査区 第1面 | 35 |
| 図28 | 08-2 調査区 第1面における金属探査 | 36 |
| 図29 | 08-2 調査区 第1面3建物検出状況 | 37 |
| 図30 | 08-2 調査区 第1面3建物断面 | 38 |
| 図31 | 08-2 調査区 第1面3建物遺物出土状況 | 39 |
| 図32 | 08-2 調査区 第1面3建物青銅製品等出土状況 | 40 |
| 図33 | 08-2 調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(1) | 42 |
| 図34 | 08-2 調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(2) | 43 |
| 図35 | 08-2 調査区 第1面3建物出土軒平瓦 | 44 |
| 図36 | 08-2 調査区 第1面3建物出土丸瓦 | 45 |
| 図37 | 08-2 調査区 第1面3建物出土平瓦 | 46 |
| 図38 | 08-2 調査区 第1面3建物出土行基葺丸瓦、竹管文のある平瓦、隅瓦、面戸瓦 | 47 |
| 図39 | 08-2 調査区 第1面3建物出土雁振瓦 | 48 |
| 図40 | 08-2 調査区 第1面3建物出土その他の道具瓦類 | 49 |
| 図41 | 08-2 調査区 第1面3建物出土菊花文軒丸瓦、剣頭文軒平瓦(1) | 50 |
| 図42 | 08-2 調査区 第1面3建物出土剣頭文軒平瓦(2) | 51 |
| 図43 | 08-2 調査区 第1面3建物出土土器、石製品、金属製品 | 53 |
| 図44 | 08-2 調査区 第1面29土坑出土遺物 | 54 |
| 図45 | 08-2 調査区 第1面26石仏列 | 56 |
| 図46 | 08-2 調査区 第1面26石仏列ほか出土石仏 | 57 |
| 図47 | 08-2 調査区 第1面3建物、26石仏列完掘状況 | 58 |
| 図48 | 08-2 調査区 第1面2墓 | 59 |
| 図49 | 08-2 調査区 第1面2墓出土遺物 | 60 |
| 図50 | 08-2 調査区 第1面18竪穴、24炉、23・25・30ピット | 62 |
| 図51 | 08-2 調査区 第1面18竪穴出土遺物 | 63 |
| 図52 | 08-2 調査区 第1面235溝 | 64 |
| 図53 | 08-2 調査区 第1面31・235溝出土遺物 | 64 |
| 図54 | 08-2 調査区 第1面1石群 | 65 |
| 図55 | 08-2 調査区 第1面4石組(1) | 66 |
| 図56 | 08-2 調査区 第1面4石組(2) | 67 |
| 図57 | 08-2 調査区 第1面17・236石群 | 68 |

| | | |
|-----|-------------------------------|-----|
| 図58 | 08-2調査区 第1面石組、土坑、ピットほか出土遺物 | 69 |
| 図59 | 08-2調査区 第1面8土坑、27・28ピット | 70 |
| 図60 | 08-2調査区 第2面 | 73 |
| 図61 | 08-2調査区 第2面32石群 | 74 |
| 図62 | 08-2調査区 第2面89石群 | 75 |
| 図63 | 08-2調査区 第2面84石囲い | 76 |
| 図64 | 08-2調査区 第2面93焼土坑 | 77 |
| 図65 | 08-2調査区 第2面62・114・119墓 | 79 |
| 図66 | 08-2調査区 第2面62・114・119墓出土遺物 | 80 |
| 図67 | 08-2調査区 第2面50・76・90土坑 | 83 |
| 図68 | 08-2調査区 第2面110・111・121・125土坑 | 84 |
| 図69 | 08-2調査区 第2面土坑、ピット出土遺物 | 88 |
| 図70 | 08-2調査区 第2面43落ち込み出土遺物 | 89 |
| 図71 | 08-2調査区 第2面83落ち込み出土遺物 | 90 |
| 図72 | 08-2調査区 第2-2面 | 92 |
| 図73 | 08-2調査区 第2-2面134土坑、135焼土坑 | 93 |
| 図74 | 08-2調査区 第3面 | 97 |
| 図75 | 08-2調査区 第3面231石群、227ピット | 98 |
| 図76 | 08-2調査区 第3面191ピット、225落ち込み出土遺物 | 100 |
| 図77 | 08-2調査区 包含層出土石器 | 102 |
| 図78 | 08-2調査区 第2層出土縄文土器、弥生土器 | 103 |
| 図79 | 08-2調査区 包含層出土鋳型、埴仏 | 103 |
| 図80 | 08-2調査区 包含層出土古代の丸瓦、平瓦(1) | 104 |
| 図81 | 08-2調査区 包含層出土古代の平瓦(2) | 105 |
| 図82 | 08-2調査区 包含層出土古代の土師器 | 106 |
| 図83 | 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(1)、転用硯 | 108 |
| 図84 | 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(2) | 109 |
| 図85 | 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(3) | 110 |
| 図86 | 08-2調査区 包含層出土緑釉陶器、灰釉陶器 | 111 |
| 図87 | 08-2調査区 包含層出土中世の土師器 | 112 |
| 図88 | 08-2調査区 包含層出土瓦器 | 113 |
| 図89 | 08-2調査区 包含層出土瓦質土器 | 114 |
| 図90 | 08-2調査区 包含層出土東播系須恵器、古瀬戸、常滑焼 | 116 |
| 図91 | 08-2調査区 包含層出土輸入陶磁器 | 117 |
| 図92 | 08-2調査区 包含層出土中世の軒瓦、丸瓦 | 118 |
| 図93 | 08-2調査区 包含層出土中世の平瓦 | 119 |
| 図94 | 08-2調査区 包含層出土滑石製品 | 120 |
| 図95 | 08-2調査区 包含層出土五輪塔火輪、地輪(1) | 121 |

| | | |
|------|-----------------------|-----|
| 図96 | 08-2調査区 包含層出土五輪塔地輪(2) | 122 |
| 図97 | 08-2調査区 包含層出土金属製品 | 123 |
| 図98 | 08-2調査区 飛鳥時代～奈良時代の遺構 | 125 |
| 図99 | 08-2調査区 平安時代の遺構 | 125 |
| 図100 | 08-2調査区 鎌倉時代の遺構 | 127 |
| 図101 | 08-2調査区 安土桃山時代の遺構 | 127 |
| 図102 | 08-2調査区 第1面3建物石材 | 131 |

表 目 次

| | | |
|----|-----------------------|---------|
| 表1 | 08-2調査区 第1面土坑・ピット一覧 | 71 |
| 表2 | 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧 | 85～87 |
| 表3 | 08-2調査区 第2-2面土坑・ピット一覧 | 94～95 |
| 表4 | 08-2調査区 第3面土坑・ピット一覧 | 99～100 |
| 表5 | 土器・瓦等観察表 | 132～146 |

写真図版目次

| | |
|--------|--------------------------|
| 写真図版1 | 08-1調査区 第1面(1) |
| 写真図版2 | 08-1調査区 第1面(2)、第3面(1) |
| 写真図版3 | 08-1調査区 第3面(2)、第3面遺物出土状況 |
| 写真図版4 | 08-2調査区 遠景、調査前状況 |
| 写真図版5 | 08-2調査区 第1面、第1面3建物(1) |
| 写真図版6 | 08-2調査区 第1面3建物(2) |
| 写真図版7 | 08-2調査区 第1面3建物(3) |
| 写真図版8 | 08-2調査区 第1面3建物(4) |
| 写真図版9 | 08-2調査区 第1面26石仏列、1石群 |
| 写真図版10 | 08-2調査区 第1面2墓、4石列 |
| 写真図版11 | 08-2調査区 第1面18竪穴、235溝 |
| 写真図版12 | 08-2調査区 第2面 |
| 写真図版13 | 08-2調査区 第2面32石群 |
| 写真図版14 | 08-2調査区 第2面89石群 |
| 写真図版15 | 08-2調査区 第2面84石囲い |
| 写真図版16 | 08-2調査区 第2面93焼土坑、121ピット |
| 写真図版17 | 08-2調査区 第2面62・114・119墓 |
| 写真図版18 | 08-2調査区 第2-2面 |

- 写真図版19 08-2調査区 第2-2面134土坑、135焼土坑
- 写真図版20 08-2調査区 第3面
- 写真図版21 08-1調査区 出土遺物
- 写真図版22 08-2調査区 第1面3建物出土軒丸瓦
- 写真図版23 08-2調査区 第1面3建物出土軒平瓦
- 写真図版24 08-2調査区 第1面3建物出土丸瓦・平瓦
- 写真図版25 08-2調査区 第1面3建物出土道具瓦類(1)
- 写真図版26 08-2調査区 第1面3建物出土道具瓦類(2)
- 写真図版27 08-2調査区 第1面3建物出土遺物、29土坑出土瓦、26石仏列(1)
- 写真図版28 08-2調査区 第1面26石仏列(2)、石仏
- 写真図版29 08-2調査区 第1面2墓出土遺物
- 写真図版30 08-2調査区 第1面各遺構出土遺物
- 写真図版31 08-2調査区 第1面31・235溝出土土器
- 写真図版32 08-2調査区 第2面各遺構出土遺物
- 写真図版33 08-2調査区 包含層出土石器
- 写真図版34 08-2調査区 包含層出土縄文土器、弥生土器、古代の瓦(1)
- 写真図版35 08-2調査区 包含層出土古代の瓦(2)、土師器
- 写真図版36 08-2調査区 包含層出土須恵器(1)
- 写真図版37 08-2調査区 包含層出土須恵器(2)
- 写真図版38 08-2調査区 包含層出土須恵器(3)
- 写真図版39 08-2調査区 包含層出土中世の土師器(1)
- 写真図版40 08-2調査区 包含層出土中世の土師器(2)
- 写真図版41 08-2調査区 包含層出土瓦器(1)
- 写真図版42 08-2調査区 包含層出土瓦器(2)、瓦質土器
- 写真図版43 08-2調査区 包含層出土陶器
- 写真図版44 08-2調査区 包含層出土古瀬戸、中世の瓦、滑石製品
- 写真図版45 08-2調査区 包含層出土地輪
- 写真図版46 08-2調査区 包含層出土銭貨
- 写真図版47 08-2調査区 第1面18竪穴、25ピット出土鉄釘・滓
- 写真図版48 08-2調査区 第1面22土坑出土鉄釘・滓等、第2面119墓出土骨

第1章 調査にいたる経緯と経過

津田遺跡は、大阪府枚方市津田南町1・2丁目他に位置する周知の遺跡である。昭和47(1972)年の発見以来、地元の枚方市教育委員会および財団法人枚方市文化財研究調査会により多くの調査が実施されてきた。古墳時代～中世の生産遺跡として遺跡分布図に記載されている。

財団法人大阪府文化財センターでも、一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴い平成15(2003)年度に津田遺跡の範囲および遺構の時期や内容の確認を行ったところ、弥生時代から戦国時代の遺構や遺物の存在が判明した。

平成18(2006)年度には、津田遺跡05-1調査として発掘調査を行った。その結果、弥生時代の集落および鎌倉時代の居館などを検出した。弥生時代中期前葉の竪穴住居群は、枚方市・交野市地域ではまともって調査されたものとしては数少ない例となった。鎌倉時代の居館は、大溝と堀によって区画された掘立柱建物群である。立地する山裾は山から流れ出す水を把握できる場所であり、平野部の水田開発との関係で注目される成果であった。

今回の津田遺跡08-1・08-2調査は、一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路の建設工事に伴い埋め立てられた大原池・新池の代替池を築造する工事に先立つものである。この範囲は05-1調査区の東側にあたり埋蔵文化財の存在が充分予測された。そこで、平成19(2007)年度末に事業計画地内において確認調査を実施したところ、古代から中世にかけての須恵器や土師器をはじめとする土器や、耕作に関連する遺構が検出された。この成果を受けて平成20(2008)年度に発掘調査を実施するよう関係各機関で調整がなされた。

08-1調査区 確認調査の結果、第3層に18世紀後半代のくらわんか手肥前系磁器が含まれており、第4層は無遺物の自然堆積であることが判明していた。

平成20(2008)年6月20日から着手した現地調査では、確認調査の結果を踏まえて、第4層の途中までを機械力にて除去し、以下を人力に変更するという方法を採用し、作業効率を高めるよう配慮した。また、平面図の作成についても、写真測量を積極的に導入し、図化の省力化と迅速化を図った。平成20年12月26日を以て現地での調査を終了した。

08-2調査区 確認調査において、深い所では山砂が2m以上も堆積していることが判明し、その下に中世の瓦や石が敷きつめられた平坦面、古代の土器を含む地層、さらに下層からも遺物を含む可能性の高い地層が見つかった。

平成20(2008)年10月から調査に入り、大量の山砂を重機により慎重かつ迅速に掘削した。本格的な人力掘削に移行してから、主に古代から中世にいたる多くの遺構・遺物が出土した。平成21(2009)年5月末に現地調査を完了した。

普及広報活動 現地調査で礎石建物や石仏などが検出されるとともに見学希望も多く寄せられたため、平成21(2009)年2月21日(土)、08-2調査区の第1面調査中に現地を公開した。それ以外にも随時、多くの研究者・見学者が訪れた。

整理作業 平成21(2009)年6月～12月に行った。基礎整理作業からはじめ、専門家のご指導や同僚諸氏の援助を受けながら、図・表・写真・原稿などを作成し、報告書にまとめた。



この地図は、国土地理院が平成14年に発行した「枚方」1:25000をもとに作成した図に遺跡範囲を加筆したものである。

図1 遺跡分布

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

津田遺跡の所在する枚方市は、大阪府の北東部、淀川左岸に位置する。大阪市と京都市のほぼ中間にあたる。東部は生駒山地の山裾とそれに連なる丘陵であり、中部以西の市域の大部分は段丘上にある。その段丘を生駒山地を源流とする船橋川、穂谷川、天野川が開析し、市域の北西側を琵琶湖から大阪湾に流れ下る淀川に注いでいる。

津田遺跡は、枚方市の南部、生駒山地北端近くの西麓部に位置する。生駒山地は花崗岩を主体としており、それらの風化土壌が流下することにより数多くの扇状地が形成されている。今回の調査地は、穂谷川と天野川にはさまれた交野台地の最も山寄り、扇状地と山地との接点にあたる(図2)。

津田遺跡08-1調査区は、円通谷と呼ばれる谷部とその前面に形成された扇状地の扇頂部に位置する。標高はおよそ T.P. +80m前後で、調査前までは水田として利用されていた。

津田遺跡08-2調査区は、円通谷北側の中位段丘面に立地し、調査前は棚田であったという。標高はおよそ T.P. +90～93mであったが、最終的には低い部分ではおよそ T.P. +85.3mまで掘り下げた。調査地から西方の交野台地とその遠方に摂津の山なみを望むことができる。

08-2調査区のすぐ北側に、およそ T.P. +93m(08-2調査区の最高所とほぼ同じ高さ)で東西約35m、南北約25mの範囲の山裾から西に張り出した平坦地がある。現在は畑として利用されている。調査区の東側は山である。一方、西側は昭和40年代までは耕作地であったが、その後、山裾まで宅地化が進んだ。大規模な第二京阪道路の建設が進む現在、その景観はさらに大きく変わろうとしている。

第2節 歴史的環境

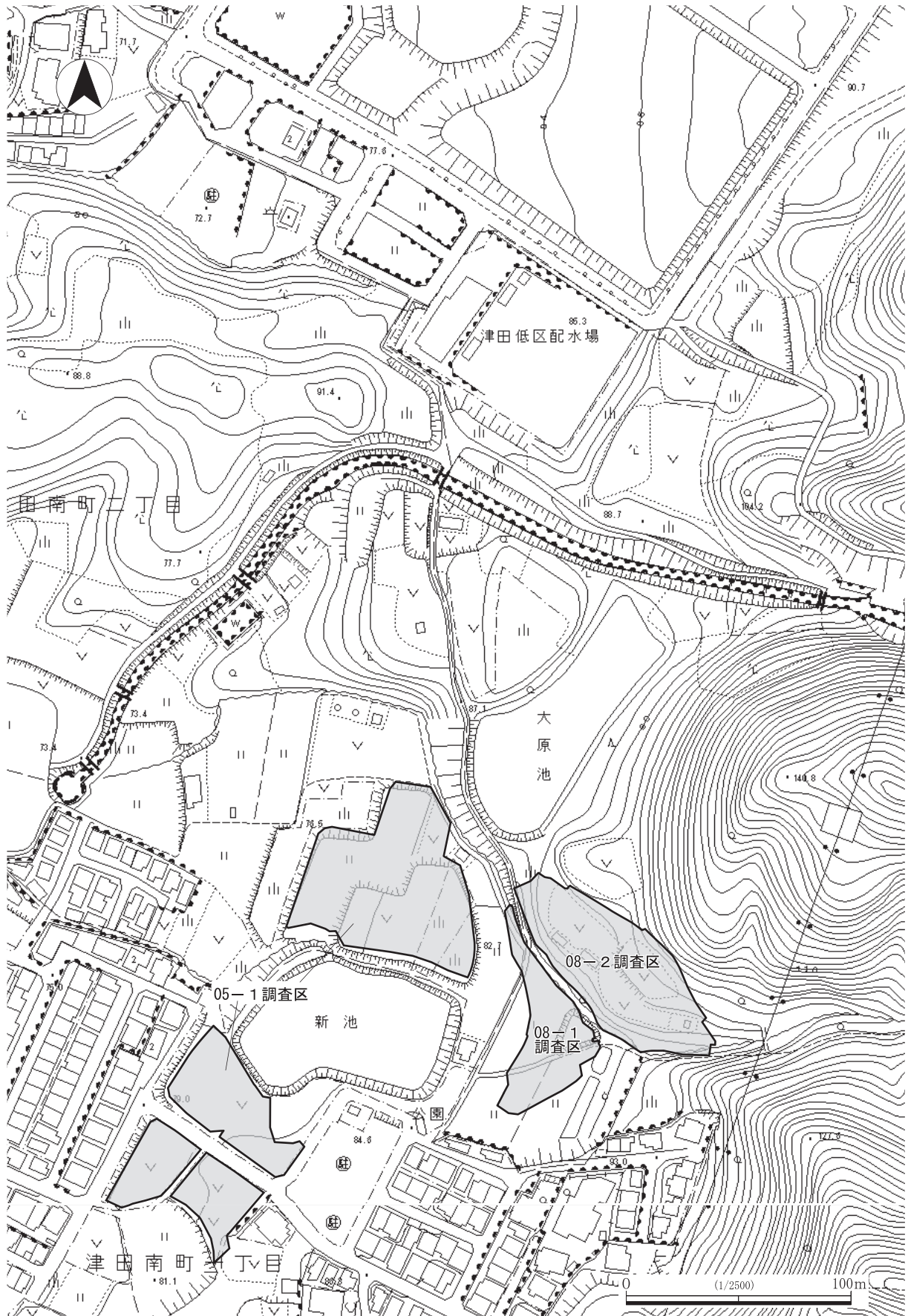
津田遺跡周辺では旧石器時代から近世に至る多くの遺跡が周知されている。図1の範囲を中心に時代順に概観する。

旧石器時代 谷口扇状地などに遺跡が立地している。穂谷川流域の藤阪宮山遺跡では炉跡と細石器が検出された。津田三ツ池遺跡は国府型ナイフなどの散布地である。津田トッパナ遺跡、津田城遺跡城坂地区、神宮寺遺跡などからも有舌尖頭器、ナイフ形石器や剥片が出土した。

縄文時代 台地上を中心に遺跡が分布する。穂谷川流域に前期の津田三ツ池遺跡などあり、天野川流域では、押型文土器が出土し早期の神宮寺式の標式遺跡となった神宮寺遺跡が知られる。

弥生時代 台地上に加えて、水稻耕作に伴い低湿地にも集落が進出するようになる。天野川流域の私部南遺跡では縄文時代晩期の長原式土器から弥生時代前期の遠賀川系土器への変遷がみられる。

中期には遺跡数が増大し、特に中期後半になると高地性集落も出現する。穂谷川流域の田口山遺跡からは鉄器が多数出土した。津田城遺跡古城地区では焼失住居も検出された。天野川流域では村野遺跡、大型円形堅穴住居をもつ私部南遺跡、独立棟持柱のある大型掘立柱建物や方形周溝墓を含む上の山遺跡などがある。



この地図は、大阪府が平成11～13年にかけて作成した大阪府ベクトル地形データ1/2500を編纂したものである。

図2 周辺地形

後期には比較的小規模な集落が広範囲に分布する。穂谷川水系の長尾西遺跡は高地性集落で焼失住居もみられる。藤阪東遺跡、ごんぼう山遺跡、出屋敷遺跡も成立する。津田城遺跡城坂地区も高地性集落である。天野川流域でも円形堅穴住居をもつ東倉治遺跡、環濠のある寺村遺跡、南山遺跡、星丘遺跡などの集落が新たに出現する。

古墳時代 前期には天野川流域の丘陵部にバチ形の前方部を持つ古墳を含む森古墳群が出現する。集落は穂谷川流域の藤阪南遺跡、津田トッパナ遺跡などで見つかっている。

中期になると天野川流域では、多様な墳形で構成される車塚古墳群が森古墳群に続いて造営される。また車塚古墳群の南側に隣接する森遺跡では、中期から後期にかけて大規模な製鉄が行われる。私部南遺跡では掘立柱建物や堅穴住居がみられる。

後期には天野川流域の倉治古墳群、寺古墳群などで群集墳が造営され、津田古墳や清水谷古墳も築造される。須恵器窯の操業も盛んで、穂谷川流域に山田池窯跡群、天野川流域に大谷窯跡、大谷北窯跡が展開する。上私部遺跡には飛鳥時代にまで続く大規模な集落が営まれる。

奈良時代 山麓部に須恵器窯などがみられる。穂谷川流域の藤阪遺跡、天野川流域の大谷北窯跡や津田城遺跡城坂窯跡では、古墳時代後期から引き続き須恵器窯が操業している。私部南遺跡の集落からは硯も見つかった。

平安時代 現代にも踏襲される耕地の整備が進む。天野川流域の有池遺跡では鎌倉時代に最盛期を迎える集落の萌芽がみられる。森遺跡では9世紀後半の溝や井戸などが検出され、荘園などとの関連も指摘されている。

鎌倉時代 穂谷川流域の津田トッパナ遺跡では方形居館、掘立柱建物、大溝がみられ、輸入陶磁器も出土する。津田エンサキ遺跡では穂谷川の氾濫原が耕地化された。天野川流域の有池遺跡に溝で囲まれた屋敷地を複数含む大規模な集落が営まれ、隣接する上私部遺跡では水田が拓かれた。

室町時代 穂谷川流域の津田エンサキ遺跡では多数のピット群と区画溝がみられる。藤阪南遺跡も中世以降の集落である。天野川流域の津田城遺跡の古城地区や本城地区では断面V字形の堀が掘削される。私部城跡は南北朝時代から戦国時代に至る平城である。

主要参考文献

片山長三 1957『津田史』津田小学校創立八十周年記念事業発起人会

枚方市史編纂委員会 1986『枚方市史 第1巻 本文編 地理・考古』枚方市

枚方市史編纂委員会 1986『枚方市史 第12巻 年表・索引・考古補遺編』枚方市

交野市史編纂委員会 1992『交野市史 考古編』交野市

財団法人大阪府文化財センター 2008『津田遺跡』財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第175集

その他、財団法人大阪府文化財センターの第二京阪道路関係の各報告書

第3章 調査・整理の方法

調査区の位置 津田遺跡08-1・08-2調査区は、遺跡範囲内の東部、枚方市津田南町1・2丁目に位置する(図1・2)。

調査区の呼称 「津田遺跡」の後の「08」は、調査を実施した2008(平成20)年度の下2桁。次の「-1」または「-2」はその年度の発注(工事請負)を表す。

地区割 当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年)に定められた方法で地区割を行った。世界測地系(2002年4月以降)の国土座標軸に準拠し、調査対象地にメッシュをかける方法である(図3)。

当センターが調査領域とする大阪府内は、全て国土座標軸(世界測地系)の第VI座標系に相当する。大阪府の南西端は、第VI座標系の $X = -192\text{km}$ ・ $Y = -88\text{km}$ にあたる。

第I区画は、ここを基準とし大阪府全域を南北(縦)6kmごとにA~Oに、東西(横)8kmごと0~8に分割したもので、1/10000地形図の範囲に相当する。今回の調査範囲は「J7」。

第II区画は、第I区画を南北(縦)1.5km、東西(横)2kmごとに各4分割、すなわち16等分したもので、1/2500地形図(都市計画図)の範囲に相当する。第II区画は、南西端を1とし、東へ4まで、1から順に北に5・9・13、北東端を16と平行式に表示する。今回の調査範囲は「15」。

第III区画は、第II区画内の北東端を基点とし、1辺100mの正方形に、南北(縦)をA~Oの15に、東西(横)を1~20に区画したもので、今回の調査範囲の大部分は「9K」で、西端のごく一部は「10K」。

第IV区画は、第III区画内の北東端を基点に、南北(縦)をa~jの15に、東西(横)を1~20の1辺10mの正方形に区画したもので、表示は横・縦の順に「8d」など。

したがって、今回の調査範囲の内10×10mグリッドは、「J7(第I区画)-15(第II区画)-9K(第III区画)-8d(第IV区画)」などと表示される。第I・II区画の「H6-2」は全域共通なので、図4に第III・第IV区画名を表示した。第IV区画が、遺物取り上げなどの基本単位となる。

方位 国土座標軸の座標北を採用した。第1次調査中に航空測量を実施した2008(平成20)年では遺跡周辺の座標北は、磁北より東へ6°54'、真北より西へ10'振れていた。

高さ 東京湾平均海面(T.P.)を適用した。T.P.と大阪湾最低干潮面(O.P.)とは、 $T.P. + 0.0\text{m} = O.P. + 1.3\text{m}$ の関係にある。

面と層の呼称法 08-2調査区では、最初に調査した面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様である。なお、ここでいう算用数字の「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、ある面と次の面との間の堆積は観察の結果○付き数字の地層に細分されることがある。

なお、08-2調査区の第2面では、堆積状況に鑑み中央部から北西部にかけての範囲を2面に細分して調査した。その範囲を含め全域を調査した面を「第2面」とし、部分的なその範囲の下面を「第2-2面」として記録した。また、第2面と第2-2面との間を「第2層(上層)」とした。

遺構番号 遺構種類に関わらず通し番号とした。具体的には、08-1調査区では1~51、08-2調査区では1~236である。番号の後に遺構の種類を付けた。

遺物の取り上げ 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに、平面的に

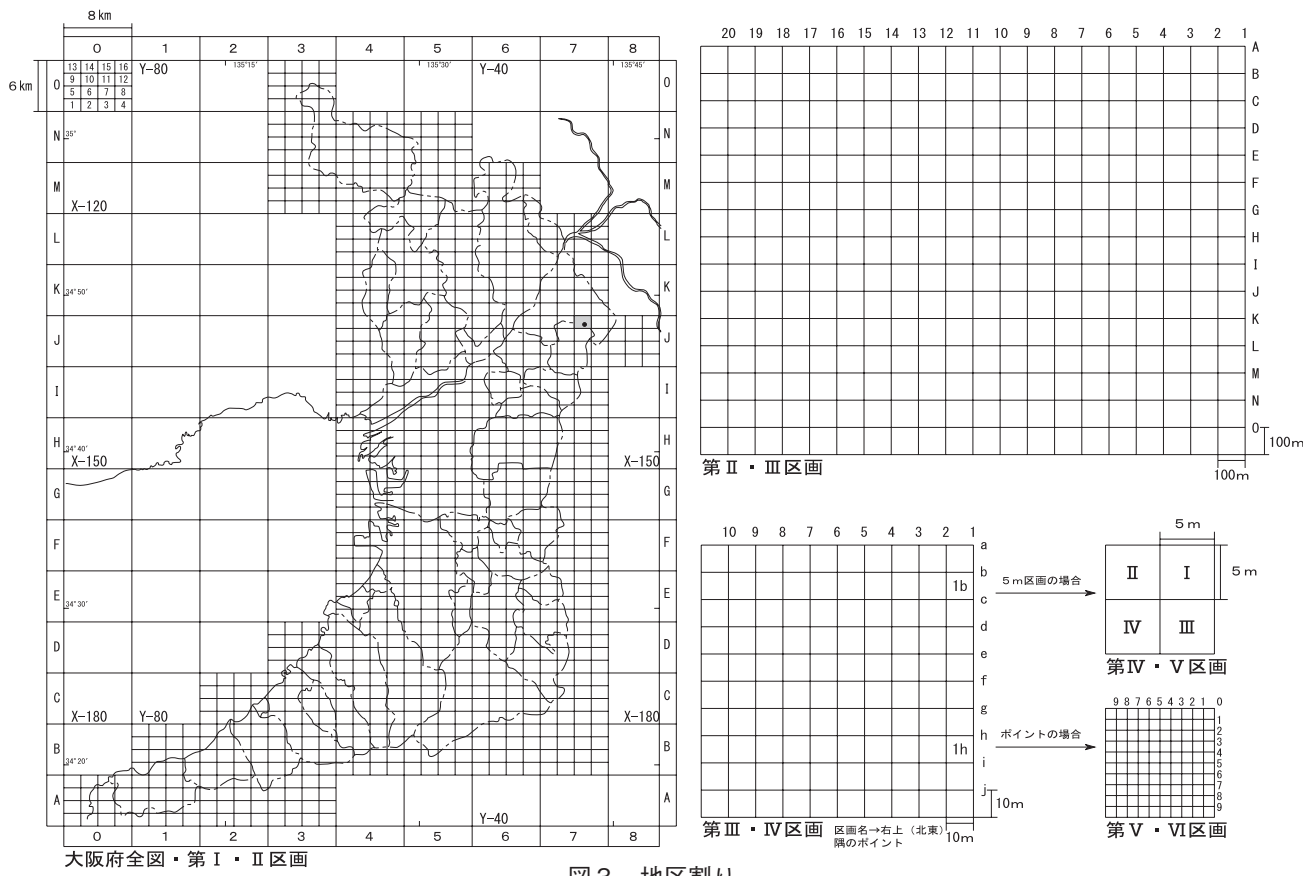


図3 地区割り

は国土座標の10×10mの区画(第IV区画)ごとの取り上げを基本とした。さらに必要に応じて、国土座標上において3次元で出土位置を特定して取り上げた遺物もある。

図面作成 各区の調査区全体図は、航空測量、平板測量、または地区杭を基準とした測量で縮尺1/50ないし1/100で作成した。地層断面図は縮尺1/20に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況などは対象物に応じて1/10ないし1/20で適宜図化した。

各種分析 石材の鑑定を奥田 尚氏(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)、骨の同定を安部みき子氏(大阪市立大学)にお願いした。

遺物整理 調査現場で登録と洗浄を優先し、注記も行った。整理期間に入り、それら作業と並行し、登録番号ごとに分類と集計を行った後、報告書掲載のものを優先して復原、実測、写真撮影などを進めた。

遺物の編年観 土器をはじめとする遺物の年代は、一般的な年代観に従った。なお、主要遺物の編年や用語については、主に次の文献を参考とした。

古代の土師器・須恵器：古代の土器研究会編 1992～1994『古代の土器1～3 都城の土器集成I～III』古代の土器研究会
 緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器：平尾政幸 1994「第四部平安京の遺物 第二章土器と陶磁器 4 緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店

瓦器・東播系須恵器・滑石製石鍋：中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

輸入陶磁器：山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 - 太宰府市の文化財第49集』太宰府市教育委員会

中世瓦：山崎信二 2000『中世瓦の研究 奈良国立文化財研究所学報第59冊』雄山閣出版株式会社

石仏：藤沢典彦 1999「茨木市佐保周辺地区の石造物調査」『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』

財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集

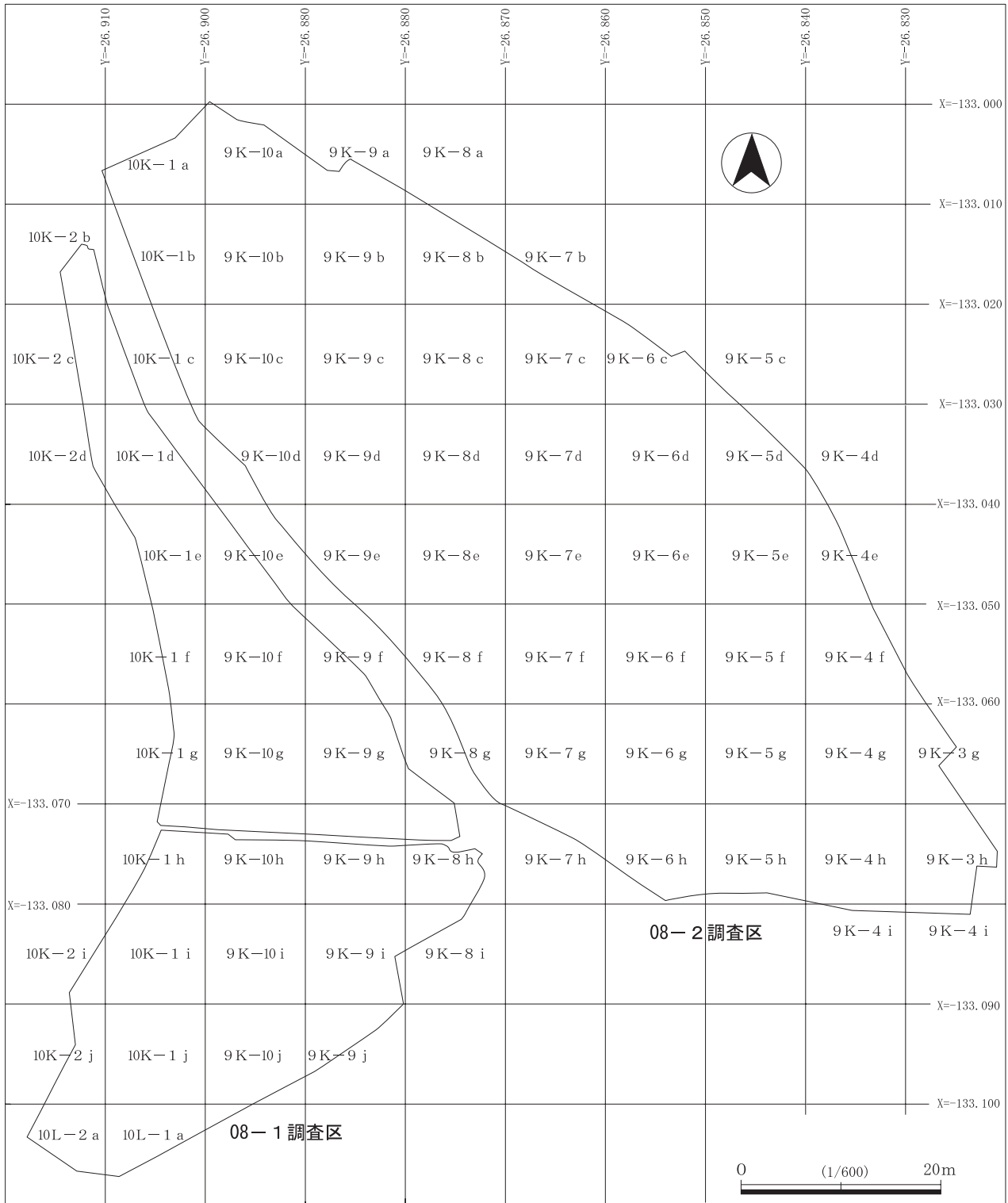


図4 グリッド配置

第4章 08-1 調査区の調査成果

第1節 概要

08-1 調査区は、今回報告する調査範囲の南西部に位置する。調査対象地は南北を尾根筋に挟まれた谷地形部に相当し、調査実施面積は1808㎡を測る。調査前の地目は階段状に造成された水田および畑作地で、附近の地盤高は東から西に向かって緩やかに傾斜するものの、およそ T.P. +82.00m前後を測る。

第2節 層序

調査地内の基本層序は、以下と図5に記す通りである。

第1層：調査着手以前まで水田として使用されていた耕作土層。

第2層：耕作地化に伴い敷き均された砂層。

第3層：耕作地化に先立ち敷設された粘土ブロックを多く含む砂質土層（漏水防止用）。

第4層：中世以降の耕作面を覆う粗砂を中心とする自然堆積層。

第5層：中世以降の耕作土として使用されたシルトから砂質土層。

第6層：粗砂から粘土質土を中心とする扇状地性の堆積土（基盤層）。

以上のうち、2から4層については、調査着手前まで使用されていた水田造成に伴う地形改変により大きく削平されている部分も確認され、第1層除去後、直ちに第6層が露呈する部分も観察された。この傾向は調査区北東部の山側に隣接する部分において特に顕著であった。

第3節 遺構

第1面

今回の調査区において検出された遺構は図6に示す通りで、中世以降の遺物を少量伴う溝や素掘小溝群、土坑などを中心とする。これらは、その形状や堆積土および、検出された位置から考えて、土地を区画する溝、耕作に伴う犁溝、水溜施設など、耕作に関連するものが大半を占めるが、その中で、出土遺物の時期や内容からみて唯一これに関連しないものが、第3面で検出された奈良時代の遺物が出土した50溝である。また、調査区南部では第6層を削剥する形で形成された自然流路が1条検出され、その流れの中心に相当する砂礫を中心とする堆積土から中世段階の土師質土器などが出土した。

a. 溝

調査区北部を中心に数条の溝を検出した。

1溝は、東から張り出した丘陵先端部を削り取るように掘削され、南東部は削平を受け消滅している。

この溝の西側にはそれに沿うようにして並行する小溝が存在し、また後述する54溝を境として西側に低い段差が形成されていることから、耕作地を区画する溝であると考えられる。

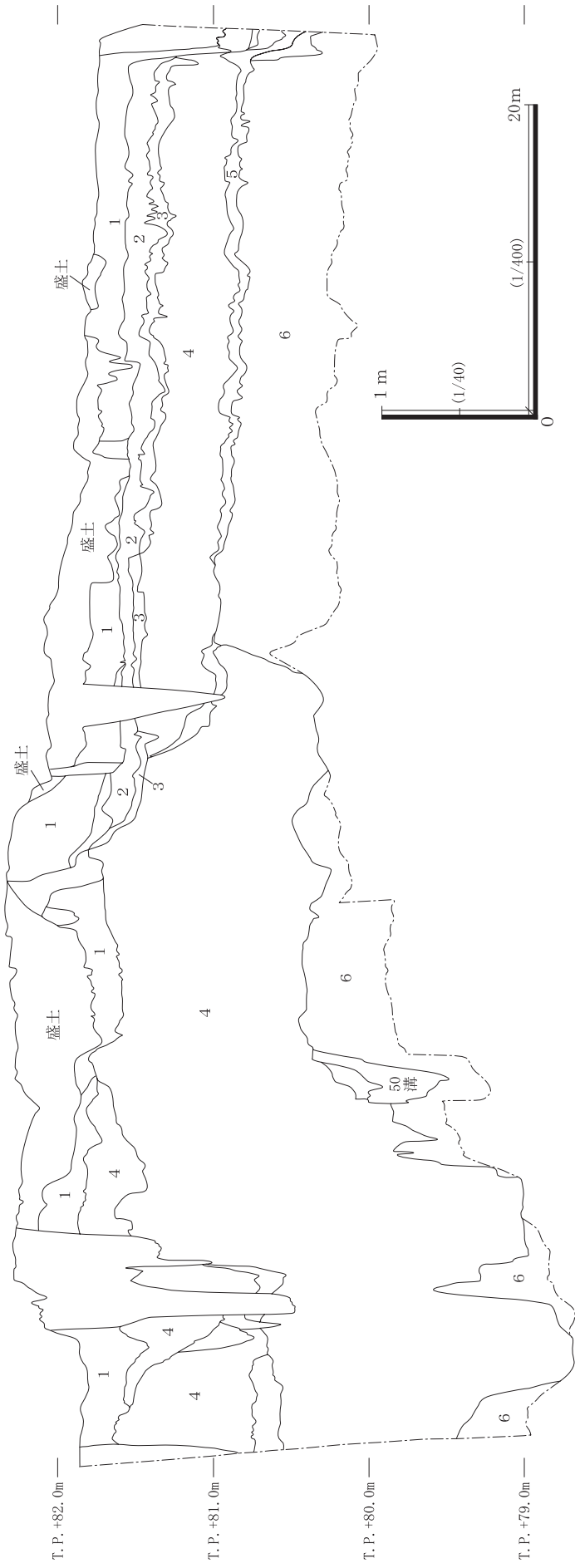


图 5 08—1 調査区 西壁断面

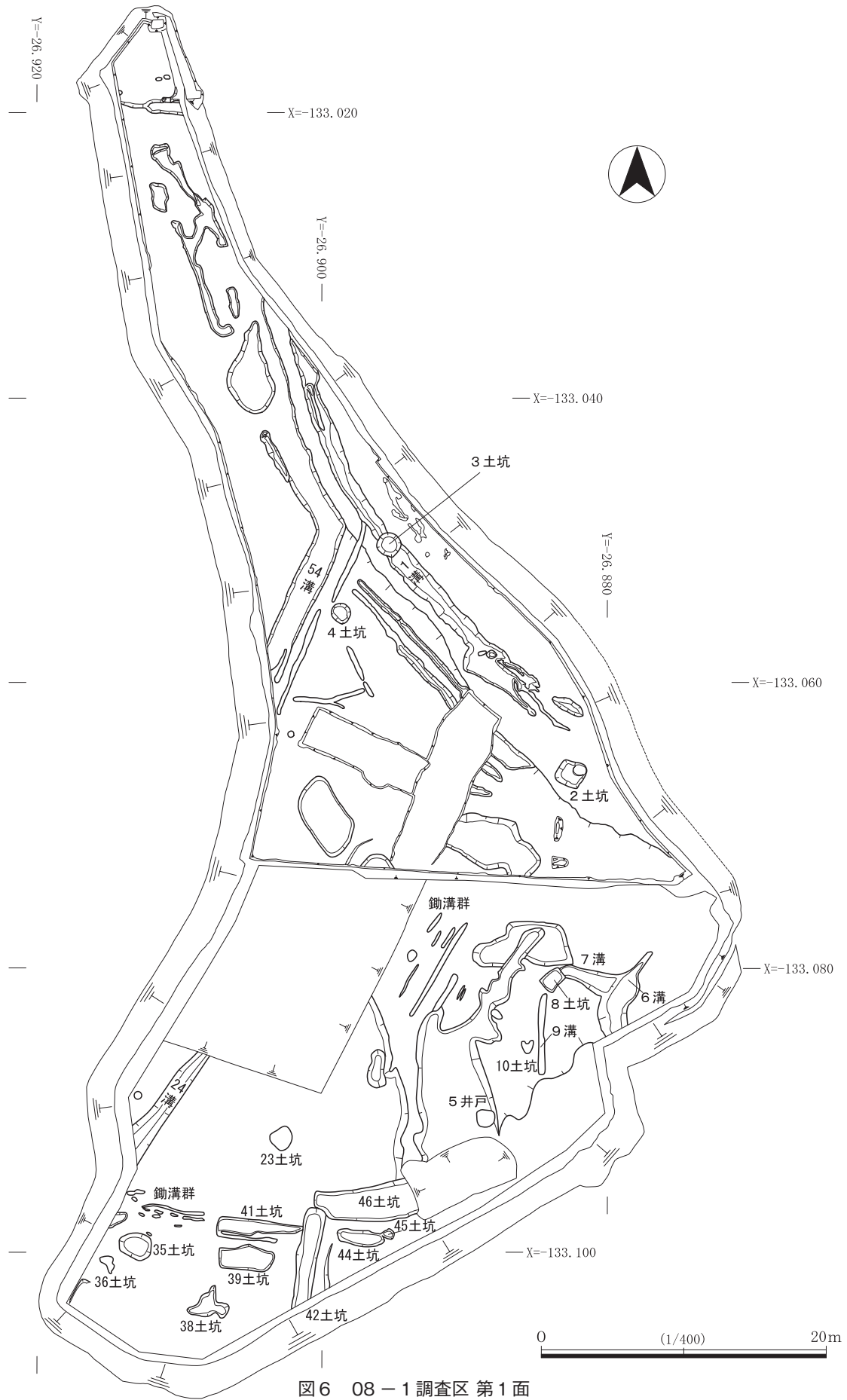


図6 08-1 調査区 第1面

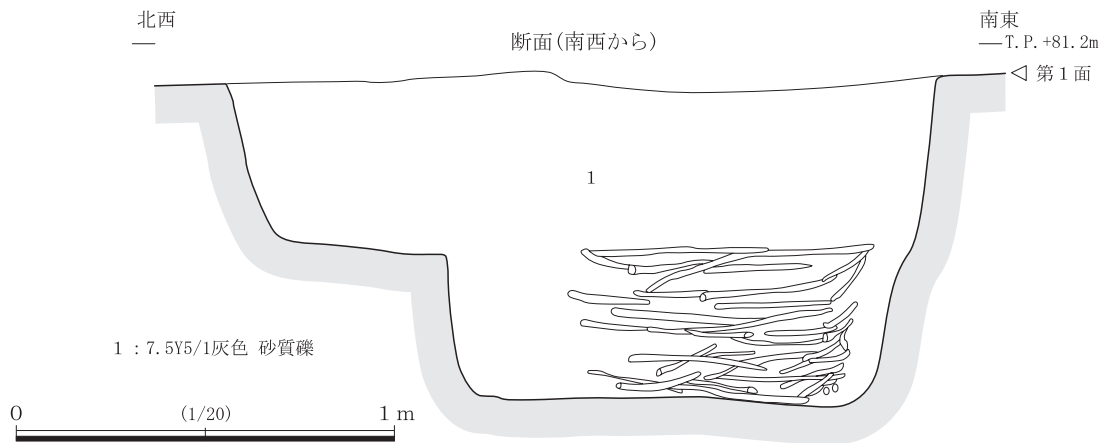
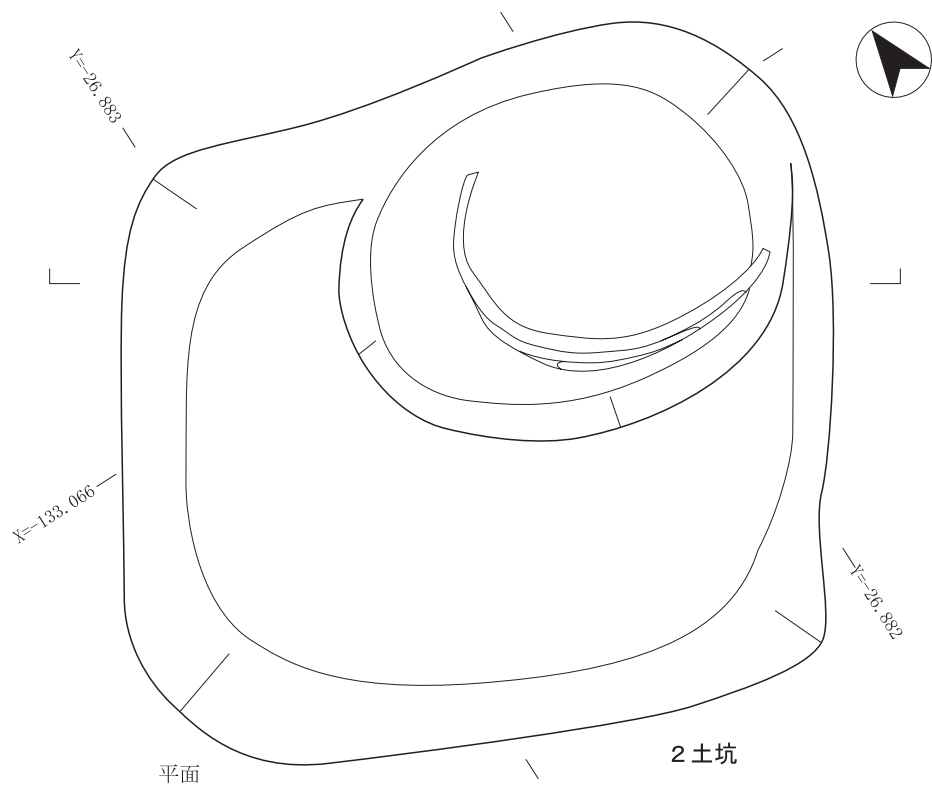
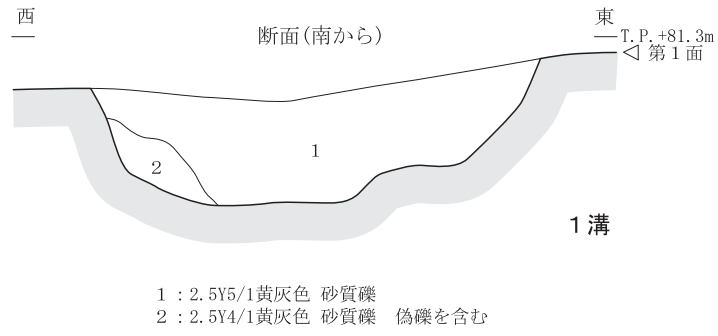


図7 08-1調査区 第1面1溝、2土坑

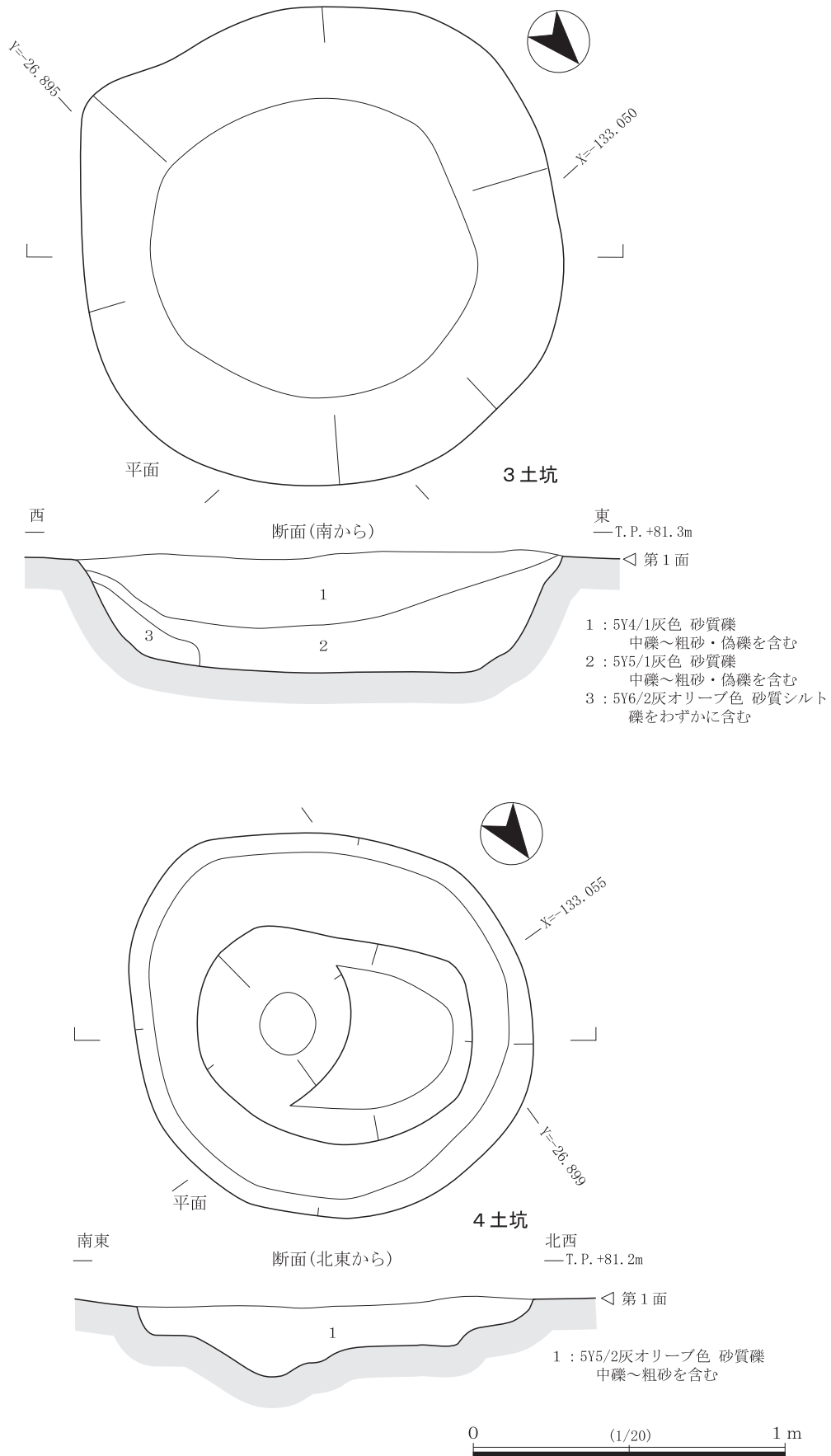


図8 08-1調査区 第1面3・4土坑

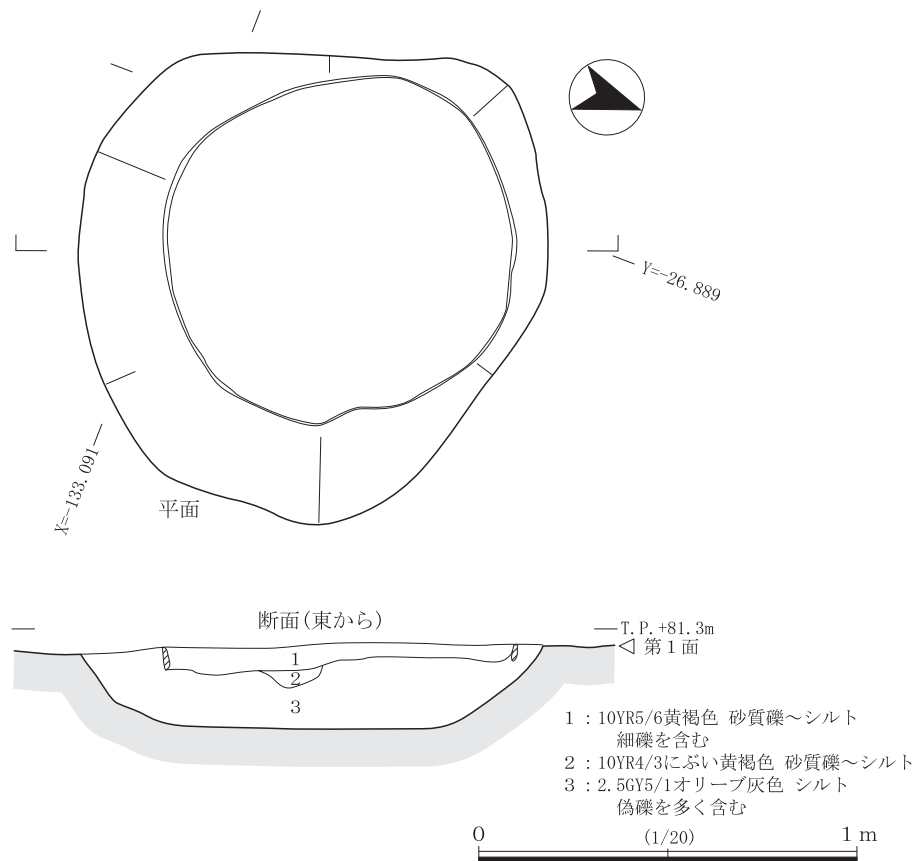


図7 08 - 1 調査区 第1面5井戸

54溝は、調査区中央からやや西北によった位置で検出され、平面形は逆「く」の字形を呈する。断面形は扁平な矩形を呈し、埋土は砂からシルト分の強い砂質土の堆積が観察された。

これら2条の溝については、特に北半分において互いが一定の間隔を置きながら並行して伸びていることから、強い関連性のもとに開削されたものと想定され、それが肯綮に当たるものであるならば、両者の間にみられる高まりは、土地区画を兼ねた畦畔とみなすことが可能となる。

なお、これらの時期については、互いの埋土から遺物が出土しなかったために、そこからの情報を得ることはできなかったが、溝を覆う周辺の堆積土から瓦器の細片や、近世の焼き締め陶器などが出土したことから類推するならば、中世以降、近世にかけてのものと考えることがゆるされよう。

50溝（図12）は、調査区南半部の第3面で検出された。溝は、南側に向かってゆるやかに下降する斜面地形の縁辺に沿うような場所に位置し、南肩部は、中世段階の流水堆積層が直上に堆積していることから、この段階に削されたものと考えられる。断面形はゆるやかな「U」字形を呈しており、埋土の上位から、図12や写真17のような状況で、ほぼ完形の須恵器杯B 2点が重なりあって出土したほか、確認調査段階でも図15に示す土師器杯Aや、須恵器の杯類や獣脚などが出土し、これらが、本調査を行う根拠とされた。遺物の時期については、平城宮土器編年のⅡ期を中心とする段階のものともみなされる。

b. 素掘小溝群

調査区第1面のほぼ全域で検出され、それらが最も集中するのが写真図版1に示す調査区北部を中心とする地域である。それらの形状や、互いが平行して掘削されている状況からみて、耕作に伴う犁溝群であると判断される。

溝の埋土からはほとんど遺物が出土していないため明確な時期は判別しがたいが、上記の1溝や54溝

と同様、溝群を覆う堆積土や周辺の包含層から、ほぼ同時期の遺物が同じような状態で出土していることから、これらと同様に中世から近世にかけてのものと考えられる。

c. 土坑

調査区北半分において3基検出された。平面形は2基が円形、他の1基は隅丸方形となる。円形のものうち3土坑(図8)は、1溝と重複する関係で、その前後関係より、溝より後の段階に掘削されたことが明らかである。埋土を除去したところ、断面形は矩形をなし、そこから肥前系色絵磁器の細片が得られたことから、近世段階に開鑿されたものであることが判明した。

同じく平面円形をなす4土坑(図8)についても、平面や断面の形状および、埋土の堆積状況から、先述した3土坑に類似する性格の遺構であろうことが推定されるが、時期については遺物が得られていないため不明と言わざるを得ない。

唯一平面隅丸方形を呈する2土坑(図7)は、断面形が矩形を呈することでは上記2例と共通しているが、底面北東隅を不整円形に一段掘り下げ、壁面に籬状の植物繊維が遺存している点において上記2遺構と様相が異なる。なお、時期判別を行いうる資料が得られていないため、これを成し得ない。

これら3基の土坑については、平面形や底面の状況が一部異なるものの、検出された位置が土地区画を意図したと考えられる溝の縁辺や隅に接するような地点に位置していること、掘削深度や断面の形状が近似していることから、耕作に関連する水溜状の掘り込みとして機能していたとみなしておきたい。

d. 井戸

調査区南部において5井戸(図9)を検出した。平面形は不正円形を呈し、断面形は偏平な「U」字形となる。断面には直径0.9mを測る円形を呈した籬状の植物遺体が一条遺存しており、そこを境として堆積土を違えることから、三寸の桶を据え置いた枠を設置していたものと考えられる。

掘方および枠内双方から出土遺物がみられなかったため、構築、機能した時期ともに不詳である。

e. 流路

調査区南部で検出された幅約10m、深さ約1.5mを測る自然流路で、断面形は逆台形を呈している。その位置や周辺地形から考えて、現状では北側に位置している円通川の旧流路と考えられ、さらに、その位置が、ここを扇頂部として西側に展開する扇状地とほぼ重なることから、これを形成するに至った砂礫の供給源ともなった流路の最終形態であると考えられる。

流路内は砂礫で充填され、各所で葉理が明瞭に発達した堆積層が観察されたことから、往時絶え間ない流水と土砂の供給があったものと推定される。それら堆積層の中には、転磨の激しい奈良時代から中世にかけての須恵器や土師器、瓦のほか、弥生時代中期初頭の甕、同時代後期の壺や甕の破片が少量含まれていた。それらのうち最も新しい段階の資料が中世の土師質小皿であった。これについては遺物総体の中でも比較的磨滅が少ないことともあいまって、当該期にこの流路が機能を停止したと考えられる。

なお、ここから溢流した砂礫層は、一時期、今回検出された遺構面のほぼ全面を覆う状況であり、その中には図18に示すような中世後半段階の花崗岩製五輪塔の空風輪が遊離した状態で検出された。その時期は他の遺構や包含層から出土した遺物の下限とも時期をほぼ同じくしていることから、これら一連の遺構との整合性に矛盾をきたさないものと認識される。

また、この流路の延長部は、新池に連続していることから、この流路の下流をせき止め、かつ、円通川を北側に迂回させることによって水量を制御し、灌漑用水を確保したものと想定される。すなわち、新池の築造は最も古くさかのほってもこの段階以降であったことがうかがい知れる。

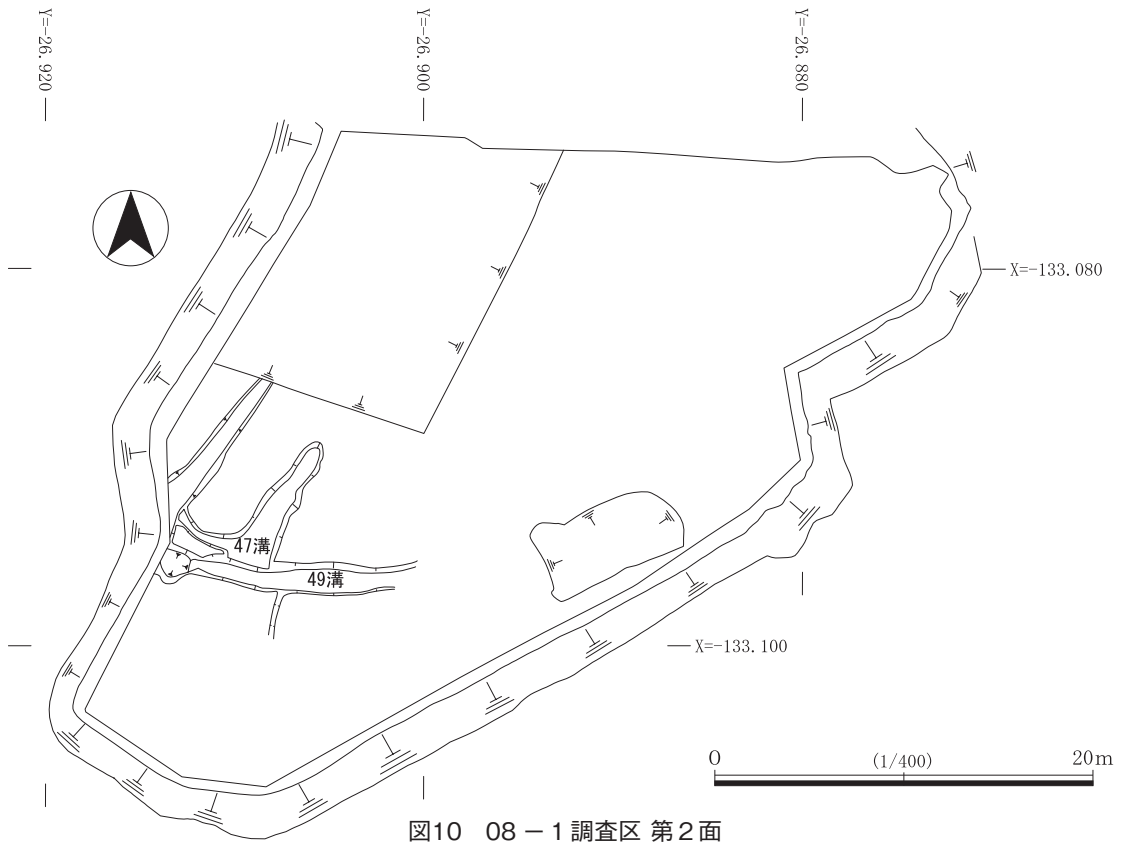


图10 08-1 調査区 第2面

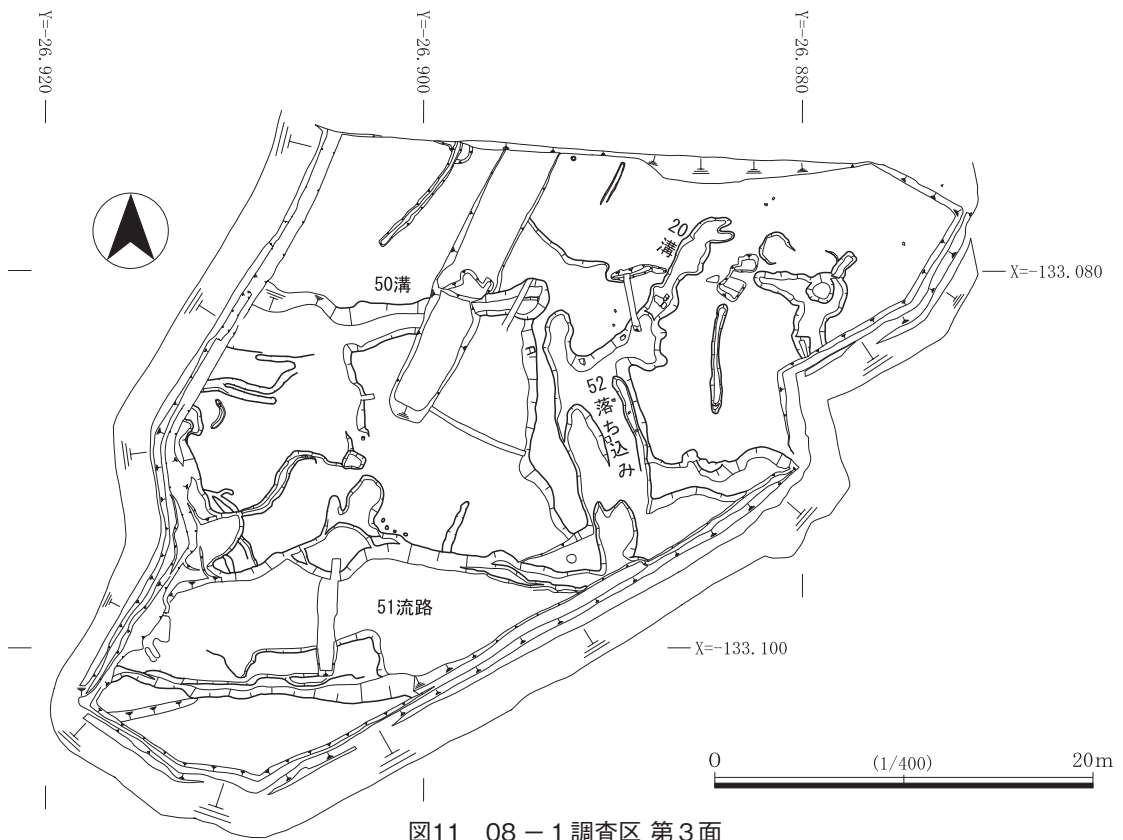
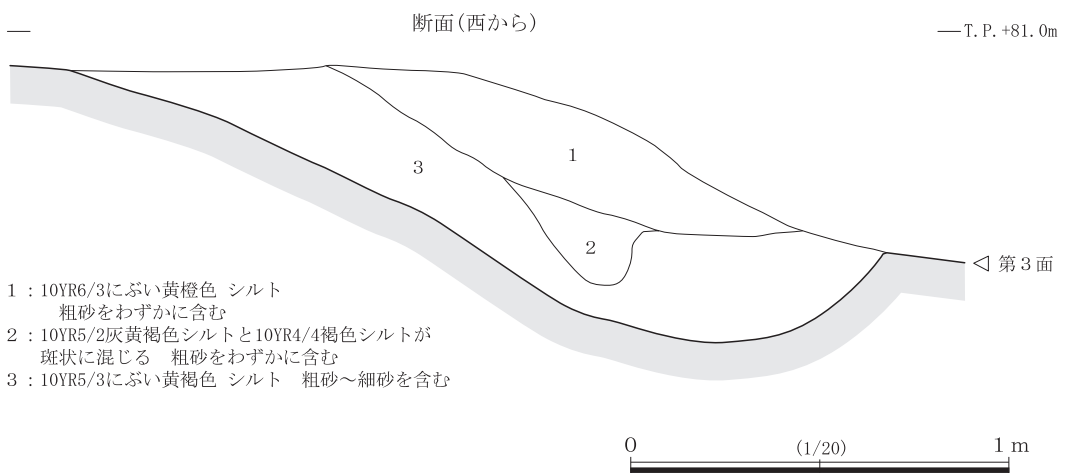
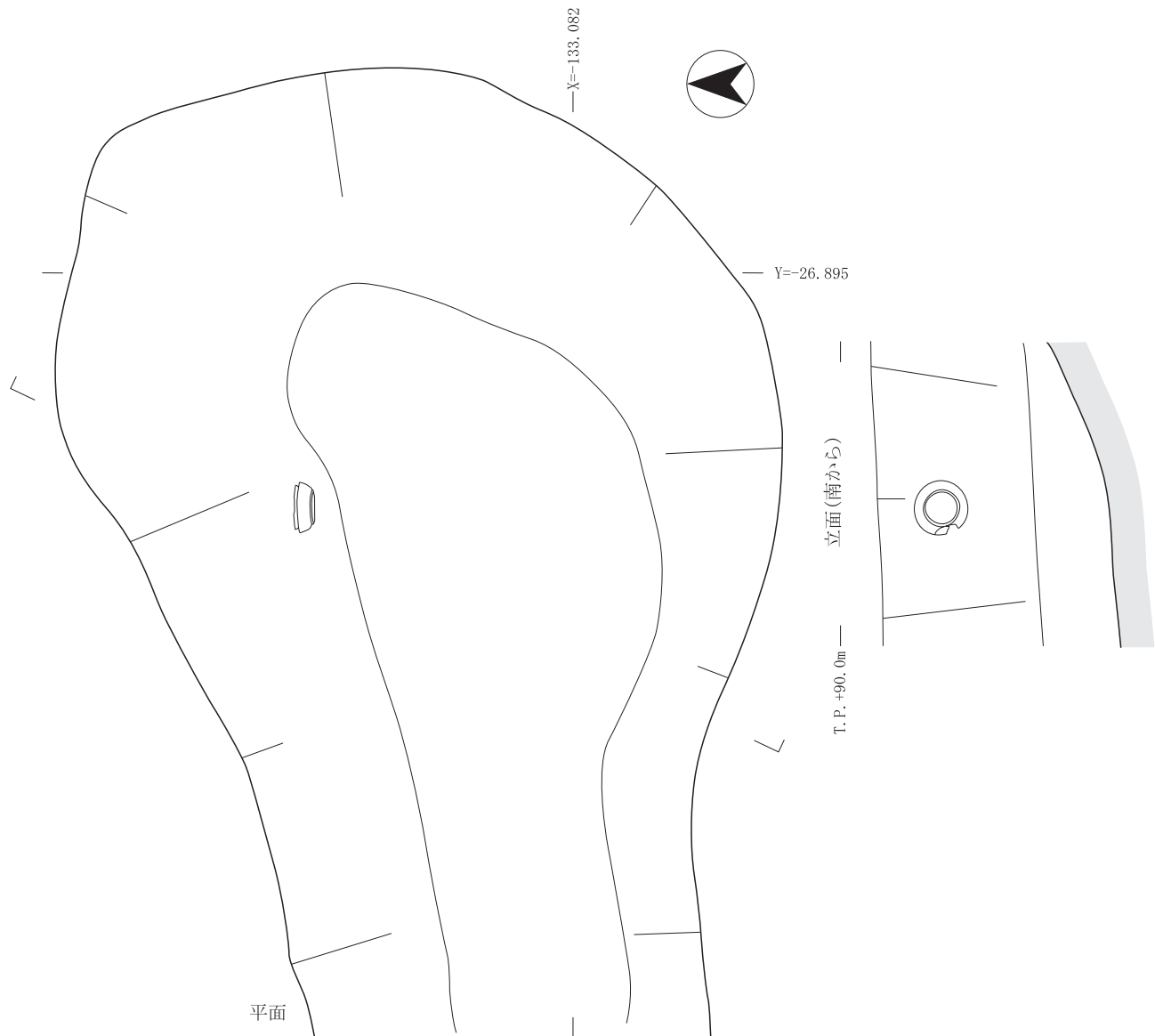


图11 08-1 調査区 第3面



- 1 : 10YR6/3にぶい黄橙色 シルト
粗砂をわずかに含む
- 2 : 10YR5/2灰黄褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが
斑状に混じる 粗砂をわずかに含む
- 3 : 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粗砂～細砂を含む

図12 08-1 調査区 第3面50溝遺物出土状況

第4節 遺物

08-1 調査区からはコンテナで12箱分の遺物が出土した。それらには縄文時代かと考えられるものから近世のものまで含まれているが、奈良時代と鎌倉・室町時代の遺物が主体である。

以下、遺物の記述に際しては、遺構出土遺物は遺構の時代順にその特徴を述べる。

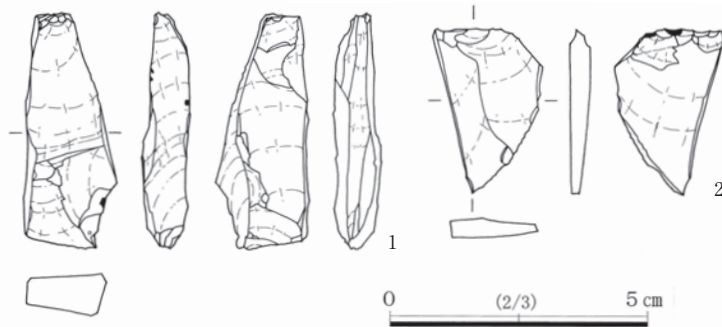


図13 08-1 調査区 出土土器

と思われるものである。全体に風化しており、縄文時代の可能性がある。この他、図化していないもので縄文土器片と思しきものが20溝から1点だけ出土しているが、表面の摩滅が著しく、詳細は不明である。2は大剥離面を裏面に残し、打点が剥離により取り除かれた二次加工のある剥片である。

弥生時代中・後期の土器片が数片、サヌカイト剥片が1点出土している。これらは後世の落ち込みや包含層から出土した。

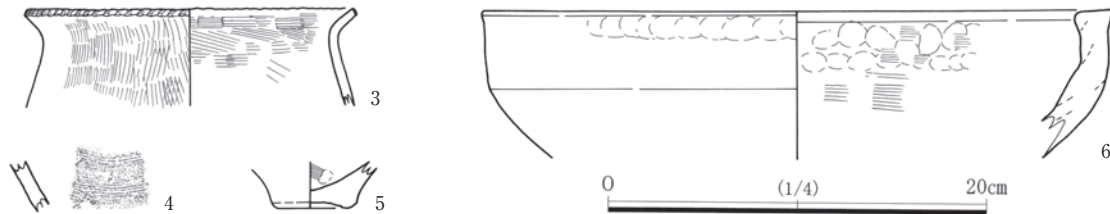


図14 08-1 調査区 出土弥生土器

図14-3は口縁端部に刻み目、外面は縦方向の、内面は横方向の粗いハケ調整を施した、Ⅱ様式の甕である。4は外面に櫛描直線紋を施したⅡ様式と思われる壺の頸部破片である。5は底部内面にハケ調整のみられる底部である。平底で器壁の薄い点から、中期のものと思われる。6は52落ち込みから出土した、かなり器壁が厚い受け口状の壺口縁部である。外・内面にはユビオサエの痕跡が残り、内面には横方向のハケ調整が施されている。後期のものか。

奈良・平安時代

土師器、須恵器が出土しており、この時期の遺物出土遺構としては第3面50溝上層以外のものがある。50溝出土遺物（図15）

図15-7～11・17・19は土師器である。それ以外のものは須恵器である。

7・8は内面に放射状暗文を1段施した杯で、底部まで遺存する8の内面には螺旋状暗文もみられる。底部外面は双方とも4方向からのヘラケズリが施されている。2点は共に平城宮Ⅲの時期にあたる。9は小形の杯で、内外面とも下半分をナデ、上半部をヨコナデ手法によって仕上げている。10・11は甕の

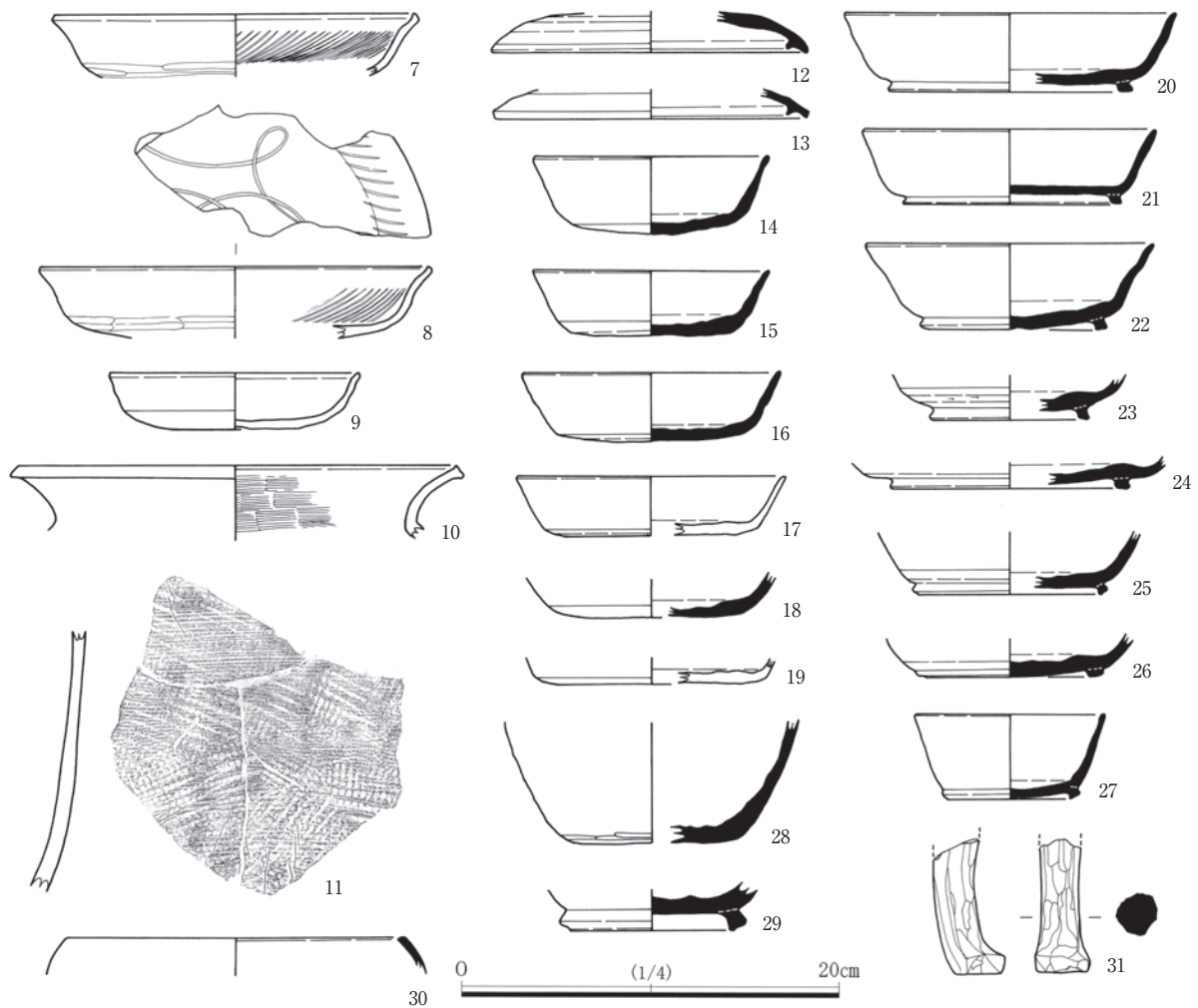


図15 08 - 1 調査区 第3面50溝出土遺物

口縁部と体部の破片である。口縁部は内面にハケが残るが、内外面ともにナデである。11は体部外面に格子叩きの後カキメを施した須恵器の手法を用いた土師器で、図化していないが、内面には縦方向のヘラケズリが施されていることから長胴甕の可能性が高い。

12・13は杯蓋である。2点はかえりの特徴から飛鳥Vであろう。14～19は杯身である。17・19は須恵器の手法を用いた土師器である。底部は17・18が回転ヘラ切り未調整、14～16・19は回転ヘラ切り後雑な静止ナデを施している。20～27は高台付きの杯身である。底部外面は26が回転ヘラ切り未調整、20・24が回転ヘラケズリ、25が回転ナデ、他は回転ヘラ切り後、雑な静止ナデないし回転ナデである。高台が若干外側に位置する26が平城宮Ⅲ、27が平安京Ⅰ以外は平城宮Ⅰ～Ⅱに該当すると思われる。28は壺底部と思われるもので、底部外面は回転ヘラ切りのままである。29は高台付きの壺底部である。28は7世紀、29は8世紀のものと思われる。30は奈良時代の鉄鉢形の須恵器である。31は須恵器の獣脚であり、長軸方向に8面体位の面取り状にヘラケズリを施して成形し、脚端部裏面は5角形状をなす。つま先に該当する部分には爪の表現はみられない。奈良から平安時代の壺に付随するものかと思われるが、類例が乏しく不明である。

鎌倉・室町時代

中世の遺物には土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦、五輪塔がみられ、それらは第3面20溝、

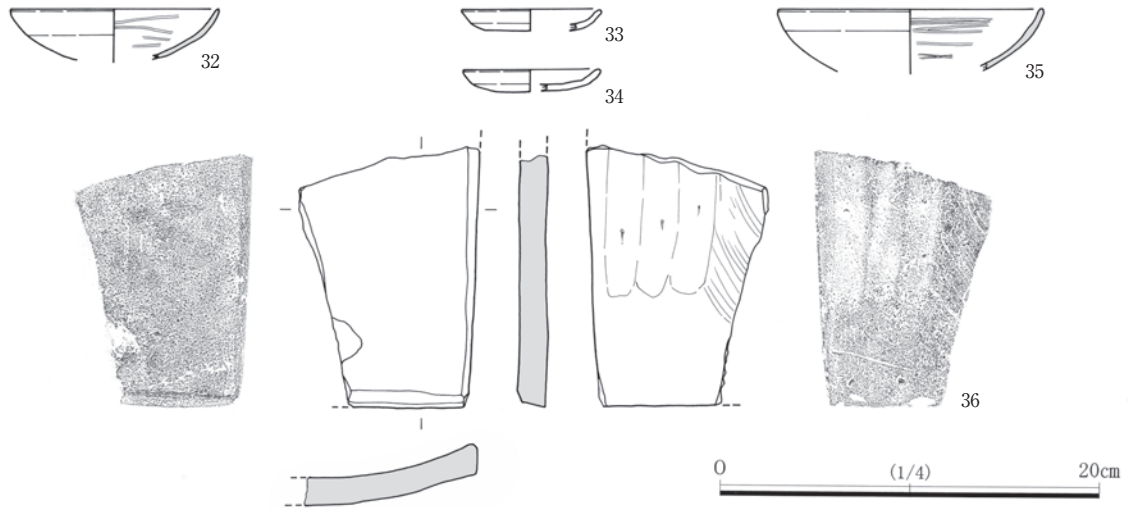


図16 08-1 調査区 第3面20・50溝出土遺物

50溝上層、51流路、第3面、中世洪水砂層から出土している。

20溝からは図16-32の瓦器碗が出土している。全体に炭素の吸着がみられず、外面の一部は被熱したように僅かに赤みを帯びる。口径が小さめで、内面の暗文がまばらな点から森島編年楠葉型Ⅳ-1~2に該当すると思われる。20溝からは他に平安時代の須恵器甕体部と思われるもの1点と、縄文土器と考えられる体部破片が1点出土しているのみであり、これらは図化していない。

奈良・平安時代で記述した50溝の上層から出土したと考えられる遺物には33・34の土師器小皿、35の瓦器碗、36の平瓦がある。33・34はユビオサエ、ナデによる調整であり、12~13世紀頃のものと思われる。35は外面に粘土紐の継ぎ目を留め、内面には疎らな圏線状の暗文がみられることから、楠葉型Ⅲ-2~3の時期に該当すると考えられる。36は須恵質の平瓦である。狭端と思しき辺の凹面側に幅7mmの面取りが施され、凹面には離れ砂と布目が一部観察される。凸面側には離れ砂と斜め方向の緩い張りの糸で粘土板を挽いたコビキ痕(コビキA)を留め、一部には離れ砂と共に縦方向のナデが観察される。鎌倉時代の平瓦であろうと思われる。

51流路からは図17-37の須恵器杯蓋、38~40の土師器小皿、41の瓦器碗、42の丸瓦が出土している。37は焼け歪のある須恵器杯蓋で、外面に灰を被る。調整は外面に回転ヘラケズリを施している。平城宮Ⅲか。38~40はユビオサエ、ナデによる調整である。時期は12~13世紀のものと思われる。41は細片であるが、口縁部外面および内面に暗文がみられる事から、楠葉型Ⅱ-3~Ⅲ-1に該当すると考えられる。42は丸瓦で、凹面の側縁と玉縁部分に面取りが施され、凸面には長軸方向のナデがみられる。

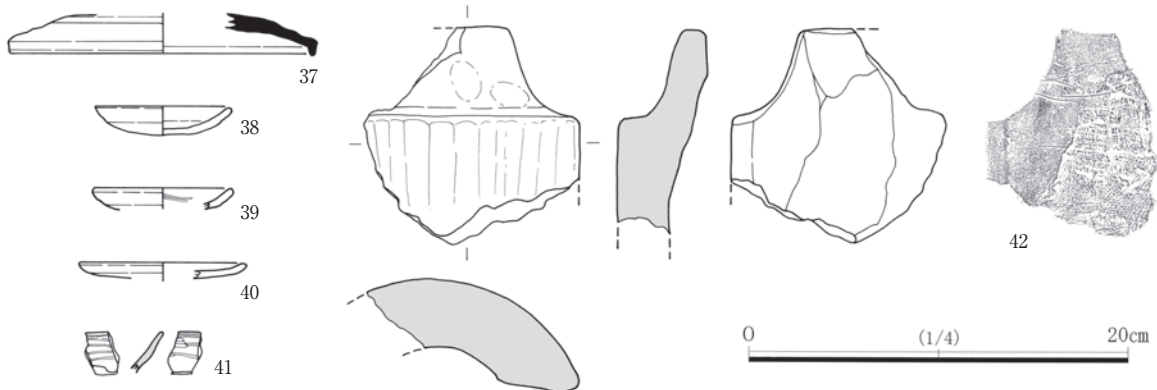


図17 08-1 調査区 第3面51流路出土遺物

規格が大きめで面取り幅が広めである点から、室町時代のものである。この他、51流路からは図化していないが、瓦質土器三足釜の脚片や須恵質の平瓦などが出土している。

第3面からは花崗岩製の五輪塔空風輪が1点出土している。図18-43は全体にやや風化してもしろい。風輪下部には直径4.9cmの柄がみられる。空・風輪ともに直径約16cmで、空輪は直径よりも少し丈が高く、上端は丸みを帯びる。空輪の上下に加工痕が残るが工具の幅は不明である。空・風輪の境には幅8mmの工具痕が残る。空・風輪ともに文字は刻まれていない。この五輪塔は空輪が尖っておらず全体に整った形をなし、風輪下部に柄のみられる点から室町時代のものかと推測する。

中世洪水砂層からは古代の土師器、須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土している。このうち、古代の遺物は50溝に関連する可能性がある。

図19-44・45は内面に連弧状と放射線状の2段の暗文がみられ、外面にはヘラミガキが施された土師器の杯である。平城宮Ⅱに該当する。46は内面に1段の放射状暗文が、底部外面にはヘラケズリが施された土師器の杯であり、平城宮Ⅲに該当する。47は土師器杯高台である。内面に微かに暗文の痕跡があるが、詳細は不明である。平城宮Ⅲか。48は内面を板状のものでナデ調整した土師器の小形椀である。49～51は土師器の鍋と思われるものであり、51のみハケ調整が施されている。52・53は土師器甕である。54は土師器の把手付鍋体部である。鍋、甕ともに奈良時代のものである。55は土師器甕把手である。把手が小さく体部に接着しており、平安京Ⅰである。

56～58は天井部外面を回転ヘラケズリした須恵器杯蓋である。58はかなり焼歪み、外面には灰を被り、直径11cmの溶着痕がみられる。56は外面に灰を被る。57は焼成不良である。57が平城宮Ⅱで、56・58もそれと同時期位と思われる。59は須恵器杯身であり、底部外面を回転ヘラ切り後僅かにナデている。60・61は須恵器杯身の口縁部である。62・63は須恵器高台付杯である。64の壺底部外面には粘土紐巻上げ痕を留め、回転ヘラ切り後軽く回転ナデを施している。これらの須恵器は平城宮Ⅰ～Ⅲに該当すると思われる。65は奈良時代の鉄鉢形の須恵器である。以上の古代の遺物は50溝の下位出土遺物とほぼ同時期に属するため、溝に堆積した一連の遺物が洪水砂で巻き上げられた可能性が考えられる。

中世の遺物について以下に述べる。66は土師器小皿、67～70は土師器大皿である。いずれも調整はユビオサエ、ナデである。12～13世紀ころのものであろう。71・72は口縁端部に沈線を1条巡らせた瓦器椀で、口縁部外面には疎らなヘラミガキが、内面にはやや疎らな横方向のヘラミガキが施されている。71は口縁部がやや外反気味で大和型Ⅲ-A(新)、72は楠葉型のⅡ-3～Ⅲ-2に該当すると思われる。73は高台が断面三角形状をした瓦器椀底部であり、体部には圏線状の、見込みには螺旋状か不明の暗文が施されている。73は楠葉型Ⅲ-3に該当すると思われる。以上の事から、これらの瓦器椀は12世紀後半から13世紀前半に所属すると考えられる。74は須恵質鉢で、東播系Ⅲ期3段階の14世紀後半か。75は常滑焼の鉢底部であり片口鉢Ⅱ類の5型式、13世紀前半であろうか。これらの事から14世紀後半以降に洪水が起きた事が推測される。

江戸時代

陶磁器が少量出土している。それらは第1面1溝、耕土層、近世洪水砂層からの出土であり、耕土層、

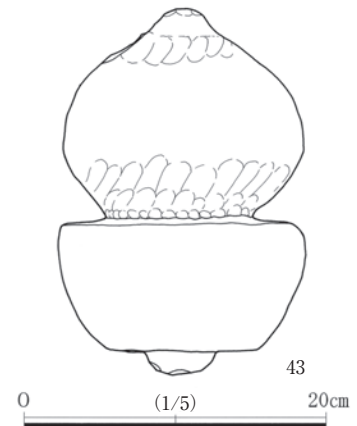


図18 08-1調査区
第3面出土五輪塔空風輪

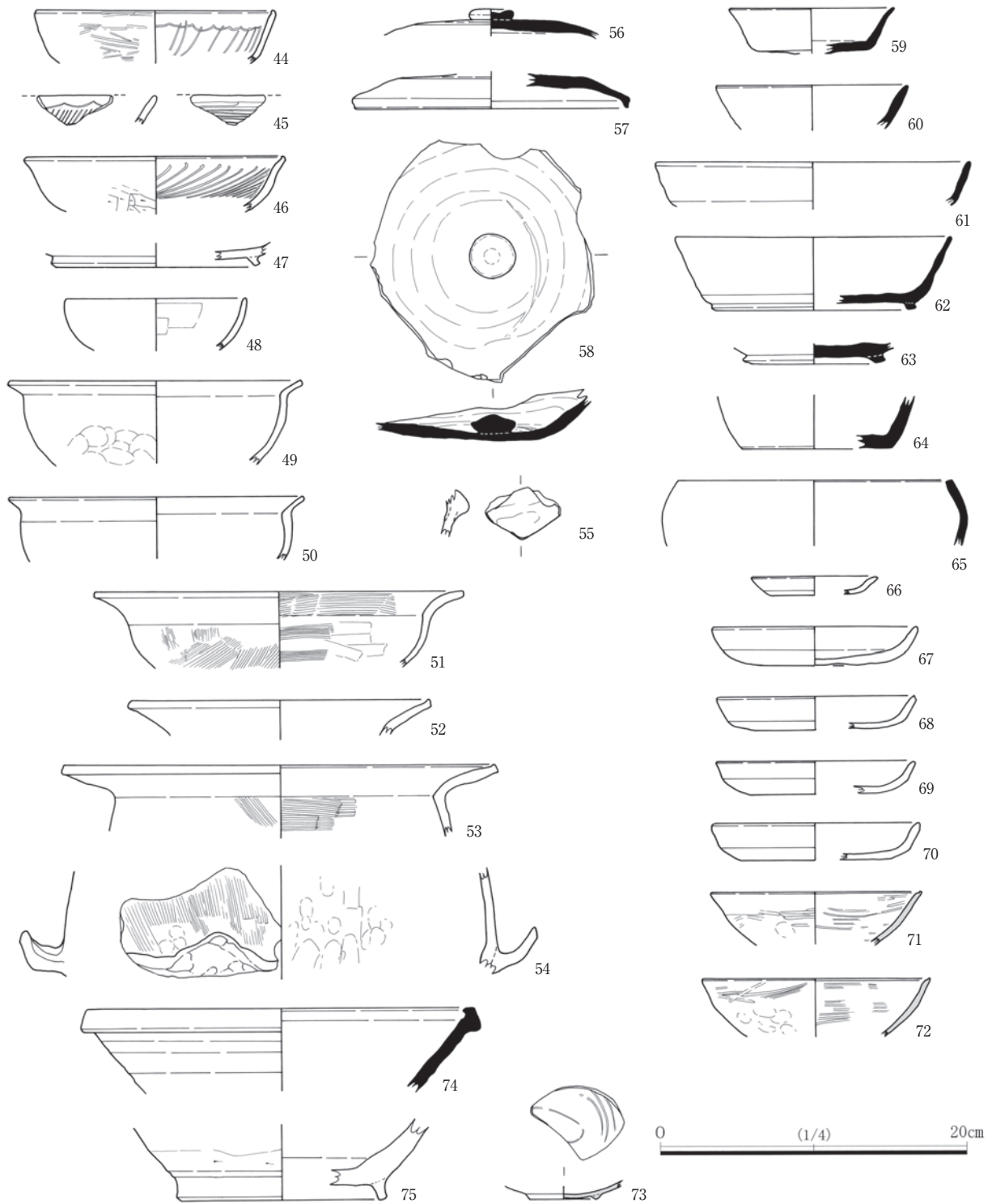


図19 08-1 調査区 中世洪水砂出土遺物

近世洪水砂層では古代、中世の遺物をも含む。

1 溝出土の図20-76は備前焼壺であり、内面には轆轤目が顕著である。外面は静止ヘラケズリを施している。内面に付着物は認められないが、お歯黒壺か。

耕土層出土の77は器種不明の瓦質土器の底部であり、内面にハケ、外面にユビオサエの痕がある。

近世洪水砂層からは古代の遺物が少量出土している。78は須恵器杯身の高台であり、底部外面を回転ヘラ切り後軽くナデ調整を施している。平城宮Ⅲの時期にあたる。79・80の土師器甕は口縁部内面に横

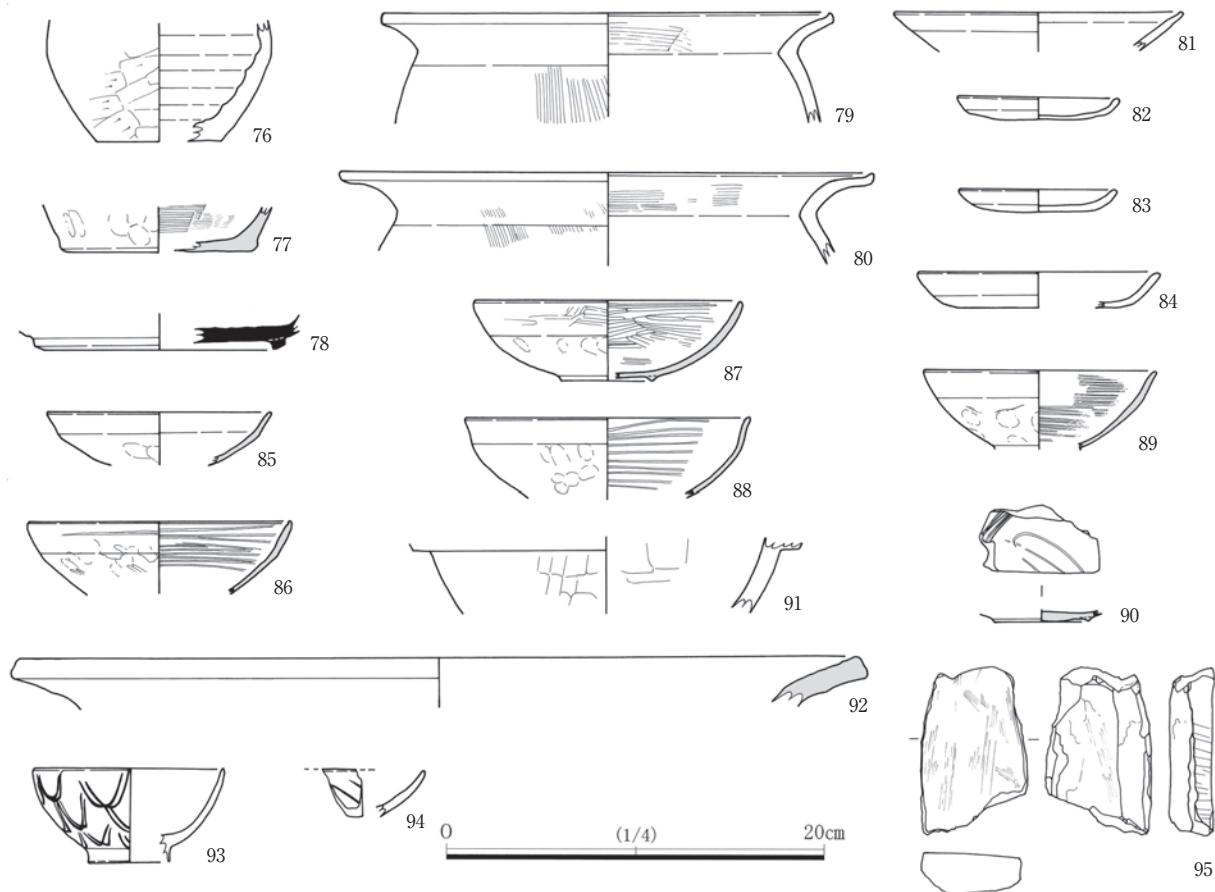


図20 08 - 1 調査区 第1面1溝、耕土層、近世洪水砂出土遺物

方向のハケが残り、体部外面には縦方向のハケが施されている。これらの土師器甕は奈良時代のものと思われる。81は土師器杯であり、残存状態が不良で調整は不明であるが、平安京Ⅰの時期のものか。

近世洪水砂層には中世の遺物も含まれている。82・83は土師器小皿、84は土師器大皿であり、いずれもユビオサエ、ナデによる成形・調整であり、83の底部外面には粘土紐接合痕が残る。いずれも12～13世紀のものと思われる。85～90は瓦器碗である。85は表面が摩滅し詳細は不明である。86の口縁端部内面には沈線が1条巡り、体部外面には粘土を貼り足して補修した痕跡が残る。86の外面体部には僅かにヘラミガキの痕跡が残り、内面はやや密な圈線状の暗文を施している。87は口縁端部内面に沈線が退化したような痕跡がみられる。外面は口縁部にヘラミガキ、内面にはやや密な横方向の暗文がみられる。88は内面に細くて疎らな圈線状の暗文が施されている。89は外面体部に粘土紐接合痕が残る。外面口縁部に疎らなヘラミガキ、内面に細くてやや密な横方向の暗文が施されている。90は高台断面が三角形状をし、内面には圈線状と螺旋状の暗文がみられる。これらの瓦器碗の時期は楠葉型のⅢ-1～3の範疇に該当し、12世紀終わりから13世紀前半の中におさまるとされる。91は石鍋の鏝下半から体部にかけてのものである。体部の内外面には工具痕が残る。Ⅲ-a～cの段階にあたり、13～14世紀のものか。92は瓦質土器甕口縁部であり、口縁端部が肥厚せずそのまま外反する点から14世紀前半のものと考えられる。

近世遺物としては93・94がある。93は二重網目紋の染付碗である。見込みには釉剥ぎがみられず、高台内面に釉がかかる。94は国産青磁皿である。内面の釉下に片切り彫りのような紋様が施されている。

これらの磁器は18世紀前半に類例がある。

95は頁岩製砥石である。表面はほぼ平坦で長軸ないし斜め方向に研磨した痕跡が残る。表面の長軸両端寄りに横ないし斜め方向の稜がわずかに認められるが、使用により形成されたものか。裏面には表面よりも幅狭の研ぎ面があり、斜め方向の条痕が残る。片方の側面には砥石を成形した際についたものか長軸に直交する線状痕が複数みられる。

遺物の小結

今回の整理対象となった津田遺跡の遺物には縄文時代と推定されるもの、弥生時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の各時期のものがみられた。これらの遺物は各時代の遺構に伴うものが少ないが、主な遺構に伴う遺物として第3面50溝下位から出土の奈良時代を中心とした遺物、51流路から出土の中世の遺物をあげることができる。

時代順に遺物を概観すると、縄文時代と思われる遺物では、かなり磨耗した土器1片と若干風化したサヌカイトの楔形石器1点が出土したのみであり、殆ど人の活動した痕跡は認められなかった。

弥生時代の遺物では、中期初頭の壺、甕と後期の壺、サヌカイト剥片が後世の遺構や洪水砂層などから僅かながら出土した。平成18年度の調査時に中期の堅穴建物が検出され、遺物は中期・後期の土器が出土していることから、それに関連した遺物であろう。

奈良・平安時代の遺物では、50溝が1条検出され、その下位からは奈良時代から平安時代初頭にかけての土器が出土した。出土土器には土師器・須恵器の杯類の食器、煮炊き用の鍋、甕、他には壺類、鉄鉢形土器がある。時期は平城宮Ⅰ～Ⅲが中心で、まれに平安時代初期のものが含まれている。須恵器の杯では2点がほぼ完形に近い状態で出土しており、他の破片もあまり摩滅していない点から、近くに生活の場があったことが伺われる。これらの中でも壺かと思われる獣脚は類例をあまり見ず、この遺跡の性質を考えるうえで一つの指標となると思われる。

他に、中世洪水砂層から焼け歪の著しく溶着痕のみられる須恵器杯蓋や51流路出土の焼け歪のある須恵器杯蓋がみられることから、近くに奈良時代の須恵器の窯が存在する可能性がある。あるいは北側に所在する城坂窯跡に関連する資料であることも想定される。

鎌倉・室町時代の遺物では、51流路と洪水砂層から土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦、五輪塔が出土した。遺物の中心は鎌倉時代である。器種は土師器皿、須恵質鉢、瓦器椀、瓦質甕、瓦質羽釜、常滑焼の甕や鉢、丸瓦、平瓦などである。輸入陶磁器は出土していないが、常滑焼の甕や鉢が出土していることにより、東海地方の陶器が搬入されていることが分かった。当調査区からは耕作に関連する遺構が検出されており、生活用品である遺物の出土により、近くの人々が暮らした痕跡を留めているといえる。

その他、中世の遺構面からは室町時代かと思われる花崗岩製の五輪塔の空・風輪が1点出土しており、近くに墓があったことが伺われる。

近世遺物では18世紀代の磁器や瓦質土器などが出土しているが、特筆すべきものは認められなかった。

第5章 08-2調査区の調査成果

第1節 概要

08-2調査区は、08-1調査区の北東、山側に位置する。08-1調査区と同様に第二京阪道路建設によって埋め立てられた池(大原池、新池)の代替池築造に伴い調査した。

調査地は北東から南西に傾斜する地点に位置する北西-南東約110m、北東-南西約40mの紡錘形の範囲で、調査面積は2018㎡である。

図21のように調査地は、傾斜地にもかかわらず調査前地盤はほぼ平坦に造成されており、調査範囲の北東部約4分の1がT.P. +92.0m、その他の大部分はT.P. +89.5mであった。現在の表土層および山側から大量に流下した土砂を重機で除去し、それ以下の遺構面と包含層を人力掘削した。

3面(一部では4面)を調査し、約230か所の遺構を検出した。

出土遺物は、陶器、磁器、瓦、瓦器、瓦質土器、土師器、須恵器、金属器など約27000点である。

第2節 層序

08-2調査区では図21に示す位置で、現地表面から調査を終了した第3面あるいはその下層まで堆積状況を記録した。A・C・E断面は等高線にほぼ直交し、B・D断面はおおむね等高線に並行する。

なお、第3章調査の方法でも述べたように、08-2調査区では、最初に調査した面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様に呼ぶ。ある面と次の面との間の堆積は観察の結果○付き数字の地層に細分されることがある。

A断面(図22)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で5Y3/1オリーブ黒色粗砂に礫を含む。②は5Y4/2灰オリーブ色粗砂に礫を含む。

③～⑥は斜面に盛土されたものが、その後の平坦面造成に伴い一部カットされている。③は10YR6/8明黄褐色粗砂～シルトに礫を含む。④は北東の山側は7.5YR4/3褐色粗砂～細砂に礫を含み、南西の谷側では10YR6/8明黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。⑤は2.5Y7/2灰黄色粗砂～細砂に礫を含む。⑥も④と同様に山側と谷側では若干異なり、山側では7.5YR4/2灰褐色粗砂～細砂に礫を含み、谷側では2.5Y5/3黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

⑦は⑥を盛土する前の整地層で2.5Y7/3浅黄色粗砂～細砂に礫を含む。

⑧は旧表土と考えられる。2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～細砂に礫を含むが、谷側の方が粒子が細かい。

⑨は2.5Y6/4にぶい黄色粗砂～細砂に礫を含む。ラミナが発達し、層も厚いことから、斜面上方より一気に流下したものと考えられる。

⑩は10YR6/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。⑪は2.5Y7/2灰黄色粗砂～細砂に礫を含む。

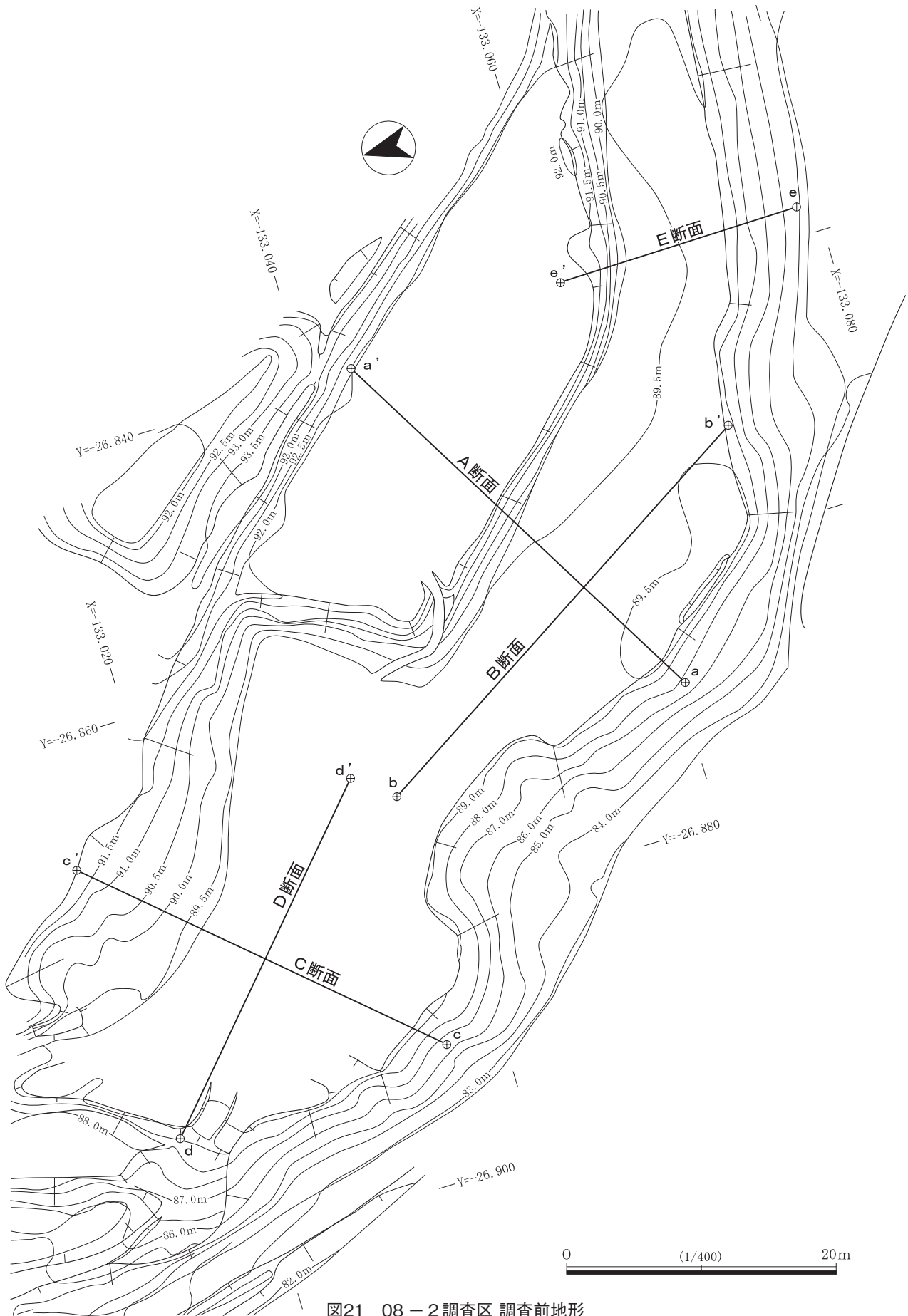


図21 08-2 調査区 調査前地形

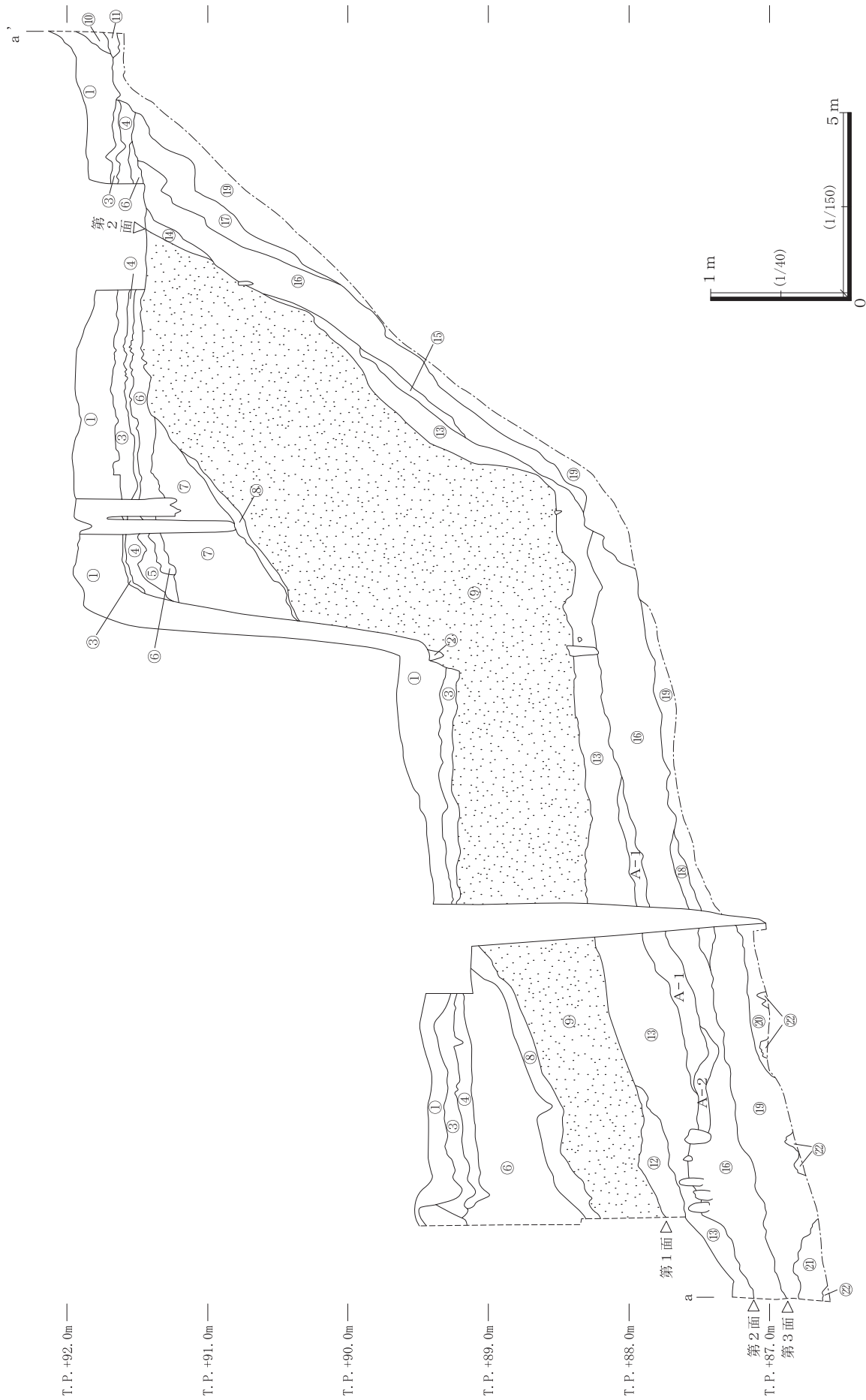


图22 08-2 调查区 A 断面

第1層 ⑫は谷側に分布し、2.5Y6/3にぶい黄色シルト～粘土に礫を含む。第1層の主体となるのが⑬で、山側では10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂、谷側では10YR4/4褐色粗砂～シルトに礫を含む。

第2層 ⑭は山側に分布し、7.5YR5/4にぶい褐色粗砂～シルトに礫を含む。山側の斜面にみられる⑮は10YR5/3にぶい黄褐色粗砂～シルトに礫を含む。

Aは第2面83落ち込みで、上層山側の10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～シルトに礫を含む(A-1)と下層谷側の7.5YR4/2灰褐色粗砂～細砂に礫を含む(A-2)に細分できる。

第2層の主体となる⑯は、山側では10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～細砂に礫を含み、谷側では7.5YR5/6明褐色粗砂～シルトとなる。山側の⑰は10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。中央部の⑱は7.5YR5/2灰褐色粗砂～シルトに礫を含む。

第3層 第3層はいわゆる地山で、⑲とした層は基本的に同一だが、山側では2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粗砂～細砂に礫を含み、中央部では2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粗砂～細砂、谷側は花崗岩が風化した5Y3/2オリーブ黒色粗砂～細砂に礫を含む、と地点によって変化する。⑳は2.5Y4/1黄灰色粗砂に礫を含む。㉑は10YR5/4にぶい黄褐色粗砂～細砂。㉒は10YR3/4暗褐色の細砂～シルトで花崗岩が風化した小礫を多く含む。

B断面(図23)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で10YR5/1褐灰色粗砂に礫を含む。

②～⑦は盛土である。②は5Y4/2灰オリーブ色礫を含むシルト質粗砂～細砂。③は7.5YR4/4褐色粗砂～シルトに礫を含む。④は10YR6/6明黄褐色粗砂～シルトに礫を含む。⑤は10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。⑥は10YR4/1褐灰色シルト質粗砂～細砂。⑦は10YR7/8黄橙色細砂～シルトに礫を含む。

⑧の2.5Y5/2暗灰黄色粗砂に礫を含むは、斜面上方より一気に流下したもので、A断面の⑨に対応する。⑨の2.5Y6/1黄灰色細砂～シルトは⑧と⑩との間層である。⑩は中央谷を一気に埋めたもので、北西部の10YR7/4にぶい黄橙色粗砂に礫を含む部分から、南東部の5Y3/1オリーブ黒色粗砂に漸移的に変化している。

第1層 ⑪は第1層の主体となる10YR4/4褐色シルトで礫～細砂を含む。北西部に分布する⑫は、10YR5/4にぶい黄褐色シルトに礫～細砂を含む。

第2層(上層) 北西側のAは第2面73土坑で10YR3/4暗褐色シルトに粗砂～細砂を含む。中央部のBは第2面83落ち込みで、その大部分を10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む(B-1)が占め、下部に10YR3/3暗褐色シルトに粗砂～細砂を含む層(B-2)が堆積している。Cは第2面85ピットで10YR4/3にぶい黄褐色に粗砂～細砂を含む。

⑬・⑭は第2面の中央部にのみ分布する。⑭は10YR3/4暗褐色シルト、⑮はそれよりわずかに暗い10YR3/3暗褐色シルトで、これらの範囲の下面を「第2-2面」として記録した。

第2層 ⑮は7.5YR5/6明褐色シルトに粗砂～細砂を含む。⑯は7.5YR5/6明褐色シルトで粗砂～細砂を含む。⑰は7.5YR5/4にぶい褐色シルトに粗砂～細砂を含む。⑯と⑰とは⑩の中央谷をはさんでわずかに色調が異なるが、基本的に同一層である。

第3層 Dは第3面197落ち込みで10YR5/8黄褐色シルトに細砂と木の根を含む。

⑱は2.5Y5/6黄褐色シルトで粗砂を多く含む。⑲は10YR5/4にぶい黄褐色シルトに礫～細砂を多く含む。⑳は10YR3/4暗褐色シルトで細砂と花崗岩の小礫を含む。⑲と⑳は混じりあって堆積している。

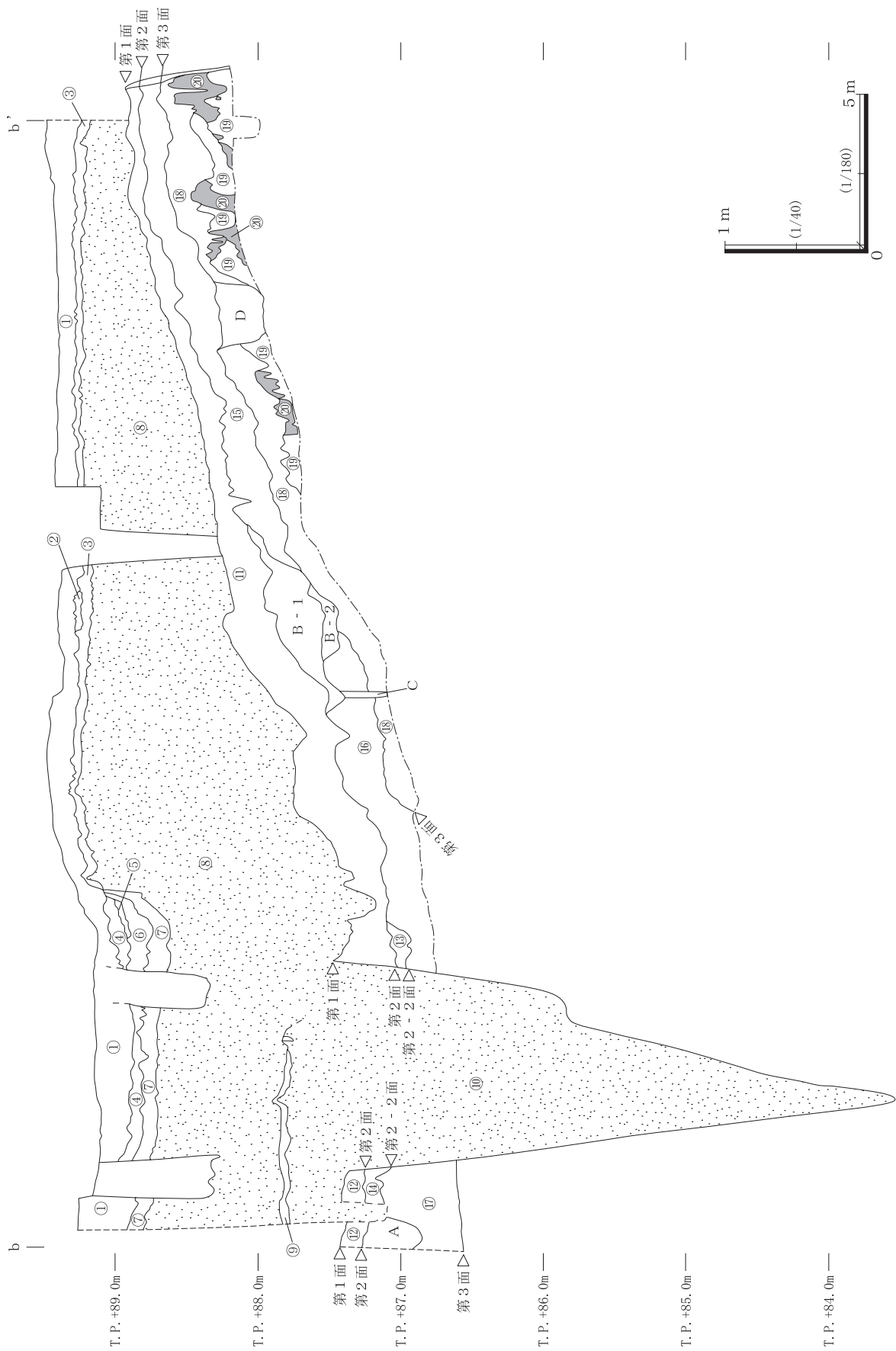


图23 08-2 调查区 B 断面

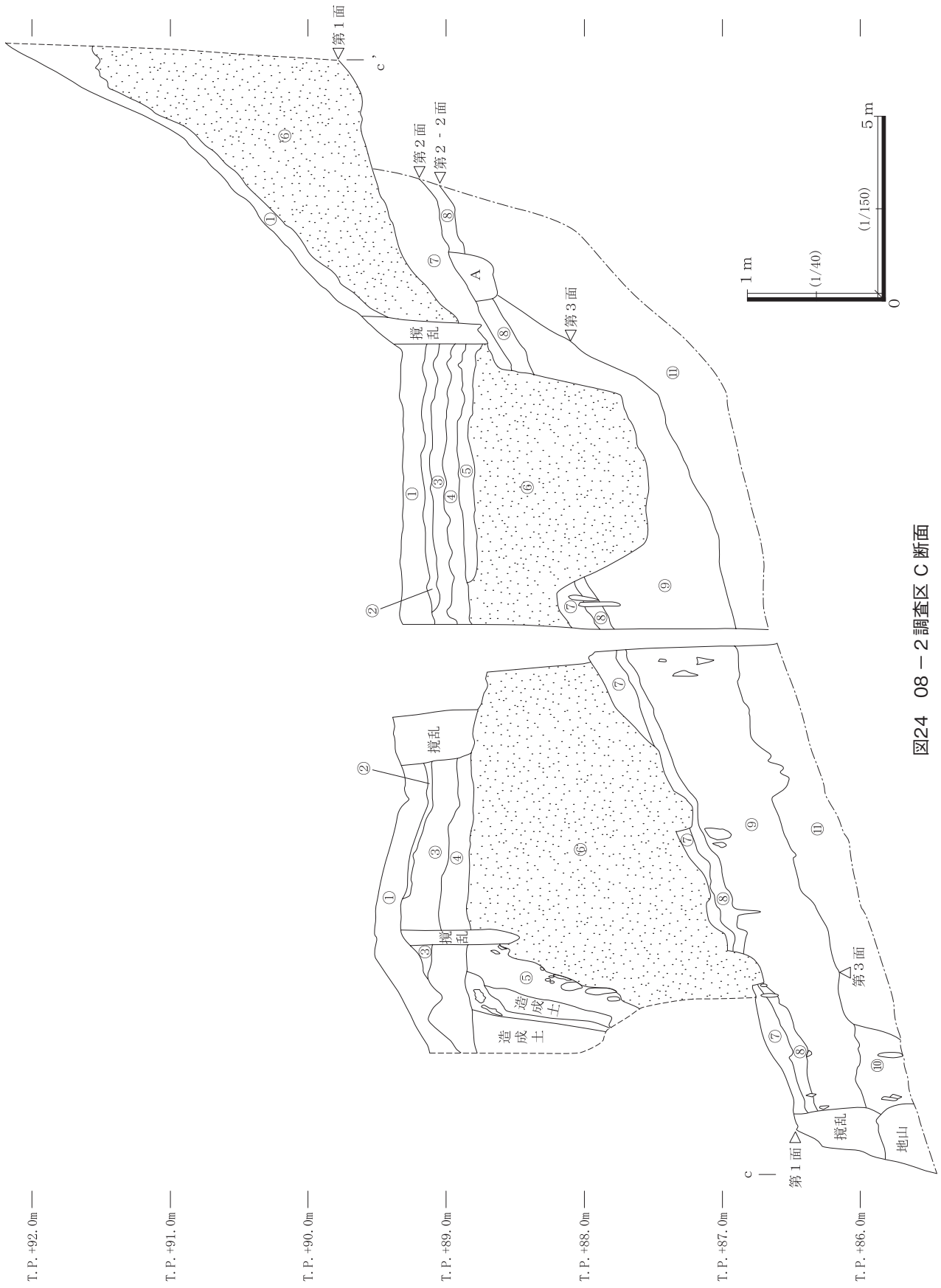


图24 08-2 调查区 C 断面

C断面(図24)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

②～⑤は盛土である。②は10YR5/2灰黄褐色細砂に礫を含む。③は10YR5/3にぶい黄褐色細砂に礫を含む。④は7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。⑤は中央部では10YR5/2灰黄褐色細砂に礫を含み、谷側の斜面に沿って傾斜している部分は10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂で少量の粘土ブロックと礫を含む。②～⑤はほぼ水平に盛られている。

⑥のラミナの発達した2.5Y6/3にぶい黄色粗砂に礫を含むは、A断面の⑨やB断面の⑧に対応する。斜面上方より流下し一気に堆積したものである。

第1層 ⑦は7.5YR6/2灰褐色粗砂～細砂に礫を含む。

第2層(上層) Aは第2面38土坑で10YR4/4褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

⑧は一見してかなり黒味が強く明瞭に判別できる。しかし、詳細にみると北西部の山側では5YR4/4にぶい赤褐色粗砂～シルトに礫を含み、中央部では10YR4/1褐灰色粗砂に礫を含み、南西部の谷側では10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫と粘土ブロックを含む、と変化している。この⑧の上面を「第2面」、下面を「第2-2面」とした。

第2層 ⑨は7.5YR5/4にぶい褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

第3層 ⑩は10YR5/8黄褐色シルトに粗砂～細砂を含み、さらに木の根を多く含む。⑪は花崗岩が風化した地山で10YR4/4褐色礫～シルトである。

D断面(図25)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

②～⑤は盛土。②は7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。③は北西部では10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含み、南東部では10YR6/6明黄褐色細砂に礫を含む、と北西部に向かうにつれて色調が明るくなる。④は北西部では10YR5/3にぶい黄褐色粗砂～細砂に礫を含み、南東部では7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。③同様に北西側で色調が明るくなる。⑤は10YR7/6明黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

⑥は後述する⑨よりは小規模だが斜面上部から流れてきた2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂で礫を含む。⑦は10YR5/8黄褐色細砂～シルトに礫を含む。⑧は7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。

⑨はラミナのみられる2.5Y6/3にぶい黄色粗砂に礫を含む。A断面の⑨、B断面の⑧、C断面の⑥に対応する。⑩もラミナのみられる10YR5/3にぶい黄褐色シルト。

⑪は10YR6/4にぶい黄橙色粗砂～シルト。⑫は10YR4/4褐色シルト。

第1層 ⑬は10YR4/4褐色粗砂に礫を含む。

第2面(上層) Aは第2面43落ち込みで10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。Bは第2面52土坑で10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。Cは第2面53土坑で10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

⑭は10YR2/2黒褐色細砂～シルトに炭化物の小粒を多く含む。⑮は10YR4/1褐灰色粗砂に礫を含む。この⑭と⑮の上面を含め全域を「第2面」、⑭と⑮の分布範囲の下面を「第2-2面」とした。

第2層 ⑯は10YR3/4暗褐色シルトで礫～細砂および炭化物を多く含む。⑰は第2層の主体となる層で、7.5YR5/4にぶい褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

第3層 ⑱は10YR4/4褐色礫～シルト。花崗岩が風化した地山で、C断面の⑪に対応する。



图25 08—2 调查区 D 断面

E断面 (図26)

E断面は、08-2調査区南東部の堆積状況を確認するために調査区機械掘削停止後に設定した。

第0層 ①～⑦は盛土である。①は10YR5/3にぶい黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。②は10YR6/1褐灰色粗砂～細砂。③は7.5YR6/4にぶい橙色粗砂～細砂。④は2.5Y5/1黄灰色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑤は7.5YR6/4にぶい橙色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑥は7.5YR5/2灰褐色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑦は10YR6/2灰黄褐色細砂～シルトに粗砂を多く含む。

⑧は10YR6/3にぶい黄橙色粗砂～細砂。

第1層 ⑨は7.5YR4/2灰褐色細砂～シルトに礫～粗砂を多く含む。谷側では第1面が東谷によって削られているため、山側にしか存在しない。

第2層 Aは第2面116ピットで、7.5YR2/1黒色細砂～シルトに10YR5/3にぶい黄褐色細砂～シルトのブロックを含む。

⑩は10YR5/4にぶい黄褐色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑪は10YR5/2灰黄褐色細砂に粗砂を多く含む。⑫は10YR6/4にぶい黄橙色粗砂～細砂でラミナがみられる。

第3層 ⑬は10YR6/1褐灰色粗砂に水平方向のラミナがみられ、さらに10YR3/1黒褐色細砂～シルトがラミナ状に入る。地山である。

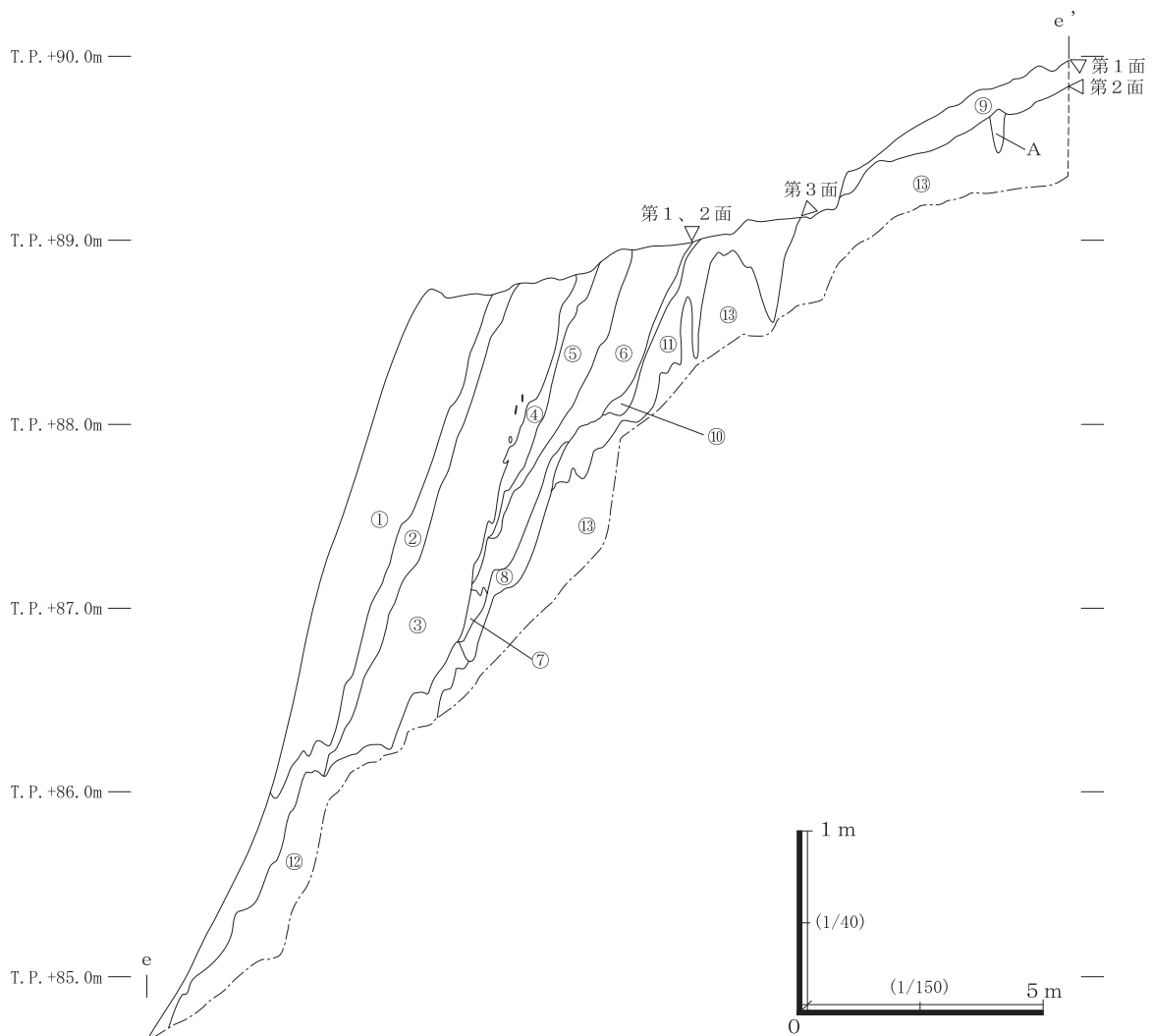


図26 08-2調査区 E断面

第3節 第1面の遺構と遺物

第1面(図27 写真図版5)は、基本的に機械掘削層・第0層のラミナの発達した砂層を除去した面である。ただし、調査区中央部から北西部にかけては、中央谷を埋めた砂層の上面において3建物や26石仏列などが姿を現したため、その面で記録しその後当該の遺構を掘り上げて下層を確認した。

第1面は北東から南西に傾斜しており、高い部分ではおよそ T.P.+93m、低い部分では北西端で T.P.+85m、南西側でおよそ T.P.+86.5mと高低差がある。遺構として、礎石建物、石仏列、石列・石群、土坑、ピット、溝など、計35か所[番号1～31・235・236～244(欠番7・9・10・11・13・14)]を調査した。

第0層を掘削し第1面を検出中に鉄釘などの金属製品がしばしば見つかったため、第1面の遺構調査と併行して金属探査を行った。鉄製品は錆びると土の色と見分けがつきにくく、しかも概して小さい。第1面では、寺院と思しき瓦を伴う礎石建ちの建物や鍛冶工房らしき土坑も検出されつつあり、ますます金属製品の出土が予想された。しかし、当センターに金属探知機はない。そこでレンタル数社の見積りを取り、費用と性能とを比較して、フジテコム社の金属探知機 F-90M を1週間借りることにした。

その探知性能は感度(Hi)時で、「鉄板(φ100×20):42cm、制水弁蓋(φ180):65cm」という。長さ10cm程度以下、太さ数mm、しかも錆びた鉄釘などにどう反応するのかは未知であった。

2000㎡以上に及ぶ調査区全域を図28のように5mメッシュで探査し、反応の有無を確認した。さらに、寺院と推定される3建物と鍛冶工房である18堅穴については全面探査した。

3建物では、反応のあった地点を中心に鉄釘や青銅製品が多く出土した。ただし、反応があってもその周辺から金属が出土しなかった場合や、反応地点と出土地点が数10cmずれる場合もあった。

18堅穴では、堅穴の北部でしばしば反応はあったが、掘削の結果、堅穴全面からほぼまんべんなく鉄釘や鉄滓が出土した。また、18堅穴北部の30ピットでは、その中心部に金属反応があったものの、金属は出土しなかった。一方、18堅穴南東部にある24炉と25ピットでは、ピット上面での探査では反応がなかったが、両遺構の埋土から鉄釘や鉄小塊が出土した。

以上、金属探査の結果、反応があっても遺物のないケースやその逆もあったが、おおむね金属製品の検出につながった。

以下、3建物、29土坑、26石仏列、18堅穴と関連遺構、溝、石組・石群、土坑・ピット、第1面出土遺物の順に報告する。

3建物(図29～32 カラー写真図版1・写真図版5～8)

調査区中央部やや北西側に位置する。機械掘削中に人頭大あるいはそれ以上の石が見つかったため、人力掘削に切りかえ礎石群を検出した。

構築順は、まず北東から南西に傾斜する面を建物の北方に約5m、東方には約5～6mまでカットし、平坦面を造りだす。次に、穴を掘り、根石を入れ、礎石を据え、穴を埋める。この段階で、掘方のない石も置かれた。その後、建物の建つ範囲内の石の周辺に図30の第1層の4(5YR5/6明赤褐色シルトに粗砂～細砂を含む)を亀腹状に敷きならしている。

第1層の4の上面では、その層以下に含まれている遺物はほとんど露出していない。建物北列西側の237礎石の周辺は黒っぽくなっているが、これはこのあたりがわずかにくぼんでいたために雨水などにより第1層の2(10YR3/2黒褐色シルトで上部に植物遺体層)が流入したためで、人為的なものではない。

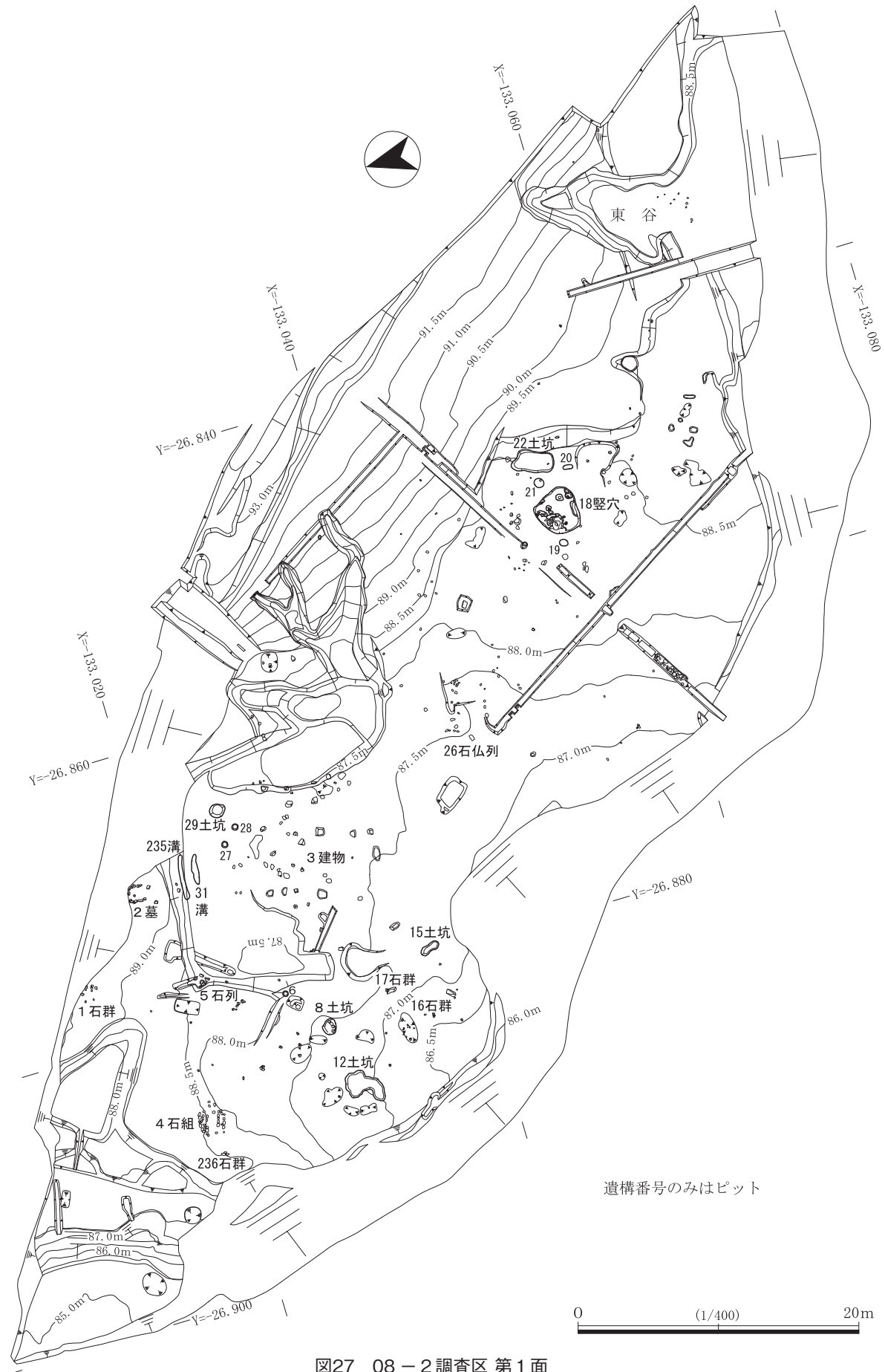


図27 08-2調査区 第1面



図28 08-2調査区 第1面における金属探査

いと考えられる。一方、建物南側の沓脱石の南から南東側にかけて数mの範囲内は、周辺の同じ層よりも踏み固められ三和土のように締りが良い。

瓦などの遺物を取り上げ石を除去して確認したところ、掘方は237～244礎石の8個で認められた。それらを基準に建物の規模を推定する(図29)と、建物北辺と考えられる237礎石と241礎石の心々距離(以下同じ)が4.1m、東辺の241礎石と242礎石の間が3.9m、西辺の237礎石と238礎石の間が3.8m、南辺の238礎石と242礎石の間が4.5mと、南辺が1割方長いが、6尺5寸を1間(1.97m)とする京間のおおむね2間×2間に相当する。この部分は2間×2間の宝形(方形)堂に復原できる。

ところが、建物南側の沓脱石を中心としその左右にある240礎石と244礎石の間は3.5m、その1.1～1.2m北側の239礎石と243礎石の間は3.4m、238礎石の0.9mほど東にある石と242礎石との間は3.6mと、6

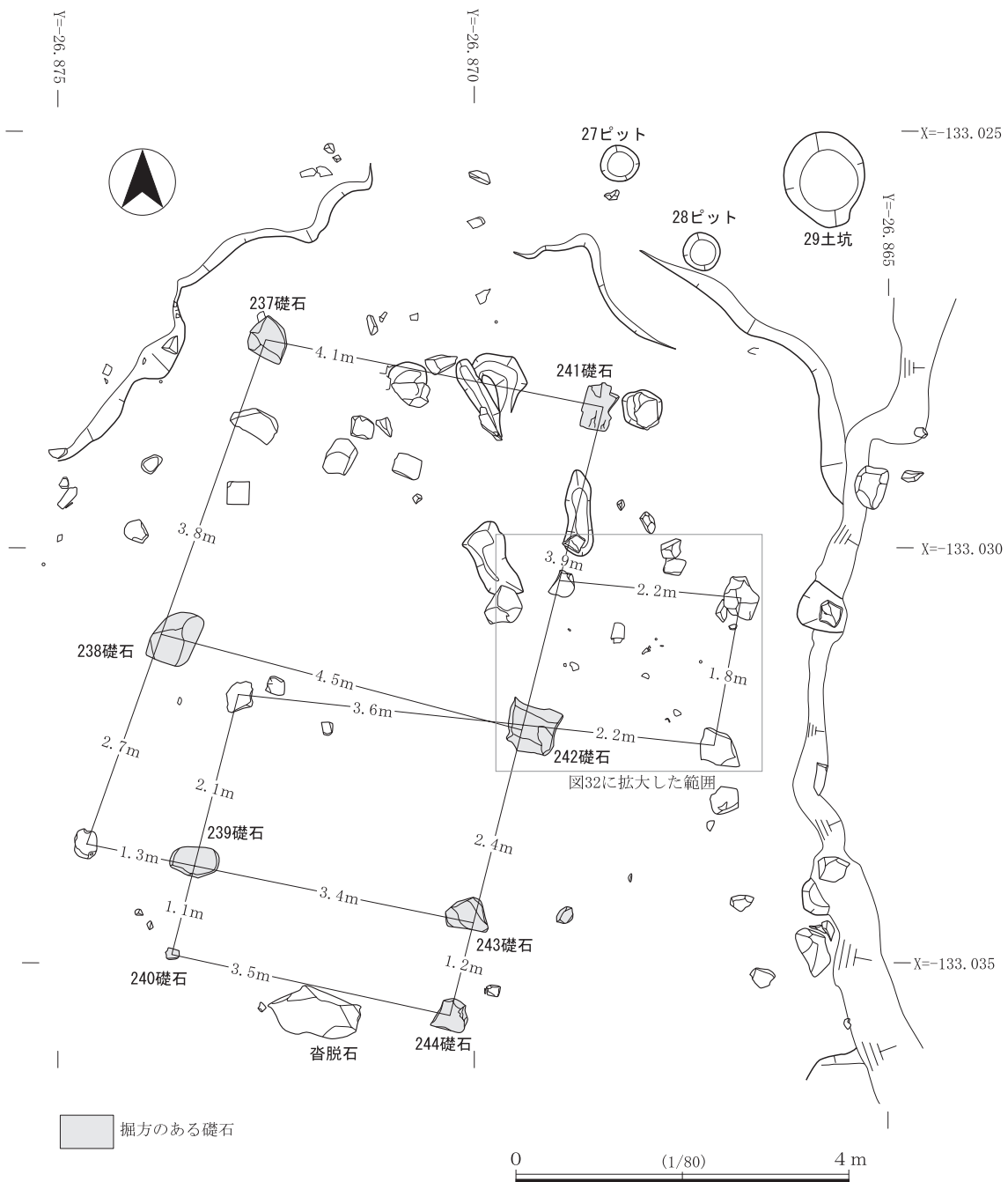


図29 08-2調査区 第1面3建物検出状況

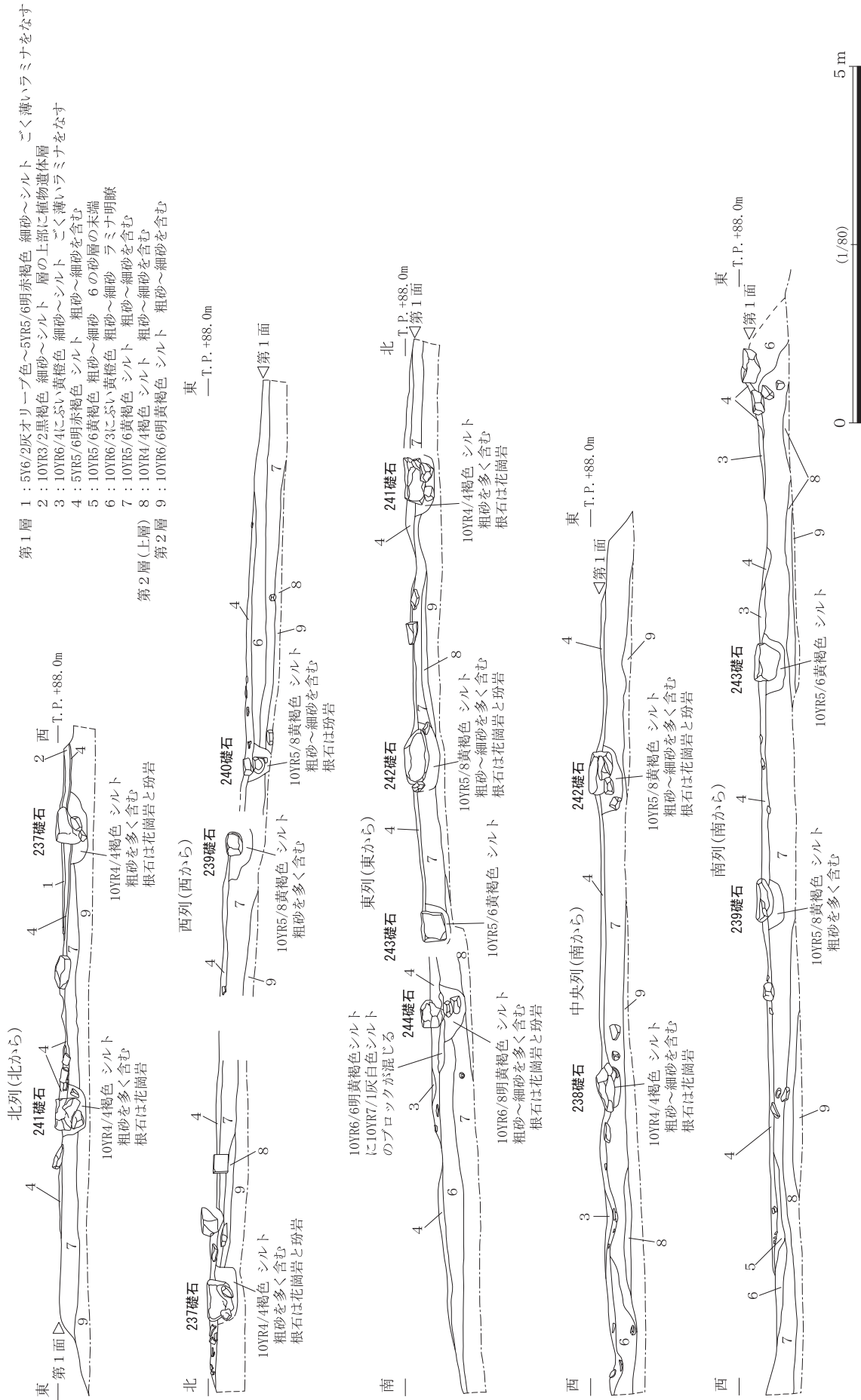


図30 08-2調査区第1面3建物断面



図31 08-2調査区 第1面3建物遺物出土状況

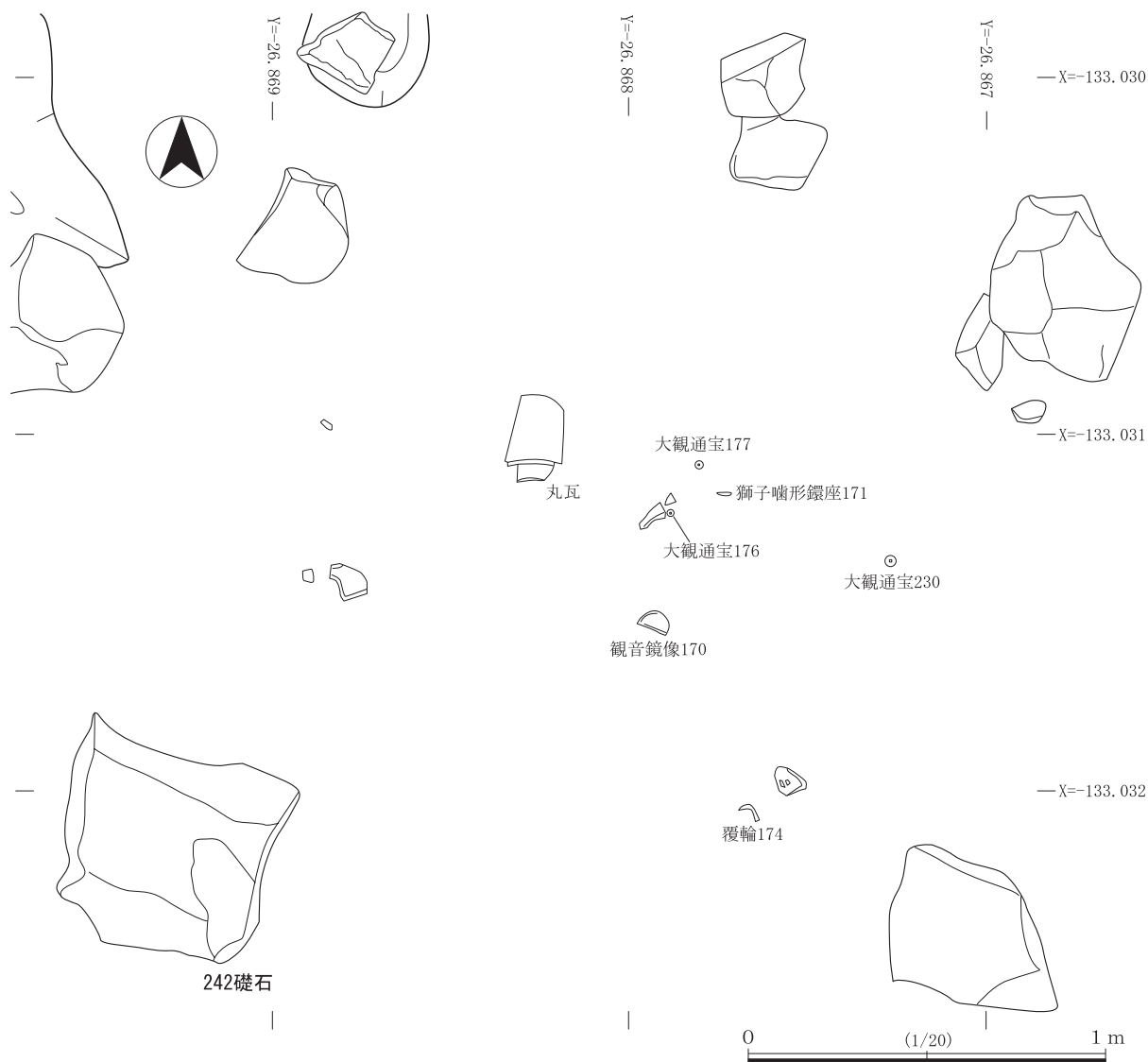


図32 08-2調査区 第1面3建物青銅製品等出土状況

尺を1間とする江戸間(1.82m)の倍数に近い。

242礎石の北東側には、掘方はないが大きめの石が存在し、南北約1.8m東西2.2mの長方形を構成する。その内側からは図32のように線刻十一面観音鏡像、獅子嚙形銀座、大観通宝、覆輪といった青銅製品などがまとまって出土した。このほか、241礎石の南西側から懸仏の尊像、237礎石の南西側部から金鍍金の鈴などが出土した。鎮壇具であろうか。

さらに各礎石間の心々距離を計測すると図29のようになり、京間と江戸間の倍数に近い値が混在する。

北側の京間の建物と南側の江戸間の建物とが時期の異なるものとの仮定も成り立つが、断面(図30)をみると、237~244礎石の8個はいずれも掘方の上面を第1層の4(5YR5/6明赤褐色シルトに粗砂~細砂を含む)で覆われており、同時並存あるいは大きな時期差はないと考えられる。

奥田 尚氏により、石材は237・240・242・244礎石がアプライト質黒雲母花崗岩、238・243礎石が黒雲母花崗岩、239・241礎石が^{ひん}玢岩と鑑定されている(「第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地」参照)。

3建物の第1層の4からは約5000片の瓦が出土した。割れた平瓦が多く、丸瓦、軒瓦、道具瓦などの比率は低い。これらの瓦の分布範囲は図31のように第1層の4(5YR5/6明赤褐色シルトに粗砂~細砂

を含む)の範囲内に限られるので、この層を敷く時点ですでに瓦が存在したと考えられる。特に建物の西外方、南西外方、南の沓脱石の周辺に集中しており、中央部から東部にかけては希薄である。ただし、242礎石北東部の瓦が少ない部分から、図32のように青銅製品が集中的に出土していることは注意すべきであろう。先述のように237～244礎石は瓦よりも後に据えられたと考えられるので、瓦の分布状況からみて、3建物に先行してほぼ同位置にこの瓦を用いていた建物が存在した可能性がある。なお、数m以上離れて出土した瓦同士が接合するのは、建物の西半に限られる。

3建物の時期は、16世紀後半の瓦を礎石周囲に敷いて再利用しているので、それ以降である。

瓦の数を推計する方法としては、四周の長さ、面積、重量を計測する、あるいは破片数や四隅などを数える方法がある。ここでは破片と四隅の数を掲げる。

3建物の第1層の4から出土した平瓦の破片数は2097である。平瓦には狭端部と広端部とがあるが、判断に迷う破片も多いので一括して数えた。このうち1隅のある破片は644片、2隅が10片、3隅以上残るものはなく、平瓦の隅は $1 \times 644 + 2 \times 10 = 664$ 隅になる。平瓦は四角形なので、664を4で割ると166。すなわち最少でも166枚の平瓦が含まれている。

同様に丸瓦の破片数は378である。丸瓦の場合、平瓦よりも狭端部と広端部の判別が容易なのでこれを分けると、狭端部1隅が115片、同2隅が5片、広端部1隅が63片、狭端部1隅+広端部2隅が1片、狭端部2隅+広端部1隅が1片である。狭端部の隅でみると $1 \times 115 + 2 \times 5 + 2 = 127$ 隅で、最少個体数は64となる。広端部では $1 \times 63 + 2 = 65$ 隅で、最少個体数は33となる。すなわち、狭端部で数を数えた方が多く、丸瓦は64枚以上含まれている。

以下、3建物の第1層の4から出土した各種の瓦を掲げる。

図33-96～図34-102(写真図版22)は全て同範の左巻き三巴紋軒丸瓦である。巴の先端はやや丸みを帯びており内側に巻き込む。巴の1単位は界線と結合するが、残りの2単位は結合しない。外区には珠紋を18単位配する。ただし珠紋の数は、完形の個体がないため推測となる。周縁の高さは8mm程度、幅は25mmである。焼成は硬質で、色調は基本的に表面灰色、断面灰白色である。96～98・100の断面観察から、丸瓦の接合は外縁部よりも下部に粘土を詰め、その後外縁部に丸瓦を差し込んでされている。97の丸瓦部凹面にはコビキ痕が確認できる。101の丸瓦部凹面にはコビキ痕と吊り紐痕が確認できる。図34-101と102は、瓦当面の上半と丸瓦部が残る。100以外は磨耗している。

図35-103～109(写真図版23)は宝珠唐草紋軒平瓦。中心飾りの宝珠の両側に3回反転の唐草紋が配置されるが、宝珠と唐草は接続しない。103～106はいずれも瓦当上縁が面取りされ、瓦当外区が平滑に仕上げられている。また、左側唐草第3単位の外側に範傷が認められる。108には向かって右側面に水切り用縦棧が付く。103～108の宝珠唐草紋軒平瓦は同範とみられ、瓦当部の接合方法や紋様構成から16世紀後半の所産と考えられる。

109も宝珠唐草紋だが先の2種とは別範である。唐草の展開は2回反転のみで、かつ紋様表現がさきの2種と比べ退化している。

図36-110～113(写真図版24)は玉縁を有する丸瓦。いずれも凹面には、布目と吊り紐痕とコビキ痕がみられる。113の凹面には滑り止めが付く。103～109の瓦当接合方法はいずれも、平瓦に顎部分を貼り付ける顎貼り付け式である。

図37-114～117(写真図版24)は平瓦。凹凸面両面とも丹念にナデ消されているため、ナデ以前の調整方法はわからない。

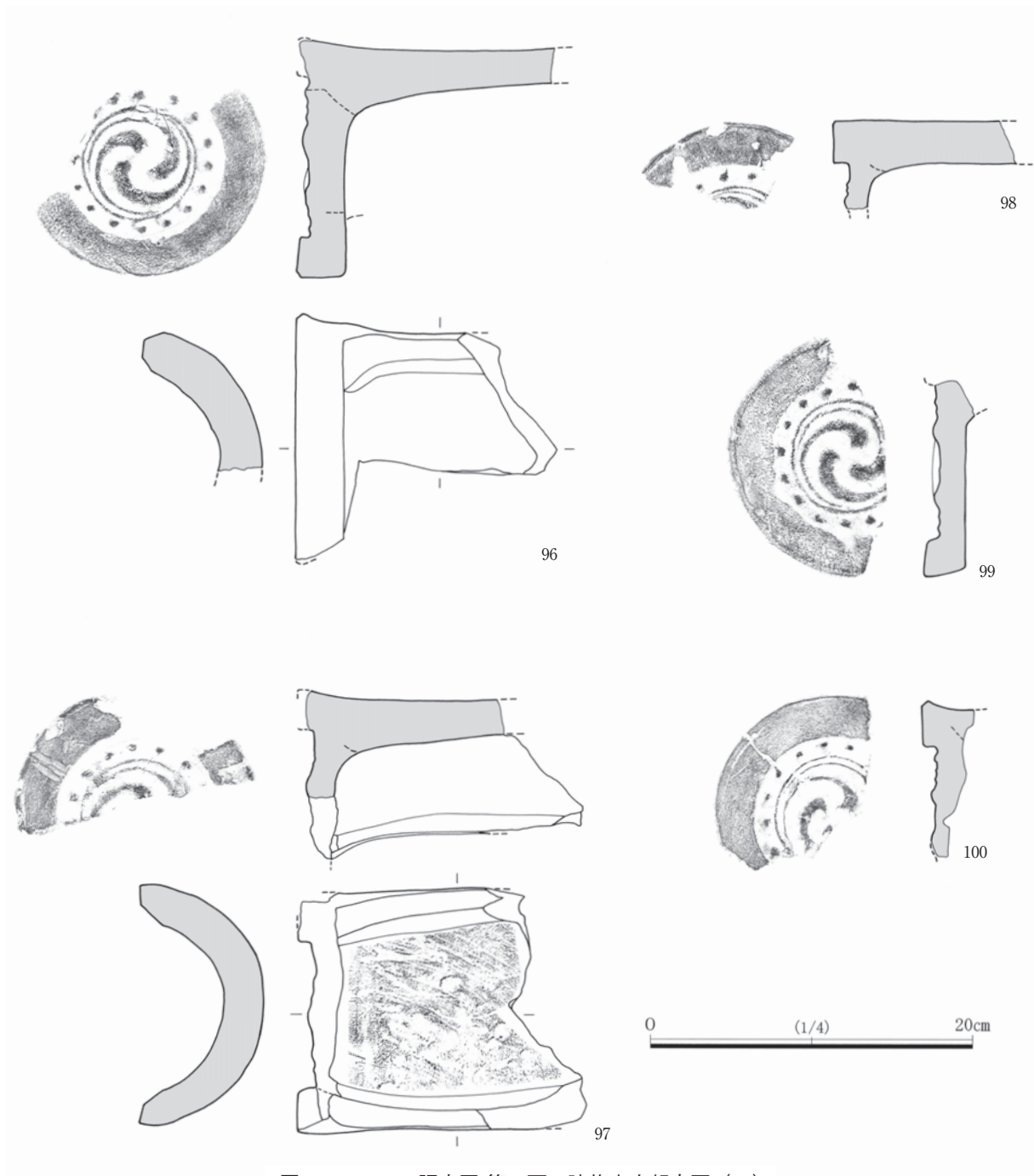


図33 08-2 調査区 第1面3建物出土軒丸瓦 (1)

図38-118は行基葺丸瓦。凹面にはコビキ痕が認められる。

119～124(写真図版25)は、いずれも端面に竹管状工具による○印の刻印がみられる平瓦。その部位は側面寄りではなくむしろ端面の中央部に近い。119には隣接して接し合う2単位の刻印があるが、その他は1単位のみである。

125は隅瓦。

126～128(写真図版25)は面戸瓦。126は丸瓦の玉縁付近を焼成前に加工したもの。127の凹面には布目とともに吊り紐痕もみられる。おそらくこれらも焼成前の丸瓦を加工したと考えられる。

図39-129～132(写真図版25)は雁振瓦(衾瓦・伏間瓦)、凸面はナデ調整を施し、凹面にはコビキ痕がみられる。

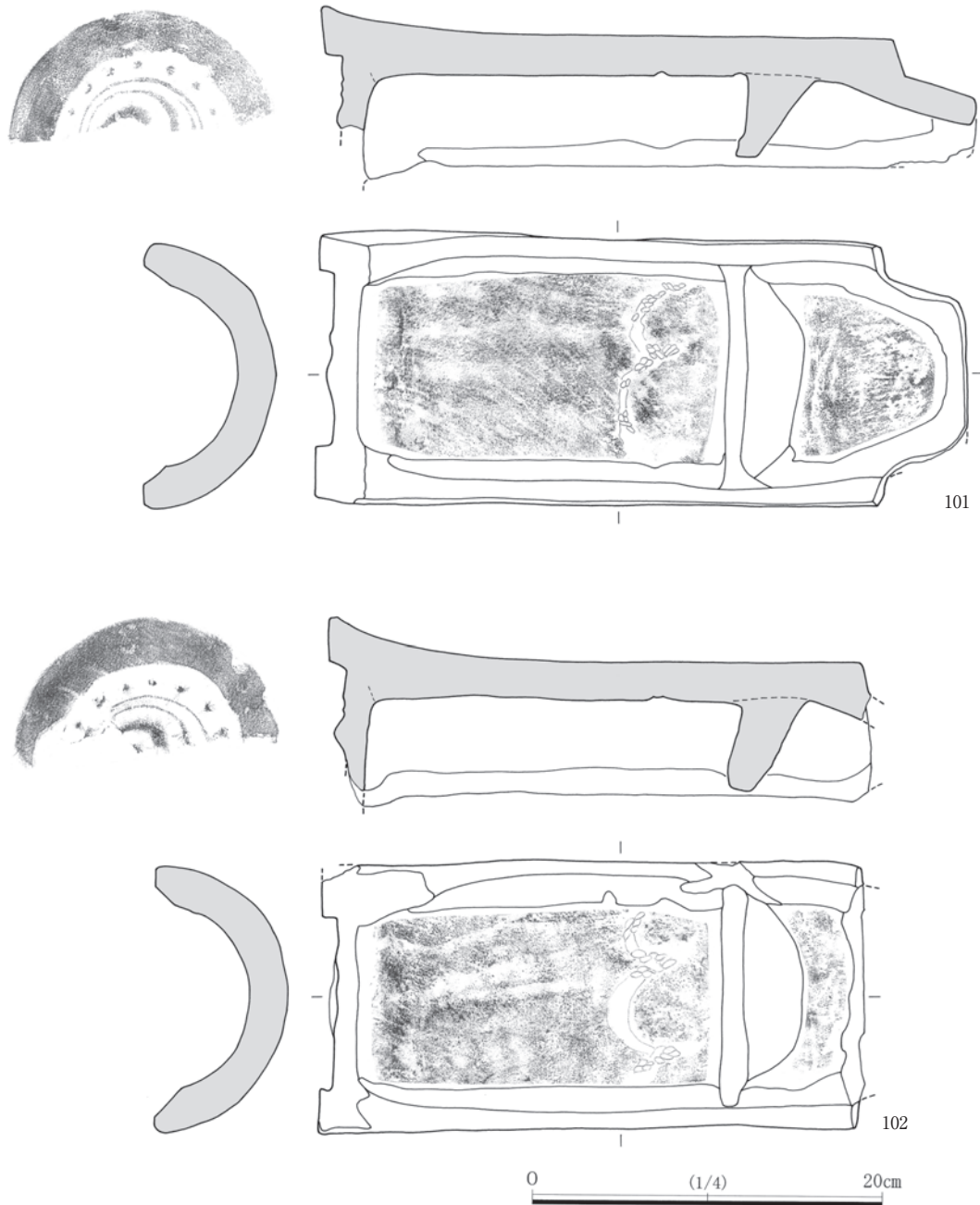


図34 08-2調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(2)

図40-133(写真図版26)は、行基葺丸瓦に文字がヘラ書きされたもの。四周を欠くが、他の破片とは接合しなかった。破片下部やや右は^{アク}𪛗、その右は^{バン}𪛗で、金剛界五仏の一部分と考えられるが、真言の可能性もある。左側の文字は上が「菩」で下が「日」の右上部としてよければ「提」と推定され、2文字合わせて「菩提」となる。

134(写真図版25)は水煙形の瓦。穴がある。

135(写真図版26)は隅木蓋瓦。内面は粗くケズられて、その周囲は強くナデられたため溝状に浅くくぼんでいる。

136は平瓦の凹面に滑り止めを施したものか。

137は平瓦の破片を円板状に加工したものである。

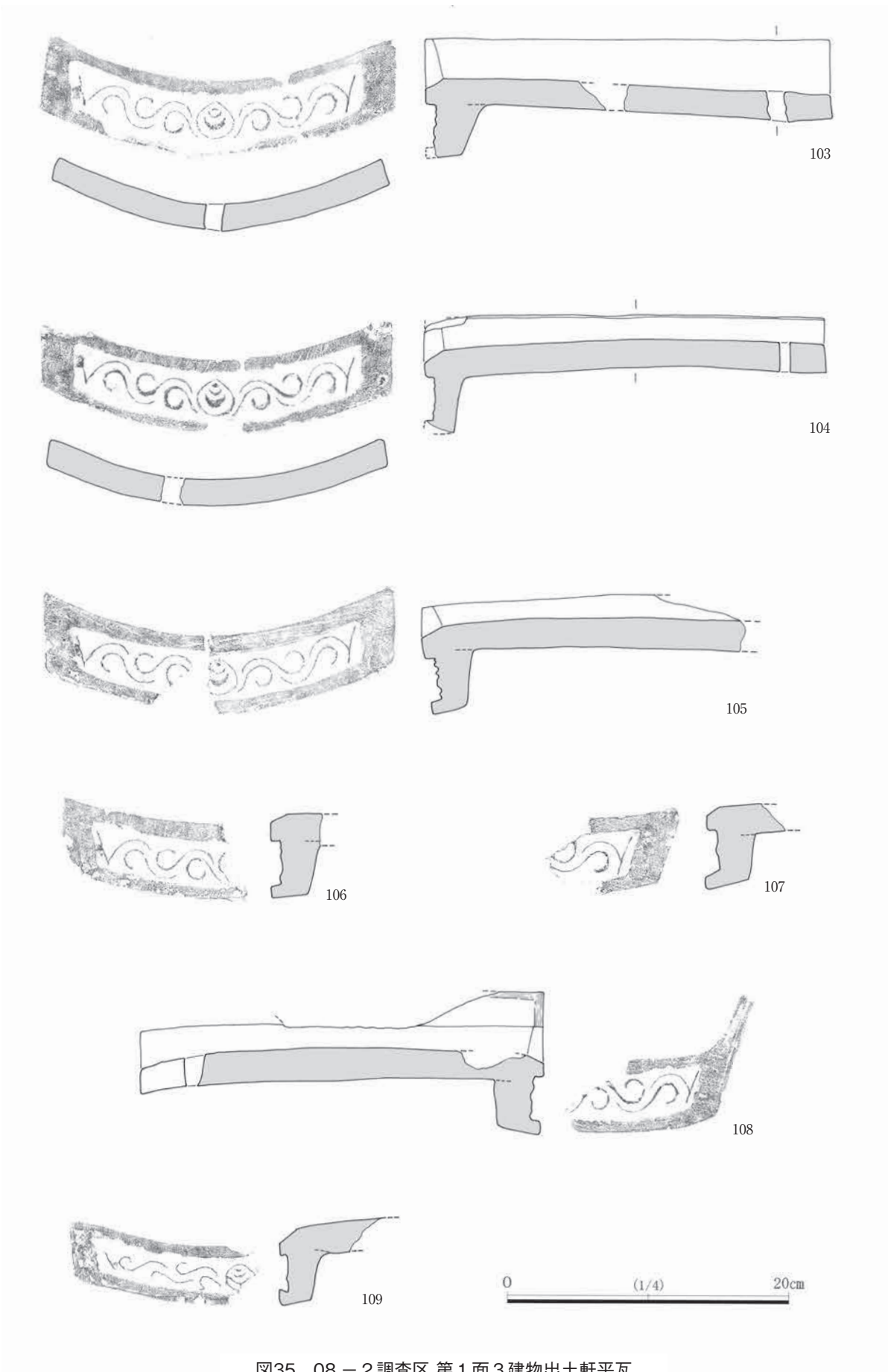


图35 08-2 调查区 第1面3 建物出土軒平瓦

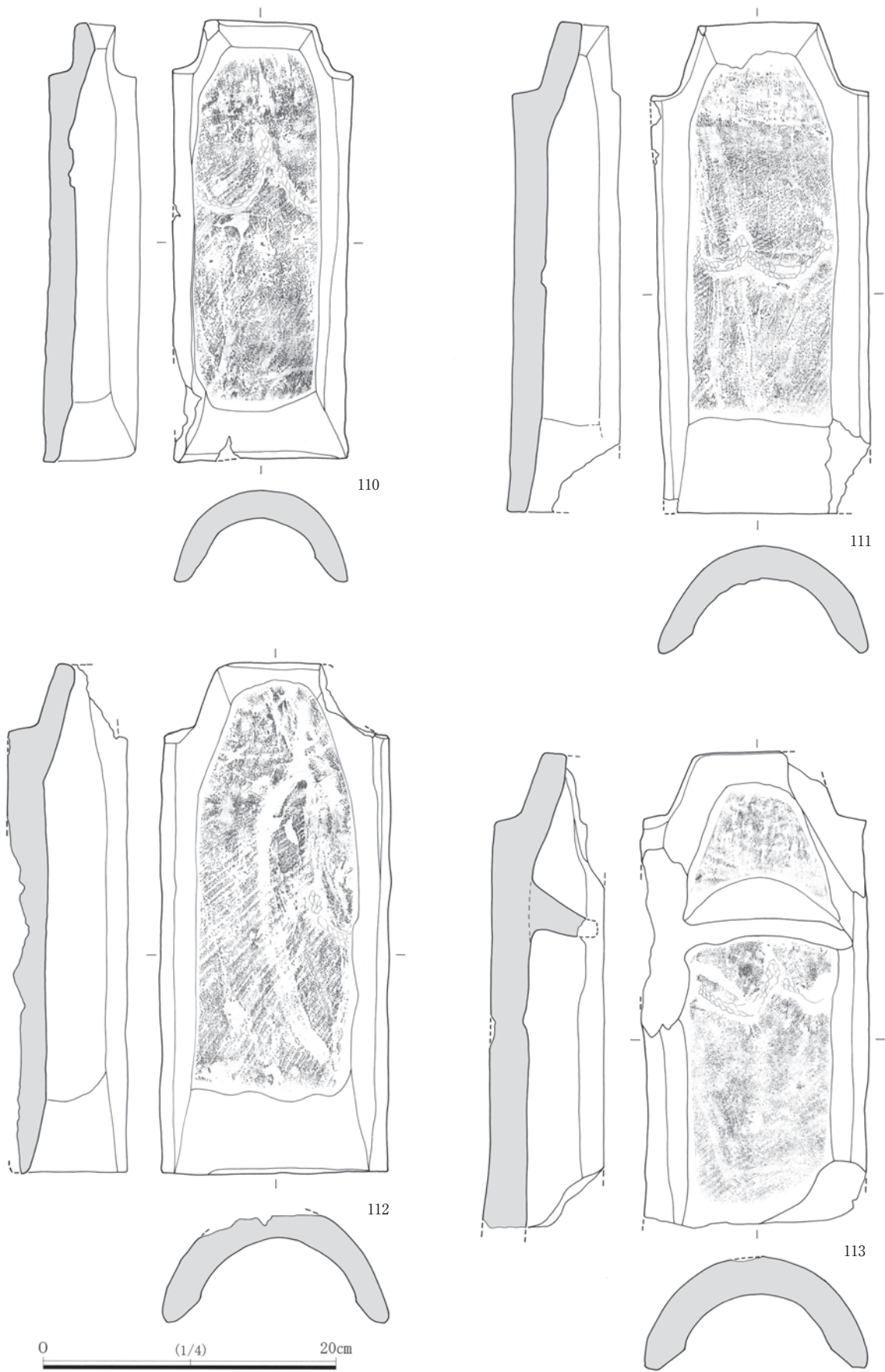
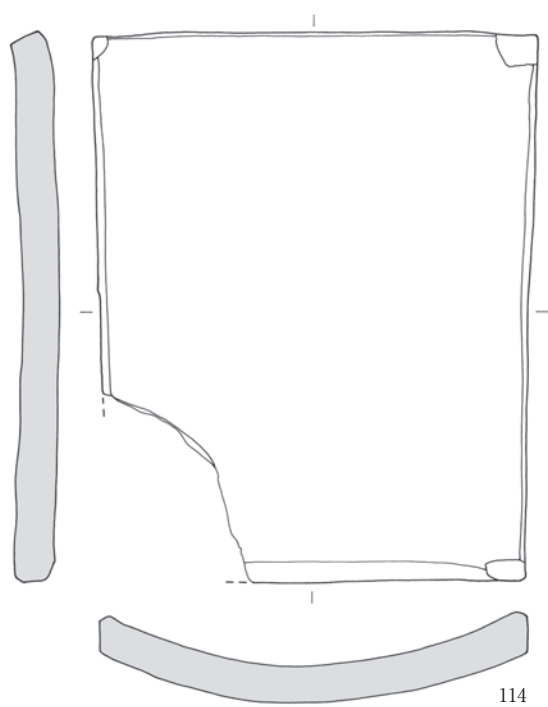
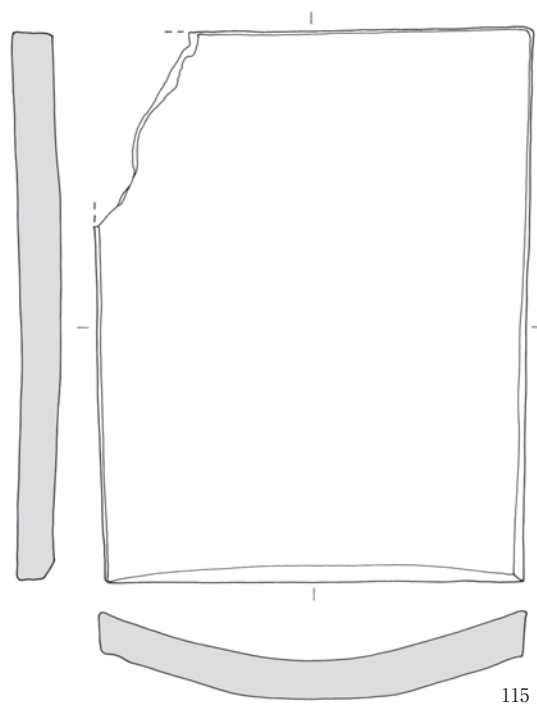


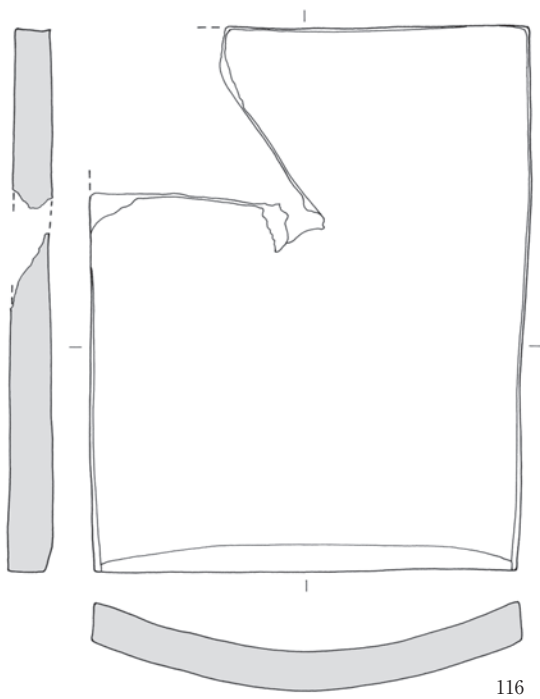
図36 08-2調査区 第1面3建物出土丸瓦



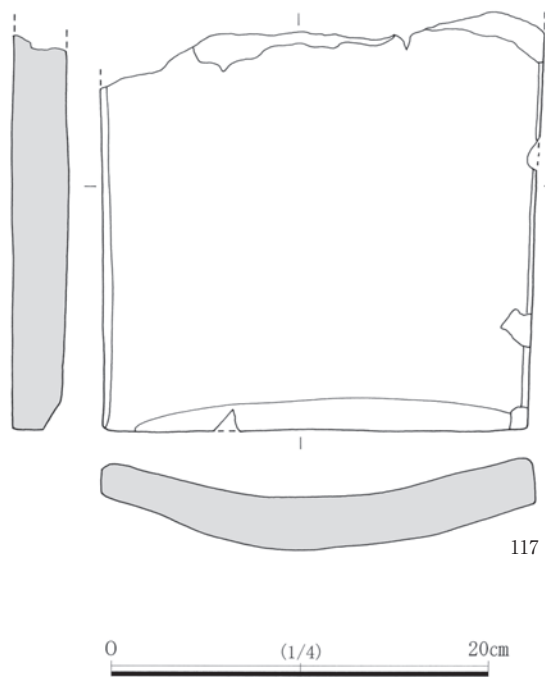
114



115



116



117

0 (1/4) 20cm

図37 08 - 2 調査区 第1面3 建物出土平瓦

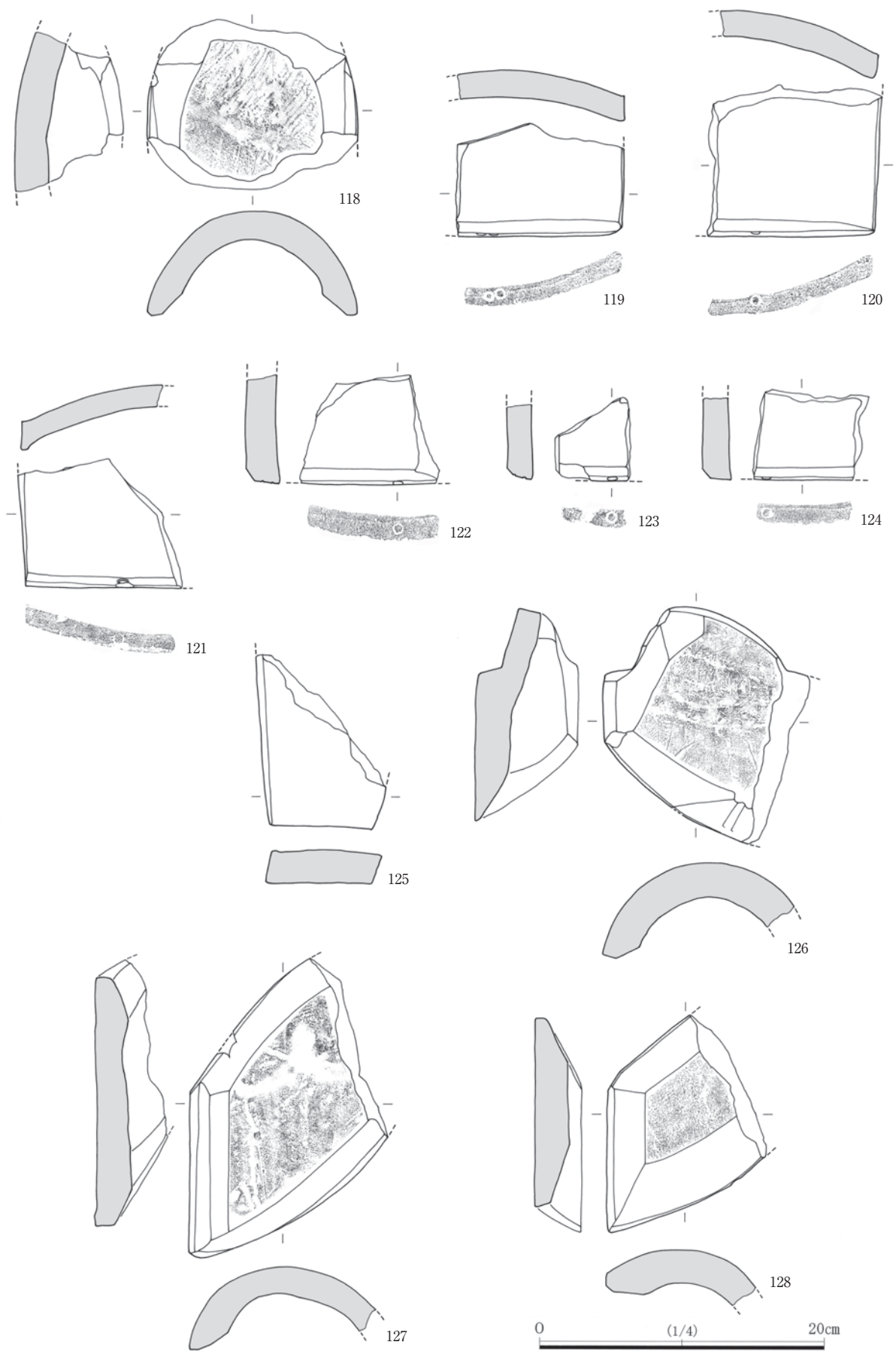


図38 08-2調査区 第1面3建物出土行基葦丸瓦、竹管文のある平瓦、隅瓦、面戸瓦

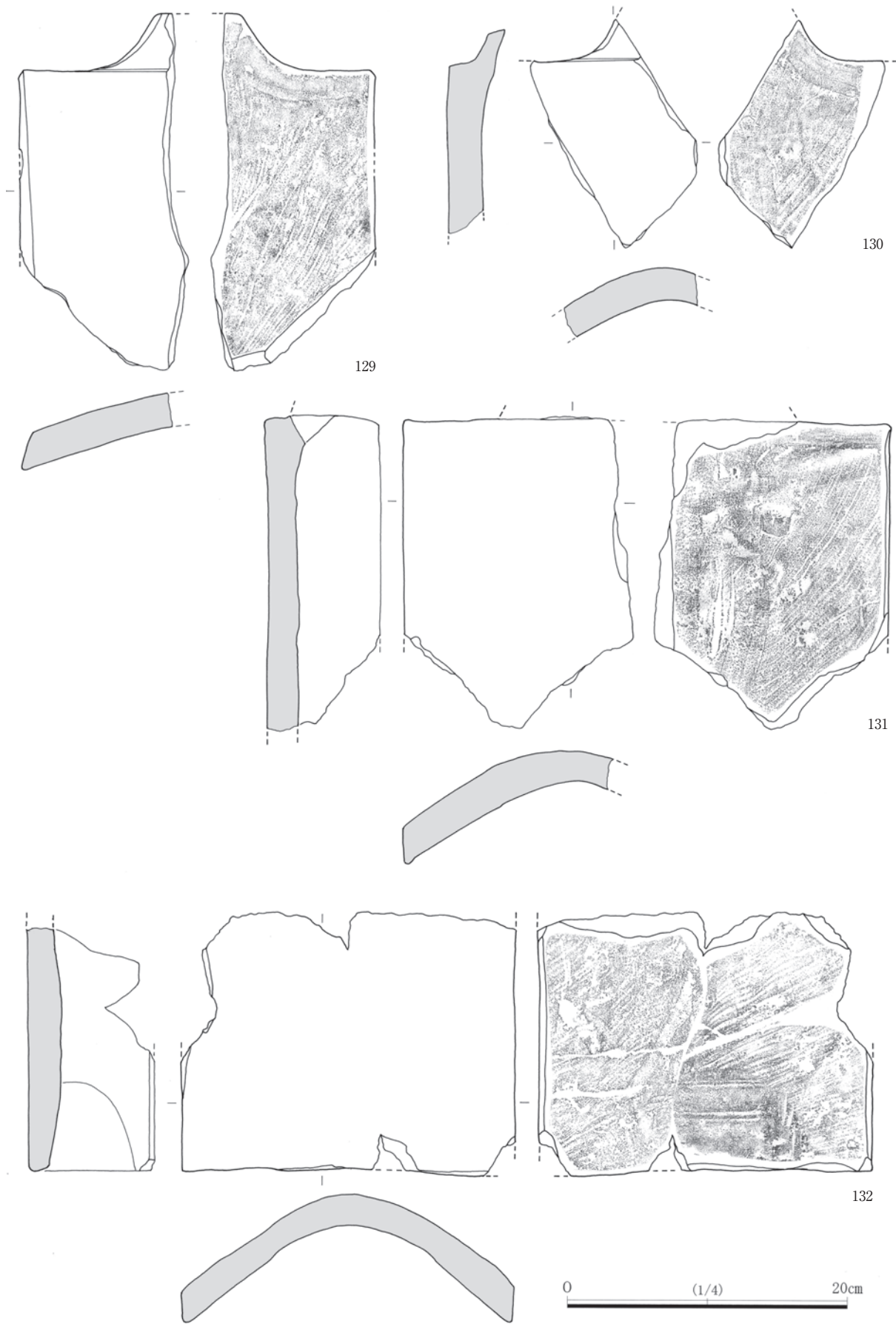


图39 08-2 調査区 第1面3 建物出土雁振瓦

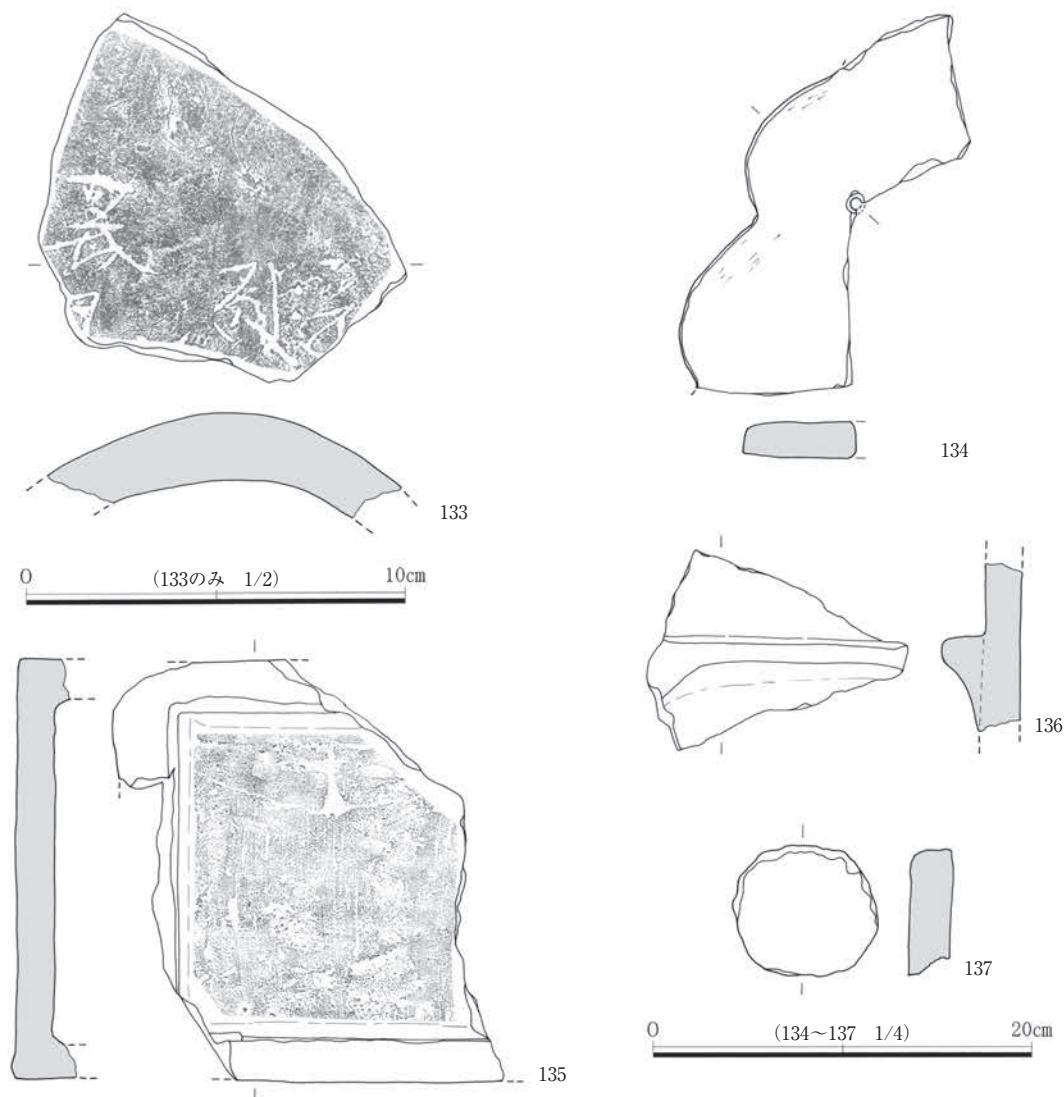


図40 08-2調査区 第1面3建物出土その他の道具瓦類

図41-138～147(写真図版26)は小型菊花紋軒丸瓦。瓦当径はいずれも10.0cm、推定長は20cm程度と小振りである。内区には12単位の花弁を配し、外区には推定20単位の珠紋を配する。瓦当範には、外縁上部と丸瓦部、内区より下部にそれぞれ粘土を詰め、瓦当と丸瓦との接合用粘土はほとんど用いない。凸面はナデ調整が施されており、凹面には布目痕跡が認められるが、釣り紐痕跡は確認できない。色調は灰色ないし褐灰色を基調とし、明らかに二次的焼成を受けている。146・147は瓦当面を欠くが、形状から同類と判断した。山崎編年中世Ⅲ期、13世紀の後半所産であろう。

図41-148～図42-158(写真図版26)は剣頭紋軒平瓦。軟質で表面が磨滅しており必ずしも鮮明ではないが、剣頭紋は陽刻の蓮弁状でその左右に各6単位認められる。向かって右から2～4単位目と左から2・4単位目が上下にやや長い。右から4単位目と5単位目との間に高まりがある。以上の特徴が共通することから、これらの剣頭紋軒平瓦は同範と考えられる。凸面はナデ調整され、凹面にはわずかに布目痕跡が残る。瓦当幅は約16cm、全長は約20cm。小型菊花紋軒丸瓦と同様に、灰色ないし褐灰色を基調とし、明らかに二次的焼成を受けている。寸法および色調から上記の小型菊花紋軒丸とセットになると考えられ、ともに13世紀後半に位置づけられる。

図43-159～161は土師器皿。159は底部が丸みを帯び、口縁部が外反する赤色系の皿。16世紀に属す

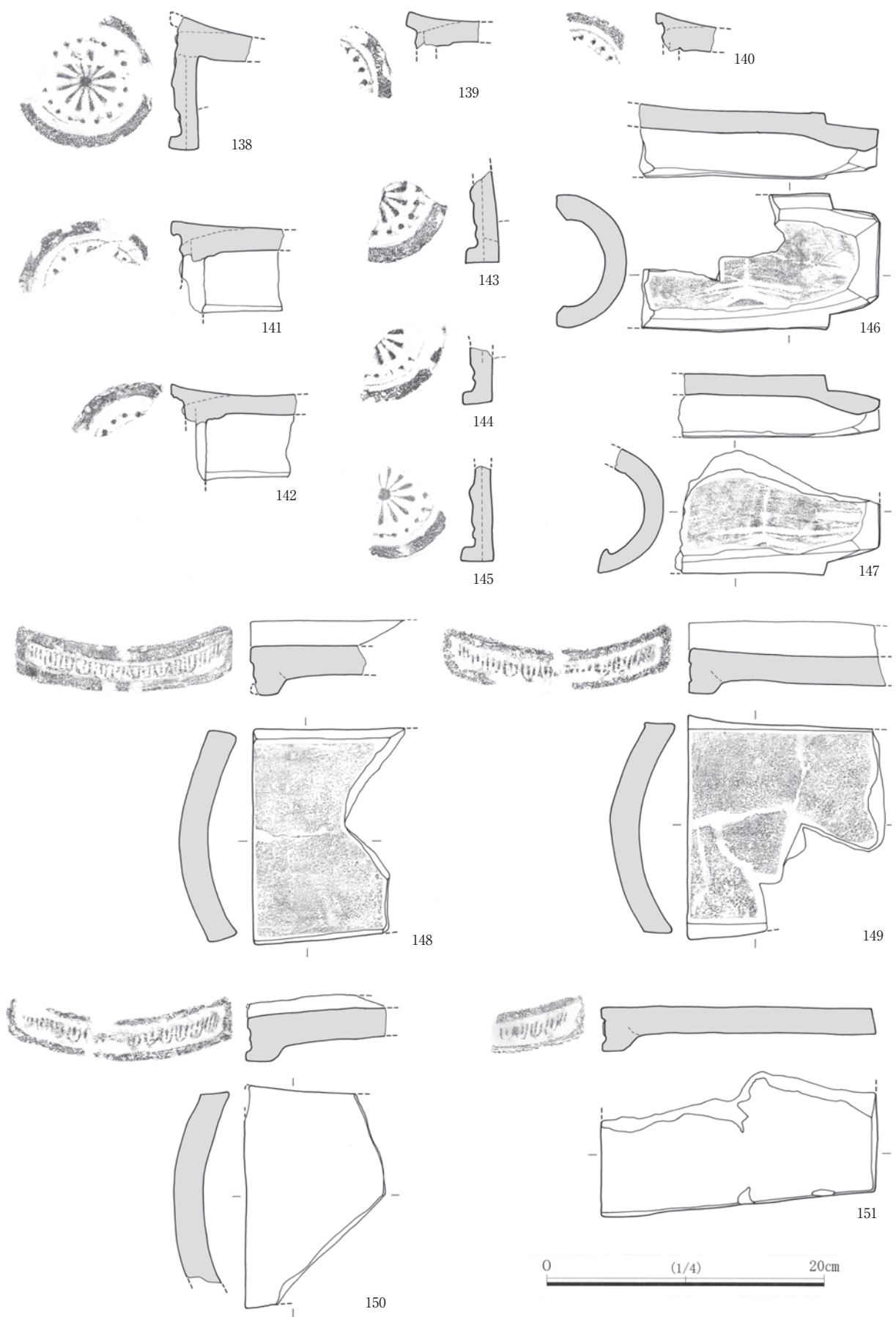


図41 08-2調査区 第1面3建物出土菊花文軒丸瓦、劍頭文軒平瓦（1）

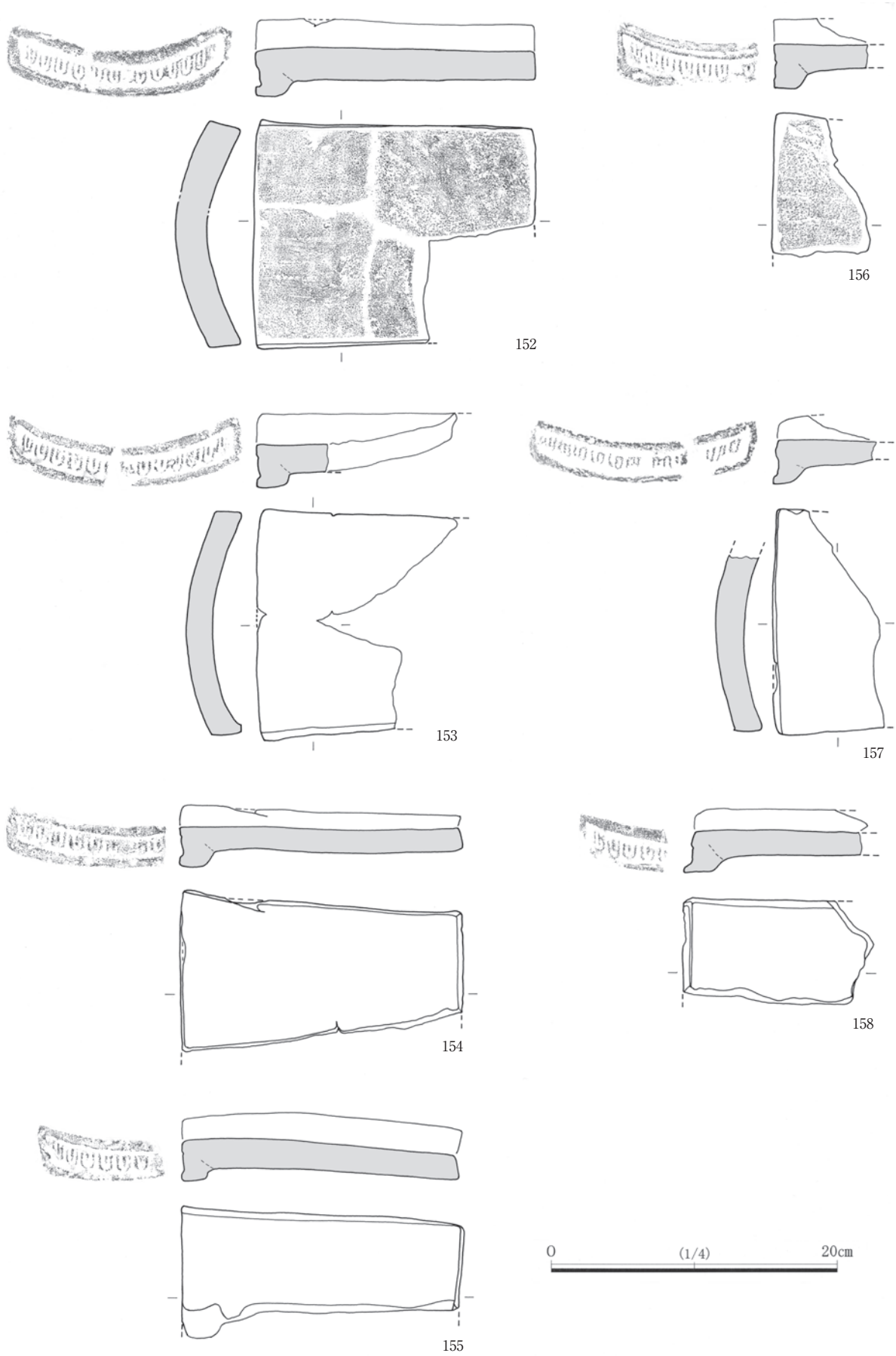


图42 08-2 調査区 第1面3 建物出土劍頭文軒平瓦 (2)

る。160・161(写真図版27)は灯明皿として使用されたもの。油の炭化物が付着している。16世紀後半、瓦と同時期の所産としてよい。

162・163は瓦質土器。火舎であろうか。163の胴部にはすくなくとも1孔が穿たれている。14～15世紀に属するか。

164(写真図版27)は石塔の相輪。上部は折損し、基部は削られている。九輪の下部には、不明瞭だが請花状の凹凸が認められる。花崗岩製。

165～168は鉄製品。

165・166は鉄釘。頭部はわずかに屈曲している。胴部の断面はほぼ正方形である。167・168は鉄製の鏝であろう。断面は縦長の長方形を呈する。

169～177は青銅製品。

169(カラー写真図版2)は懸仏の尊像(本尊)部。蓮上に坐し、右手を下げ、左手に何かを持っている。これが蓮華を挿した花瓶であれば菩薩坐像、薬壺であれば薬師如来坐像と考えられる。背面には鏡板に固定するための突起があり、上下に貫通する穴が開いている。腹部に穴が開いているが、その輪郭は不明瞭なので銅の薄い部分が腐食したものと推定する。高さ3.6cm、現状で重さ7.6g。14世紀頃の所産と考えられる。

170(カラー写真図版2)は線刻十一面観音鏡像(御正体^{みしょうたい})。直径8.4cmの素紋の鏡面に蹴彫りによる十一面観音菩薩がみられる。像の後上方に火頭型の光背、顔の向かって右側に蓮、像の頭上には小さな円と目鼻のような点からなる小さな顔が約10個描かれている。像上部の左右に直径2mmの穴を開け、紐などで吊り下げられるようにしてある。像の腹部で像に対して水平方向に鑿を入れ意図的に鏡を半截している。背面の周縁はかまぼこ状に肥厚し、背面中央には取手状の鈕がある。現状で28.8g。懸仏が169のように立体化する以前の形態で、12世紀の所産と考えられる。

171(カラー写真図版2)は獅子噛形鑲座。懸仏の鏡板を吊るすための金具で、円板状の鏡板の左右上部に付く。形状からみて鑄造品であろう。14～15世紀に類例がみられる。8.7g。

172(カラー写真図版2)は金銅製の鈴の破片。外面に金鍍金が施されている。現状で0.5g。

173(カラー写真図版2)は取手の一部と推定される。現状で1.8g。

174(カラー写真図版2)は覆輪。表面と側面に金鍍金が施されている。屈曲部にある釘穴の径は約1.5mm。この外面左右は鑿状のもので打たれたものか、線状に窪んでいる。図示したものの他に、同一個体の破片が2片ある。

175～177(写真図版46)は銭。175は聖宋元宝。1.6g。北宋1101年初鑄。176は大観通宝。1.3g。北宋1107年初鑄。銭文がやや不鮮明だが177も同様であろう。1.5g。

29土坑

3建物の北東側、241礎石の約3m北東に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径112cm、短径95cm、深さ56cmである。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルトに粗砂～細砂を含む。瓦と鉄釘が出土した。

図44-178・179(写真図版27)は左巻き三巴紋軒丸瓦。巴紋の先端は丸く、尾は2分の1周ほど伸びる。珠紋は16個、界線はその内側にのみ巡る。3建物出土の96～102と同範。

180は丸瓦。玉縁の凸面側には細かな面取りがみられる。凹面には布目と吊り紐痕がみられる。

181は剣頭紋軒平瓦。3建物出土の148～158と同範である。

182・183は鉄釘。断面四角形の和釘。

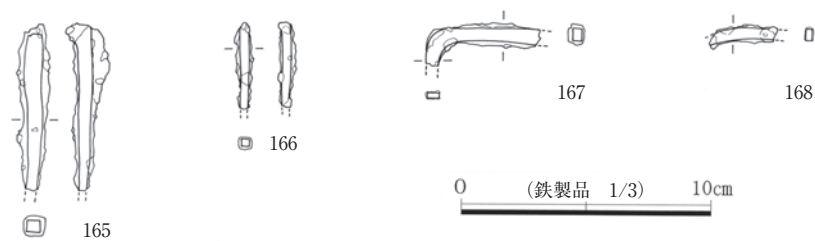
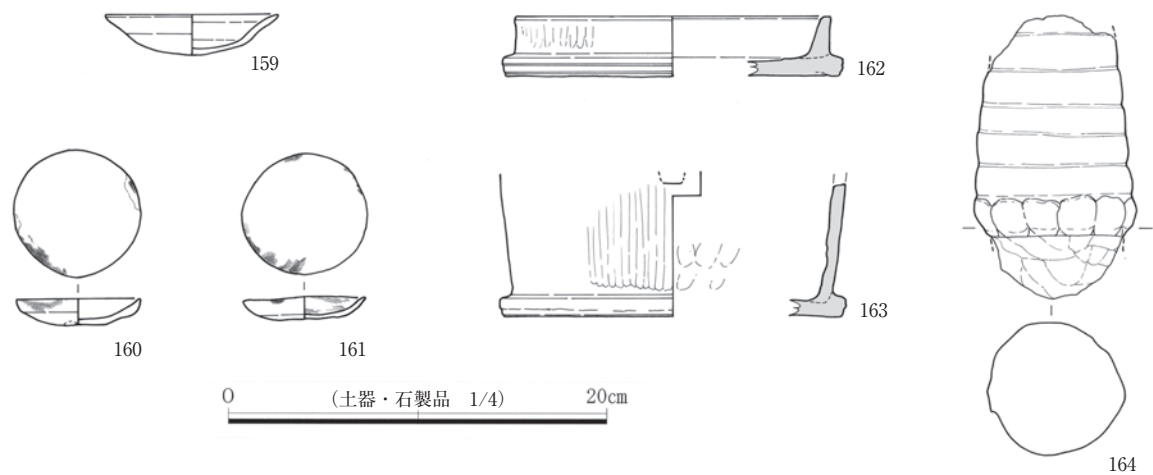


図43 08-2調査区 第1面3建物出土土器、石製品、金属製品

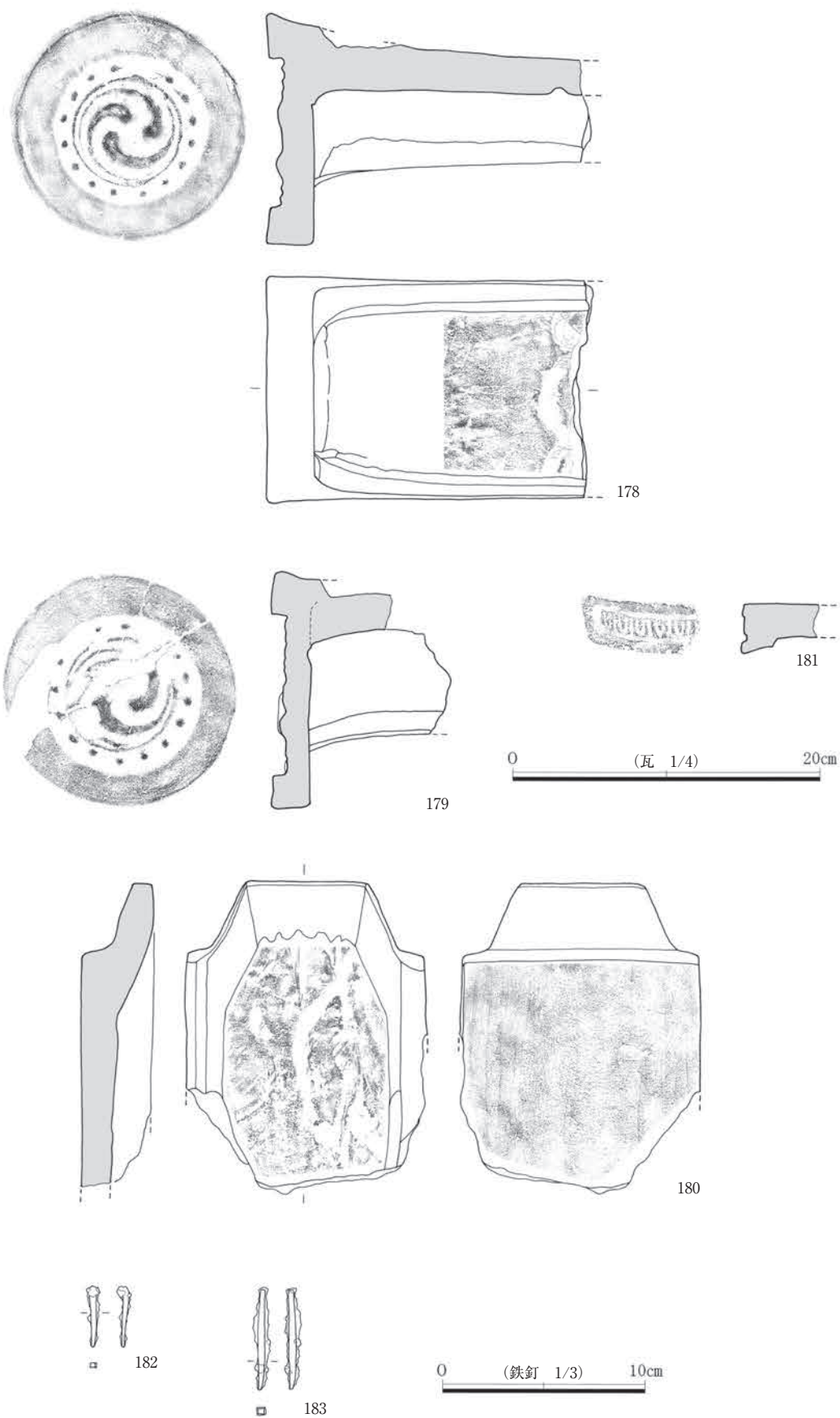


図44 08-2調査区 第1面29土坑出土遺物

26石仏列(図45 写真図版9)

調査区中央部に位置する。図46-184～187(写真図版27・28)の4体は図45の様に、顔を西に向け、南北に並んで立っていた。石仏に膝から下の表現はなく、その部分以下は土に埋まっていた。188(写真図版28)はその南側で頭を南西に向け伏した状態で検出した。この石仏は表面の磨耗が特に著しく顔の表情はうかがえない。189(写真図版28)は機械掘削の排土から回収したものだが、他の石仏と一連で、本来は6体が並んでいたものと考えたい。

184～189は、いずれも光背と像容を一石で作る光背石仏。像容は阿弥陀如来である。顔の輪郭は丸い。指先の形までは詳らかではないが左右の手を胸の下で合わせ定印を結んでいる。膝から下の表現はない。16世紀後半の所産と推定される。

石材は6体とも弱片麻状黒雲母花崗岩と鑑定されている(「第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地」参照)。

図47は、3建物と26石仏列を完掘した状況である。それらの下層には遺構はみられなかった。

2墓(図48 写真図版10)

調査区北西部、3建物の北約8m、調査範囲の北限に近い法尻に位置する。3建物と同様に機械掘削中に石が頭をのぞかせたため、人力掘削に切りかえ検出した。

主軸方位は北北東-南南西で、掘方は明瞭ではないので石列の外側で計測すると、南側は流失していると考えられ長径1.6m以上、短径約1.4mとなる。石は人頭大のものを主体に15個確認できた。花崗岩と玢岩と思われる石が用いられている。西列の南端の花崗岩は北東側にずれており、その抜けた後に砂が流れ込んでいる。東列の南から2つめにも同様な穴があり、石の抜け跡と推定される。

石で囲まれた内部の底面は平坦で、土の盛り上がりや石など棺座と思しきものは検出されていない。しかし、東と西の石列の内法は約90cmあり、埋葬空間として十分な幅がある。

出土遺物は、青磁碗、青磁皿、瓦器、土師器皿、鉄刀、鉄釘(カラー写真図版3 写真図版29)などである。図49-190と191の青磁碗は石列内部の北寄りから、伏せた状態で190が上、191は下に重なって出土した。青磁皿は192が北の石列の下から上を向いて、193はその下から伏せた状態で、194は北の石列の南に接して伏せた状態で出土した。196の瓦器碗は石列外の北にあった。199の土師器皿は石列内の北東隅にあり、油の炭化物が付着していることから灯明皿として用いられたと考えられる。200の鉄製短刀は、石列内のほぼ中央部から、切先を南、刃を東に向けた状態で出土した。被葬者の胸上に置かれたものと推定できる。木棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘が出土している。鉄釘201と202は同一個体の可能性がある。これらと鉄釘203との間は約40cmで成人を納めた木棺にしては幅が狭く、原位置とは限らない。204は西の石列外方約40cmから出土した。

図49-190(カラー写真図版3)は青磁碗。口縁端部は直口だが、内外面とも口縁部下でわずかに窪む。口縁端部には小さな打ち欠きがある。体部外面は無紋。内面の口縁部下には3条の沈線が巡らされる。体部内面は櫛刀により5分割されその間に飛雲紋が、見込み部には草花紋が描かれる。削り出し高台は断面四角で外側は面取りされている。高台内部の削りは浅く、そのため底部は肉厚である。高台の畳付けとその内側は露胎である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I-4a類で、12世紀中頃～後半の所産である。

191(カラー写真図版3)も龍泉窯系青磁碗。口縁端部には190よりも多くの小さな打ち欠きがある。体部内面は片彫りにより5分割されその間に飛雲紋が描かれている。内面見込み部は無紋である。大宰

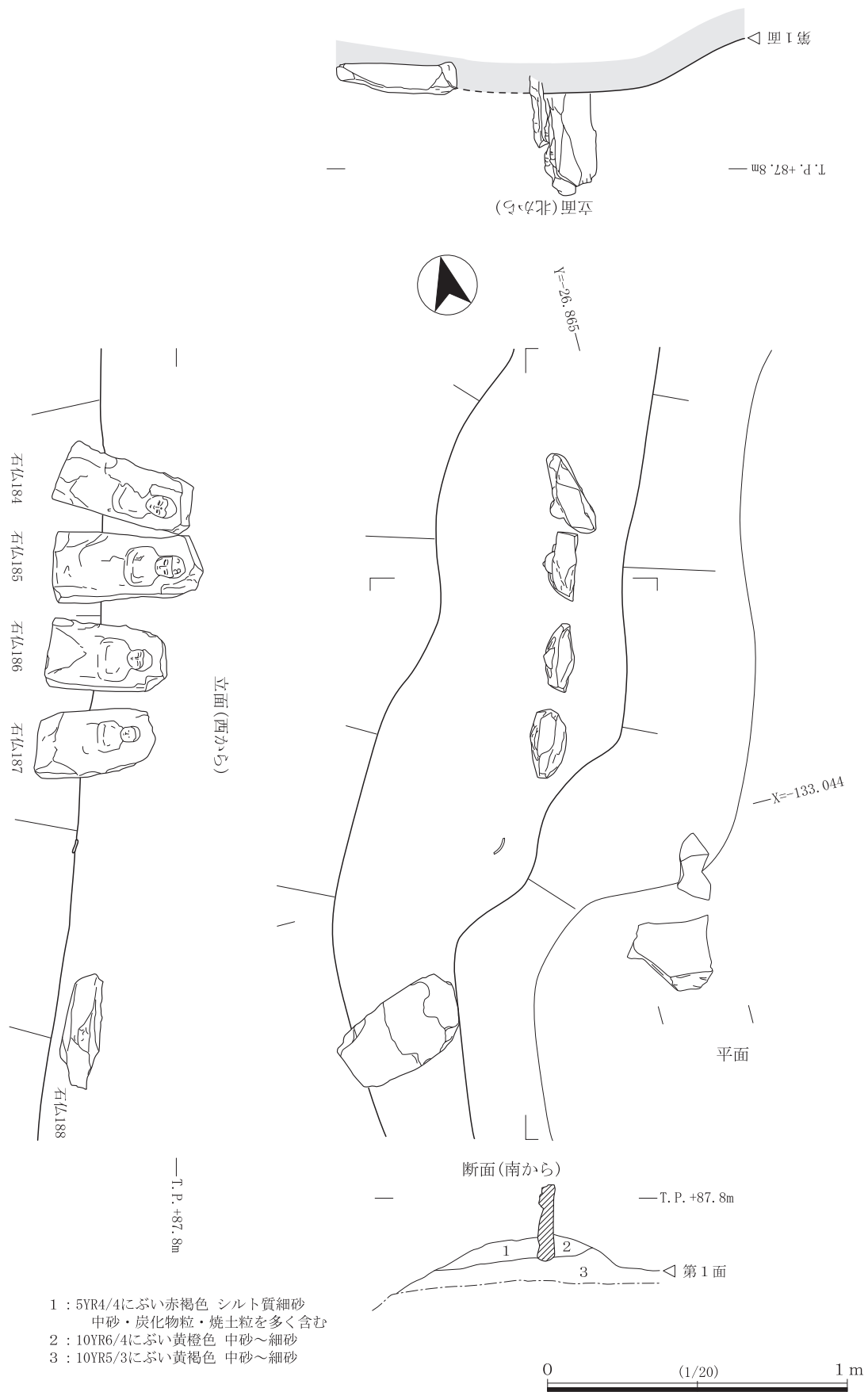
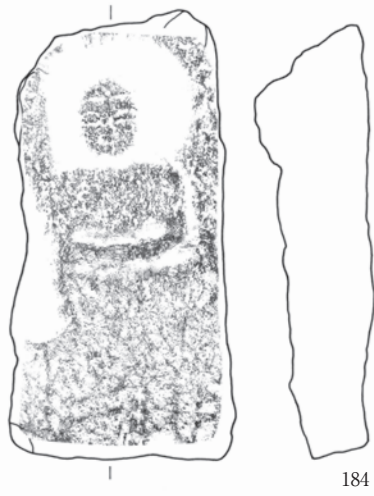
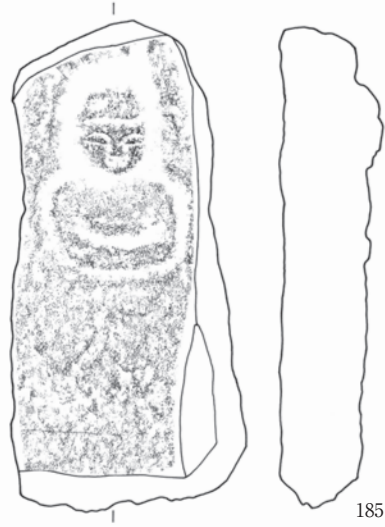


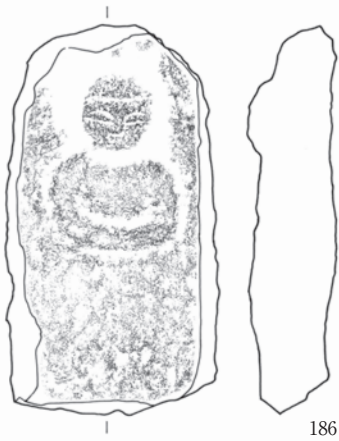
図45 08 - 2 調査区 第1面26石仏列



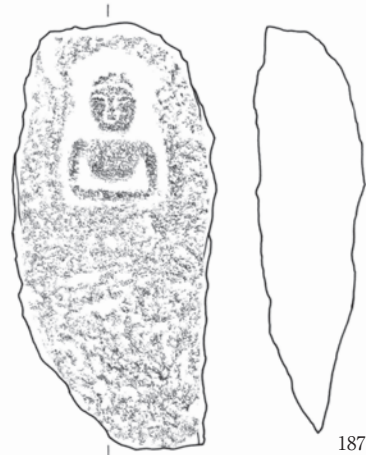
184



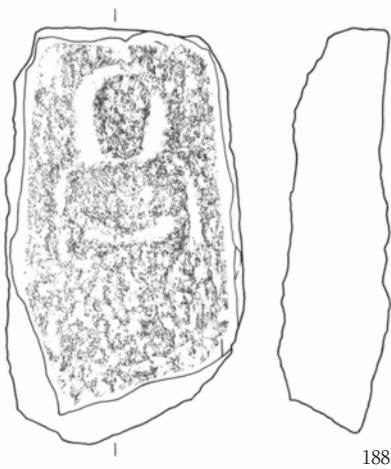
185



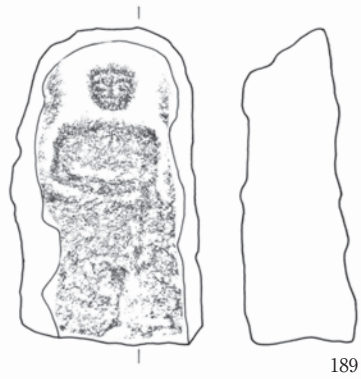
186



187



188



189

0 (1/8) 40cm

図46 08-2調査区 第1面26石仏列ほか出土石仏

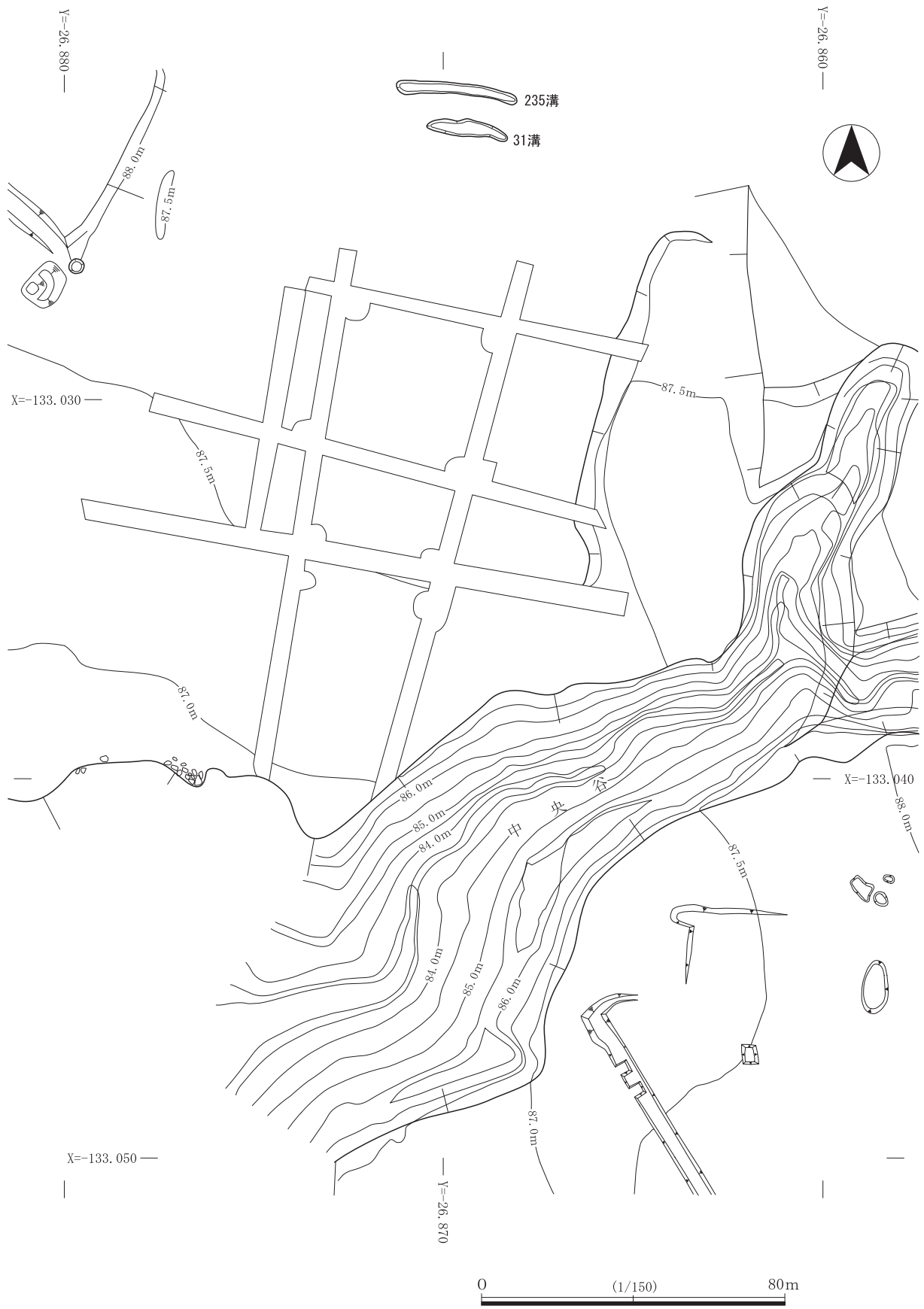


図47 08 - 2 調査区 第1面3建物、26石仏列完掘状況

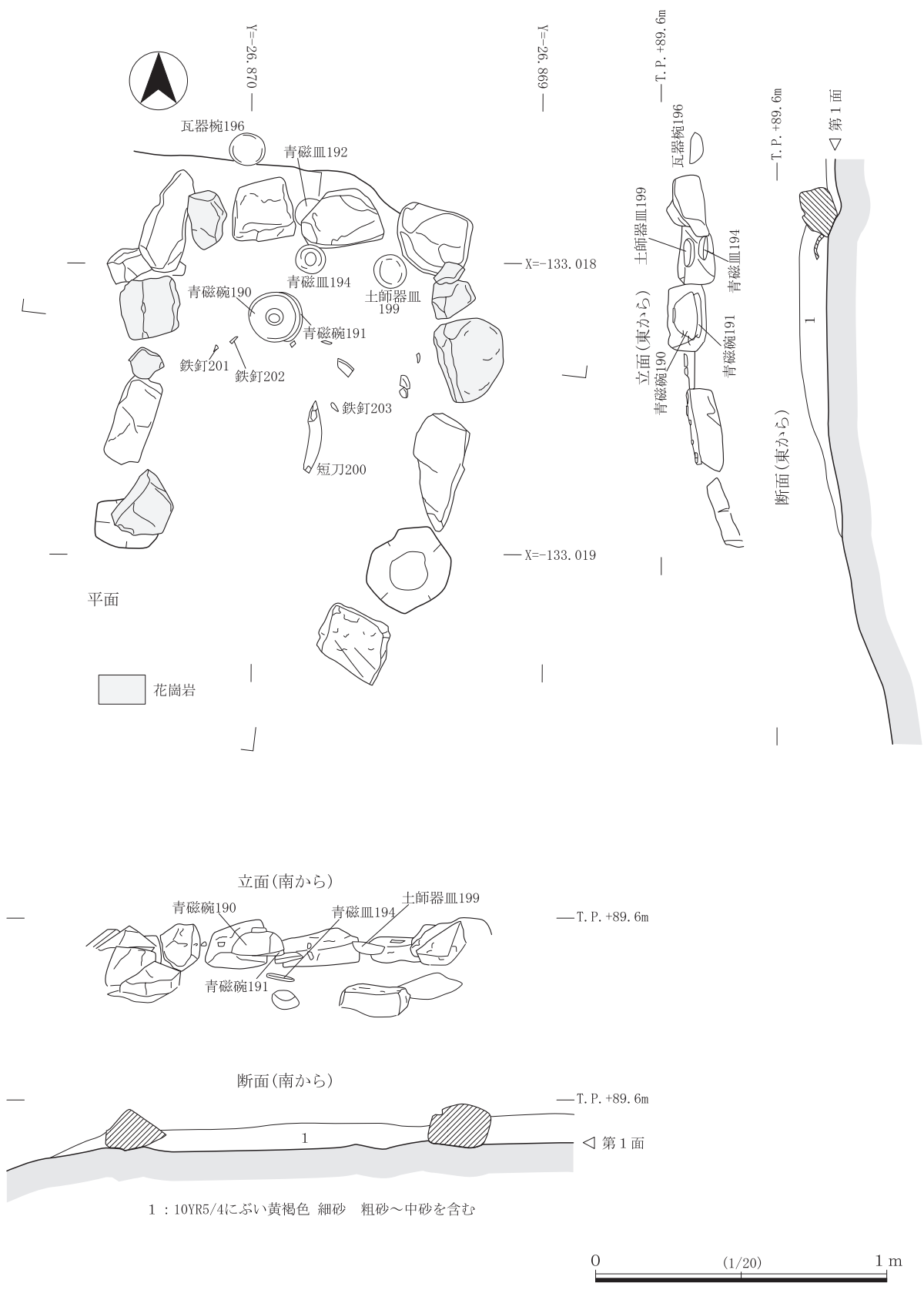


図48 08-2調査区 第1面2基

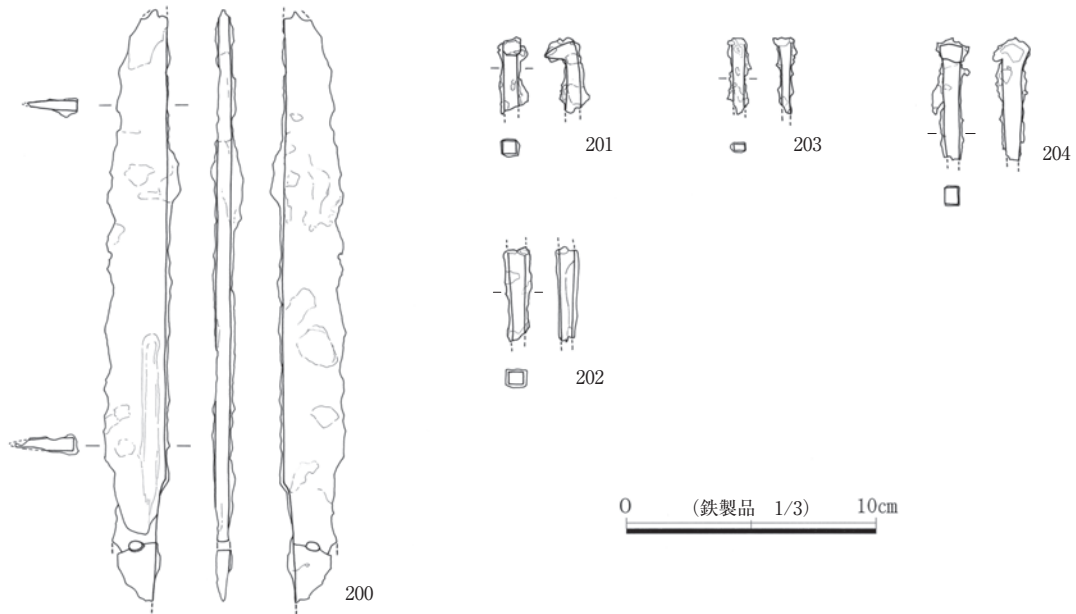
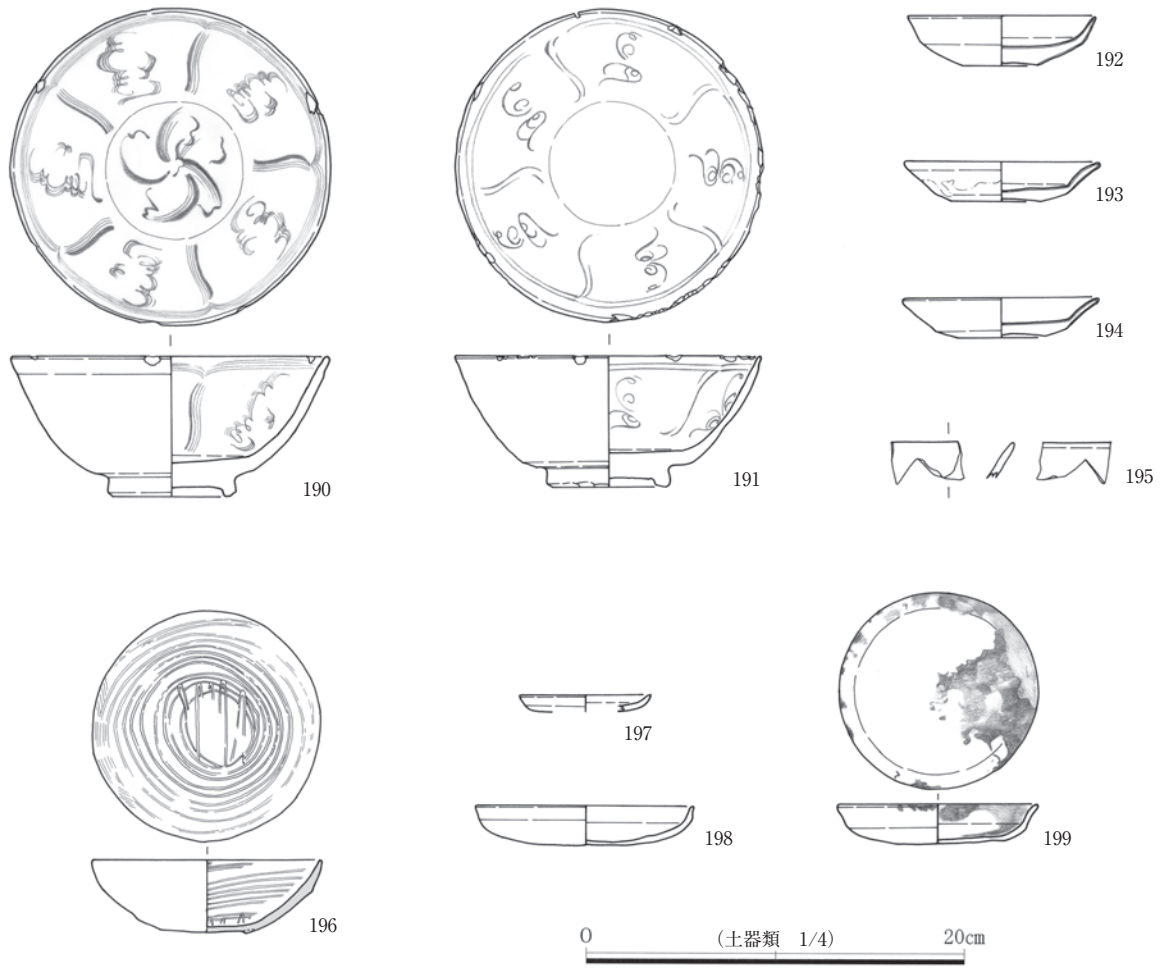


図49 08-2調査区 第1面2墓出土遺物

府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類。

192(写真図版29)は龍泉窯系青磁皿。体部中位で屈曲し、口縁部は外上方にまっすぐ伸び薄くなる。無紋である。口縁端部の一部に打ち欠きがある。底部外面は焼成前に釉を掻き取っている。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2a類で、12世紀中頃～後半の所産。

193(写真図版29)も龍泉窯系青磁皿。口縁部がわずかに外反する。無紋で、底部外面の釉は掻き取られている。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ-3a類か。

194(写真図版29)は同安窯系青磁皿。器形は193に似るが、胎土が疎である。体部中位で屈曲し、その内面は段状になっている。口縁部は外反する。無紋で、体部外面下半以下には施釉されていない。大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ-1a類で、12世紀中頃～後半の所産。

195は青磁碗の口縁部。2墓と第1層出土の破片が接合した。

196(写真図版29)は瓦器碗。内面に幅1mm程度の細い圈線ミガキが施されているが、口縁部近くにはハケメが残る。体部外面にヘラミガキはみられない。高台は断面三角形で低い。口径12.0cm、高さ3.9cm、器高指数33。楠葉型瓦器碗Ⅳ-1期で、13世紀中頃～後半に属する。

197～199は土師器皿。197は口径7.0cm、高さ0.9cmの小形品。198は口径11.6cm、高さ2.1cmの中形品。

199(写真図版30)は灯明皿として使用されており、口縁部内面から底部にかけて油の炭化物が付着している。

200(写真図版29)は鉄製短刀。現存長23.5cm、反りはなく、棟(峰)は直線状で、指表に腰樋が1筋みられる。茎の目釘穴は1個確認できる。他に接合はしないが目釘穴が開いた茎の破片があり、茎はさらに長い。鞘や柄は伴っていない。

201～204(写真図版29)は鉄釘。断面四角形の和釘。201と202は墓の西部から近接して出土した。直接は接合しないが、出土状況と形状からみて同一個体の可能性もある。

青磁碗・皿は大宰府編年によると12世紀中頃～後半だが、196の瓦器碗とそれと同時期としても矛盾ない土師器皿の存在から、2墓の造営時期は13世紀中頃～後半であろう。

18竪穴(図50 写真図版11)

調査区南東部に位置する。平面は不整形円で、直径2.9～3.3m、第1面からの深さは5～23cmである。埋土は図50のように4層に分かれる。

竪穴内の北西部に玢岩の大石がある。その上面はほぼ平坦だが、下部は尖り気味で竪穴の底に食い込んでおり、その周辺は不整形にくぼんでいる。

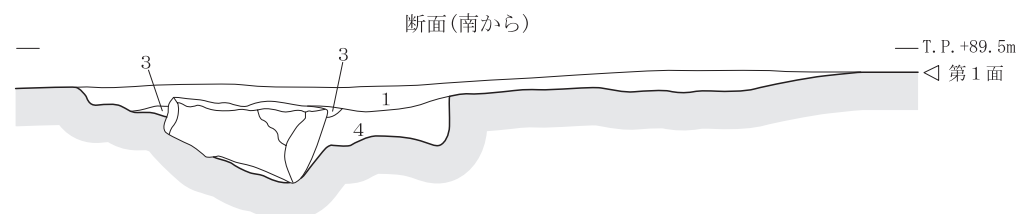
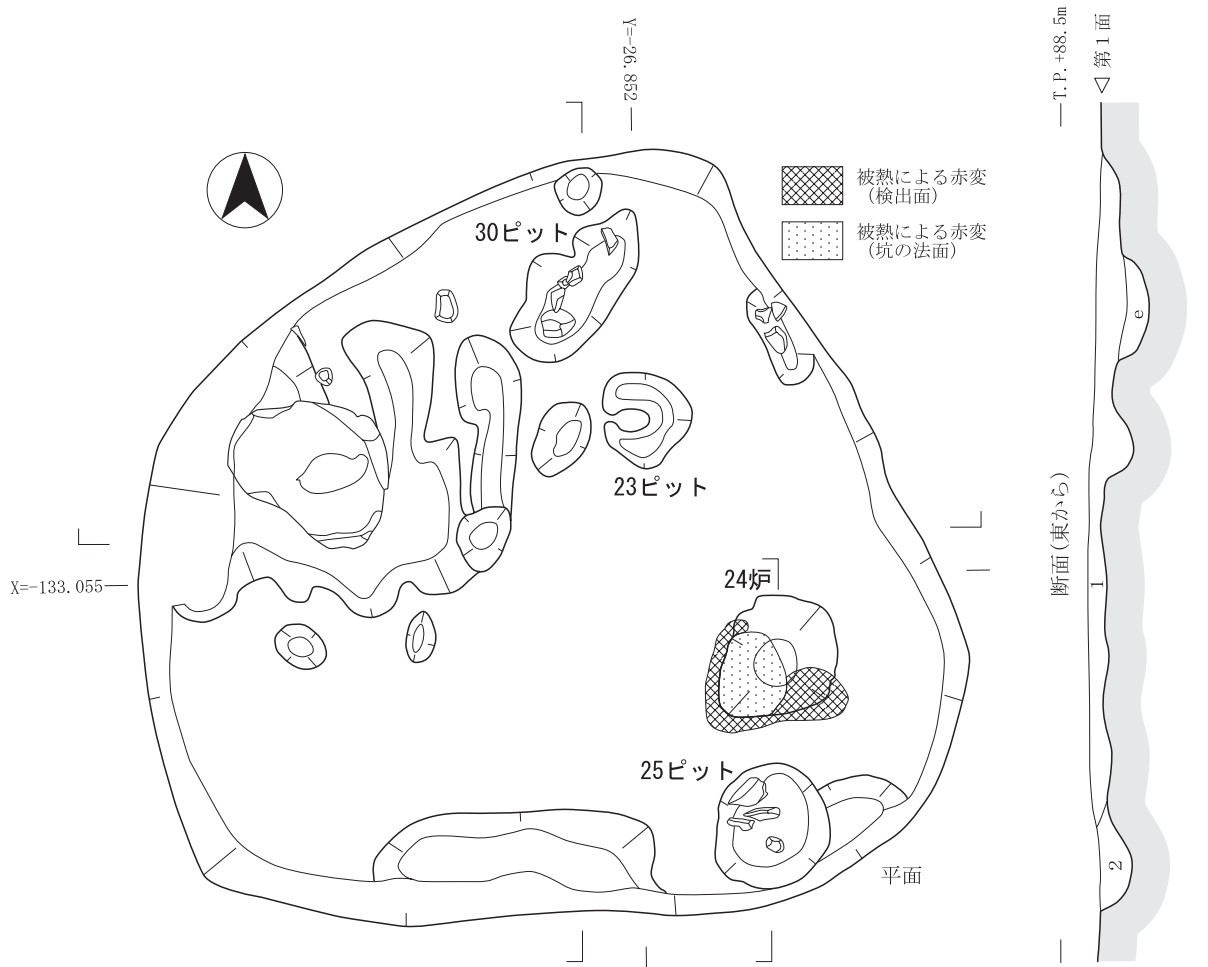
竪穴の底は、南西部が比較的平坦であるが、北から南東にかけて、30ピット・23ピット・24坑・25ピットが並び、そのほかにも大石の周辺や竪穴の南端をはじめとして溝やピット状のくぼみが数か所みられる。18竪穴からの出土遺物には、瓦器、土師器、青磁碗、鉄釘などがある。

図51-205・206は瓦器小碗。205で口径8.0cm、高さ3.0cm。206の口縁直下内面は沈線状にくぼむ。断面三角形の高台や渦巻状の暗文がまばらに施される状況から、13世紀後半前後の所産と考えられる。

207(写真図版30)は土師器皿。口径8.2cm、高さ1.3cmの小形品。13世紀後半頃の所産。

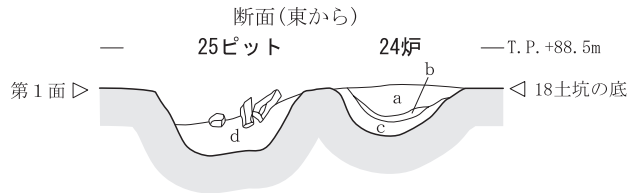
208(カラー写真図版7)は青磁碗。口縁部はごくわずかに外反する。内面は無紋。底部はないが外面に鎬蓮弁紋がみられることから、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類あるいはⅢ-2C類に該当し、13世紀頃の所産である。周辺各グリッドの第0層や第1層から出土した破片とも接合した。

209・210は鉄釘。頭部はわずかに屈曲している。胴部の断面はほぼ正方形である。



- 18竖穴
- 1 : 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物粒・焼土粒を多く含む粗砂を含む
 - 2 : 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物粒・焼土粒を多く含む
 - 3 : 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物粒を多く含む
 - 4 : 10YR4/4褐色 シルト 炭化物粒を若干含む

- 30ピット
- e : 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土塊・炭化物粒を含む



- 24炉
- a : 10YR3/3暗褐色 細砂～シルト 焼土粒・炭化物粒を含む
 - b : 5Y3/2オリーブ黒色 細砂～シルト 被熱によりガチガチに硬い
 - c : 2.5YR4/4にぶい赤褐色 細砂～シルト (第1層が被熱により赤変した部分)

- 25ピット
- d : 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土塊・炭化物粒を多く含む

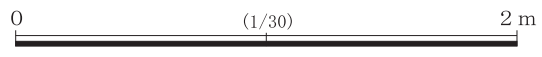


図50 08-2調査区 第1面18竖穴、24炉、23・25・30ピット

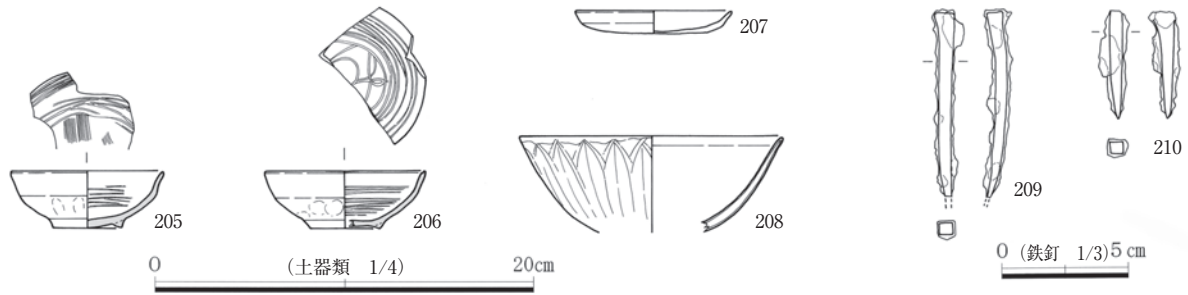


図51 08-2調査区 第1面18竪穴出土遺物

その他にも鉄釘、滓、鞆の羽口(写真図版47)が出土した。

24炉(図50 写真図版11)

18竪穴の南東部床面で検出された。平面不整形円形で、直径47～56cm、18竪穴床面からの深さは12cmである。埋土は、10YR3/3暗褐色細砂～シルトに焼土片や炭化粒を含む。ピットの底は5Y3/2オリーブ黒色細砂～シルトだが、被熱によりガチガチに硬くなっている。さらに、ピットの南西半は、周辺の第1層と同様に細砂～シルトだが、被熱により2.5YR4/4にぶい赤褐色を呈している。

埋土を全て洗浄した結果、瓦器碗と土師器の小片に加えて、鉄釘、滓、焼土塊、などが見つかった。被熱状況や出土遺物から、24炉は小鍛冶炉と考えられる。

25ピット(図50 写真図版11)

24炉のすぐ南に位置する。平面円形で、直径45～50cm、18竪穴床面からの深さは25cmである。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト。鉄釘や滓(写真図版47)と拳大の閃緑玢岩が4個出土した。

位置と出土遺物から、24炉に関連する施設と推定される。

30ピット(図50)

18竪穴の北部床面で検出した。平面不整形楕円形で、北東-南西を主軸とし、長径71cm、短径36cm、18竪穴床面からの深さ11cmを測る。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルトで、焼土塊や炭化物粒を含む。

瓦器と土師器の小片が出土した。

以上の状況から、この18竪穴は炉(24炉)と作業台(大石)、その他作業ピットを備えた13世紀後半の鍛冶工房であったと考えられる。

31溝

3建物の北方で検出した。ほぼ東西を主軸とし、検出長2.2m、幅45cm、深さ約10cm。埋土は、10YR5/6黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。土師器、瓦器、鉄製品が出土した。

図53-211～213は土師器皿。211(写真図版31)は口径7.0cm、高さ1.1cmの小形品、212は口径11.2cm、高さ1.9cm、213は口径11.8cm、高さ1.8cmの中形品である。

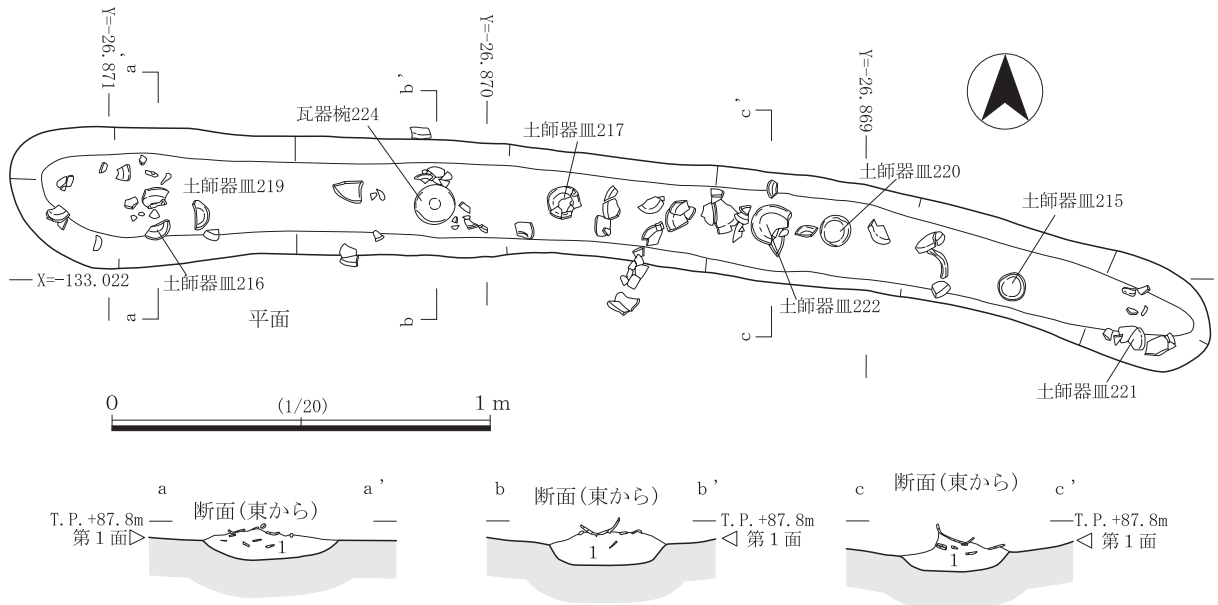
214は鉄製の釘。本遺跡出土例としては比較的大きく、現状で長さは11.7cmある。頭部はL字状に曲げられ、上から叩かれ、犬の頭部のように変形している。

瓦器碗は細片で図示していないが、楠葉型が含まれている。

以上、31溝は13世紀頃の所産である。

235溝(図52 写真図版11)

調査終盤に調査区北部の法面を整形したところ、31溝のさらに北側で検出した。出土遺物からみて、第1面に属するものと考えられる。



1 : 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 礫～細砂・植物の地下茎の炭化物を多く含む

図52 08-2調査区 第1面235溝

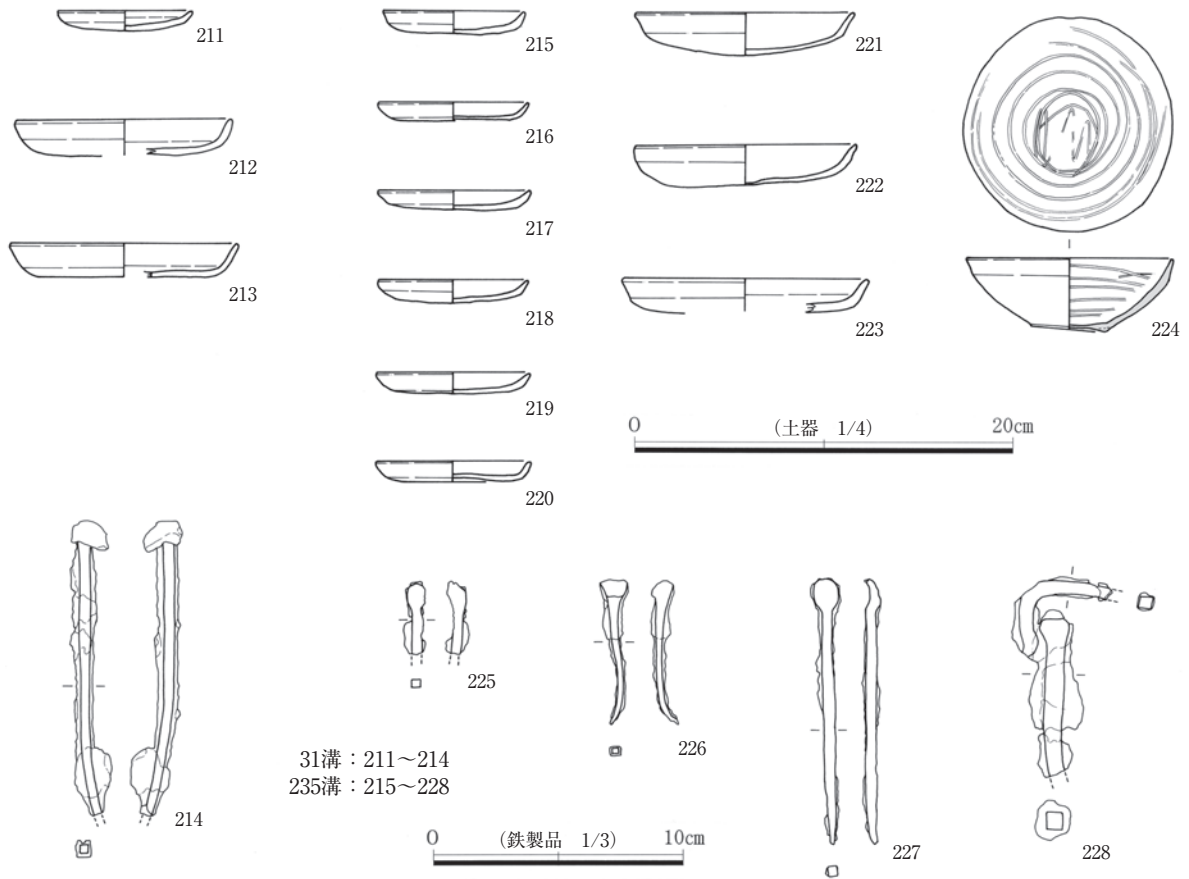


図53 08-2調査区 第1面31・235溝出土遺物

31溝と同様にほぼ東西を主軸とし、検出長3.2m、幅25～38cm、深さ約10cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルトに礫～細砂を含み、植物の地下茎の炭化物が多く混じる。

図53-215～223(写真図版31)の9点は土師器皿。直径約8cmの小振りなもの(215～220)と約12cmのもの(221～223)とがある。いずれも橙褐色系を呈する。

224(写真図版31)は楠葉型瓦器椀。体部外面のヘラミガキはみられず、内面に幅1mm程度の細い圏線ミガキが施されている。高台は断面三角形で低い。口径は11.0cm、高さは4.0cm、器高指数36。楠葉型IV-1期で、13世紀後半に属する。215～223の土師器皿も同時期として矛盾はない。

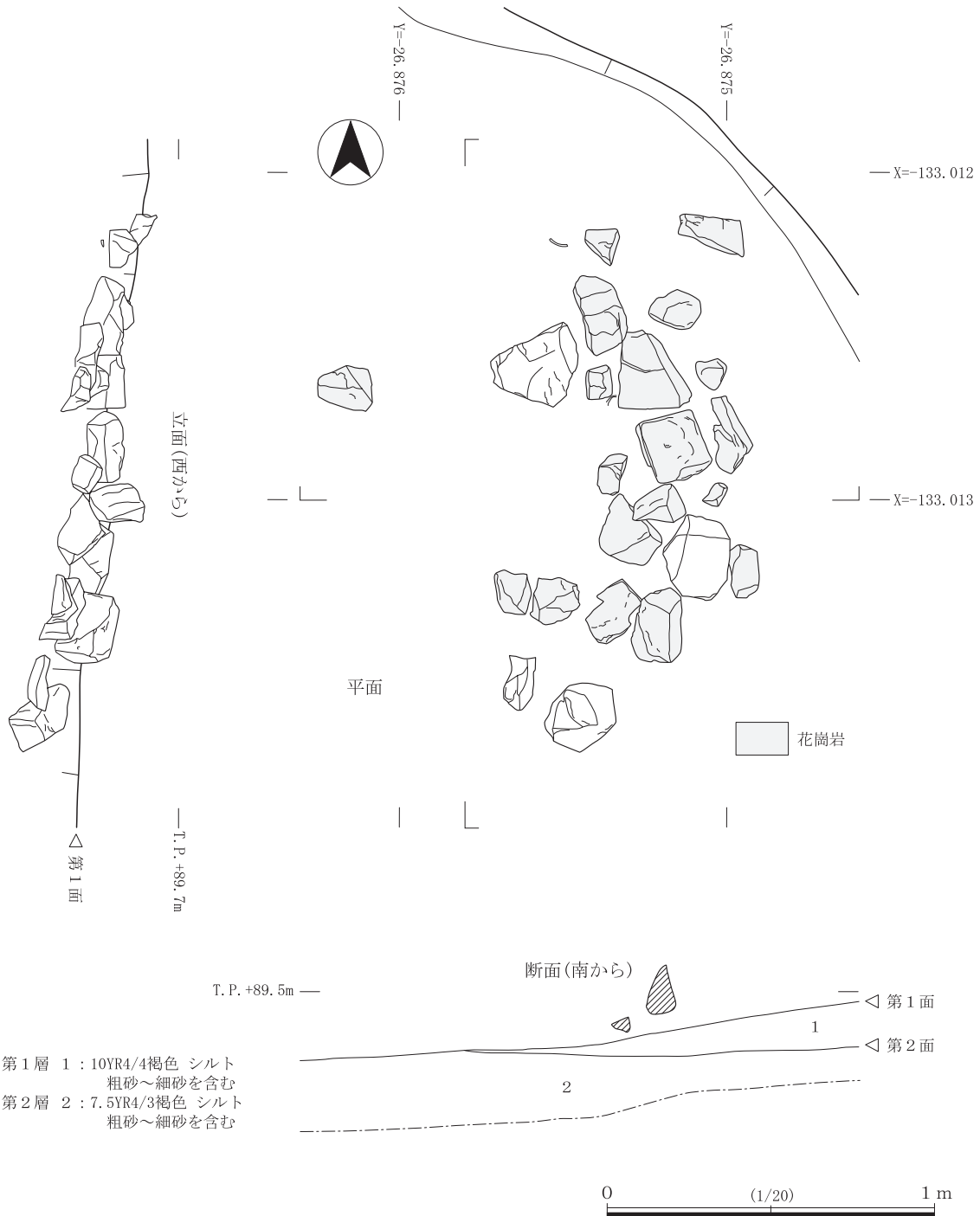


図54 08-2調査区 第1面1石群

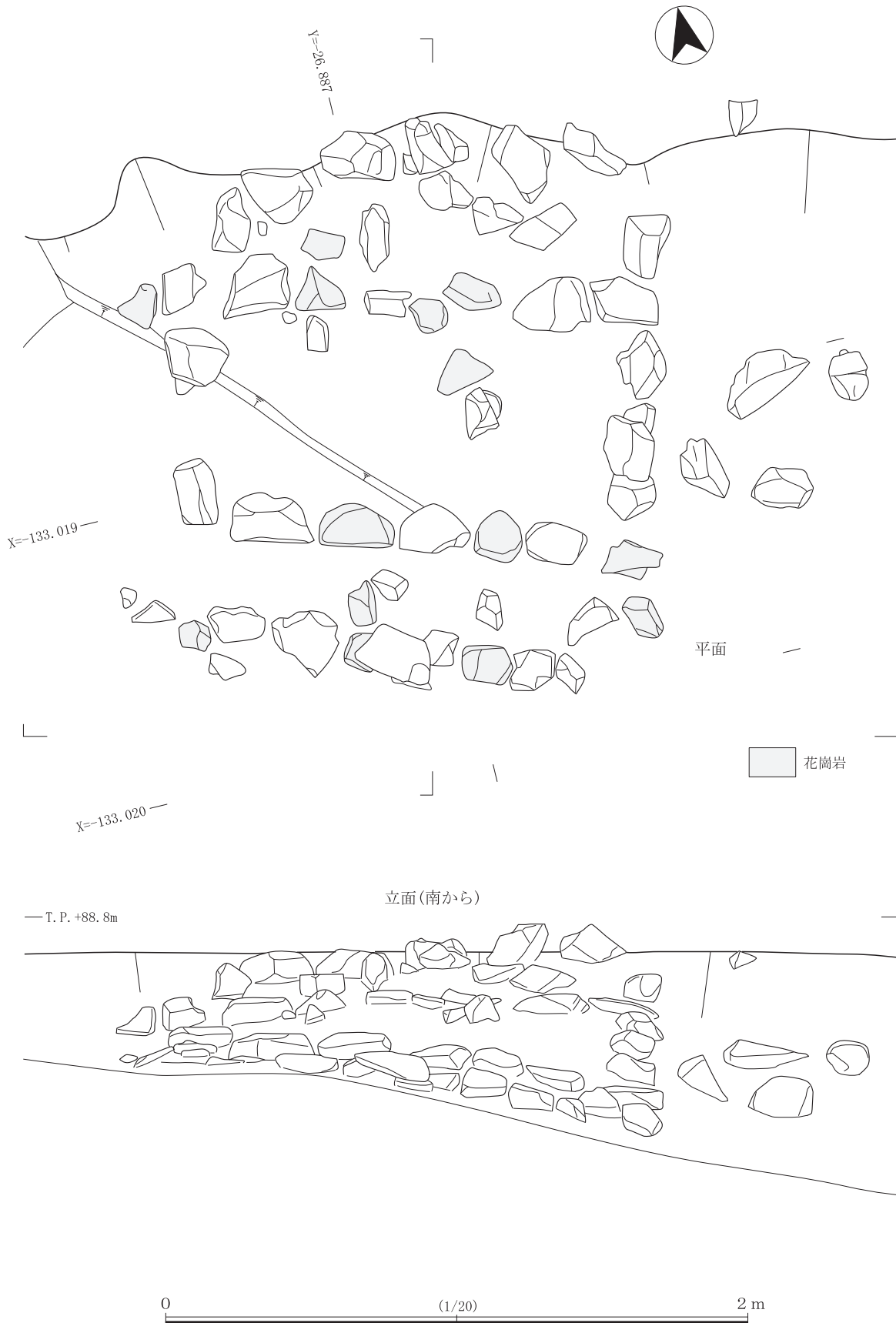


図55 08-2調査区 第1面4石組(1)

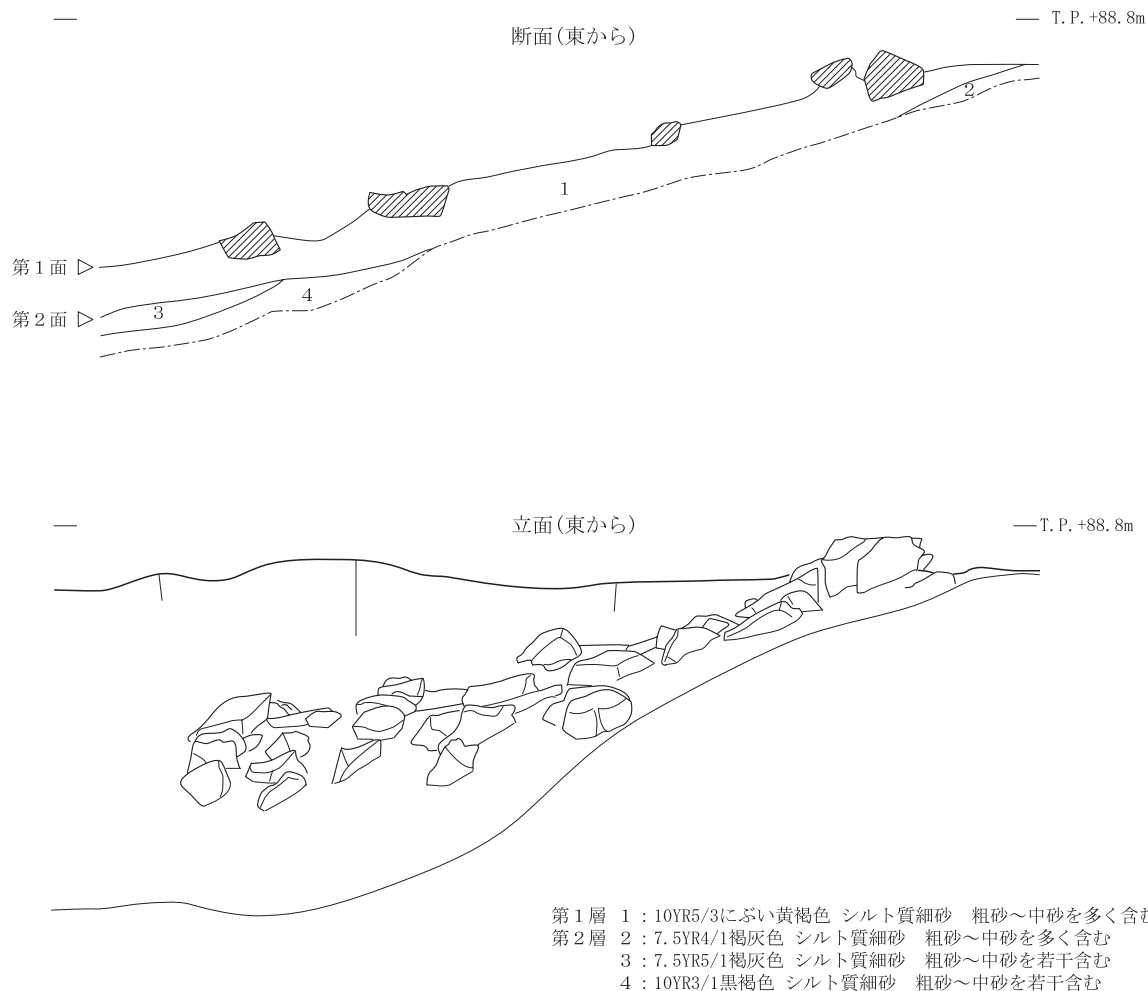


図56 08-2調査区 第1面4石組(2)

225～227は鉄釘。いずれも断面はほぼ正方形を呈する。227の頭部は匙状になっている。

228は特異な形状で鋸などの可能性も想定したが、レントゲン撮影の結果2つの鉄製品が錆で一体化したものと判明した。寸法や形状からみて、鋸と釘と考えられる。

1石群(図54 写真図版9)

調査区北部、南西にゆるやかに傾斜する斜面で検出した。機械により上層の砂層を掘削中に、数個の石が南北に並ぶように見つかった。そこで、人力調査に切替え慎重に砂層を除去したところ、長径20～30cm程度から拳大の石が20数個現れた。

石群は、南北1.6m、東西0.8mの範囲に集中するが、配列に明確な規則性は認めにくい。石は、約40cm離れた西側にもう1個存在する。墓のようにもみえるが、石群の下には構造物はない。火を使った形跡もない。石は花崗岩が多く、その他の4個は玢岩と思われる。

周辺から、13世紀頃の土師器と瓦器、青磁碗片などが出土した。

4石組(図55・56 写真図版10)

調査区北西部に位置する。南に傾斜する斜面の南北1.9m、東西1.7mの範囲に石を並べている。基本的に平面長方形を指向しているようだが、北辺は傾斜変換線に沿って、半円形に外側にふくらんでいる。石の並びが直線的なのは、中央部の東西1.7m、南北0.9mの長方形をなす部分で、特にその南列(全体では南から2列目)の南辺は石の面がほぼ直線に揃っている。この形状から、石段、何らかの基礎、墓

や埋納施設の地上標識などの可能性を考えた。しかし、石段とした場合、下にあたる南面が揃っている面が南から2列目(下から2段目)しかなく、また2列目と3列目との間隔が他と比べて広いという点が、否定的要素となる。また、下層を確認したところ何ら構造物はなかったため、基礎や地上標識という予測も肯定できなかった。

図58-231は平瓦。4石組の南辺石列中央部の石の下に挟まっていた。凹面布目、凸面縄タタキで、古代の所産。

232(写真図版30)は4石組付近から出土した五輪塔の空風輪。全体の形状は優美だが、空輪と風輪との間の彫り込みが浅い。凝灰岩製。15世紀代に属するか。

図示した2点の遺物は古代と中世後半のものであるが、検出面や上下層の出土遺物からみると、4石組は1石群や235溝などと同時期の13世紀頃の遺構である可能性が高い。

17石群(図57)

3建物の南西約8mの地点で検出した。北西の3建物に向かって緩やかに上る斜面に、上面の平らな南北76cm東西33cmの石があり、その北東に接して人頭大の石がもう1つある。掘方は認められないので偶然の産物かもしれないが、階段石として置かれたようにみえる。石材は2個とも肉眼観察では玢岩と思われる。

この石群に直接関わる遺物はない。周辺の出土遺物からは13世紀頃に地表面に露出していたと考えられるが、位置と形状からは16世紀後半の3建物に関連する階段である可能性も否定できない。

236石群(図57)

調査区北西部、4石組の約2m西側、地山面に近い南東に傾斜する斜面で検出した。3個の石からなり、西側の2個が北北東-南南西を長軸として並び、その東側中央の少し下がった所にもうひとつの石が存在し、階段状になっている。石材は、北が砂岩、南と東は玢岩であり、この遺跡に多い花崗岩は含まれていない。周辺からの出土遺物はない。

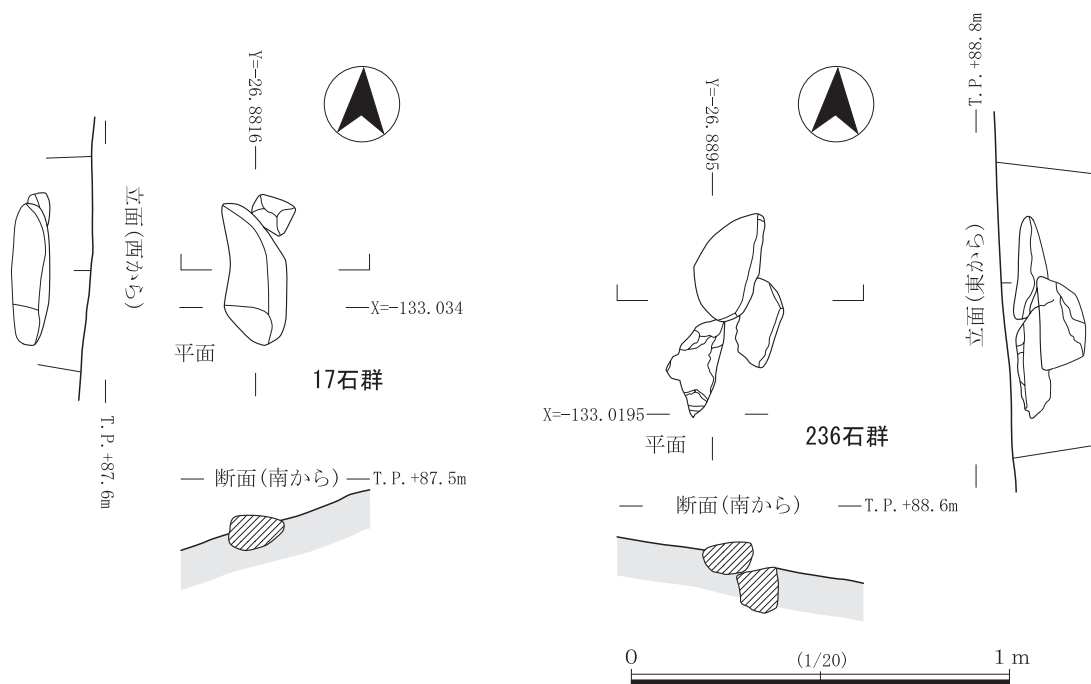


図57 08-2調査区 第1面17・236石群

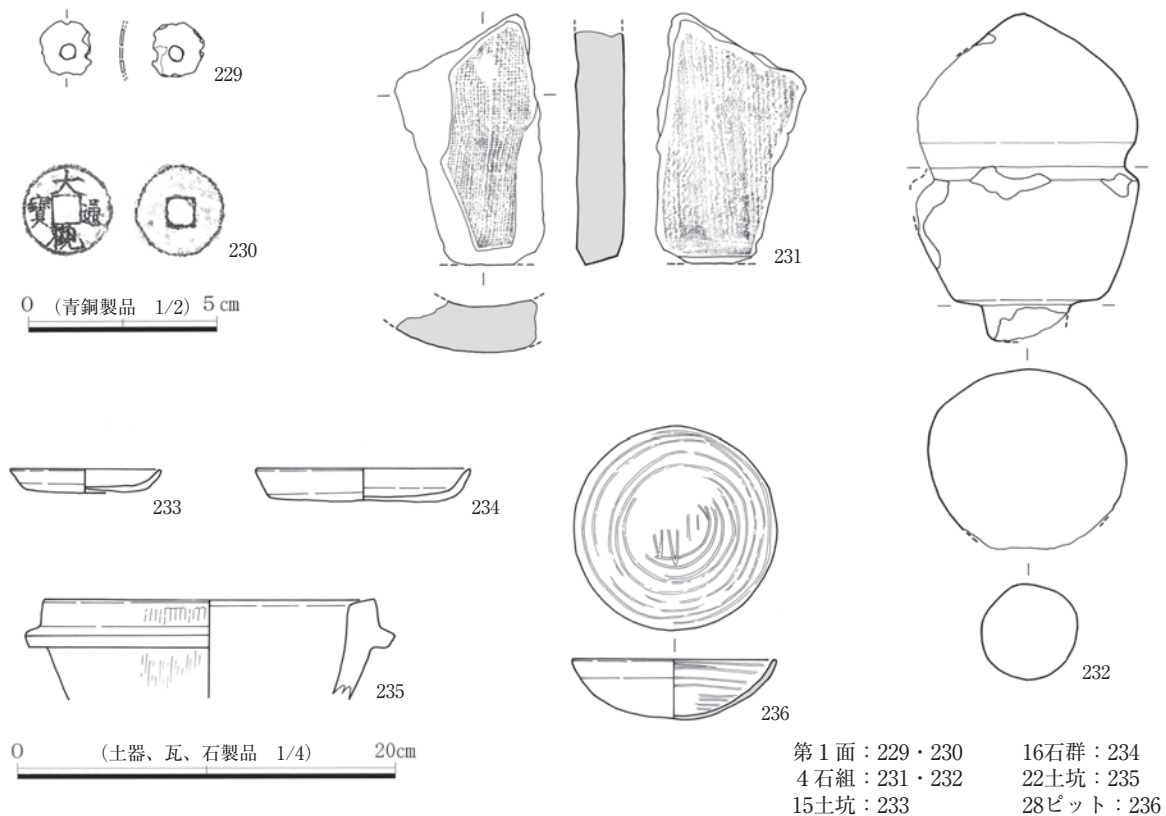


図58 08-2調査区 第1面石組、土坑、ピットほか出土遺物

土坑やピットについては、埋土が複数の層に分かれるものや遺物実測図を掲載したものなどを以下に記述し、その他は表1にまとめた。

8土坑(図59)

調査区北西部、3建物の西約8mに位置する。平面楕円形で、北西-南東を主軸とし、長径112cm、短径79cm、深さ14cm。埋土は10YR4/4褐色シルトに粗砂~細砂を含む。出土遺物は、中世の土師器片と須恵器の小片。他に拳大の花崗岩が2個、人頭大の花崗岩が1個、人頭大の玢岩が2個出土した。

22土坑

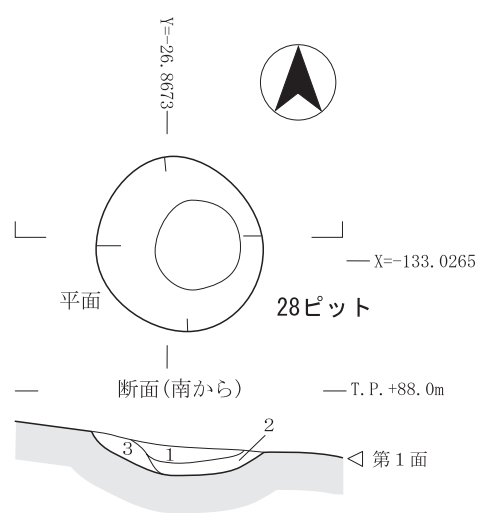
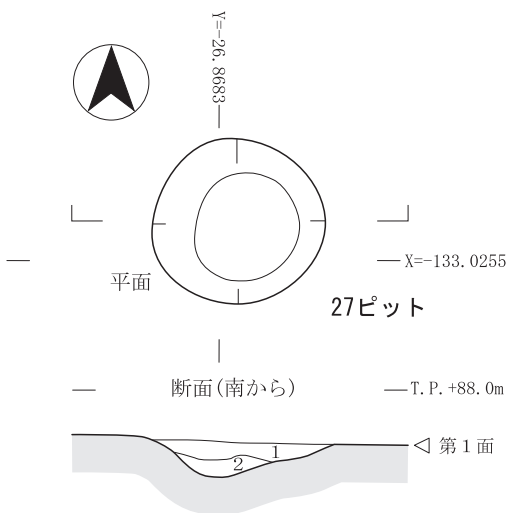
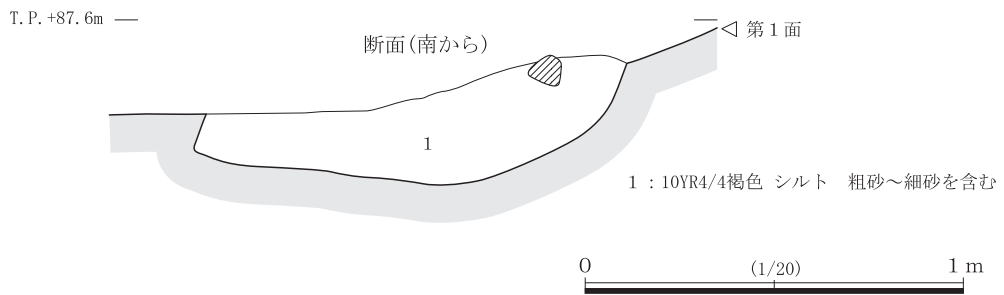
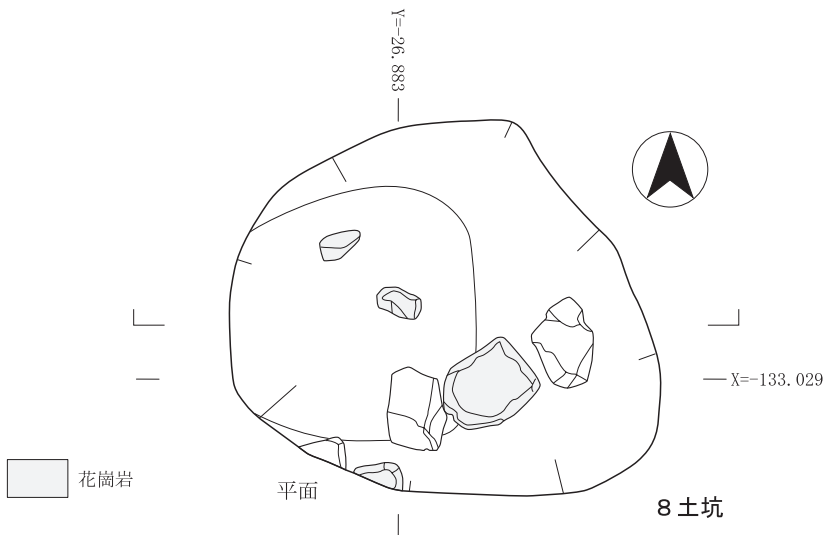
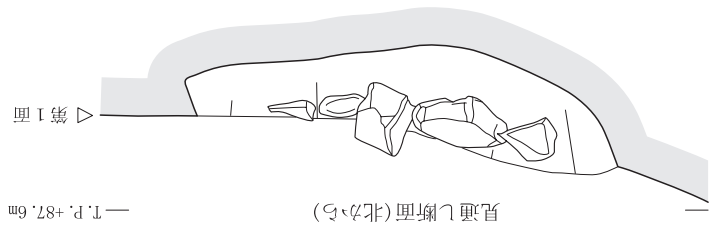
調査区南東側、18竖穴の北東約2mに位置する。平面楕円形で、北北東-南南西を主軸とし、長径302cm、短径146cmと平面規模は大きい。検出面からの深さは8cmと浅い。なお、土坑周辺の土は特に被熱していない。炭層のような黒い埋土を持ち帰り洗浄した結果、土師器、瓦器、瓦質土器、石鍋の他に、鉄釘と塊状や粒状の鉄滓(写真図版48)などが見つかった。

検出時には若干高まっていた中央部で小面積の黒い層が頭をのぞかせ、その周辺を精査していくにつれて黒い層の範囲が広がっていった。このような検出状況に加え、遺物組成や位置からすると、工房である18竖穴から出た廃棄物の捨て場所とも考えられる。

図58-235(写真図版30)は滑石製石鍋。口縁部の12分の1周の破片資料で現存部には蔓取手穴はみられない。口縁部はわずかに外反し、その下に削り出された鏝は垂れ下がり気味である。木戸分類Ⅲ類-b。12世紀後半に属する。

27ピット(図59)

3建物の北約2.4mに位置する。平面円形で、直径41~44cm、深さ10cm。埋土は図59のように2層に分かれる。出土遺物は、瓦器と土師器の小片のみ。



1 : 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂～シルト 粗砂を多く含む
炭化物粒をわずかに含む
2 : N1.5/ 黒色 炭化物 わずかに1層が混じる

1 : 5YR4/4にぶい赤褐色 細砂～シルト 粗砂を多く含む
2 : 5YR3/6暗赤褐色 細砂～シルト 被熱により赤変
3 : 7.5YR4/3褐色 細砂～シルト

図59 08-2調査区 第1面8土坑、27・28ピット

表1 08-2調査区 第1面土坑・ピット一覧

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|-------|----------|-----|------|----------|-----|----|--|------------------------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 6ピット | 9K-8c | 円 | | 48 | 36 | 6 | 7.5YR5/6明褐色シルト 粗砂を多く含む 炭化物粒多く混じる | 土師器 瓦器 |
| 8土坑 | 9K-9c | 楕円 | 北西 | 112 | 79 | 14 | 図8参照 | 土師器 須恵器 |
| 12土坑 | 9K-9c・9d | 不整円 | 北東 | 311 | 198 | 5 | 5YR4/4にぶい赤褐色シルト 粗砂～細砂を多く含む 炭化物粒多く混じる 焼けているか? | 土師器 須恵器 鉄釘 |
| 15土坑 | 9K-8d | 楕円 | 北北西 | 142 | 44 | 4 | 10YR6/2灰黄褐色 細砂～シルト 粗砂を多く含む 炭化物粒多く混じる | 土師器 瓦器 |
| 19ピット | 9K-6f | 楕円 | 北北東 | 57 | 42 | 6 | 10YR4/1褐灰色シルト 粗砂を多く含む 炭化物粒混じる | 土師器 瓦器 鉄小塊 |
| 20ピット | 9K-5f | 楕円 | 北 | 67 | 26 | 7 | 2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂～細砂を多く含む 炭化物粒混じる | 土師器 |
| 21ピット | 9K-5f | 円 | | 70 | 61 | 6 | 2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂～細砂を多く含む 炭化物粒混じる | 鉄小塊 土師器 |
| 22土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北北東 | 302 | 146 | 8 | 炭 | 土師器 瓦器 瓦質土器 鉄滓 鉄釘 炭 石鍋 |
| 23ピット | 9K-6f | C字 | | 38 | 36 | 11 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂を含む 焼土塊・炭化物粒多く混じる | 瓦器 土師器 |
| 24炉 | 9K-6f | 不整円 | 北東 | 56 | 47 | 12 | 図50参照 | 瓦器 土師器 鉄釘 焼土塊 滓 |
| 25ピット | 9K-6f | 円 | | 50 | 45 | 25 | 図50参照 | 瓦器 鉄釘 滓 |
| 27ピット | 9K-7c | 円 | | 44 | 41 | 10 | 図59参照 | 瓦器 土師器 |
| 28ピット | 9K-7c | 円 | | 43 | 40 | 15 | 図59参照 | 瓦器 土師器 鉄釘 |
| 29土坑 | 9K-7c | 楕円 | 北 | 112 | 95 | 56 | 2.5Y6/2灰黄色シルト 粗砂～細砂を含む | 瓦 鉄釘 |
| 30ピット | 9K-6f | 不整 | 北東 | 71 | 36 | 11 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 焼土塊・炭化物粒混じる | 瓦器 土師器 |

28ピット (図59)

27ピット南東約1mに位置する。平面円形で、直径40～43cm、深さ15cm。埋土は図59のように3層に分かれる。出土遺物は、瓦器、土師器、鉄釘である。

図58-236(写真図版30)は瓦器椀。内面の圏線ミガキは疎になり、高台も消失している。口径10.6cm、高さ3.2cm、器高指数30。楠葉型Ⅳ-2期で、13世紀末～14世紀初頭に属する。

以上の他に、第1面およびその遺構から次の遺物が出土した。土坑とピットのデータは表2を参照されたい。

図58-229(カラー写真図版5)は、第1面の9K-9cグリッドから出土した。箱(容器)の蓋を括るための紐の座金具であろう。四葉で中央部に穴が開いている。わずかにふくらんだ表面には金鍍金が施されている。

第1面の3建物東側から、写真図版7のように図58-230(写真図版46)の大観通宝が出土した。2.6g。北宋1107年初鑄。

15土坑から233(写真図版30)の土師器皿が出土した。口径8.0cm、高さ1.3cmの小形品。

16石群から234(写真図版30)の土師器皿が出土。口径11.4cm、高さ1.8cmの中形品。これらの土師器皿は13世紀後半頃の所産であろう。

第4節 第2面の遺構と遺物

第2面(図60 写真図版12)は、調査区北西部では褐色系の粗砂が主体で南東部では褐色ないし黄褐色の粗砂～シルトが主体となる第1層を除去して検出した面である。除去されたのは、具体的にはA断面(図22)の⑬、B断面(図23)の⑪・⑫、C断面(図24)の⑦、D断面(図25)の⑬、E断面(図26)の⑨の各層である。

第2面も第1面と同様に北東から南西に傾斜しており、面の高さはT.P. +86.5m～93mだが第1面の同一地点よりも10～45cm程度低い。遺構として、石群、石囲い、焼土坑、墓、土坑・ピット、落ち込みなど、計96か所[番号32～125・132・133]を調査した。

なお、08-2調査区の第2面では、堆積状況に鑑み中央部から北西部にかけての範囲を2面に細分して調査し、その範囲を含め全域を調査した面を「第2面」とした。

「第2-2面」として記録した部分は次節で述べる。また、第2面と第2-2面との間を「第2層(上層)」とした。

以下、第2面の32・89石群、84石囲い、93焼土坑、3基の墓、土坑・ピット、落ち込みの順に報告する。

32石群(図61 写真図版13)

調査区西部の谷側、南法面際に位置する。ほぼ水平な面に、西北西-東南東を主軸方位とし、長径約3.4m、短径約1.5mの範囲に石が分布している。ただし、南側が崖状になっているので、本来はさらに南側に広がっていた可能性はある。石は北辺と西辺は面が揃っているが、東側は一面に石が密集している。石は長径20cm程度のもが多い。石材は大半が花崗岩で、玢岩らしき石が数個混じる。

この石群の上層は第1層で覆われており、構造物などはなかった。また、サブトレンチを掘削して下層を確認したが、やはり埋葬施設や構造物はなかった。したがって、性格としては石敷であろう。

石群の間から、土師器、瓦器椀、瓦などの小片が出土しており、鎌倉時代以前の所産と考えられる。

89石群(図62 写真図版14)

調査区中部の谷側に位置する。ほぼ水平な面に、32石群とはほぼ90°方位を違えて北北東-南南西を主軸方位とし、長径約2.9m、短径1.1～1.8mの範囲に石が分布している。北、東、南の各辺の外縁は整然とした面を形成しており、明らかな企画性が認められる。それに反して西縁は乱雑で、石群の幅は中部以北で狭く、南部では広がっている。また、東縁の中央部に接して、半円形の張り出しが設けられている。89石群に使用された石は32石群よりも大きい傾向にあり、特に北、東、南の各辺の外縁には大きい石が多く、東縁南端の石は長径60cmに及ぶ。石材は花崗岩と玢岩が半々で、玢岩は石群の南北と東に半円形に張り出した部分に多くみられる。

この石群も上層は第1層で覆われており、構造物などはなかった。また、石を除去しながら下層を確認したが、平面的にも断面観察でも埋葬施設や構造物は見つからなかった。したがって、32石群と同様に石敷であろう。

89石群からは遺物は出土していないが、上下層の出土遺物や32石群との類似性から、鎌倉時代以前の所産として矛盾はない。

84石囲い(図63 写真図版15)

調査区中央部、89石群の北約10mに位置する。平面ほぼ正方形で、89石群と同様に北北東-南南西を



図60 08-2調査区 第2面



図61 08-2調査区 第2面32石群

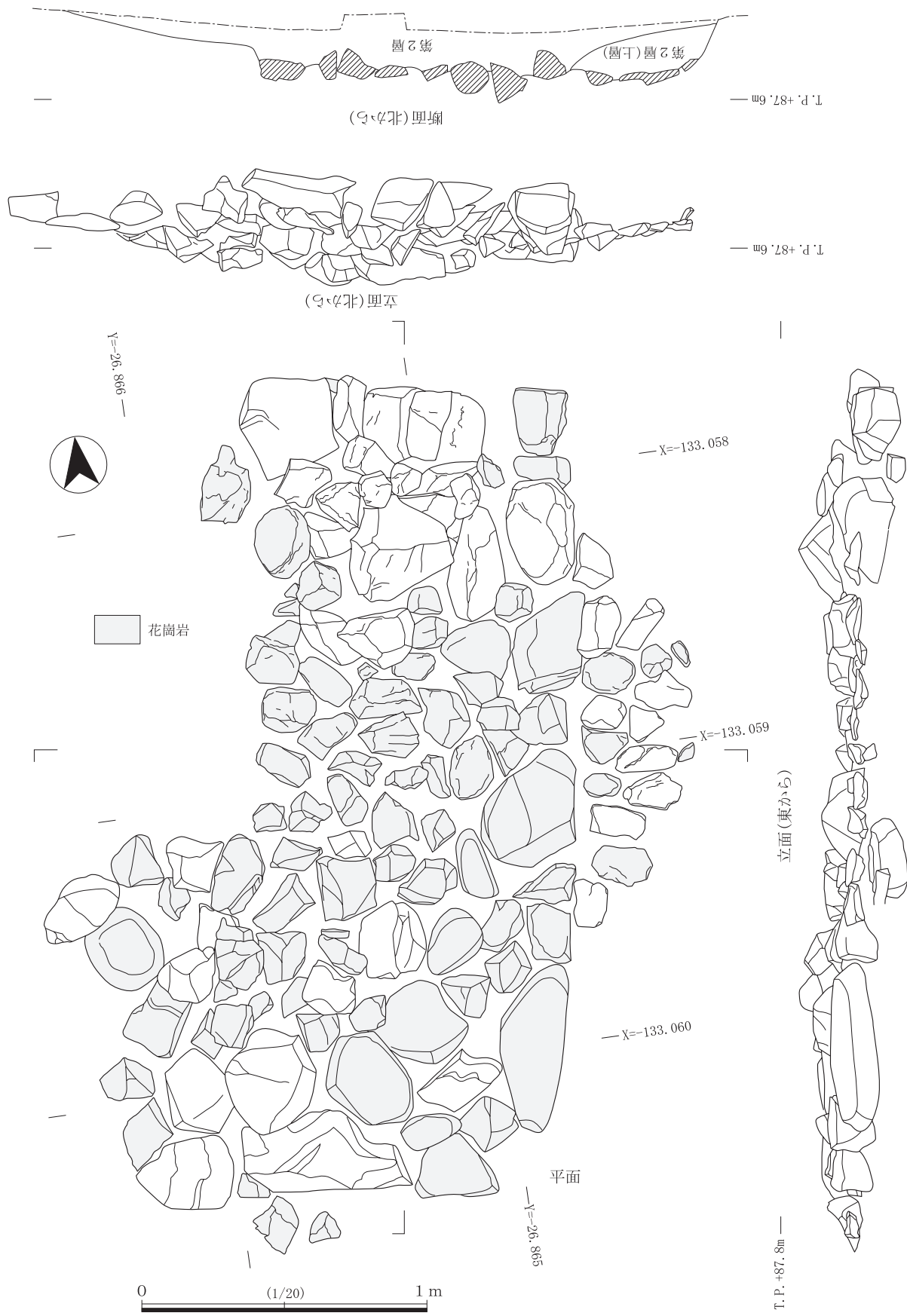
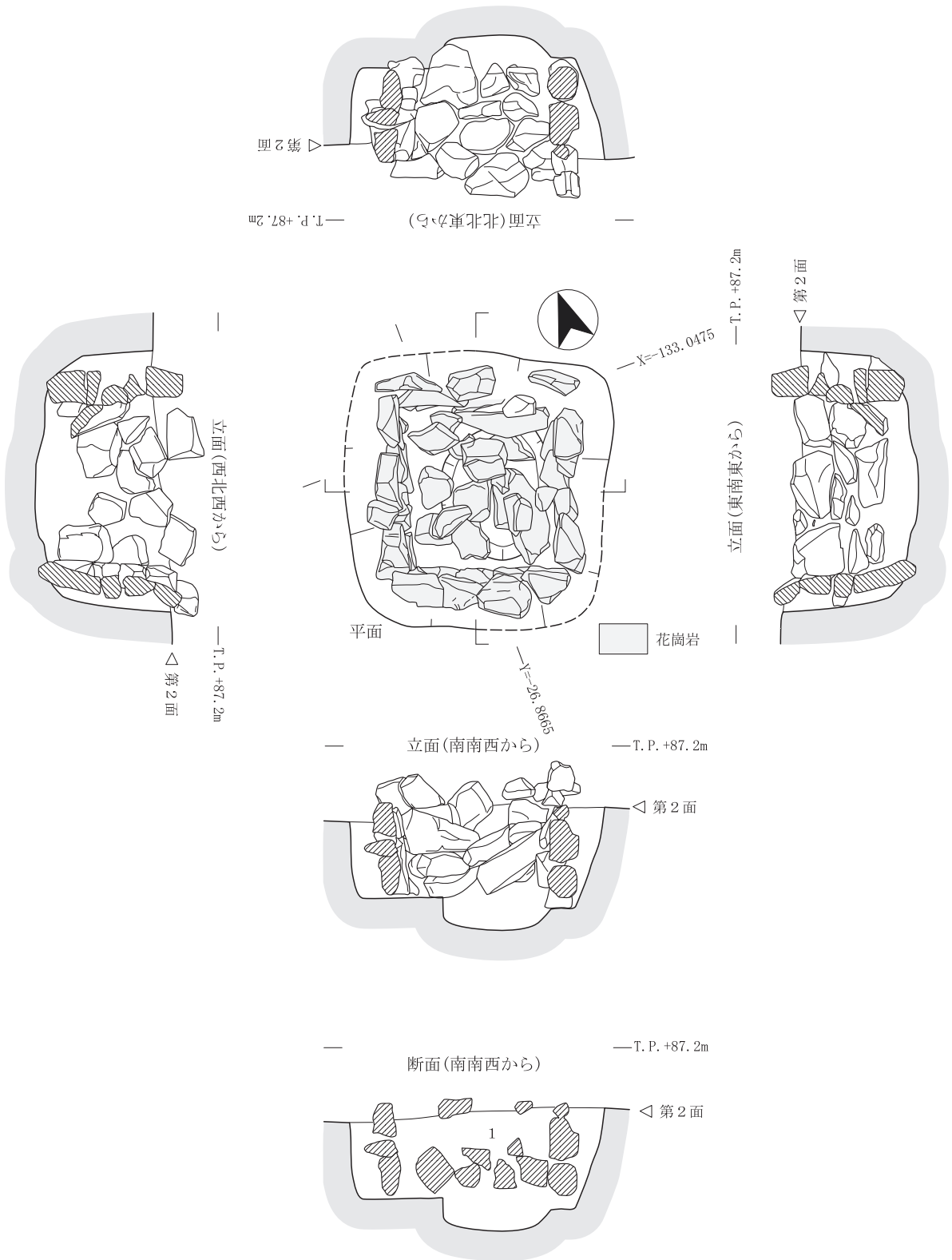


図62 08-2調査区 第2面89石群



1 : 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む

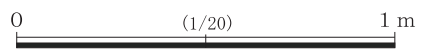


図63 08 - 2 調査区 第2面84石囲い

主軸方位とし、石列の外周は長径82cm、短径69cm、石の頂部から底までの深さは55cmである。拳大～人頭大の石が井戸状に4段程度積み上げられている。石材は北辺上部の1つ以外は全て花崗岩である。底部中央わずかに東寄りに南北45cm、東西38cm、底面からの深さ10cmのピット状のくぼみがある。井戸の水溜りのようなようではあるが、現在は湧水はない。

微細な遺物も検出するために、レベル20cmごとに上層(検出面～T.P. +87.0m)、中層(T.P. +87.0～86.8m)、下層(T.P. +86.8～86.59mの底)に分けて全ての埋土を洗浄した。上層から瓦器皿と塊状の鉄滓が検出されたが、それ以外は指頭～米粒大の土器細片ばかりであった。あえて点数を示せば、上層からは上記に加えて瓦器6片と土師器38片、中層から瓦器2片と土師器17片、下層から瓦器1片と土師器6片である。これらの遺物から、84石囲いは13世紀に位置づけられる。石囲いの内部からは、土器類の他に石も出土した。人頭大が12個、拳大が7個、計19個全て花崗岩であった。

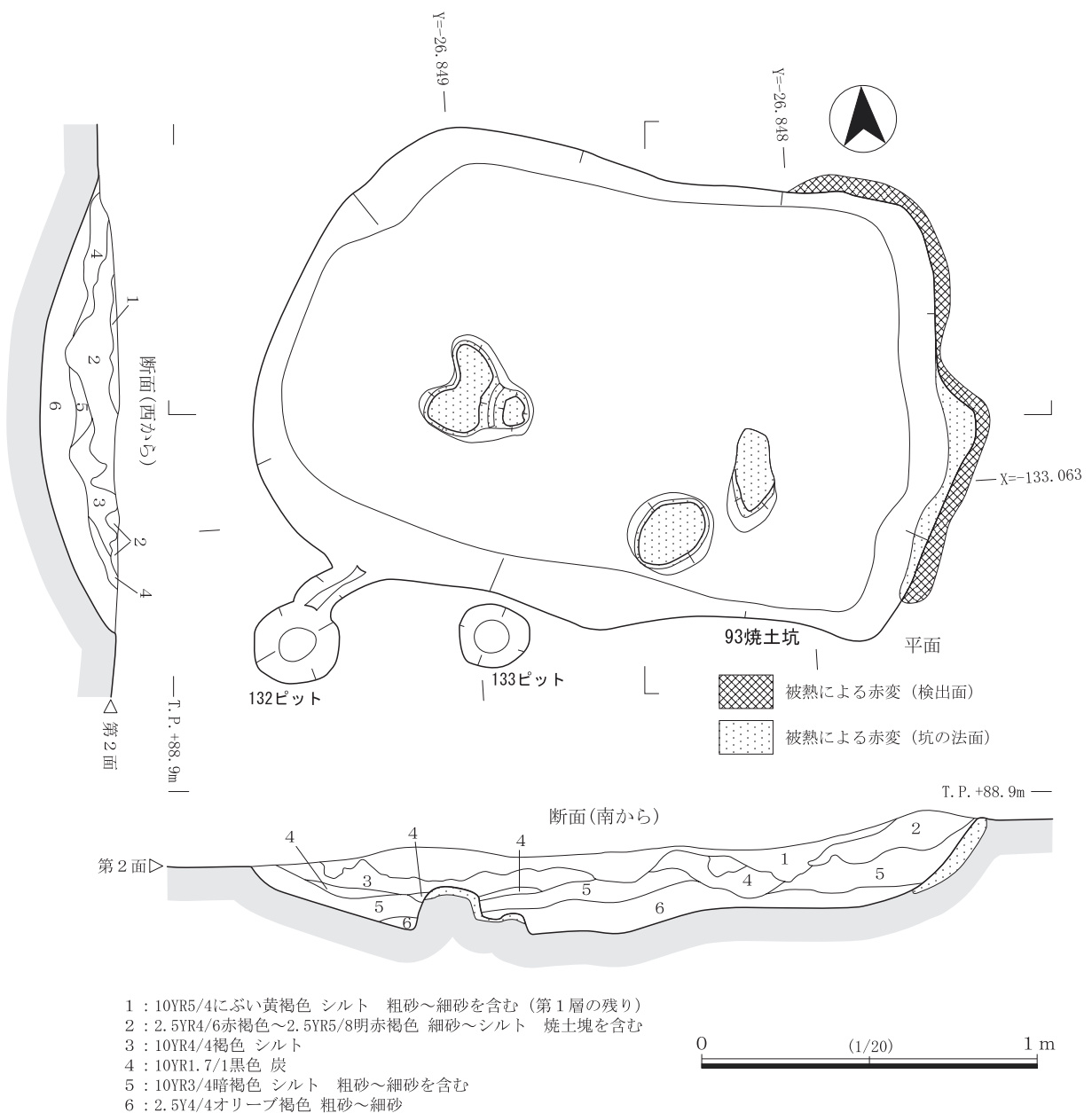


図64 08 - 2 調査区 第2面93焼土坑

構造的には井戸に類似するが、湧水の望める位置ではないので、何らかの貯蔵施設であろうか。

93焼土坑(図64 写真図版16)

調査区南東部に位置する。主軸方位は西北西-東南東で、平面形は、長い辺である北辺と南辺が直線的で、東辺の一部が東に突出しており、西辺が半円形にふくらんでいる。長径2.1m、短径1.4m、深さは25cmである。底面の盛り上がった部分と東辺が被熱により赤変している。

埋土は図64のように6層に分かれる。微細な遺物の出土が予想されたので、埋土を各層ごとに北西・北東・南西・南東の4区画に分けて持ち帰り水洗した。その結果、被熱している2層(2.5YR4/6赤褐色~2.5YR5/8明赤褐色細砂~シルト層)の各区画からは焼土塊と炭片がまんべんなく出土した。焼土塊は拳大~指頭大で、内部にスサの痕跡が認められる。他には南西部から土師器が1片出土したのみであった。炭層である4層(10YR1.7/1黒色炭層)からも焼土塊と炭片が出土した。4層の焼土塊は2層のそれとは異なり、灰黄褐色系で指頭大~米粒大の小さなものが多い。炭も細片が多く、特に南東部では焼土塊・炭ともに小さい傾向がある。また、4層は北西部では層が薄くなり、埋土の採取はできなかった。他には北東部から中世と思しき土師器の小片が4片出土した。

このような被熱した遺構の性格としては、製炭窯、炉、火化施設、土器焼成土坑などが考えられる。後述する第2-2面の135製炭窯が壁面の全周が被熱していることを参考にこの遺構をみると元々は全周が被熱していたものの上部がかなり削平された可能性もある。93焼土坑の特徴は、壁面が被熱により赤変しており、また、炭層(4層)が広がっていることである。一方、土器はきわめて少なく、金属滓や骨などは検出できなかった。

以上の状況から、この遺構は火化施設あるいは製炭窯と考えられる。前者の場合、2層や4層は焼成時に被熱した結果と考えられる。後者の場合、2層は落下した天井部、窯の焚口は西となる。なお、同様な遺構について、『久安寺モッテン墓地跡』(奈良県文化財調査報告書第70集 1995年)では中世の「火葬施設」(S X 111・S X 112・S X 125)、『小畑遺跡』(財団法人大阪府文化財センター調査報告書第36集 1998年)では鎌倉から室町時代の「石組墓」(15号墓・84号墓・102号墓ほか)、『津田遺跡』(財団法人大阪府文化財センター調査報告書第175集 2008年)では古代以前の「製炭窯」(44焼土坑・723焼土坑)と考えられている。

62墓(図65 写真図版17)

調査区北西部に位置する。平面不整円形で、直径66~93cm、深さ23cm。その中央に灰釉陶器四耳壺が逆位に置かれていた。掘方内には、見た目にも黒い10YR2/3黒褐色シルトに粗砂~細砂の混じった土が充満し、壺の下部には内部からこぼれ出た灰がみられた。

図66-237(カラー写真図版4)は灰釉陶器四耳壺。口縁部が打ち欠かれている。肩部全周と体部の一部分には釉がかかり黄緑色に発色している。体部の一部に付着したものは自然釉と推定されるが、肩部の釉は人工的に施された可能性が高い。尾張地域の9世紀中頃~後半の所産であろう。

四耳壺を取り巻く10YR2/3黒褐色シルトに粗砂~細砂が混じった土(図65の1層)からは、埋土水洗によって、土師器や須恵器の小片、鉄釘、焼土塊、指頭大以下の炭化物が手のひらに乗る程度の分量出土した。

238・239は鉄釘。断面四角形のいわゆる和釘である。238の頭部は叩かれ、犬の頭のように変形している。

土器内部に焼けた藁のような柔らかな植物遺体が入っており、器が逆位に置かれていたために、内面

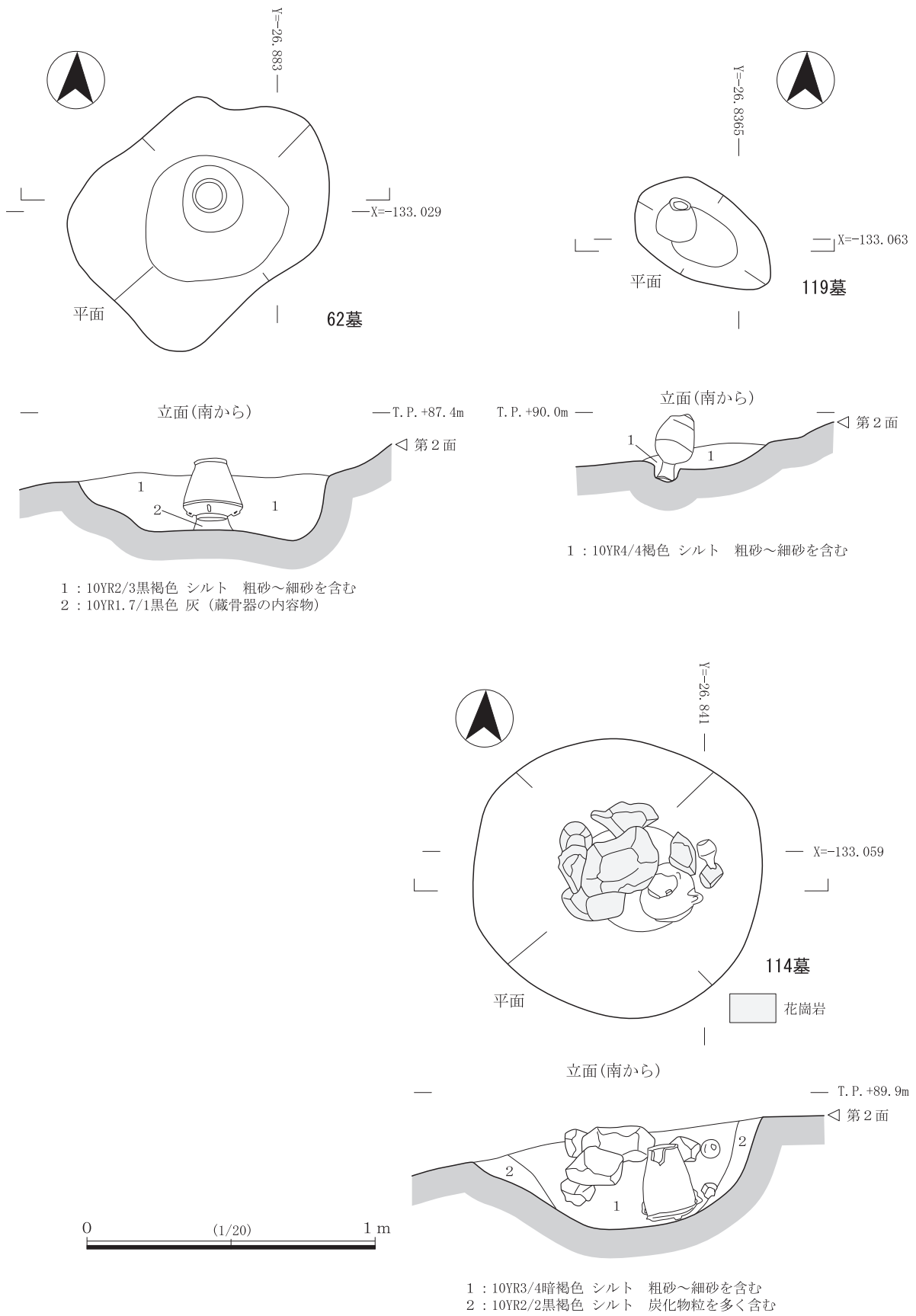
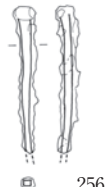
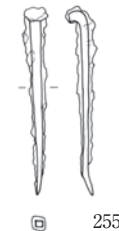
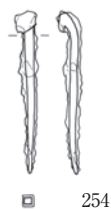
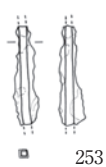
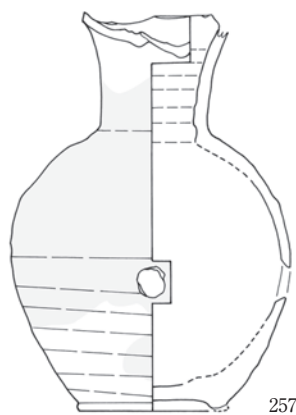
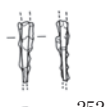
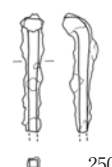
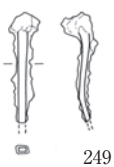
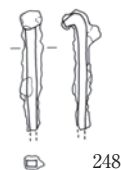
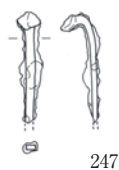
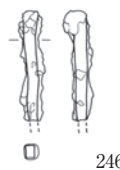
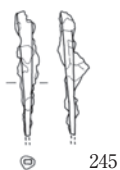
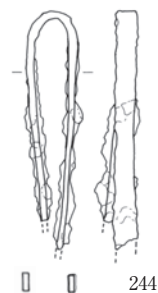
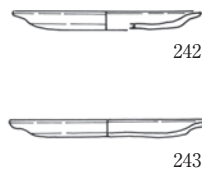
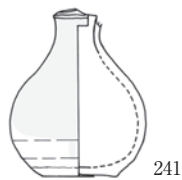
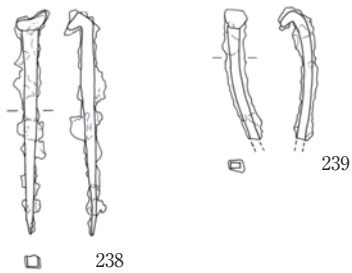
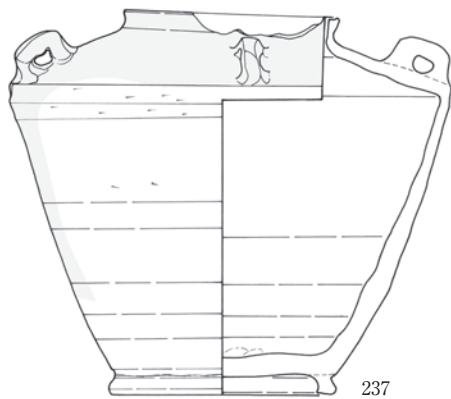


図65 08-2調査区 第2面62・114・119墓



62墓：237～239
114墓：240～256
119墓：257

0 (鉄製品 1/3) 10cm

0 (土器 1/4) 20cm

図66 08 - 2 調査区 第2面62・114・119墓出土遺物

の上部が黒く変色している。その内容物を精査したところ、炭化物と小石と土師器皿の小片が出土したが、骨は見つからなかった。

逆位に据えられた土器の口縁部の下(図65の2層)からは、土師器と須恵器の小片、指頭大以下の炭片が拳ひとつ位の分量、米粒大以下の微細な焼骨片が少量検出された。

以上、62墓は火葬骨を納めた、平安時代前期、9世紀中頃～後半の墓と考えられる。

114墓(図65 写真図版17)

調査区南東部、北東から南西に傾斜する斜面に位置する。平面円形で、直径96～101cm、深さ41cm。墓坑の中央やや南東寄りに須恵器双耳壺(瓶)が逆位に置かれていた。上面中央には人頭大の花崗岩があり、その周囲にも拳大程度の石がみられた。掘方内には、見た目にも黒い10YR2/3黒褐色シルトに粗砂～細砂の混じった土が充満し、壺の下部には壺の内部からこぼれ出た灰がみられた。

埋土は図65のように2層に分かれる。そのうち1層(粗砂～細砂混じり10YR3/4暗褐色シルト層)の北半を土嚢袋3袋分持ち帰り、遺物検出のために水洗した。その結果、土師器の細片と炭片が出土した。

図66-240(カラー写真図版4)は蔵骨器として用いられた須恵器双耳壺(瓶)。口縁部は打ち欠かされている。肩部に突帯が巡る。耳が2か所に付くが、その付け方は丁寧とは言いがたい。播磨地方に類例がある。9世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。内部から炭片が出土した。

241(カラー写真図版4)は墓坑内東部から出土した灰釉陶器小瓶。口縁部を欠く。頸部内面と外面の一部に自然釉がかかり黄緑色に発色している。9世紀後半～10世紀初頭の所産。242・243は土師器「て」の字皿。10世紀前半に位置づけられる。

244(カラー写真図版4)は鉄製毛抜き。幅7mm、厚さ2mm程度の断面長方形の扁平な鉄棒を折り曲げて成形している。245～256は鉄釘。太さにばらつきはあるが、いずれも断面四角形の和釘である。加撃により頭部が変形しているものが多く、247は頭部からやや下がった頸部で屈曲している。

以上の状況から、114墓は平安時代、10世紀前半の墓と考えられる。

119墓(図65 写真17)

調査区南東部、114墓よりもさらに南東約5.5m、やはり北東から南西に傾斜する斜面に位置する。平面楕円形で、長軸方向は北西-南東、長径54cm、短径31cm。検出面からの深さは7cmしかないが、土器が10数cm露出してしまったので、本来は20cm以上の深さがあったと考えられる。墓坑の北西寄りの底が数cm掘りくぼめられ、その小穴に口縁を打ち欠いた灰釉陶器長頸壺(瓶)が逆位に据えられていた。

図66-257は灰釉陶器長頸壺(瓶)。口縁部は打ち欠かれており、埋土にその部分は存在しない。なで肩で体部はやや縦長の球状を呈する。外面の頸部下半から体部中位以上にかけてハケにより釉が塗られ、頸部上半と底部は無施釉である。体部中位に直径10数ミリの外側からの焼成後穿孔がある。東濃(美濃東部)地域の9世紀後半～10世紀初頭の所産と考えられる。

この長頸壺(瓶)内には、焼骨(写真図版48)が納められていた。骨の表面は白色ないし灰白色で、内部は黒い。安部みき子氏より「火葬で骨の変形が強く、復原できたものは下顎骨の切歯部のみ。ほかに同定できた個所は頭骨の縫合部で、下顎の大きさと縫合の様子から、成人と推測される」とのコメントを頂いた。

その他、出土遺物はない。

以上、119墓は平安時代、9世紀後半～10世紀初頭の火葬骨を納めた墓である。

土坑やピットについては、特徴的なものや遺物が出土したものなどを以下に記述し、その他は表2にまとめた。

50土坑(図67)

調査区北西部に位置する。平面は南北に長い卵形で、南北144cm、東西117cm、検出面からの深さは規模の割りに浅く8cmしかない。埋土は、7.5YR5/6明褐色シルトに細砂が混じる。3個の花崗岩が土坑南半にみられた他に、奈良時代と考えられる土師器甕片が出土した。

76土坑(図67)

中央谷の北西側に位置する。平面は北北東-南南西に主軸を持つ楕円形で、長径100cm、短径79cm、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は、10YR4/4粗砂~細砂が混じり褐色シルト。土坑中央部から玢岩、南部から花崗岩、埋土から瓦器片が出土した。鎌倉時代の土坑であろう。

90土坑(図67)

調査区南東部に位置する。南東部は角をなし、東辺および南辺は直線的である。幅42cmの側溝の北西側までは広がらないので、隅丸方形と仮定すれば、東西1.0m、南北0.8m程度と推定される。深さは39cm。埋土は図67のように2層に分かれるが、東辺の立ち上がり部が被熱により赤変している。出土遺物はない。

110土坑(図68)

調査区東部、南西に傾斜する斜面に位置する。平面楕円形で、東西88cm、短径76cm、深さ28cmを測る。埋土は、図68のように2層に分かれる。出土遺物は、土師器小片1片と炭片のみ。時期不詳である。

111土坑(図68)

110土坑の南約50cmに位置する。平面は東西に長い楕円形で、東西97cm、短径77cm、深さ32cmである。埋土は、図68のように2層に分かれる。出土遺物はなく時期不明であるが、埋土に拳大の花崗岩が1個含まれていた。

121土坑(図68)

先述した90土坑の南約3.3mに位置する。平面円形で、直径70~74cm、深さ9cm。埋土は、10YR5/4にぶい黄褐色シルトで、細砂、炭化粒、10YR6/8明黄褐色シルトの小ブロックを含む。北西部に人頭大の玢岩がみられる他、瓦器碗片、土師器小片、鉄釘1点、鉄滓が出土した。鎌倉時代に属するか。

125土坑(図68)

90土坑の西北西約1mに位置する。平面円形で、直径75~87cm、深さ23cmを測る。埋土は、図68のように2層に分かれる。出土遺物は、土師器3片のみ。時期不詳。

以上の他に、第2面の土坑やピットから次の遺物が出土した。遺構のデータは表2を参照されたい。

42土坑とその周辺の第1層および第2層から破片となって図69-258の須恵器把手付甕が出土した。

61土坑から出土した259は須恵器平瓶の把手であろうか。一辺約1.5cmの断面正方形の粘土紐を折り曲げて把手とし、各角を面取りしている。

67土坑からは260の須恵器杯が出土した。7世紀の所産であろう。

73土坑から261の鉄鉢形の須恵器が出土した。外面は回転ケズリの後、ヘラミガキが施されている。内面は回転ナデにより平滑に仕上げられている。底部を欠く。8世紀後半に類例がある。262(写真図版32)は鼓形の特異な形状をなす。直径の大きい方を下にして器台的に用いられたと推定する。外面にはタタキが施され、その中位には貼り付け突帯状のものがはずれた痕跡がある。素焼きの土器で、土師

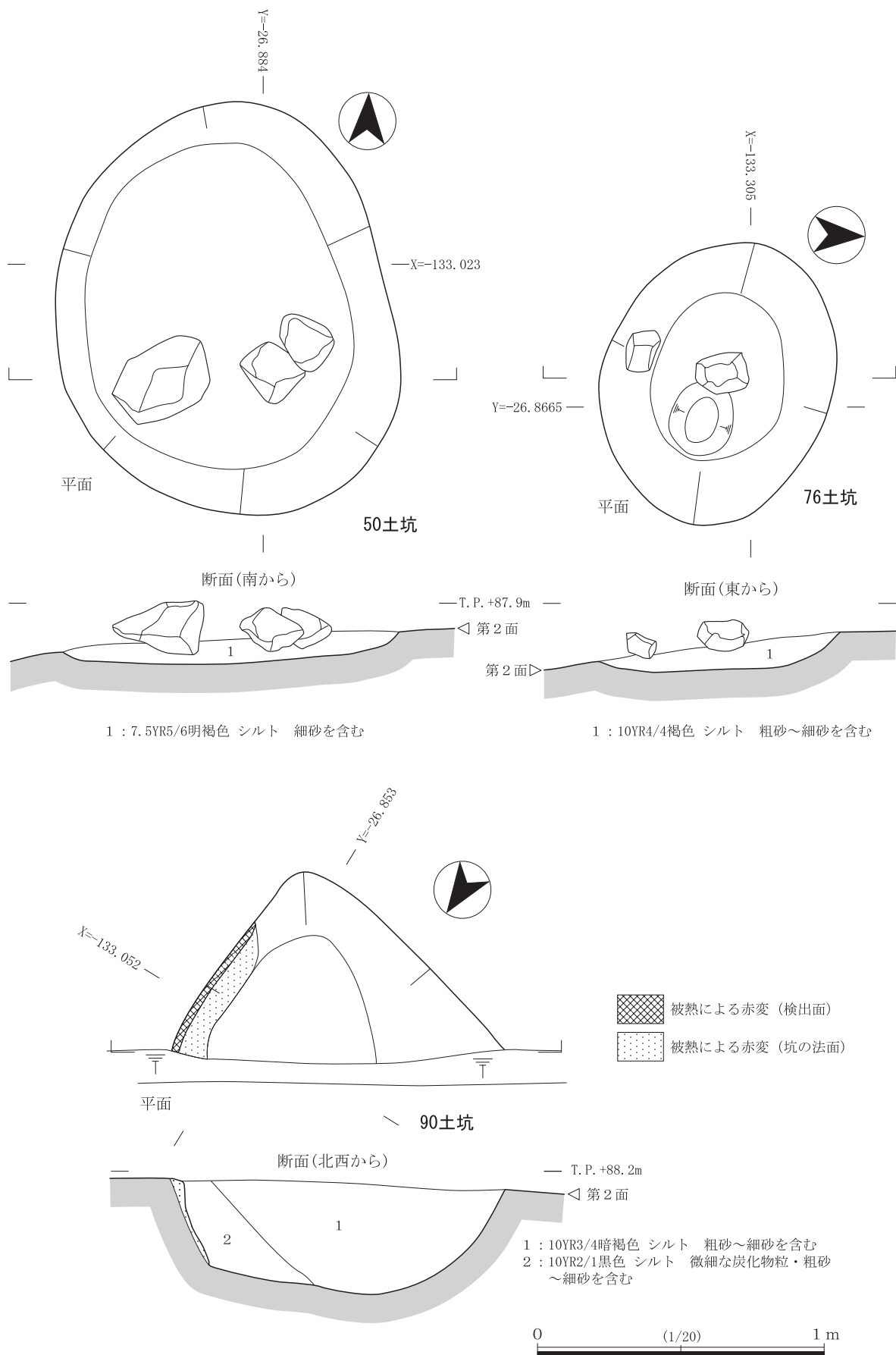


図67 08-2調査区 第2面50・76・90土坑

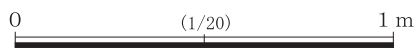
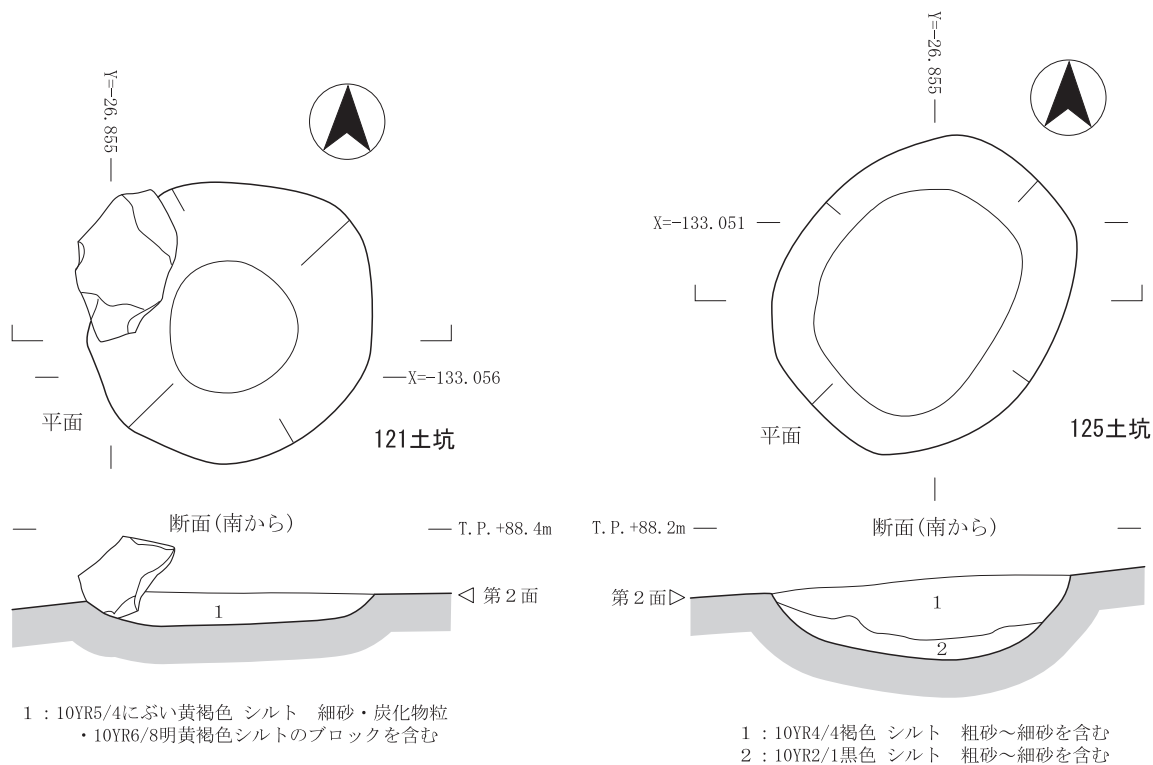
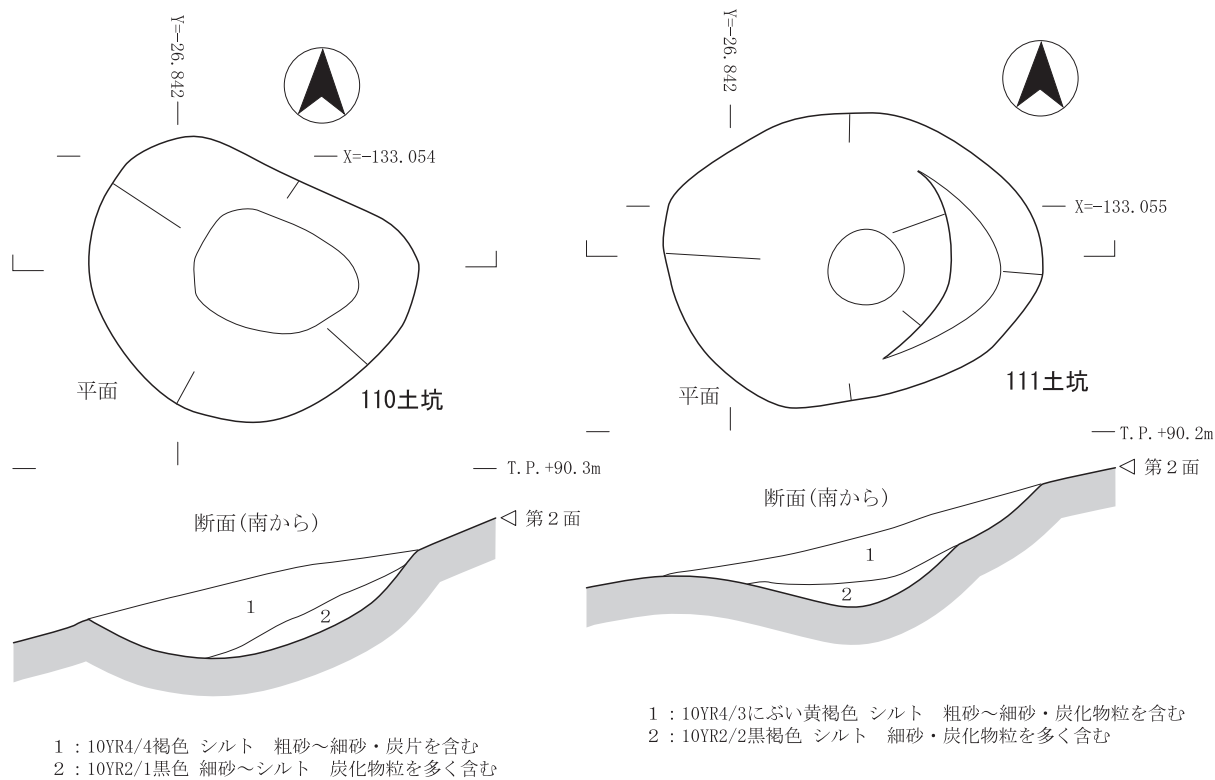


図68 08 - 2調査区 第2面110・111・121・125土坑

表2 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧(1)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|-------|----------|-----|------|----------|-----|----|---|--------------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 33ピット | 9K-8b | 円 | | 28 | 23 | 8 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 鉄釘 |
| 34ピット | 9K-8b | 楕円 | 北西 | 58 | 42 | 23 | 2.5Y5/4黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 35ピット | 9K-8b | 楕円 | 北東 | 42 | 28 | 16 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 36ピット | 9K-8b | 楕円 | 北北東 | 52 | 18 | 18 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 37土坑 | 9K-8b | 楕円 | 北北西 | 274 | 73 | 31 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 38土坑 | 9K-8b | 楕円 | 北東 | 134 | 58 | 7 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 39ピット | 9K-8b | 円 | | 45 | 39 | 18 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 40ピット | 9K-8b | 楕円 | 北東 | 54 | 38 | 1 | 10YR4/4褐色シルト 木の根?・粗砂～細砂を含む | |
| 41ピット | 9K-7b | 円 | | 39 | 29 | 17 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 42土坑 | 9K-8c | 楕円 | 北北西 | 132 | 84 | 16 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 44ピット | 9K-9c | 不整円 | 北北西 | 83 | 55 | 14 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 45ピット | 9K-9c | 楕円 | 北北東 | 62 | 39 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 46ピット | 9K-9c | 円 | | 73 | 66 | 17 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 47ピット | 9K-9c | 楕円 | 東西 | 84 | 33 | 18 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む 46ピットより粗砂が多い | 須恵器 |
| 48ピット | 9K-9c | 円 | | 32 | 26 | 9 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 49ピット | 9K-9c | 楕円 | 北北東 | 78 | 35 | 5 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 50土坑 | 9K-9c | 楕円 | 北 | 142 | 112 | 13 | 7.5YR5/6明褐色シルト 細砂を含む | 土師器 |
| 51土坑 | 9K-9c | 不整円 | 北東 | 141 | 82 | 27 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 52土坑 | 9K-9c | 不整円 | 北 | 225 | 88 | 13 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 53土坑 | 9K-9c | 楕円 | 北東 | 181 | 143 | 33 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 54ピット | 9K-10c | 円 | | 34 | 33 | 11 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 55ピット | 9K-10c | 隅丸方 | 北西 | 96 | 58 | 10 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 56ピット | 9K-10c | 不整円 | 北 | 99 | 62 | 17 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 57土坑 | 9K-9c | 不整円 | 北西 | 284 | 218 | 33 | 10YR3/3暗褐色シルト 細砂を含む | 土師器 須恵器 瓦器 瓦 |
| 58土坑 | 9K-9c | 不整円 | 東西 | 319 | 103 | 45 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 59土坑 | 9K-9c・9d | 不整円 | 北東 | 122 | 72 | 18 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 60土坑 | 9K-9c | 楕円 | 北 | 114 | 89 | 9 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 61土坑 | 9K-9d | 不整 | 北東 | 318 | 223 | 40 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 弥生土器 |
| 63ピット | 9K-9d | 楕円 | 北東 | 70 | 50 | 10 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 64土坑 | 9K-9d | 不整 | 東西 | 194 | 113 | 20 | 10YR2/2黒褐色シルト 粗砂～細砂を含む 炭化粒も混じる 木の根か? | 土師器 滓 焼土塊 |
| 65土坑 | 9K-9d | 不整 | 東西 | 210 | 55 | 15 | 10YR3/2黒褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 66ピット | 9K-8d | 楕円 | 東西 | 54 | 42 | 6 | 10YR3/3暗褐色シルト 細砂を含む | |
| 67土坑 | 9K-8d | 楕円 | 北西 | 108 | 36 | 15 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 土師器 |
| 68ピット | 9K-8d | ? | | 42 | 32 | 14 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 69ピット | 9K-8d | 円 | | 26 | 24 | 8 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |

表2 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧(2)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-------|------|------|----------|-----|----|---------------------------------|-----------------------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 70ピット | 9K-8d | 円 | | 16 | 14 | 7 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 71土坑 | 9K-8d | 楕円 | 北西 | 102 | 68 | 15 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 瓦 |
| 72土坑 | 9K-8d | 楕円 | 北 | 103 | 29 | 7 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 73土坑 | 9K-8d | 不整円 | 北東 | 155 | 118 | 21 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 瓦質土器 |
| 74ピット | 9K-7c | 楕円 | 北東 | 34 | 25 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 75ピット | 9K-7d | 楕円 | 北北東 | 30 | 22 | 7 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 76土坑 | 9K-7d | 楕円 | 東西 | 98 | 76 | 19 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 瓦器 |
| 77ピット | 9K-7d | 円 | | 70 | 59 | 16 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 78ピット | 9K-7d | 円 | | 31 | 28 | 11 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 79ピット | 9K-7d | 円 | | 40 | 38 | 10 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 土師器 |
| 80ピット | 9K-6e | 円 | | 18 | 17 | 16 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 81ピット | 9K-6e | 円 | | 70 | 53 | 30 | 10YR2/3黒褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 82土坑 | 9K-6e | 楕円 | 北北西 | 192 | 99 | 21 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 瓦器 瓦質土器 焼土塊 石器 |
| 85ピット | 9K-7f | ? | | 33 | 19 | 32 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 86ピット | 9K-7f | 円 | | 40 | 35 | 37 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 87ピット | 9K-7f | 円 | | 32 | 27 | 16 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 88ピット | 9K-6g | 円 | | 36 | 32 | 35 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 90土坑 | 9K-6f | 隅丸方? | | 100? | 80? | 39 | 図67参照 | 土師器 瓦器 |
| 91ピット | 9K-6f | 円 | | 40 | 35 | 6 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 94ピット | 9K-6g | 円 | | 19 | 18 | 14 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 95ピット | 9K-5g | 楕円 | 東西 | 40 | 18 | 21 | 10YR2/1黒色シルト 微細な炭化粒・焼土塊を含む | 瓦器 土師器 鉄釘 焼土塊 |
| 96ピット | 9K-5g | 円 | | 25 | 20 | 23 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 瓦器 土師器 焼土塊 |
| 97ピット | 9K-6g | ? | | 56 | 32 | 10 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む 炭化粒を少量含む | |
| 98ピット | 9K-6g | 楕円 | 北 | 27 | 16 | 7 | 10YR5/8黄褐色シルト 粗砂と炭化粒が混じる | |
| 99ピット | 9K-6g | 楕円 | 東西 | 45 | 35 | 11 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 100ピット | 9K-6g | 楕円 | 東西 | 42 | 30 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 101ピット | 9K-5g | 円 | | 24 | 22 | 10 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 102ピット | 9K-5g | 円 | | 23 | 20 | 7 | 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 瓦器 |
| 103ピット | 9K-5g | 円 | | 30 | 28 | 11 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 104土坑 | 9K-5g | 円 | | 69 | 63 | 12 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 105土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北 | 112 | 83 | 48 | 10YR3/4暗褐色シルト 礫～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 106土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北北西 | 66 | 37 | 11 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 107土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北西 | 128 | 83 | 28 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 瓦器 土師器 |
| 109土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北 | 92 | 60 | 33 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 110土坑 | 9K-5f | 楕円 | 東西 | 86 | 64 | 34 | 図68参照 | 土師器 炭 |

表2 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧(3)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-------|-----|------|----------|-----|----|----------------------------------|-------------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 111土坑 | 9K-5f | 楕円 | 東西 | 94 | 72 | 37 | 図68参照 | |
| 112ピット | 9K-5f | 円 | | 27 | 24 | 13 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 113ピット | 9K-5f | 不整円 | 東西 | 64 | 25 | 21 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 115土坑 | 9K-5g | 円 | | 72 | 60 | 22 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 鉄釘 |
| 116ピット | 9K-4g | ? | | 25 | 13 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 117ピット | 9K-4g | ? | | 40 | 15 | 10 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 118ピット | 9K-4g | 円 | | 29 | 26 | 10 | 10YR4/6褐色シルト 礫～細砂を含む | |
| 120ピット | 9K-6f | 円 | | 48 | 44 | 9 | 5YR5/6明赤褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 121土坑 | 9K-6f | 円 | | 72 | 66 | 13 | 図68参照 | 瓦器 土師器 鉄釘 滓 |
| 122ピット | 9K-6f | 円 | | 22 | 19 | 10 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 123土坑 | 9K-7c | 楕円 | 北 | 136 | 103 | 45 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む 炭化粒を少量含む | 土師器 瓦器 |
| 124ピット | 9K-8c | ? | | 26 | 13 | 19 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 125土坑 | 9K-6f | 円 | | 83 | 70 | 20 | 図68参照 | 土師器 |
| 132ピット | 9K-5g | 円 | | 25 | 24 | | 10YR3/4暗褐色シルト 焼土塊小片・炭化粒・粗砂～細砂を含む | 土師器 焼土小塊 |
| 133ピット | 9K-5g | 円 | | 21 | 19 | ? | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |

器というよりは弥生土器に近い印象がある。近畿地方よりも西の地域の影響かという指摘もあるが、具体的には探し当てていない。

86ピットからは263(写真図版32)の土師器甕が出土した。外面には横方向のハケの後、縦方向の粗いハケが施される。体部内面の上半には横方向の細かなハケメがみられる。8世紀の所産であろう。

95ピットとその周辺の第1層および第2層からは264の須恵器盤が出土した。底部と体部との境は不明瞭で、口縁端部は水平な面となる。底口径24.0cmの大形品で、器壁も厚い。

105土坑からは265の須恵器杯が出土した。7～8世紀に属する。

115土坑からは266・267の鉄釘が出土した。両者とも断面四角形の和釘である。

43落ち込み

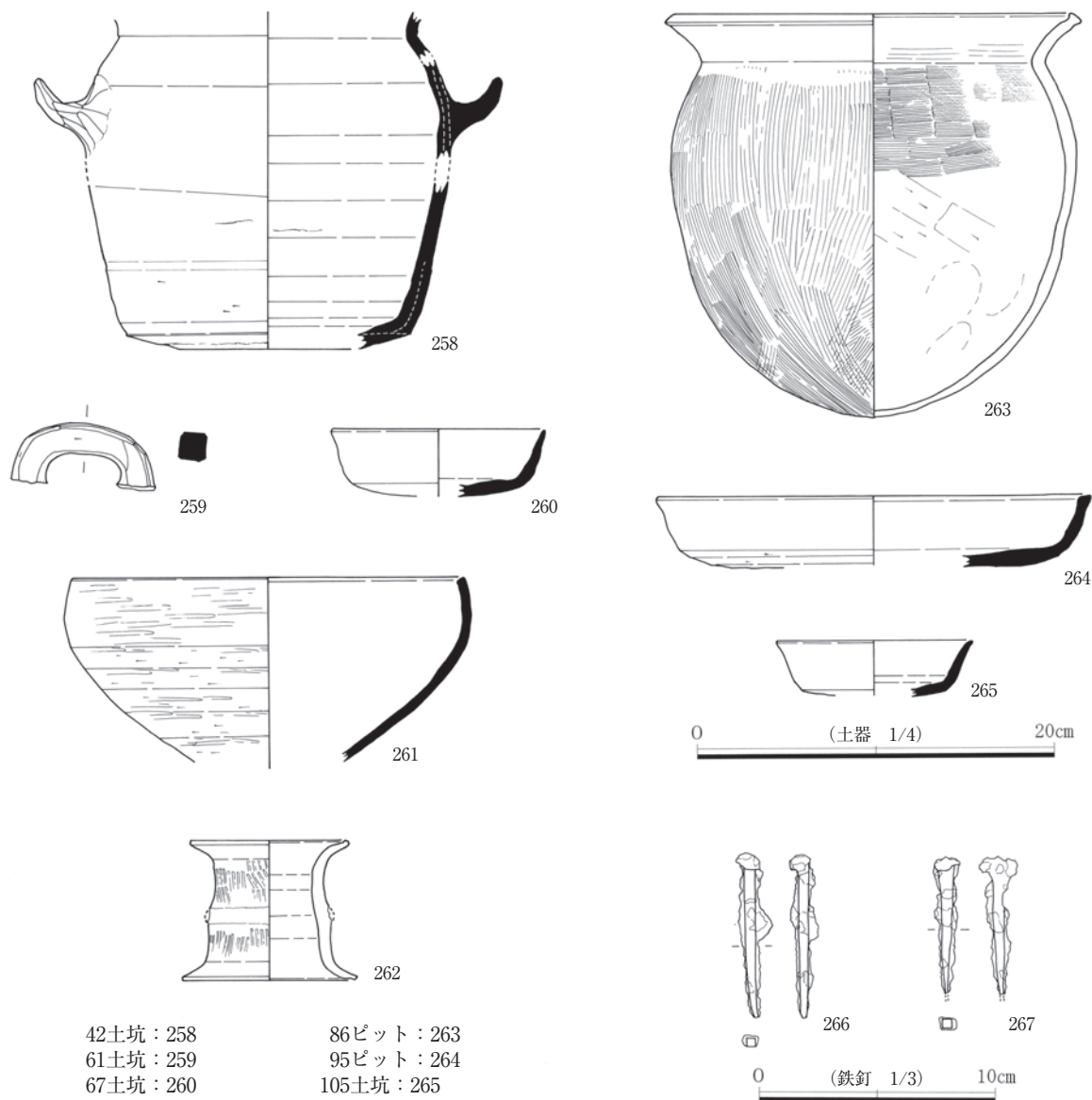
調査区北西部、北から南に緩やかに下る斜面に位置する。平面は不整形で、東西約6.4m、南北約3.5m。北側半周はおおむね半円を描いているが、南辺は出入りがはげしい。斜面にあるので高低差では約40cmになるが、埋土の厚さは10～15cmで、10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

出土遺物は、古代の須恵器や土師器が主体を占め、古代の瓦、鉄釘、滓、炭片なども少量混じる。

図70-268～280は須恵器。

268(写真図版32)は蓋。扁平な宝珠形つまみが付く。その周囲は平らで外縁が高くなっている。そこから裾広がりに口縁部にいたる。口縁部は垂直な面をもつ。上面には灰がかぶっている。7世紀後半に類例がある。

269～271は杯蓋。269・270の内面口縁部近くにはかえりがあるが、口縁部より下方までは伸びない。この2点は7世紀後半の所産。271の天井部にはふくらみがなくほぼ平らになり、端部は下方に短く屈



| | |
|--------------|---------------|
| 42土坑：258 | 86ピット：263 |
| 61土坑：259 | 95ピット：264 |
| 67土坑：260 | 105土坑：265 |
| 73土坑：261・262 | 115土坑：266・267 |

図69 08-2調査区 第2面土坑、ピット出土遺物

曲している。復原径は26.2cmと大きい。8世紀の所産であろう。

272～275は杯身。272は厚みのある高台が比較的内側に回る。これとは対照的に273には断面形が四角形から崩れた高台が底部の外側に付く。272は7世紀、273～275は8世紀に属する。

276は平瓶または壺の口縁部と推定される。277は壺の口縁部～肩部で、外面に自然釉が付着している。

278は甕の口縁部。口縁端部は直立気味になり、端面はわずかに内外に張り出しほぼ水平の面をなす。第2層出土の破片と接合した。7世紀後半に属するか。

279(写真図版32)は鉄鉢形の鉢。口縁部は内彎し、底部は緩やかな球状をなす。内外面とも丁寧なナデで平滑に仕上げている。この43落ち込みを中心として周辺に分布する破片と接合した。

280(写真図版32)は杯底部を転用した硯。見込み部の中央部が磨かれて平滑になっている。

281(写真図版32)は筒部分を上にすると異形の蓋にもみえるが、口縁部内面に油の炭化物が付着しているので灯明皿として用いられたと考えられる。その場合、中空になった筒に下から丸棒を差し込んで燭台のように掲げたものであろう。一見すると褐釉陶器に似るが、胎土は砂っぽく、成形も異なる。

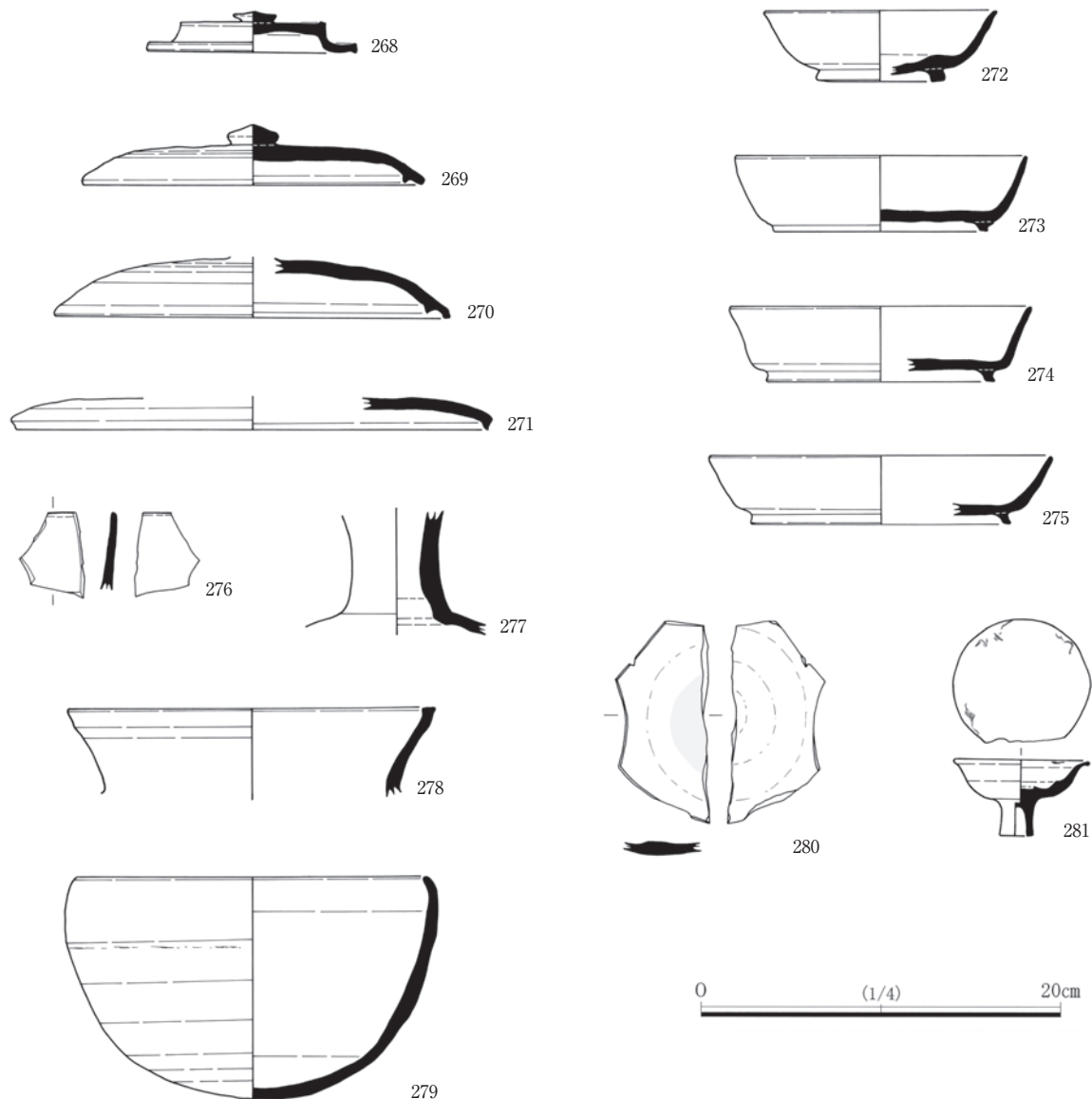


図70 08 - 2 調査区 第2面43落ち込み出土遺物

以上、43落ち込みの出土遺物には時期不詳の灯明皿も混じるが、主体は7～8世紀の須恵器である。

83落ち込み

調査区中央部やや南、先述の89石群の北側一帯に広がる。平面形は溝状で、89石群の北では南北に伸び、そこから南西に屈曲している。延長約16m、幅2.6～5.1m、深さは最大で70cmに及ぶ。埋土は中層以上を10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む層が占め、下部に10YR3/3暗褐色シルトに粗砂～細砂を含む層が堆積している。

出土遺物では、火頭形三尊埴仏と埴仏鑄型が特筆される。

図71-282(カラー写真図版5)は火頭形三尊埴仏の向かって左側上部の破片である。周縁部分は高まっている。天蓋はシャープに表現され、鈴を表現したと思しき直径4mmほどの円形の高まりがその上に2個、下に1個みられる。表面には金箔が点々と残る。胎土はきめ細かい。類例は7世紀後半の白鳳時代にみられる。出土位置は、83落ち込み内の86ピットの東側である。

283(カラー写真図版5)は三尊埴仏の鑄型。282と同様に素縁の周縁が高まっている埴仏とも考えたが、

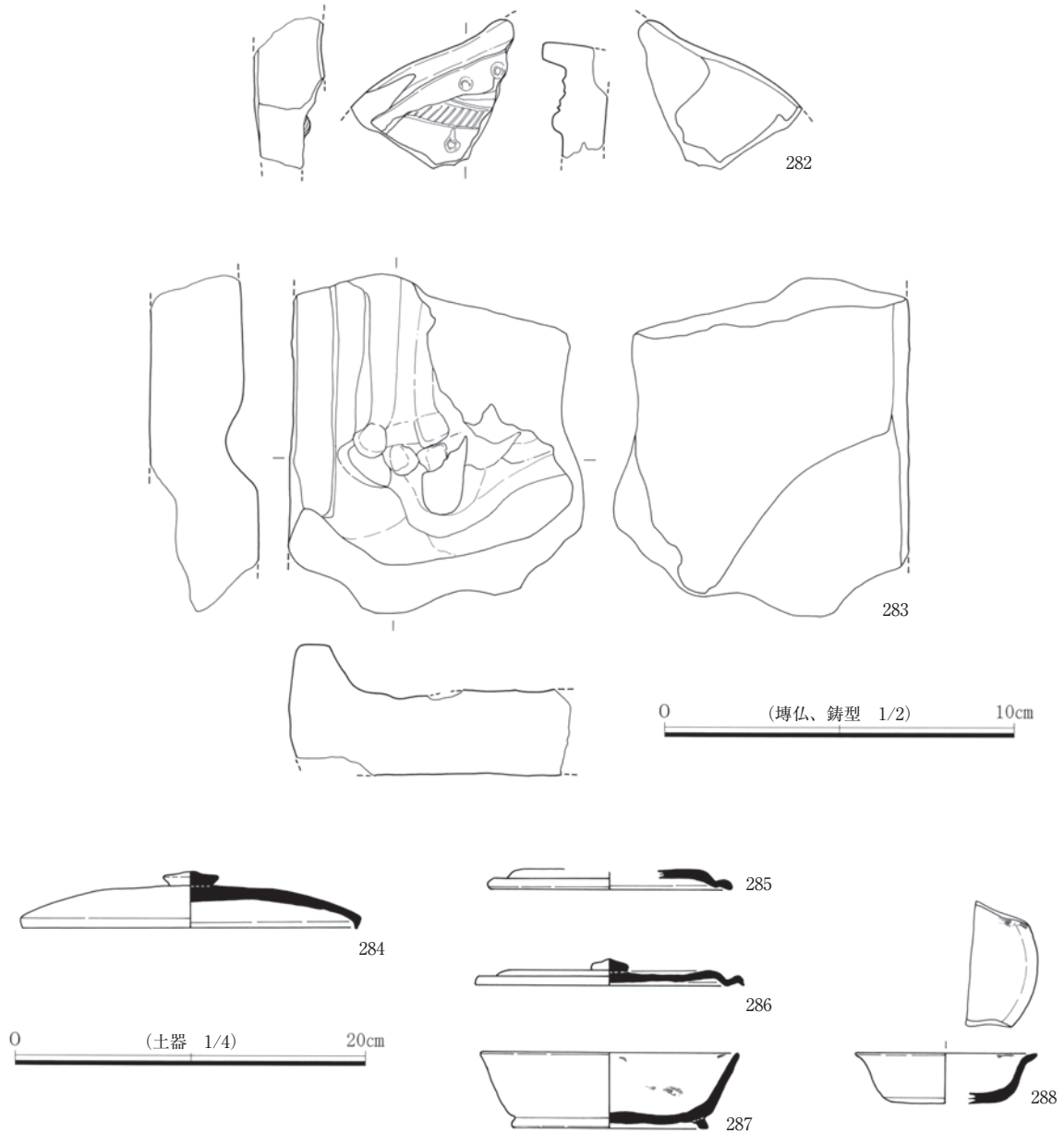


図71 08-2調査区 第2面83落ち込み出土遺物

脇侍の足元と蓮華座の部分が掘り込まれていることから鑄型と判断した。押出仏の原型を鑄造するためのものか。表面は細かな砂が浮きザラザラしており、被熱により黒くなっている部分がある。

284～288は須恵器。

284～286は杯蓋。284は中央に扁平な宝珠形つまみが付き、口縁端部は下方に短く屈曲する。285の天井部は平らで、口縁端部はふくらみ気味である。286の天井部はむしろくぼみ、口縁部はS字状に屈曲し、端部は下外方を向く。

287・288は杯。287はやや外に開く高台が底部の外周近くに付く。体部は直線的に外上方に開く。8世紀の所産。288は破片資料だが、短く外反する口縁部の内面の一部に油の炭化物が付着していることから灯明皿に転用されたと考えられる。9世紀に属するか。

以上、83落ち込みの出土遺物は、古代の土師器や須恵器が主体を占める。しかし、この他に古代の瓦、中世の瓦器、弥生土器片なども混じっており、一括性はない。

第5節 第2 - 2面の遺構と遺物

第2 - 2面(図72 写真図版18)とした範囲は、第2面と第2 - 2面との間の「第2層(上層)」を除去したその下面である。具体的には図72に示すように、調査区の中央部から北西にかけての範囲で、室町時代後半の遺物を含む中央谷によって分断されている。

第2 - 2面も第1面・第2面と同様に北東から南西に傾斜しており、面の高さは調査した範囲の北端でT.P.+89.3mと高く、南側でT.P.+86.2mと低い。遺構として、焼土坑、土坑・ピット、落ち込み、計56か所[番号126～131・134～183]を調査した。

以下、第2 - 2面の134土坑、135焼土坑、土坑・ピット、156落ち込みの順に報告する。

134土坑(図73 写真図版19)

調査区北部に位置する。平面楕円形で、北東 - 南西を主軸とし、長径140cm、短径59cmを測る。検出面からの深さは12cmだが、石の存在を勘案すると本来の深さは20cm以上あったと推定される。

出土土器は土師器のごく小片と奈良時代の須恵器杯片のみ。加えて土坑の南東部に石が3個みられた。中央寄りの大振りなものは玢岩で、外周に近い2個は花崗岩である。

135焼土坑(図73 写真図版19)

調査区中央、中央谷の北側に位置する。平面はやや北に張り出した隅丸方形で、西北西 - 東南東を主軸とし、長径134cm、短径60cm、深さ18cmを測る。

埋土は図73のように4層に分かれる。その外周は被熱のため赤変しているが、底面には被熱による明瞭な赤変は認められない。

出土遺物を層ごとにみると、1層からは須恵器と土師器の小片が出土した。須恵器の1片は灯明皿として用いられていた。

遺構内のほぼ下半分を占める3層は黒色を呈し、遺構外周の被熱部分の存在と相まって、何らかの被熱した遺物の出土が予想された。そこで、3層を北西・北東・南西・南東の4区画に分けて持ち帰り、遺物検出のために水洗した。その結果、3層の各区画からは指頭大以下の炭片がまんべんなく出土した。分量は、北西・北東・南西部では各々拳ひとつ程度、南東部ではその半分程度であった。米粒大以下の焼土塊も、北西・南西・南東部から少量出土した。それら以外には、北西部から須恵器杯の底部と土師器細片がみられたのみであった。

2層と4層からの出土遺物はない。

遺構外周の被熱部分は取り上げようとするバラバラに崩壊し、多くは米粒大以下の粒状となった。それらも全て取り上げ、水洗した。微細な炭片が少量混じるが、それ以外の出土遺物はなかった。

第2面の93焼土坑が東辺と底面の盛り上がった部分が被熱しているのに対し、この135焼土坑は底は被熱していないが壁面の全周が被熱している。

135焼土坑の場合、炭片が比較的多く出土しているが、土器はきわめて少なく、金属滓や骨などは検出できなかった。93焼土坑と同様に火化施設あるいは製炭窯と考えられる。

以上の134土坑、135焼土坑を含めて、55か所の土坑やピットを調査した。埋土は単層のものがほとんどで、柱痕や石を伴うものはない。出土遺物も少なく、土師器や須恵器の細片のみである。これらの土器には明らかな中世以降のものは含まれず、基本的に古代の所産といえる。個々の遺構のデータは表3にまとめた。

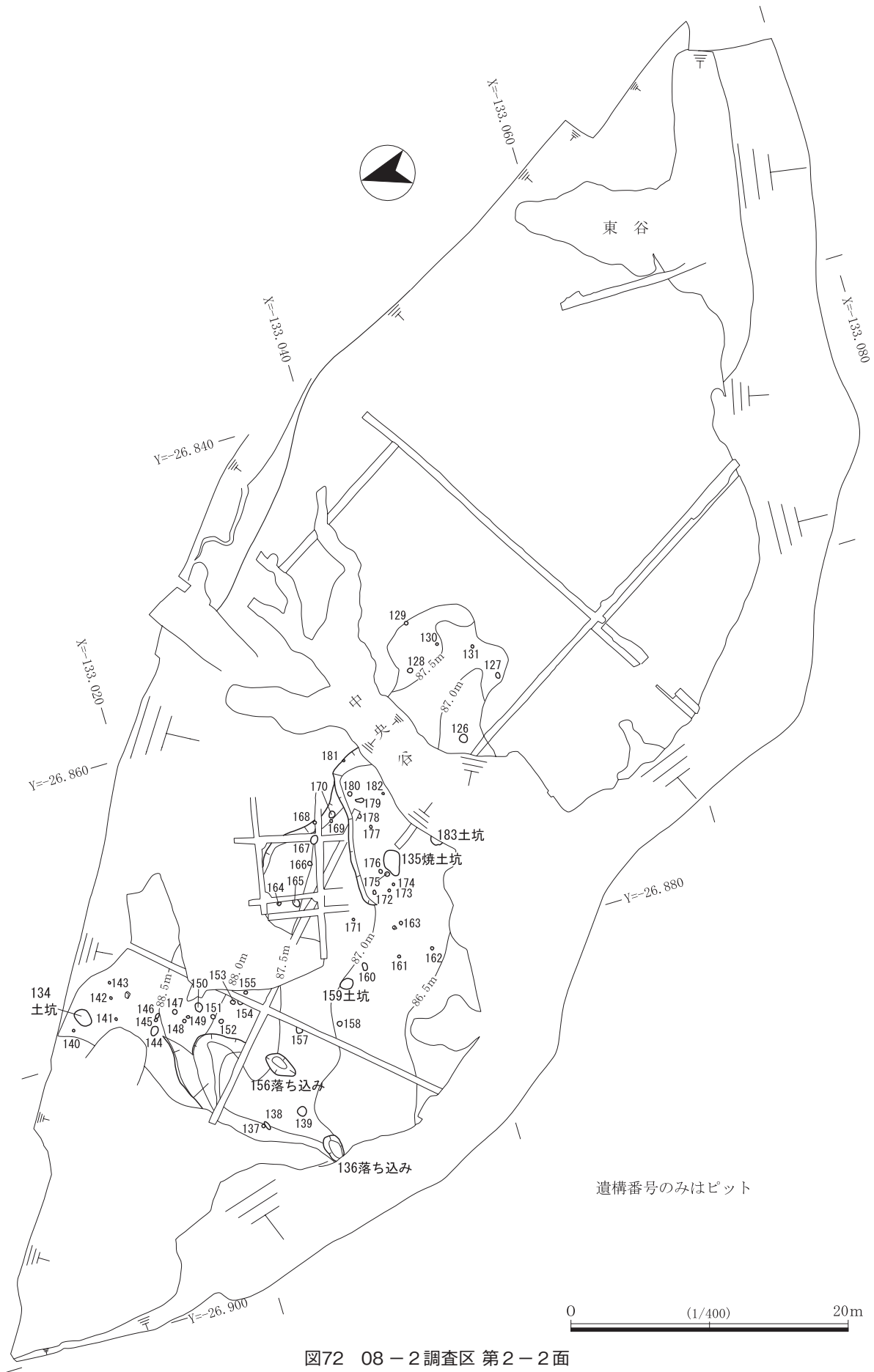


図72 08-2調査区 第2-2面

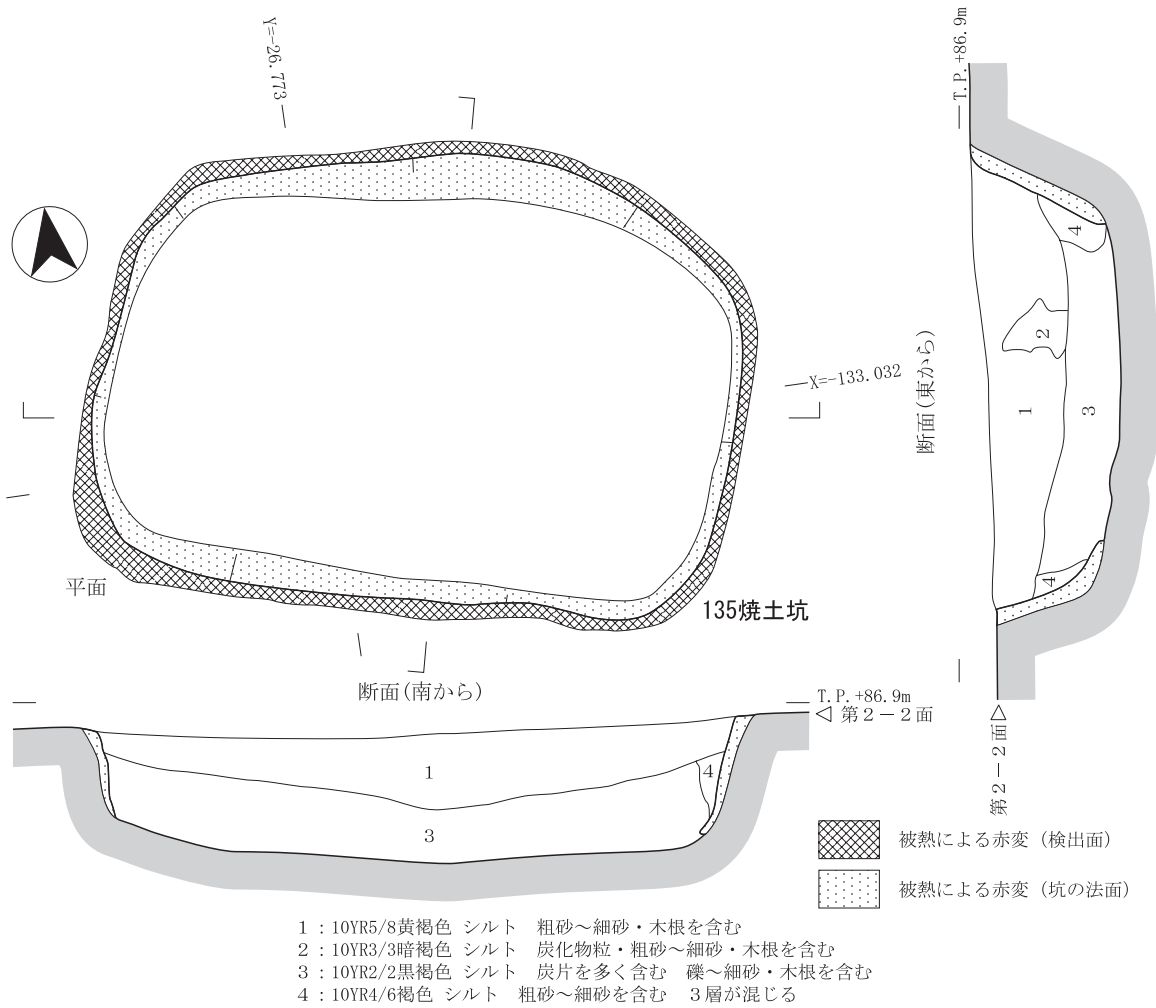
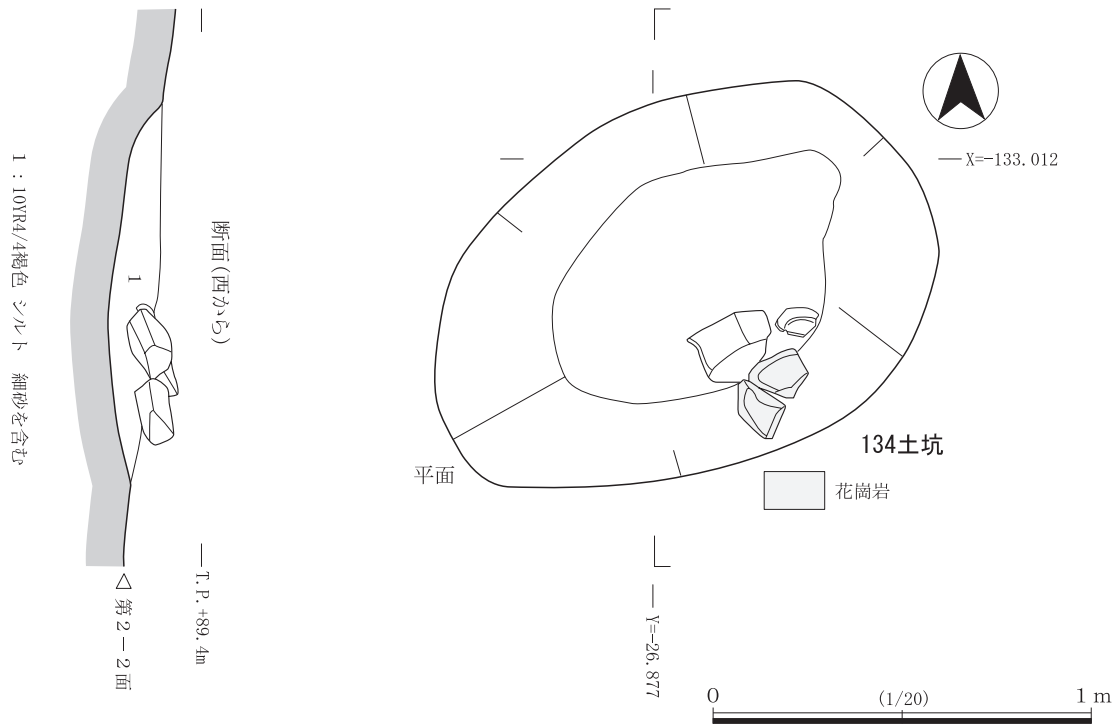


図73 08-2調査区 第2-2面134土坑、135焼土坑

表3 08-2調査区 第2-2面土坑・ピット一覧(1)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|----------|-----|------|----------|-----|----|-------------------------------|---------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 126ピット | 9K-7e | 楕円 | 東西 | 67 | 64 | 18 | 10YR4/4褐色シルト 細砂・炭化粒を含む | |
| 127ピット | 9K-7e | 楕円 | 東西 | 48 | 34 | 27 | 10YR3/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 128ピット | 9K-6e | 円 | | 33 | 32 | 4 | 10YR3/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 129ピット | 9K-6e | 円 | | 23 | 22 | 18 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 130ピット | 9K-6e | 円 | | 19 | 18 | 4 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 131ピット | 9K-6e | 円 | | 18 | 18 | 12 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 134土坑 | 9K-8b | 楕円 | 北東 | 140 | 59 | 12 | 図73参照 | 土師器 須恵器 |
| 135焼土坑 | 9K-8d | 隅丸方 | 西北西 | 134 | 60 | 18 | 図73参照 | 須恵器 土師器 |
| 136土坑 | 9K-10c | 楕円 | 北東 | 179 | 107 | 16 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂・木の根を含む | 土師器 須恵器 |
| 137ピット | 9K-9c | 円 | | 30 | 29 | 5 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 138ピット | 9K-9c | 楕円 | 北東 | 68 | 28 | 7 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 139ピット | 9K-9c | 円 | | 69 | 66 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂・木の根を含む | 土師器 |
| 140ピット | 9K-8b | 円 | | 26 | 23 | 7 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 141ピット | 9K-8b | 円 | | 20 | 18 | 13 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 142ピット | 9K-8b | 円 | | 21 | 19 | 12 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 143ピット | 9K-8b | 円 | | 20 | 17 | 9 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 144ピット | 9K-8b | 楕円 | 北西 | 75 | 56 | 14 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 145ピット | 9K-8b | 円 | | 27 | 23 | 11 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 146ピット | 9K-8b | 楕円 | 北西 | 41 | 27 | 10 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 147ピット | 9K-8b | 円 | | 28 | 26 | 6 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 148ピット | 9K-8b | 円 | | 30 | 27 | 15 | 10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 149ピット | 9K-8b | 円 | | 24 | 21 | 13 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 150ピット | 9K-8c | 円 | | 59 | 49 | 14 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 151ピット | 9K-8c | 円 | | 34 | 30 | 38 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 152ピット | 9K-9c | 円 | | 33 | 32 | 31 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 153ピット | 9K-8c | 円 | | 43 | 39 | 9 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 154ピット | 9K-8c | 円 | | 56 | ? | 12 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 155ピット | 9K-8c | 円 | | 30 | 26 | 7 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 157ピット | 9K-9c | 楕円 | 北西 | 50+ | 45 | 13 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂・木の根を含む | |
| 158ピット | 9K-9c | 円 | | 36 | 32 | 31 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 159土坑 | 9K-8d・9d | 楕円 | 北 | 94 | 79 | 11 | 10YR褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 160ピット | 9K-8d | 楕円 | 東西 | 52 | 35 | 21 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 161ピット | 9K-8d | 円 | | 23 | 21 | 6 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 162ピット | 9K-8d | 円 | | 22 | 19 | 6 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 163ピット | 9K-8d | 円 | | 24 | 23 | 4 | 10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |

表3 08-2調査区 第2-2面土坑・ピット一覧(2)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-------|-----|------|----------|----|----|---------------------------|------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 164ピット | 9K-8c | 円 | | 20 | 19 | 15 | 10YR5/6黄褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 165ピット | 9K-8c | 楕円 | 東北東 | 52+ | 42 | 11 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 166ピット | 9K-8d | 円 | | 36 | 31 | 7 | 10YR4/6褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 167ピット | 9K-7d | 楕円 | 北西 | 64 | 40 | 3 | 10YR4/6褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 168ピット | 9K-7d | 楕円 | 北 | 32 | 23 | 11 | 10YR4/6褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 169ピット | 9K-7d | 円 | | 22 | 20 | 3 | 10YR5/6黄褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 170ピット | 9K-7d | 円 | | 56 | 46 | 5 | 10YR4/6褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 171ピット | 9K-8d | 円 | | 16 | 15 | 11 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 172ピット | 9K-8d | 不整円 | 東西 | 26 | 22 | 3 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 173ピット | 9K-8d | 円 | | 20 | 19 | 3 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 174ピット | 9K-8d | 円 | | 23 | 20 | 3 | 10YR4/6褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 175ピット | 9K-8d | 円 | | 34 | 31 | 8 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 176ピット | 9K-8d | 円 | | 34 | 30 | 6 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | 須恵器 |
| 177ピット | 9K-7d | 円 | | 30 | 27 | 10 | 10YR4/3にぶい褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 178ピット | 9K-7d | 円 | | 53 | 48 | 9 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 179ピット | 9K-7d | 楕円 | 北北東 | 58 | 26 | 8 | 10YR4/6褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 180ピット | 9K-7d | 円 | | 27 | 25 | 6 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 181ピット | 9K-7d | 円 | | 25 | 24 | 9 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 182ピット | 9K-7d | 円 | | 18 | 18 | 4 | 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 183土坑 | 9K-9d | 円? | | 120 | | 21 | 10YR3/4暗褐色 シルト 粗砂～細砂を含む | |

156落ち込み

調査区北西部、第2面43落ち込みのやや南側に位置する。平面は楕円形で、北東-南西に長く、長径約2.4m、短径1.3m、深さは33cmであるが斜面に位置するため、底と南西側のレベルはほぼ同じである。埋土はこの周辺に分布する第2層(上層)の10YR4/1褐灰色粗砂で礫を含む。

出土遺物は、古代と思しき土師器甕片と第Ⅱ様式の弥生土器の底部のみである。両者とも著しく磨耗しており二次堆積物と考えられる。

第6節 第3面の遺構と遺物

第3面(図74 写真図版20)は、花崗岩が風化したいわゆる地山の上面である。

第1面や第2面では、南西の谷側にある程度の平坦部分が確保されていたが、この第3面では旧地形のままに北東から南西に傾斜している。面の高さは山側の北東部でT.P. +91.6mと高く、谷側の南西部ではT.P. +86.0mまで下がる。遺構として、石群、土坑・ピット、落ち込み、計51か所[番号184～234]を調査した。

中央谷から北西側ではピット3個の検出に止まった。これに対し南東側では多くの土坑、ピット、落ち込みを調査した。

以下、第3面の231石群、土坑・ピット、落ち込みの順に報告する。

231石群(図75)

調査区南東部、南西に傾斜する斜面で検出した。長径20～30cm程度の石7個と拳大の石1個が南北56cm、東西44cmの範囲に平面卵形に並んでいた。一見すると炉のようにみえるが、石で囲まれた範囲内の土も周辺の土と同じであり、火を使った形跡はない。石材は花崗岩が6個、玢岩が2個用いられている。出土遺物はない。

土坑やピットについては、出土遺物を掲載した191ピットと埋土が複数の層に分かれる227ピットを以下に記述し、その他は表4にまとめた。

191ピット

調査区南東部、196落ち込みの北西約3mに位置する。平面円形で、直径20～22cm、深さ9cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

図76-289の土師器皿のみ出土した。

227ピット(図75)

調査区南東部、225落ち込みの底に位置する。平面楕円形で、東西40cm、南北30cm、深さ27cm。埋土は、図75のように2層に分かれる。

出土遺物は、古代と考えられる土師器甕の口縁部1片のみ。

195落ち込み

以下の4か所の落ち込みは、いずれも調査区南東部に位置する。平面は不整形で、北北西-南南東に長く、長径2.3m、短径1.3m、深さ51cmを測る。埋土は、10YR5/8黄褐色シルトに細砂を含む。出土遺物はない。

196落ち込み

195落ち込みの西約1mに位置する。平面は東西にやや長い楕円形で、東西6.0m、南北5.1m、深さ約80cm。埋土は、この周辺の第2層と同じく7.5YR5/6明褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

出土遺物は、中世の瓦器や瓦質土器片と土師器皿片、古代の平瓦であった。

197落ち込み

196落ち込みの南西約3mに位置する。平面は不整形で、北西-南東の長径が2.5m、短径約1.5m、深さ約70cm。埋土は、10YR5/8黄褐色シルトに細砂や木の根を含む。出土遺物はない。

225落ち込み

調査区南部、崖際に位置する。平面は基本的に円形だが、東側で内側にくびれる。東西4.8m、南北

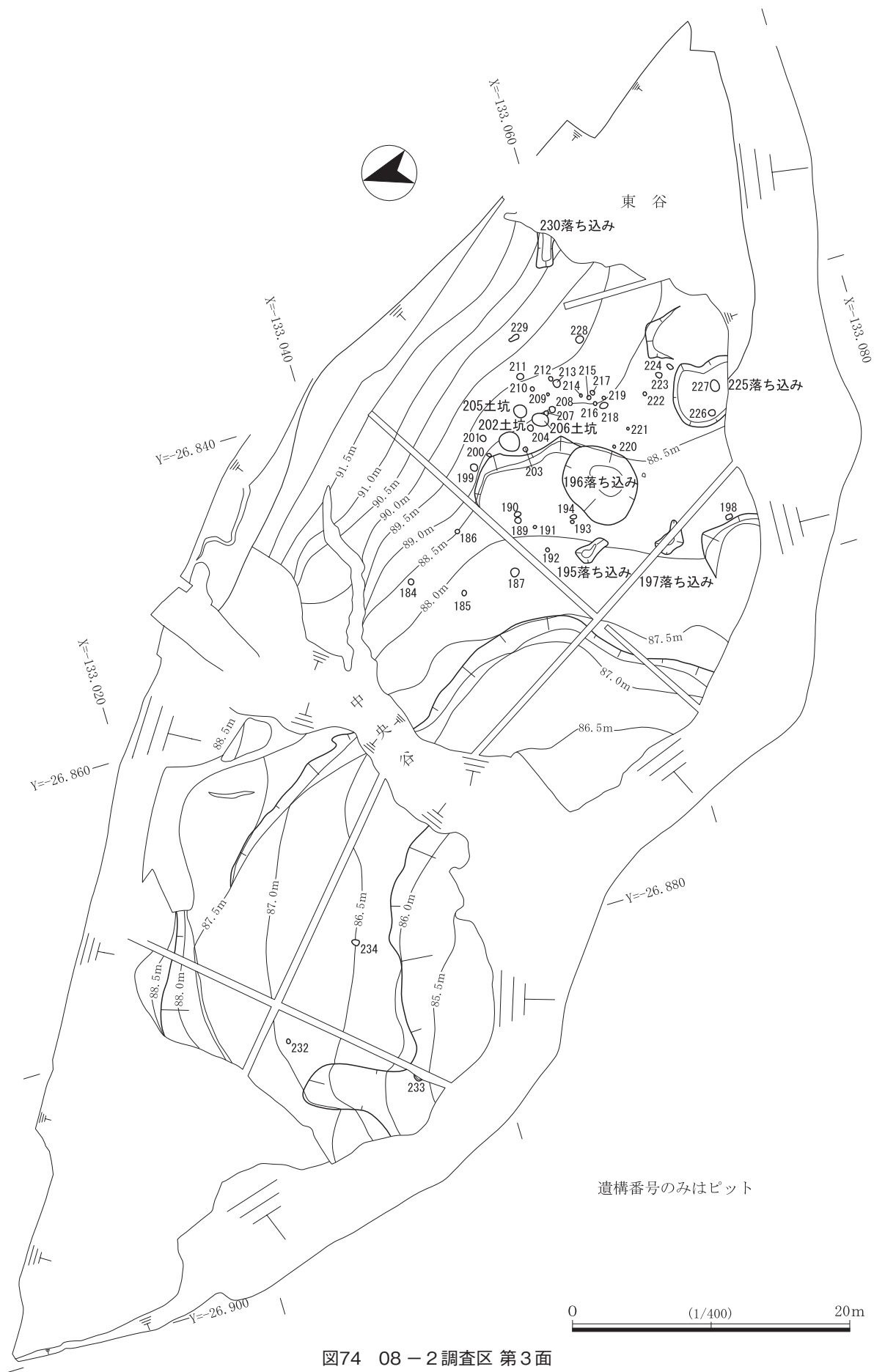


図74 08-2調査区 第3面

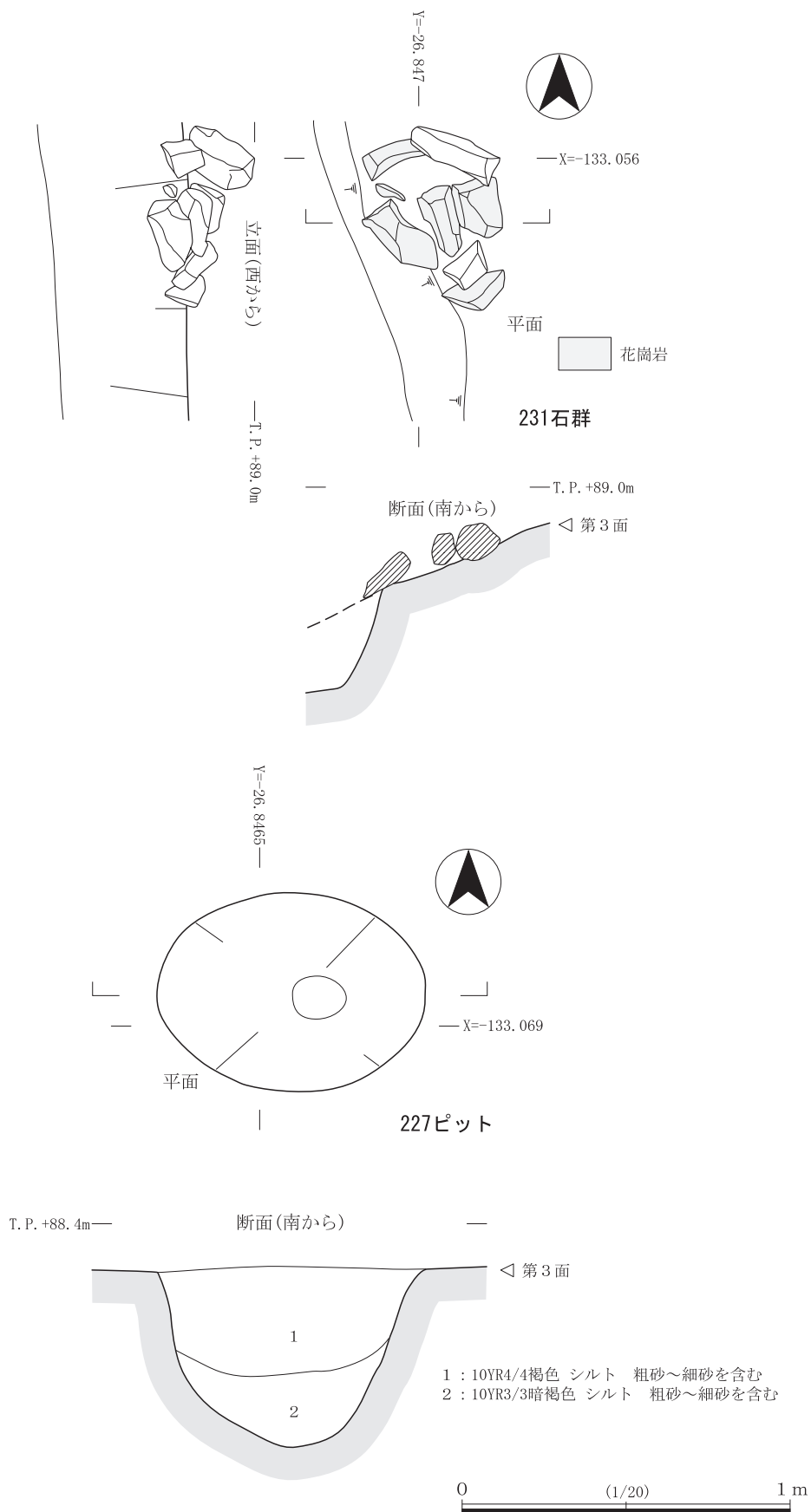


図75 08-2調査区 第3面231石群、227ピット

表4 08-2調査区 第3面土坑・ピット一覧(1)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-------|-----|------|----------|-----|----|---------------------------|----------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 184ピット | 9K-6e | 楕円 | 北西 | 43 | 34 | 11 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 185ピット | 9K-6e | 円 | | 39 | 35 | 16 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 186ピット | 9K-6e | 円 | | 36 | 36 | 10 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 187ピット | 9K-6f | 不整円 | | 61 | 54 | 12 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 188ピット | 9K-6f | 円 | | 18 | 17 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 細砂を含む | |
| 189ピット | 9K-6f | 円 | | 52 | 47 | 19 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 190ピット | 9K-6f | 楕円 | 北西 | 51 | 35 | 8 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 191ピット | 9K-6f | 円 | | 22 | 20 | 9 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 192ピット | 9K-6f | 円 | | 30 | 25 | 3 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 193ピット | 9K-6f | 円 | | 25 | 24 | 14 | 10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 194ピット | 9K-6f | 楕円 | 北 | 53 | 38 | 17 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 198ピット | 9K-6g | 楕円 | 北 | 47 | 35 | 16 | 10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 199ピット | 9K-5f | 円 | | 50 | 49 | 18 | 10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 200ピット | 9K-5f | 不整円 | | 27 | 17 | 7 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 201ピット | 9K-5f | 円 | | 47 | 42 | 31 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 202土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北東 | 159 | 120 | 37 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 瓦質土器 |
| 203ピット | 9K-5f | 円 | | 35 | 31 | 10 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 204ピット | 9K-5f | 円 | | 49 | 43 | 7 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 205土坑 | 9K-5f | 円 | | 91 | 90 | 15 | 10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 206土坑 | 9K-5f | 楕円 | 北東 | 125 | 89 | 13 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 須恵器 |
| 207ピット | 9K-5f | 円 | | 42 | 35 | 7 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 208ピット | 9K-5f | 楕円 | 北北西 | 62 | 52 | 40 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 209ピット | 9K-5f | 円 | | 26 | 21 | 10 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 210ピット | 9K-5f | 楕円 | 東西 | 34 | 27 | 11 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 211ピット | 9K-5f | 楕円 | 北西 | 62 | 45 | 16 | 10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 212ピット | 9K-5f | 楕円 | 北東 | 39 | 29 | 9 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 213ピット | 9K-5f | 円 | | 66 | 60 | 8 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 瓦器 土師器 |
| 214ピット | 9K-5f | 円 | | 20 | 18 | 11 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 215ピット | 9K-5f | 円 | | 35 | 35 | 13 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 216ピット | 9K-5g | 円 | | 29 | 27 | 14 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 221ピット | 9K-5g | 円 | | 22 | 19 | 9 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 222ピット | 9K-5g | 円 | | 26 | 25 | 8 | 10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |
| 223ピット | 9K-5g | 楕円 | 北東 | 45 | 32 | 10 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 224ピット | 9K-5g | 楕円 | 北東 | 44 | 28 | 19 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 226ピット | 9K-5g | 円 | | 54 | 51 | 16 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 227ピット | 9K-5g | 円 | | 80 | 71 | 54 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 |

表4 08-2調査区 第3面土坑・ピット一覧(2)

| 遺構番号 | グリッド | 平面形 | 主軸方向 | 寸法 cm | | | 埋土 | 出土遺物 |
|--------|-------|-----|------|----------|----|----|---------------------------|---------|
| | | | | 長径 | 短径 | 深さ | | |
| 228ピット | 9K-5g | 円 | | 66 | 50 | 28 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む | 土師器 炭小塊 |
| 229ピット | 9K-4f | 瓢箪 | 北北西 | 75 | 31 | 8 | 10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む | |
| 232ピット | 9K-9c | 円 | | 35 | 31 | 3 | 10YR5/6黄褐色 細砂～シルト 礫を含む | |
| 233ピット | 9K-9d | ? | | 62 | 7 | | 10YR6/8明黄褐色 細砂～シルト 木の根跡 | |
| 234ピット | 9K-8d | 楕円 | 北東 | 63 | 53 | 19 | 10YR6/8明黄褐色 細砂～シルト 木の根跡 | |

4.6m以上。底面がほぼ平らで、そこにピットも2個存在したことから、堅穴の可能性も考えて調査したが、人為的な加工痕は認められなかった。埋土は、196落ち込みと同様に周辺の第2層と同じく7.5YR5/6明褐色シルトに粗砂～細砂を含むであった。

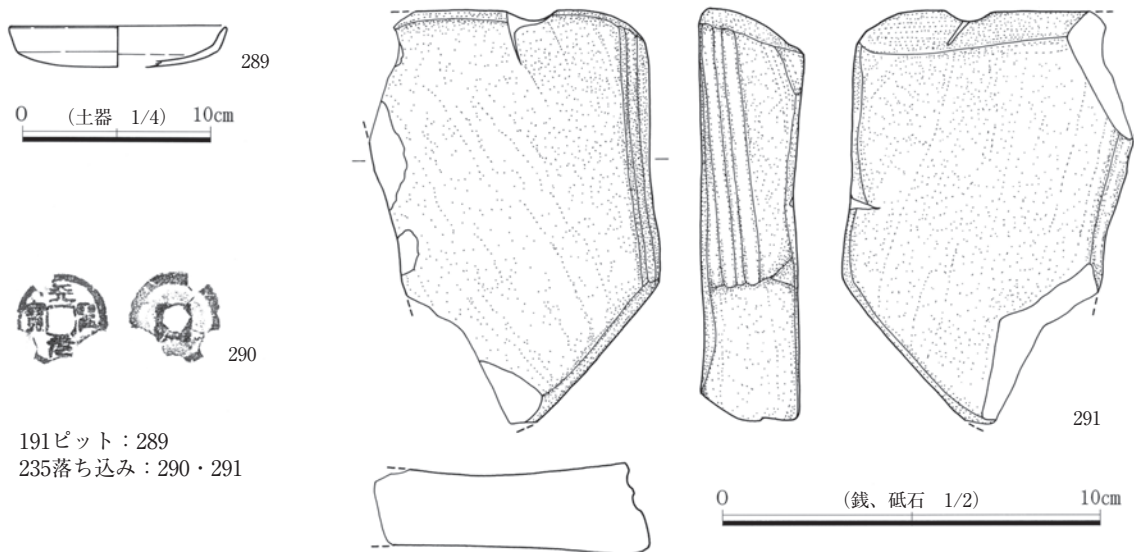
出土遺物は、瓦質土器片、須恵器片、天聖元寶、砂岩製砥石で、一括性はない。

図76-290(写真図版46)は天聖元寶。遺存状態は悪い。現状で2.0g。北宋1023年初鑄。

291は砂岩製砥石。表裏両面とも研磨によりくぼんでいる。さらに側面に断面U字形の溝が2条みられる。現状で278.9g。

230落ち込み

調査区東端、北東から南西に傾斜する斜面に位置する。時期不詳の東谷に切られている。主軸方位は西北西-東南東で、長径は2.5m以上、短径は1.2m、深さ68cm。この周辺の第2層である10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む層で埋まっている。出土遺物はない。



191ピット：289
235落ち込み：290・291

図76 08-2調査区 第3面191ピット、225落ち込み出土遺物

第7節 包含層出土遺物

08-2調査区の調査では、これまでに報告してきた各面の遺構のみならず、機械掘削の対象である旧表土上の盛土、整地層や多量の土砂層をはじめとする包含層からも多くの遺物が出土した。

機械掘削層・第0層からは中世あるいはそれ以降、第1層からは中世を主体に古代の遺物も、第2層の北西部では古代が、南東部では中世がそれぞれ主体となる傾向にはある。

しかし、調査区が斜面に立地するために上方からの流下や下方への転落などのため、出土遺物は必ずしも上層の新しいものから下層の古いものへと整然と変遷するのではなかった。そこで、包含層出土遺物については、種類ごとに報告する。

石器

図77-292(写真図版33)はナイフ形石器。サヌカイトの縦長剥片を素材とする。背部は丁寧に調整されている。新欠部分を除き、全体に風化している。19.3gを量る。第2層出土。

293・294(写真図版33)は打製石鏃。293は凹基式で、両面とも丁寧に調整されている。先端部分を欠損する。1.2g。294は平基式で、全体に丁寧な押圧剥離が施されているが、裏面側に素材面を残す。やはり先端部分を欠損する。現状で3.4g。2点とも第1層出土。

295(写真図版33)は尖頭器の未成品。山形の自然面の頂点を打面として剥離した剥片を素材としている。先端部の自然面と折損面を除去できなかったため、尖頭器としての製作を途中で廃棄したものか。サヌカイト製。74.2g。第2面82土坑からの出土遺物として取り上げたが、明らかに下層からの混入品である。

296(写真図版33)は石包丁。直線刃の明瞭な片刃で、刃部には斜め方向の研磨痕が残る。刃部・背部ともに潰れはない。紐穴は少なくとも4個あり、折損部の2個は縦に近接しており1個は背部に非常に近い。粘板岩製で、出土時には石の目に沿って数枚の薄片状に分離していた。現状で38.5g。

297(写真図版33)は大形石包丁と推定される。残存部に紐穴はみられない。大きさの割に厚さは7mmと薄く、刃先は鋭い。緑泥片岩製。現状で54.7g。両者とも第2層出土。

縄文土器

図78-298～300は突帯文土器。磨耗が著しく直接接合もしないが、まとまって出土しており、胎土や色調が似ていることから同一個体の可能性が高い。298(写真図版34)は口縁部ではなく体部であり、2条突帯の長原式土器であろう。第2層出土。

301と302(写真図版34)は胎土や色調から同一個体と推定される。磨耗のため明瞭ではないが、301の内面の口縁部直下とくびれ部には凹線状のくぼみがある。鉢の口縁部とも推定されるが、時期や器形は不詳である。両者とも第2層出土。

弥生土器

303・304は弥生土器の底部。

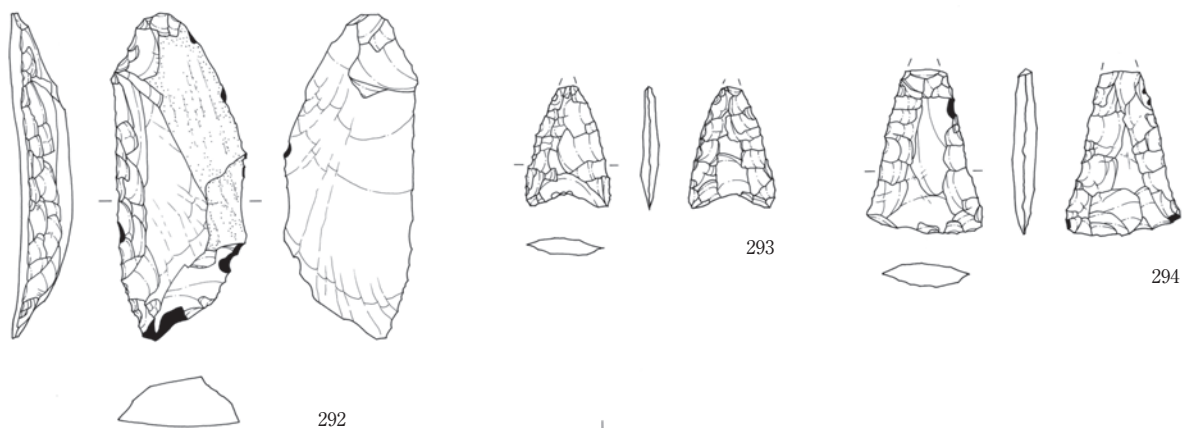
303(写真図版34)の外面には縦方向のハケメがみられ、底には木葉痕がある。Ⅱ様式に属する。

304は磨耗が著しく調整など不詳だが、形状から中期と考えられる。

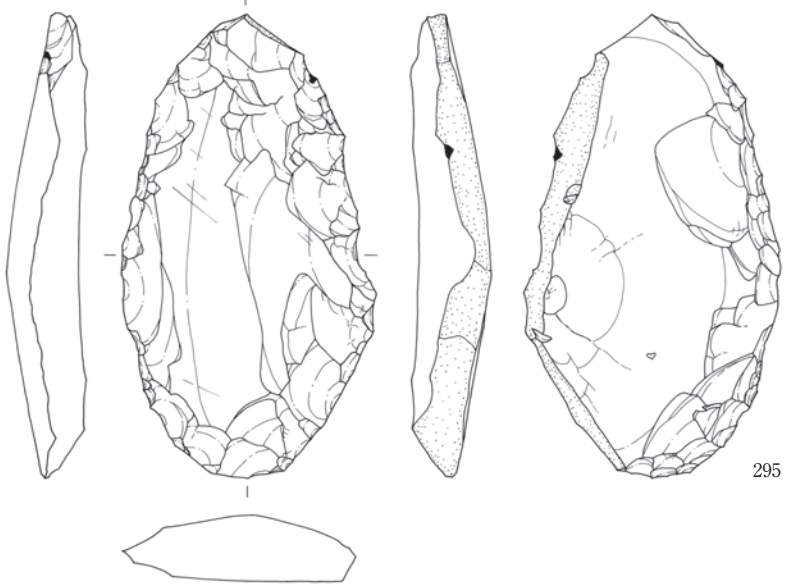
いずれも第2層出土。

鋳型

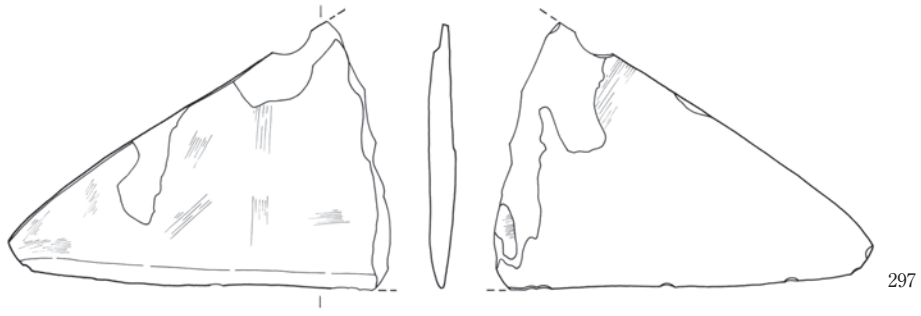
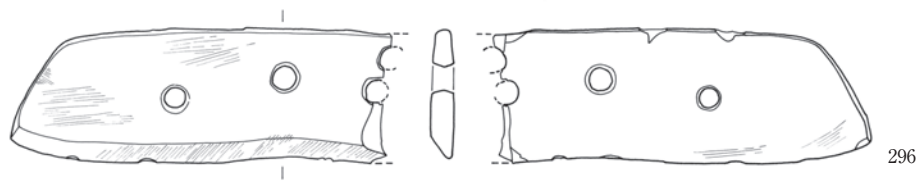
図79-305(カラー写真図版5)は土製鋳型。図示した上部が湯口で、鋳込まれた面は被熱により一



第1層：293・294
 第2層：292・296・297
 82土坑：295



0 (打製石器 2/3) 5 cm



0 (石包丁 1/2) 10cm

图77 08-2 调查区 包含层出土石器

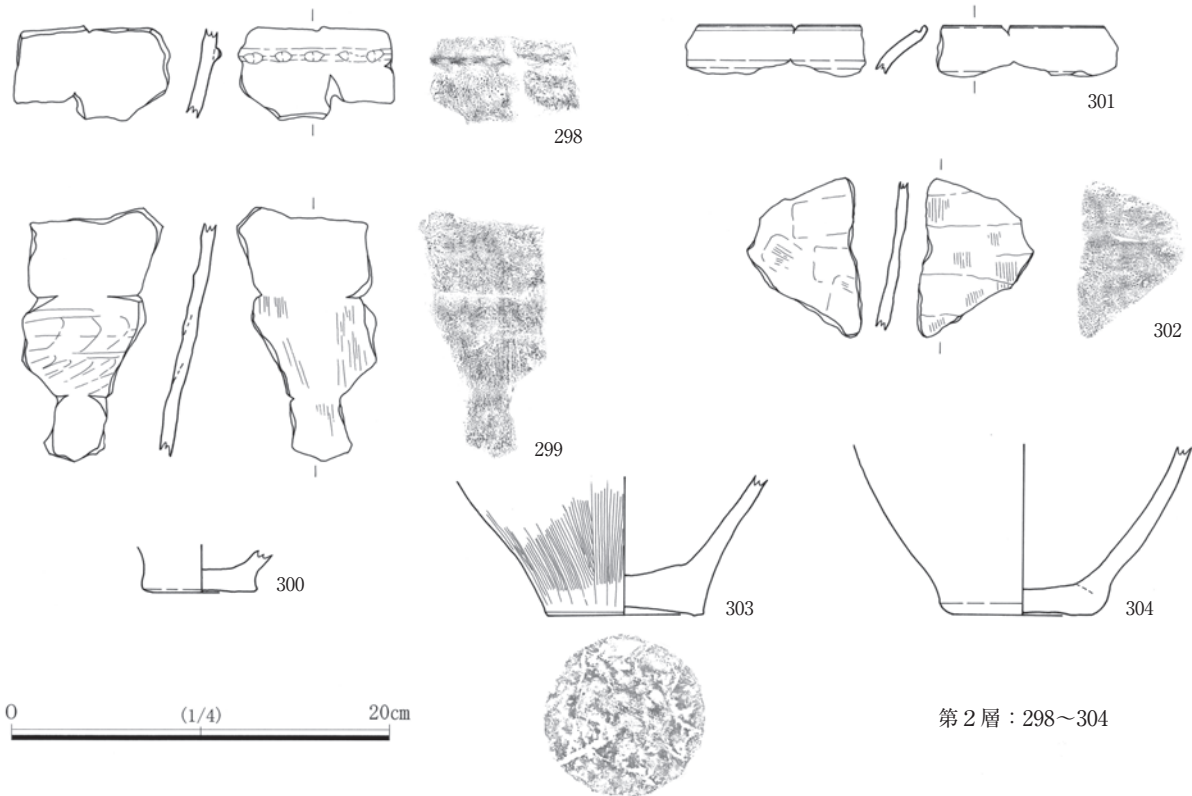


図78 08-2調査区 包含層出土縄文土器、弥生土器

皮剥けたようになっている。火頭形埴仏の鋳型であろう。第2面83落ち込みから出土した鋳型(図71-283)よりも細砂が多く混じりザラザラ感がある。第0層出土。

埴仏

306(カラー写真図版5)は縦4.0cmの小形独尊埴仏。左右を欠くことから連座の可能性も検討したが、類例から独尊と推定する。頭部は大きめで、蓮台に結跏趺坐している。あまり明瞭ではないが、膝の上に組んだ両手に布をかけているように見える。胎土は粗い。奈良時代の所産であろうか。第2層出土。

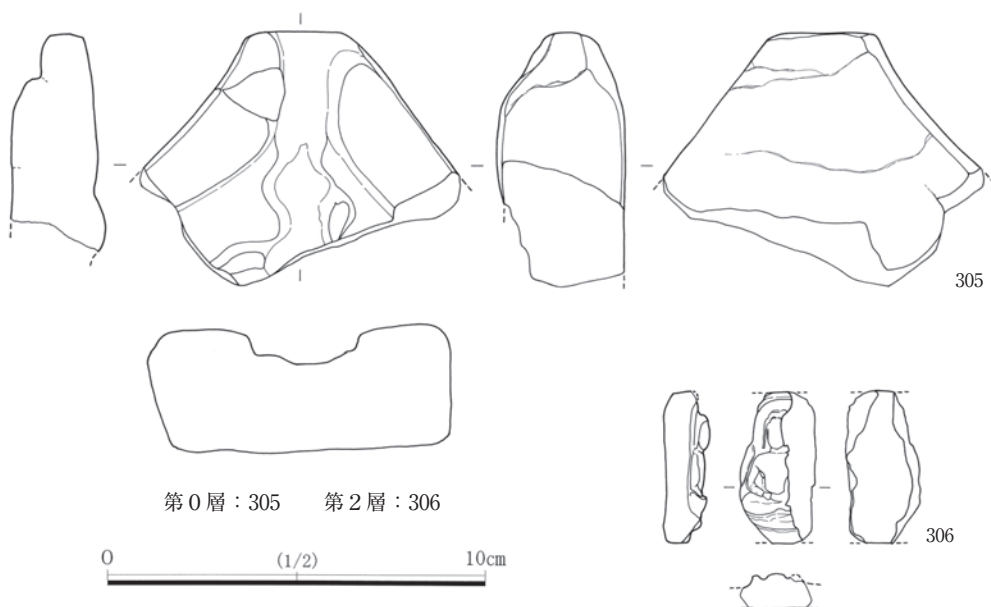


図79 08-2調査区 包含層出土鋳型、埴仏

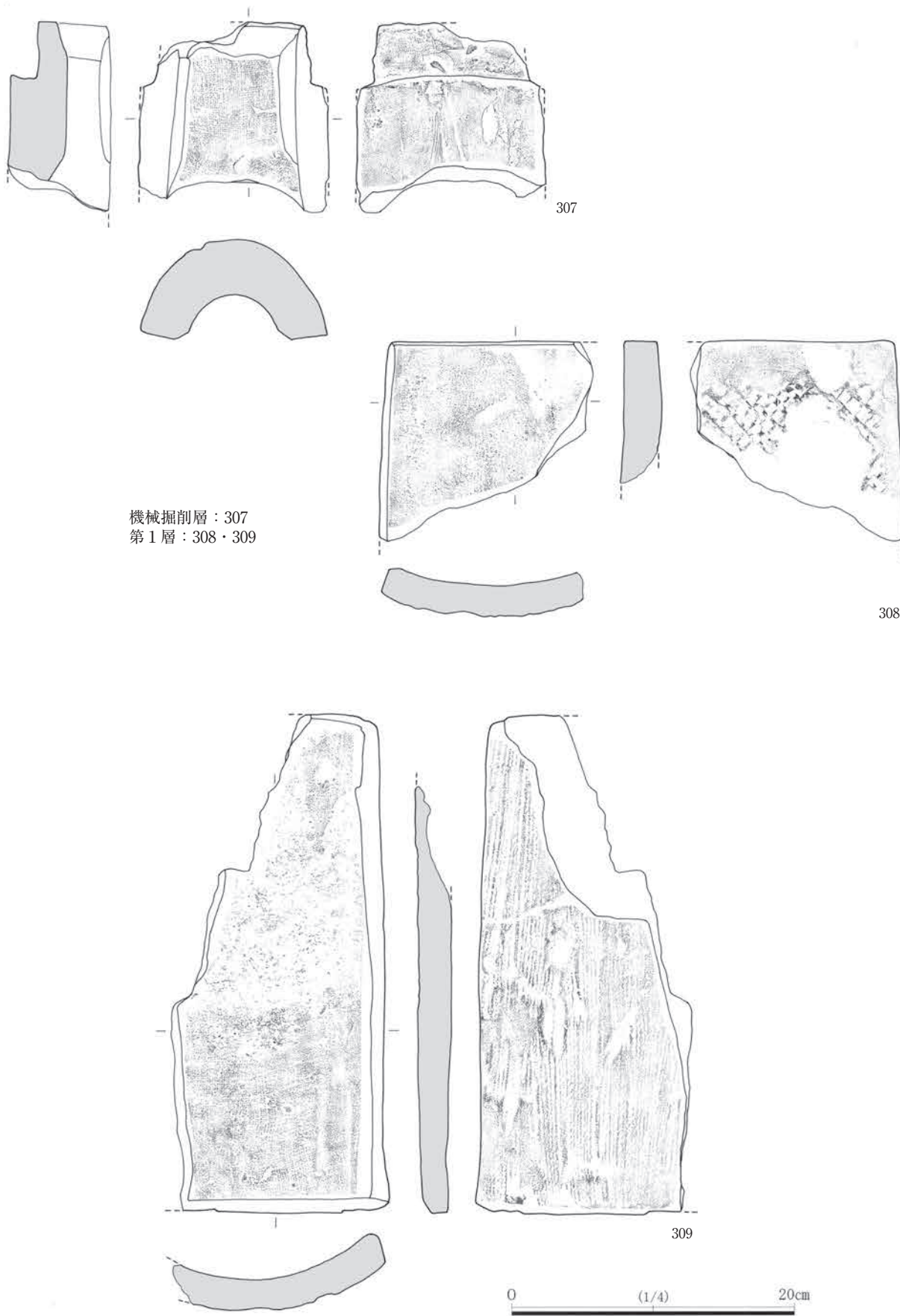


図80 08-2調査区 包含層出土古代の丸瓦、平瓦（1）

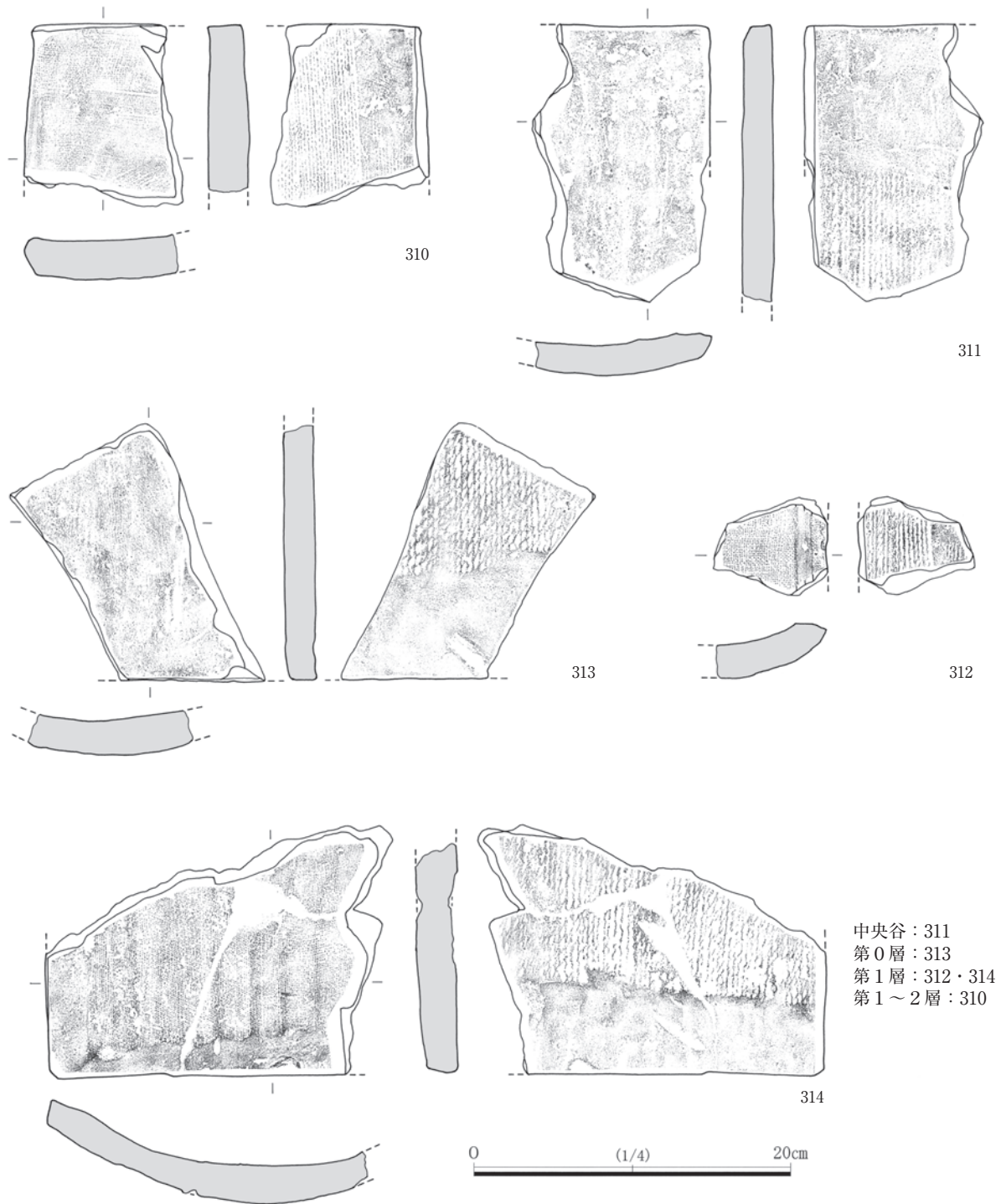


図80 08 - 2 調査区 包含層出土古代の平瓦 (2)

古代の瓦

図80-307 (写真図版34) は丸瓦。厚みがあり、内面と玉縁の外面に布目圧痕跡が残る。機械掘削層出土。

308 (写真図版34) ~ 図81-314 (写真図版35) は平瓦。

308 (写真図版34) の凹面には布目痕跡は確認できるが模骨痕は確認できない。凸面には斜格子タタキが施される。第1層出土。

309は凹面に布目圧痕が残るが、狭端側約半分は摩滅している。この部分は葺き足(平瓦の重なり部分)

にあたるため、磨耗したと考えられる。凸面には縄タタキが施されているが、縦方向に数単位交錯している。また縄タタキ痕の上には、数単位の指頭圧痕が残る。乾燥前に持ち運ばれた際に付いたと考えられる。312には凹面だけでなく側面に布目痕がみられる。凸台上での成形時に凸面にまで布がかぶせられていた可能性があり、奈良時代後半から平安時代前半にみられる凸面布目圧痕技法により成形されたと考えられる。いずれも凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕が確認できる。313では凸面の広端から約6cmまでの範囲に横方向のナデ調整が施されている。308～313は一枚作りの可能性が高い。313は第0層、309・312・314は第1層、310は第1層～第2層、311は中央谷から出土した。

一方、314の凹面には明瞭な模骨痕がみられることから、桶巻き作りの可能性が考えられる。広端から約5cmまでの範囲に横方向のナデ調整が施されている。第1層出土。

古代の土師器

図82-315(写真図版35)は皿。底部外面はユビオサエ、他はナデ調整される。口径18.8cm、高さ2.5cmの大形品。9世紀後半頃に属するか。第2層(上層)出土。

316(写真図版35)は土師器甕。口縁端部はわずかにつまみ上げ。口縁部はナデ調整。体部外面は縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメがみられる。8世紀の所産。機械掘削層出土。

317(写真図版35)は土師質の移動式かまどの焚口部分であろう。外面にはハケメが顕著に残る。第2層出土。

古代の須恵器

図83-318～324は杯蓋。

318(写真図版36)は天井頂部にやや扁平な宝珠つまみが付く。口縁部内面のかえりは下方に伸びるが短く、口縁部以下には突出しない。7世紀後半に属する。第0層出土。319はつまみを欠くが、口縁部内面のかえりが痕跡的に残る。第2層出土。

320はほどよくふくらんだ優美な宝珠つまみ。第1層出土。

321の天井頂部には扁平なつまみが付く。口縁端部は下方に短く屈曲する。第1層出土。322・323のつまみは宝珠形のおもかげを残す。2点とも第2層出土。321～323は8世紀初頭の所産であろう。324は扁平なつまみと平らな天井部をもち、口縁端部は下方に短く屈曲する。8世紀後半に属する。第0層出土。

325は8分の1周程度の破片から図上復原したもので、天井頂部中心よりに回転ナデの存在によりつまみが付いていたと想定されることから壺など大振りの器の蓋と考えられる。第1層と第2層(上層)から出土した破片が接合した。

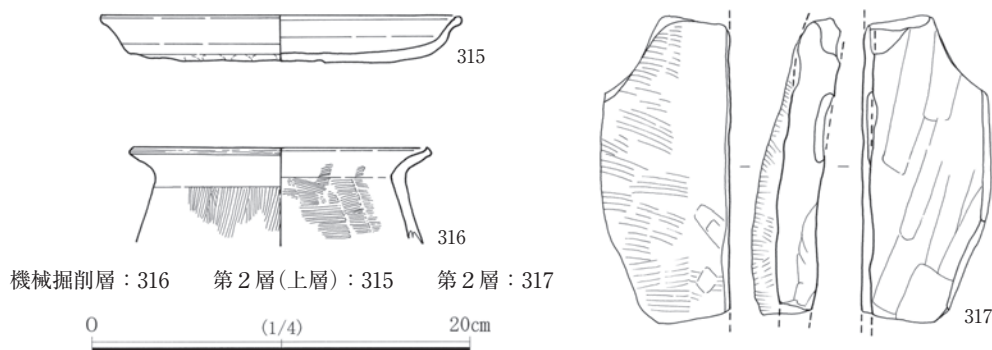


図82 08-2調査区 包含層出土古代の土師器

326(写真図版36)は蓋と考えられる。天井頂部はヘラ切り後ナデで整えられている。口縁部は著しくゆがむ。口縁部内面に点々と漆状の物質が付着している。第2層(上層)出土。

327～344は杯。

327(写真図版36)～329(写真図版36)は高台のない杯で、口縁部は外上方にわずかに外反しながら伸び、端部は丸くおさまられている。7世紀後半の所産。327・328は第2層、329は第2層(上層)の出土。

330の底部はやや突出し、その外面底部はヘラ切り後ナデられている。口縁部は外反する。7世紀末～8世紀初頭に属する。第2層出土。

331～338は高台のある杯。全て貼り付け高台である。

331(写真図版36)の貼り付け高台は太く、内端部で接地する。7世紀後半の所産か。第2層出土。

332～335は平らな底部から緩やかな曲線を描いて体部が立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。336・337(写真図版36)はわずかに外反しながら高く立ち上がる体部をもつ。高台は、内端部で接地する335・337・338、凹面をなす334、外端部で接地する333(写真図版36)・336といった違いはあるが、底部のやや内側に付きわずかに外方にふんばる形状の貼り付け高台である点で共通する。332～338の高台のある杯は、個々については新旧の要素もつが、器形や高台の付く位置からみておおむね8世紀後半前後の所産と考えられる。332・335は第0層、333・338は第1層、334・337は第2層、336は第2層(上層)から出土した。

339～341は小形の杯。

339は小振りですら平らな底部から大きく外反して口縁にいたる。第1層出土。340は丸味のある底部に外反する口縁が付く。第2層(上層)出土。341の口縁端部は外方に伸びる。第1層出土。

342は皿。底と体部の境は明瞭に屈曲する。表面全体が非常に丁寧に仕上げられている。第1層と第2層から出土した破片が接合した。

343(写真図版37)は杯。口縁部が外反する器形で、底部外面に「萬」字がヘラ書きされている。この土器は、第2層(上層)の遺物チェック中に「萬」字がヘラ書きされた部分を含め3片見出したもので、その周辺グリッドや上下層の遺物も合わせて探索したところ、東隣のグリッドの同一層から先の3片に囲まれる部位の1片が見つかった。内面には灯明皿として使われていた痕跡である油の炭化物が斑に付着している。

344(カラー写真図版6)は杯。平底から外上方に体部が伸びる。内面と断面の一部に赤色顔料が付着している。9世紀に属する。第2層出土。

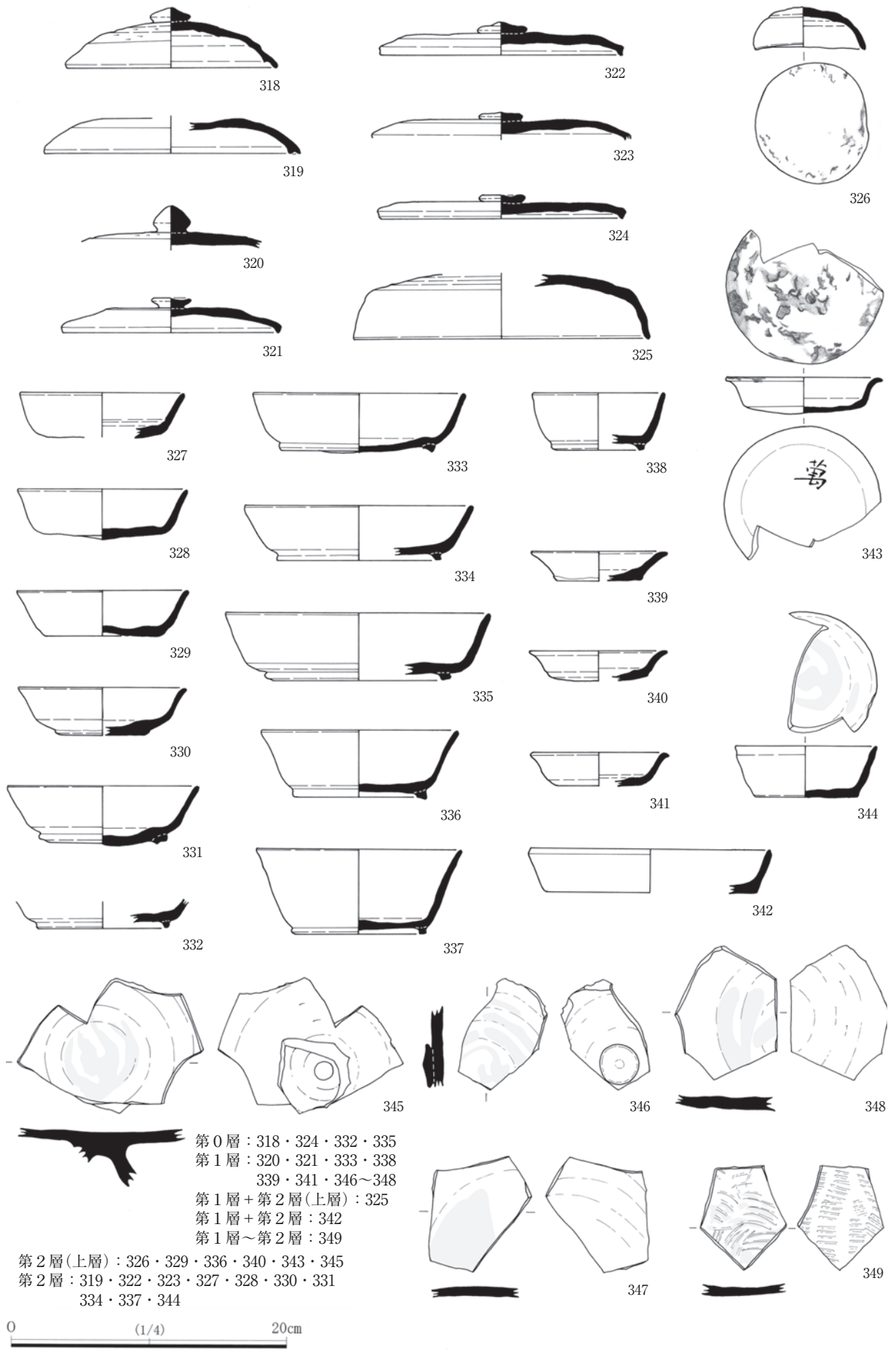
345～349は須恵器を転用した硯。

345(写真図版37)は高杯を転用した硯。杯の内面底部が磨られて平滑になっている。第2層(上層)出土。

346～348(写真図版37)は杯蓋を転用した硯。346は宝珠つまみの形状から8世紀に属すると考えられる。3点とも第1層出土。

349(写真図版37)は甕の体部を転用したいわゆる猿面硯。甕とした場合の内面が硯面とされ、磨られて青海波状の紋様が不明瞭になっている。周辺のグリッドや上下の層の遺物も探索したが接合するものはなく、全体の形状は明らかではない。第1層～第2層出土。

図84-350は短頸壺。球状の体部に短く直立する口縁部が付く。肩部と内面底部には自然釉が付着し



第0層：318・324・332・335
 第1層：320・321・333・338
 339・341・346～348
 第1層+第2層(上層)：325
 第1層+第2層：342
 第1層～第2層：349
 第2層(上層)：326・329・336・340・343・345
 第2層：319・322・323・327・328・330・331
 334・337・344

図83 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(1)、転用硯
 108

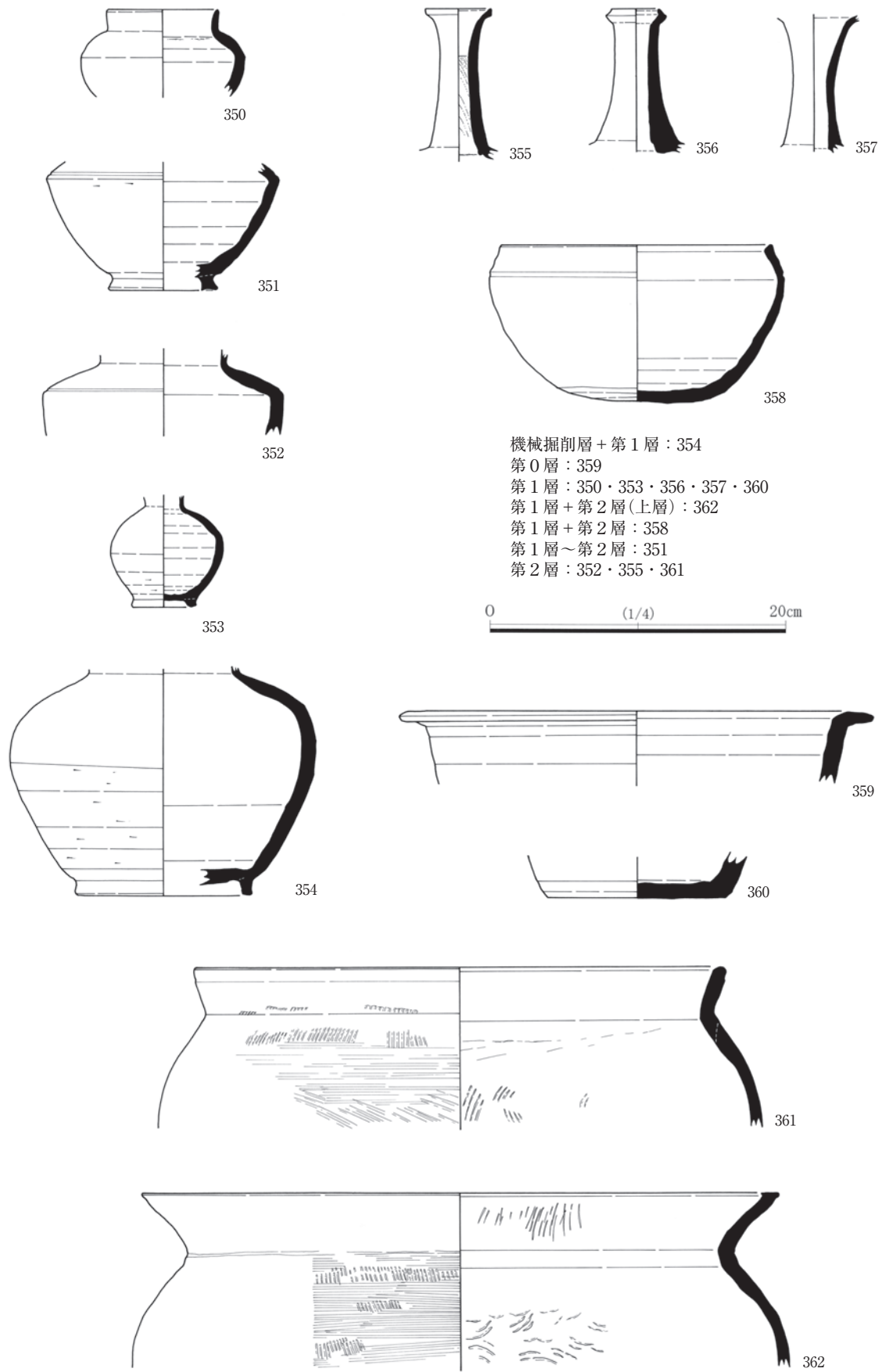


図84 08 - 2 調査区 包含層出土古代の須恵器 (2)

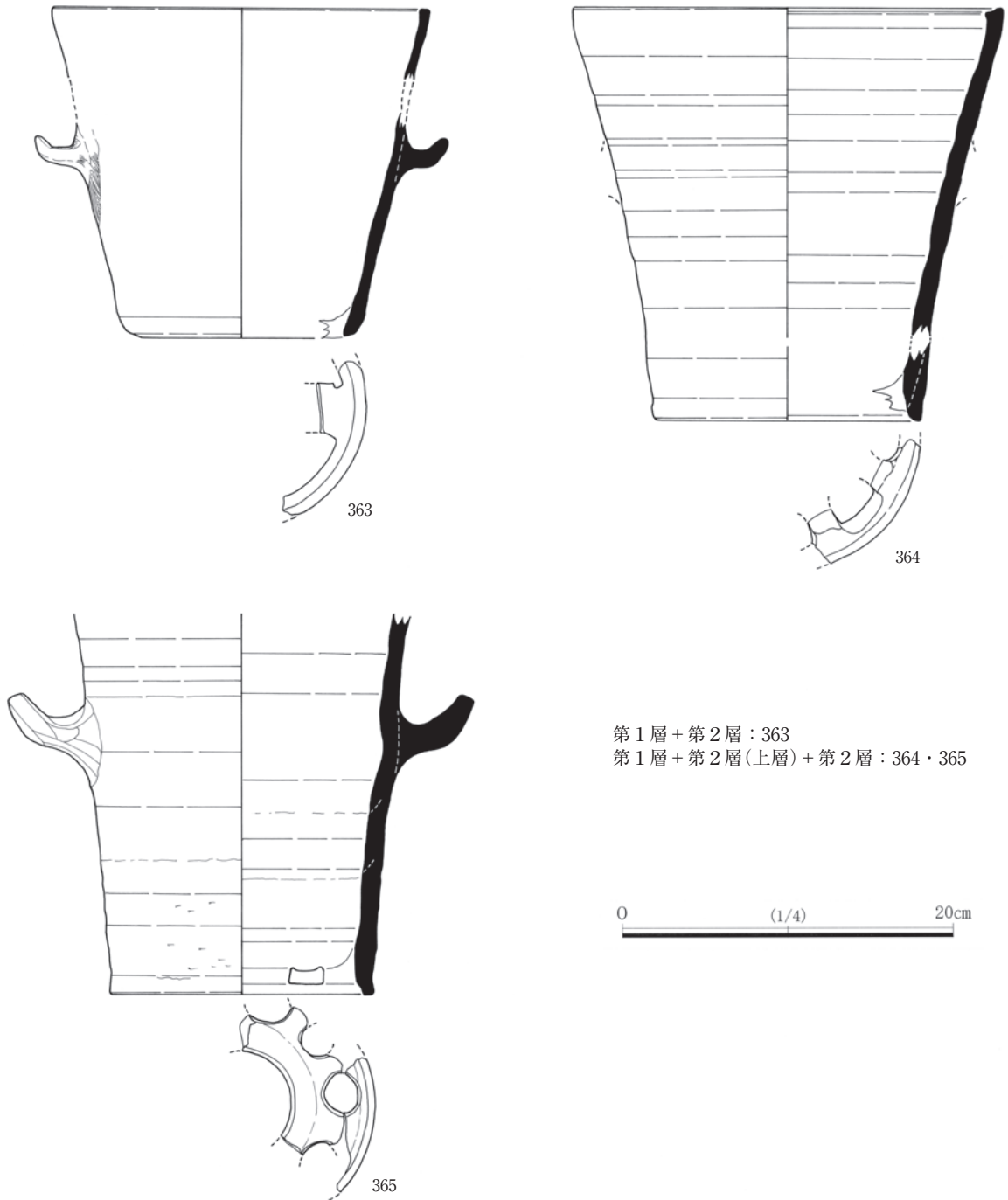


図85 08 - 2 調査区 包含層出土古代の須恵器 (3)

黄緑色に発色している。第1層出土。

351は長頸壺。肩が張った器形で、最大径の直上に凹線状のくぼみが巡る。肩部には自然釉が付着し黄緑色に発色している。7世紀の所産。第1層～第2層出土。

352も壺。頸部外面には自然釉が付着し黄緑色に発色している。肩部には沈線が1条巡る。7世紀末～8世紀初頭に属する。第2層出土。

353(写真図版37)は小形瓶。球状の体部にわずかに外に広がる高台が付く。底部外面はナデられている。8世紀末の所産。第1層出土。

354(写真図版38)はいわゆる葉壺形の壺。肩部に自然釉が付着している。機械掘削層と第1層の各

グリッドから出土した破片が接合した。

355～357は水瓶の口頸部。

355の外表面の一部に灰がかぶっている。内面には絞り目が顕著にみえる。第2層出土。356の口縁部は袋状になっている。外面に自然釉が付着し黄緑色に発色している。第1層出土。357は口縁端部を欠く。第1層出土。いずれも8世紀の所産であろう。

358(写真図版38)は鉄鉢形の鉢。口縁部は内彎し、体部最大径の部分に沈線が1条巡る。平底である。7世紀後半～8世紀初頭の所産。第1層と第2層の各グリッドから出土した10片が接合した。

359は甕の口縁部か。口縁端部は外側に伸び、その上下が水平な面をなす。第0層出土。

360は甕の底部と考えられる。器壁が厚く重量感がある。8～9世紀に属する。第1層出土。

361・362も甕。361(写真図版38)の口縁部と頸体境のくびれ部とは強くナデられ、口縁の外表面直下は沈線状にくぼむ。頸部にはタタキの原体が当たった跡が残る。復原口径は36cm弱。第2層出土。362(写真図版38)の体部外面にはタタキの後カキメがみられ、内面には同心円タタキの後ナデが施されている。第1層と第2層(上層)から出土した破片が接合した。

図85-363～365は甕。

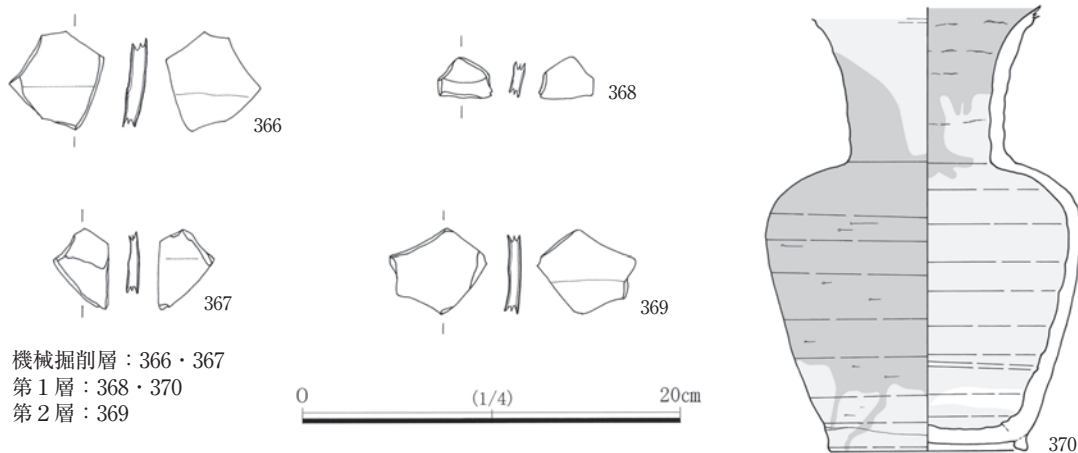
363の底部の穴はヘラを用いて鋭角に切り抜いている。第1層と第2層から出土した破片が接合した。364は把手の部位は4分の1周しか出土しておらず、その部分には把手は見当たらないが、類例からみて2か所に把手が付くと考えられる。365の底の穴は丸い。364・365とも第1層、第2層(上層)、第2層の各グリッドから出土した破片が接合した。363の孔の明け方に古い要素がみられるが、3点とも平安時代の所産であろうか。

緑釉陶器

図86-366～369(カラー写真図版6)は緑釉陶器片。4片出土した。いずれも壺あるいは水注の小片で、出土層位やグリッドは異なるが同一個体の可能性もある。これらの破片では産地や時期の特定は難しいが、強いていえば10世紀後半の近江ないし美濃産と推定される。366と367は機械掘削層、368は第1層、369は第2層から出土した。

灰釉陶器

370(カラー写真図版6)は灰釉陶器広口壺(瓶)。肩部は丸みを帯びる。高台は器の大きさの割には華奢な印象がある。図中のアミフセの薄い部分は1度、濃い部分は2度にわたって施釉されている。底



機械掘削層：366・367
第1層：368・370
第2層：369

図86 08-2調査区 包含層出土緑釉陶器、灰釉陶器

部外面は黒い。東濃(美濃東部)地域の10世紀後半の所産と考えられる。第1層の広範囲にわたる各グリッドから出土した破片を接合したが口縁部は見当たらなかったため、第2面62墓・114墓・119墓の灰釉陶器や須恵器と同様に口縁部を打ち欠いて蔵骨器として使われた可能性がある。

中世の土師器

図87-371～392(写真図版39・40)は土師器皿。

371～373は口径約7cm、374～388は約8cmの小形、389は9.5cmの中形、390～392は12.4～13.2cmの大形である。胎土は橙色系。13世紀前後の所産。371～373・389は機械掘削層、374～381・390～392は第1層、382～388は第2層から出土した。

393(写真図版40)は羽釜。口縁は内傾し、外面に比較的幅広の羽(鏝)が巡る。第0層出土。

瓦器・瓦質土器

図88-394～397は無高台の瓦器小椀。

394(写真図版41)の口縁端部は外上方に伸びて丸く収まる部分と、外側に屈曲する部分とがある。口径6.7cm。395・396の口縁部はわずかに厚みを帯び、外上方に直線的に伸びる。397の口縁端部は短く外に屈曲する。

398～405は高台のある瓦器小椀。

399(写真図版41)の口径6.8cm、高さ2.8cm。403・404(写真図版41)の器表面への炭素の吸着は弱いですが、口縁端部の一部には煤状の付着物がある。

以上394～405の小椀は全て第1層から出土した。高台の形状や暗文の状況からみて、次の瓦器椀と同時期の13世紀後半頃に属すると考えられる。

406～415は楠葉型瓦器椀。

いずれも口縁部は直立気味であるが、409の口縁部はわずかに外反し、412と414(写真図版42)の口

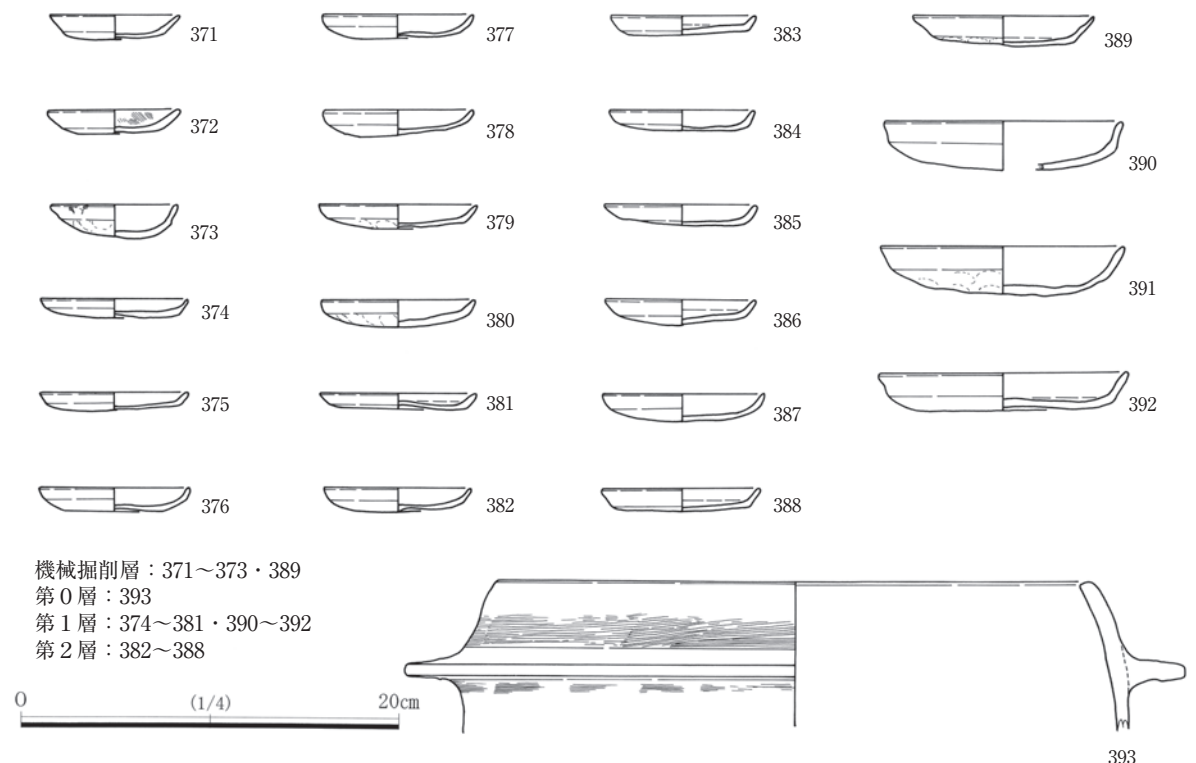


図87 08-2調査区 包含層出土中世の土師器

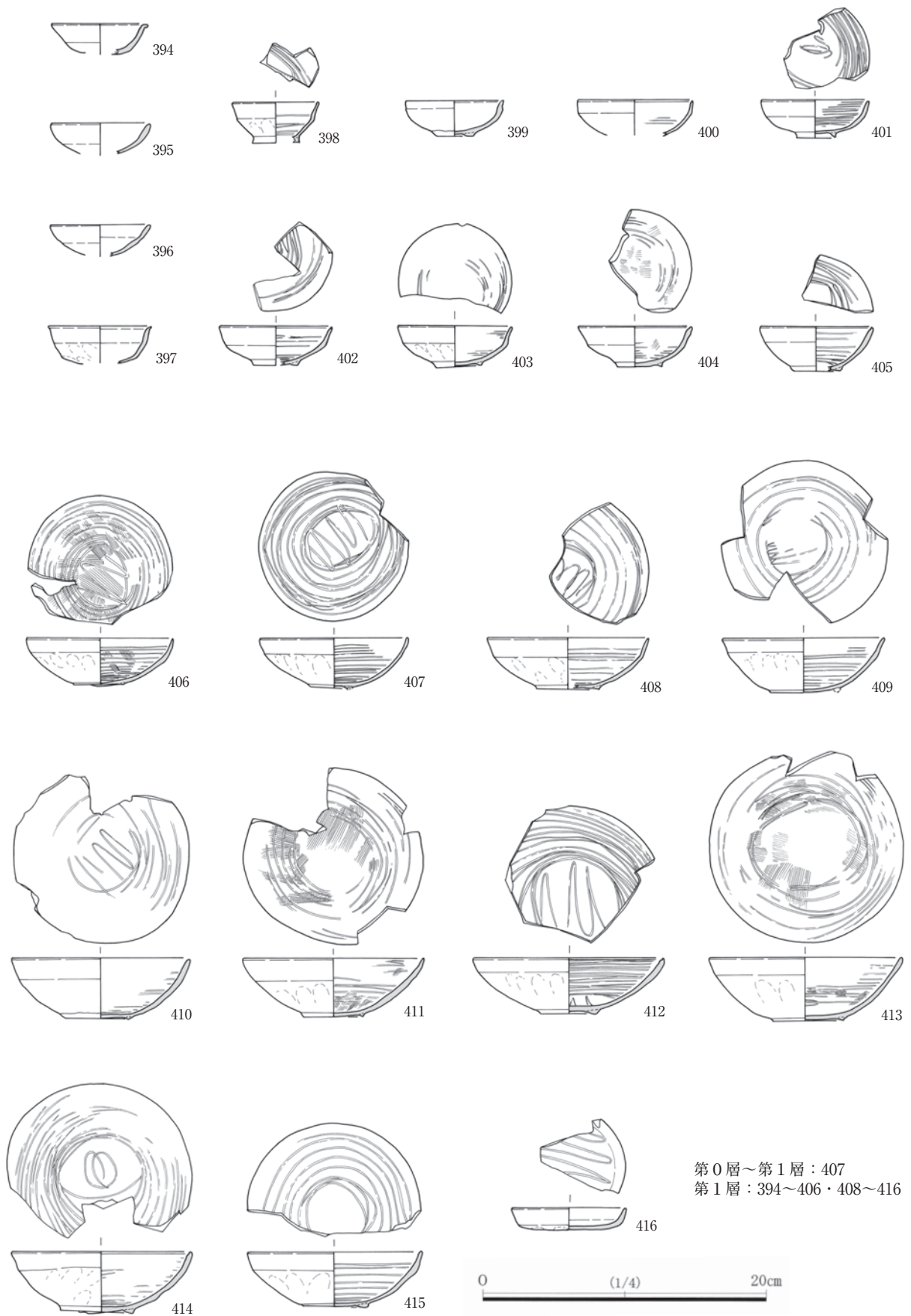


图88 08-2 調査区 包含層出土瓦器

縁端部内面には沈線がみられる。断面三角形の細い高台が付く。外面に暗文はない。体部内面の暗文は渦巻状で、見込み部の暗文は406・407(写真図版41)・410(写真図版41)・412では簡素な鋸歯状、408・414ではルーズならせん状である。最少の406で口径10.2cm、高さ3.4cm、器高指数33、最大の413で口径は13.3cm、高さ4.5cm、器高指数34である。大きく、ヘラミガキが緻密で、高台のしっかりした413や414が相対的に古い傾向にあるが、いずれも楠葉型Ⅲ-3期~Ⅳ-1期に属し、13世紀中頃~後半の所産といえる。以上の瓦器碗は407が第0~1層から出土した以外は、全て第1層からの出土。

416は瓦器皿。見込み部に鋸歯状の暗文がみられる。そのヘラミガキの幅は1mm程度と細い。口径8.0cm、高さ1.5cm。第1層出土。

図89-417(写真図版42)は瓦質の三足鉢。底部内面に細いヘラミガキが施される。灰白色を呈することと三足という器形から平安京で8世紀中頃から12世紀中頃までみられる白色土器とも考えたが、瓦質焼成の土器の炭素が飛んだものと判明した。ただし例の少ない器形なので、同時期の白色土器を模倣した可能性もある。11~12世紀以降の所産と考えられる。第0層出土。

418(写真図版42)は瓦質甕。外面にはタタキが顕著に残る。調査区南法面から出土した。

419(写真図版42)は瓦質鍋。口縁部は断面L字形で受け口状になっている。口縁上端面はわずかにくぼむ。外面の磨耗が著しいが、それでもユビオサエの痕跡が残る。一部に煤が付着している。内面には横方向に細かなハケメがみられる。第0層出土。

420(写真図版42)は瓦質釜。口縁部に外上方から直径5.5mmの孔が開いている。体部外面には炭化物が厚く付着している。機械掘削層出土。

421は瓦質の三足釜。第1層出土。422は同一個体ではないが三足釜の脚部。第0層出土。

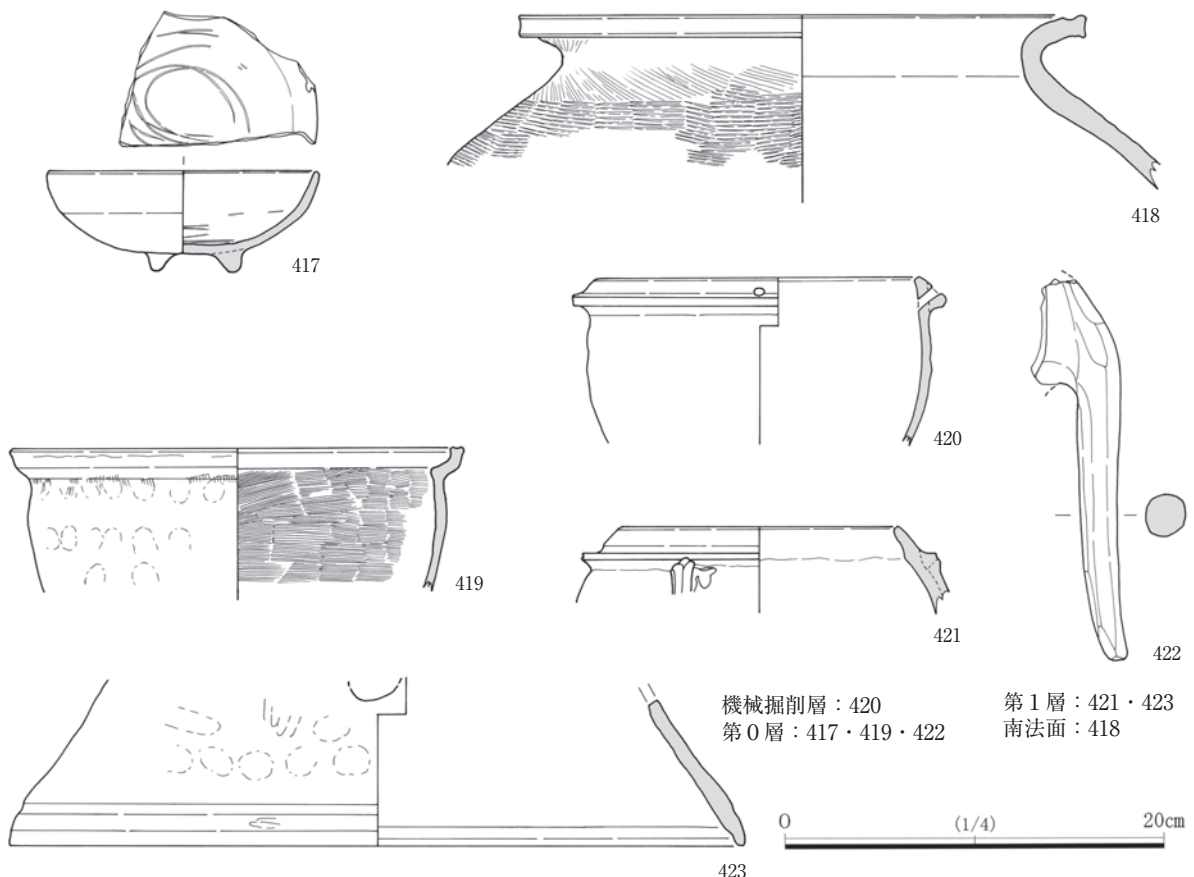


図89 08-2調査区 包含層出土瓦質土器

423は炉の台であろうか。円形の窓が開いている。外面にはミガキが施される。使用によるものか内面の磨耗が著しい。第1層出土。

東播系須恵器

図90-424～426は東播系須恵器の片口鉢。3点とも、底部と体部の境は丸みを帯び、体部は直線的に外上方に伸びて口縁に至る。外面には成形時のナデの痕が明瞭に残る。一方、内面下半は使用による摩滅が著しい。

しかし、口縁端部の形状に違いがある。424の口縁端部は細く上方に伸びる。底部はヘラ切り未調整。4分の1周しか残っていないため片口部はみられないが、類例から片口をもつと考えられる。復原口径26.5cm、高さ10.1cm。森田分類第Ⅱ期第1段階に属し、12世紀中葉～後半に位置づけられる。機械掘削層、第0層、第1層の各グリッドから出土した多数の破片が接合した。

425の口縁端部はわずかに肥厚する。片口部は小さく傾きも弱い。口縁部内面の一部が被熱している。第0層と第1層から出土した破片が接合した。

426(写真図版43)の口縁部は拡張され、断面L字状を呈する。第Ⅲ期第1～2段階で、13世紀後半～14世紀前半の所産。機械掘削層、第2層(上層)から出土した破片が接合した。

古瀬戸

427(写真図版44)は古瀬戸の筒形容器。外面と口縁部内面には厚く釉がかかり、黄緑色に発色している。後期様式で15世紀に位置付けられる。機械掘削層と第0層から出土した破片が接合した。

常滑焼

428(写真図版43)は常滑焼(知多窯)の甕。口縁部は小さく外反し、端部内面がわずかにくぼむ。肩部が張り、腰部で屈曲するが体部は比較的直線的な構成をもつ。内外面とも施釉されている。常滑焼に特徴的な体部外面の押印紋は明瞭ではない。口径22.5cm、最大径37.2cm、高さ35.3cm。中野分類3～4形式で、12世紀後半～13世紀初頭の所産であろう。第0層、第1層、第2層の各グリッドから出土した多数の破片が接合した。

青磁

図91-429～435(カラー写真図版7)は青磁碗。

429は体部外面に鎬蓮弁紋を有する。内面は無紋。口縁部はわずかに内彎し、端部は尖り気味になる。口径13.0cm、高さ6.2cm、高台の厚みが薄くその径も3.2cmと小さい。高台部畳付けおよびその内側は露胎である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2C類。13世紀中頃～14世紀初頭前後の所産。第1層出土。

430・431の口縁部は外反するが、429と同類であろう。430は第0層、431は第1層出土。

432・433も体部外面に鎬蓮弁紋を有するが、内面は無紋である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類で、13世紀前半の所産。432は機械掘削層と第0層、433は第0層出土。

434は体部下半のみの破片で、他の青磁碗に比べて若干肉厚である。外面にはヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。第1層出土。

435も龍泉窯系青磁碗、削り出し底部。畳付けより内側は無施釉。第0層出土。

436・437は青磁皿。

436は底部と口縁部の境で屈曲し、口縁部は外上方に伸びる。外面には飛鉋の跡がみられる。底部外面は無施釉。口径10.0cm、高さ2.1cm。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2a類で、12世紀中頃～後半の所産。437も青磁皿の口縁部。2点とも第1層出土。

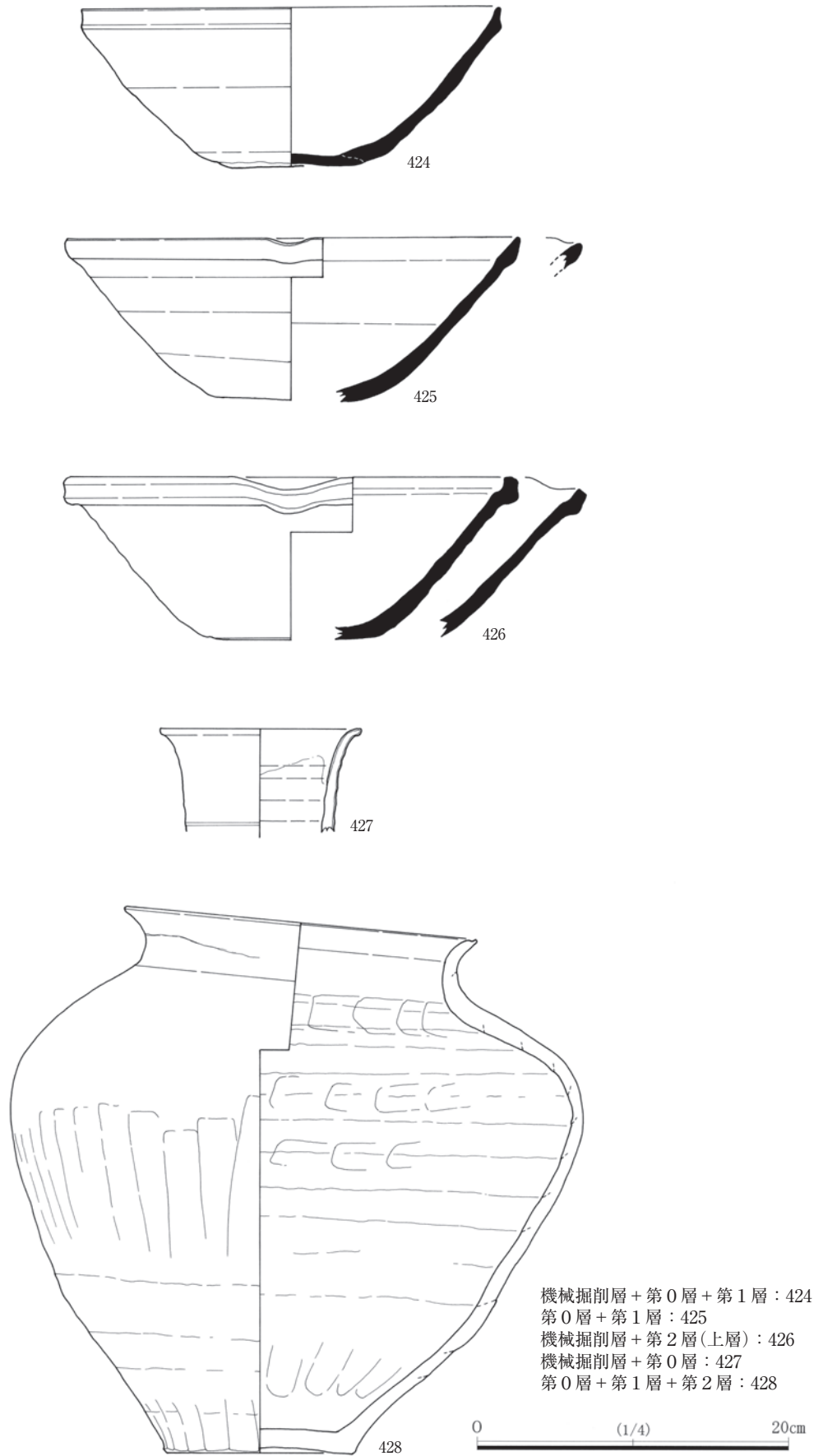
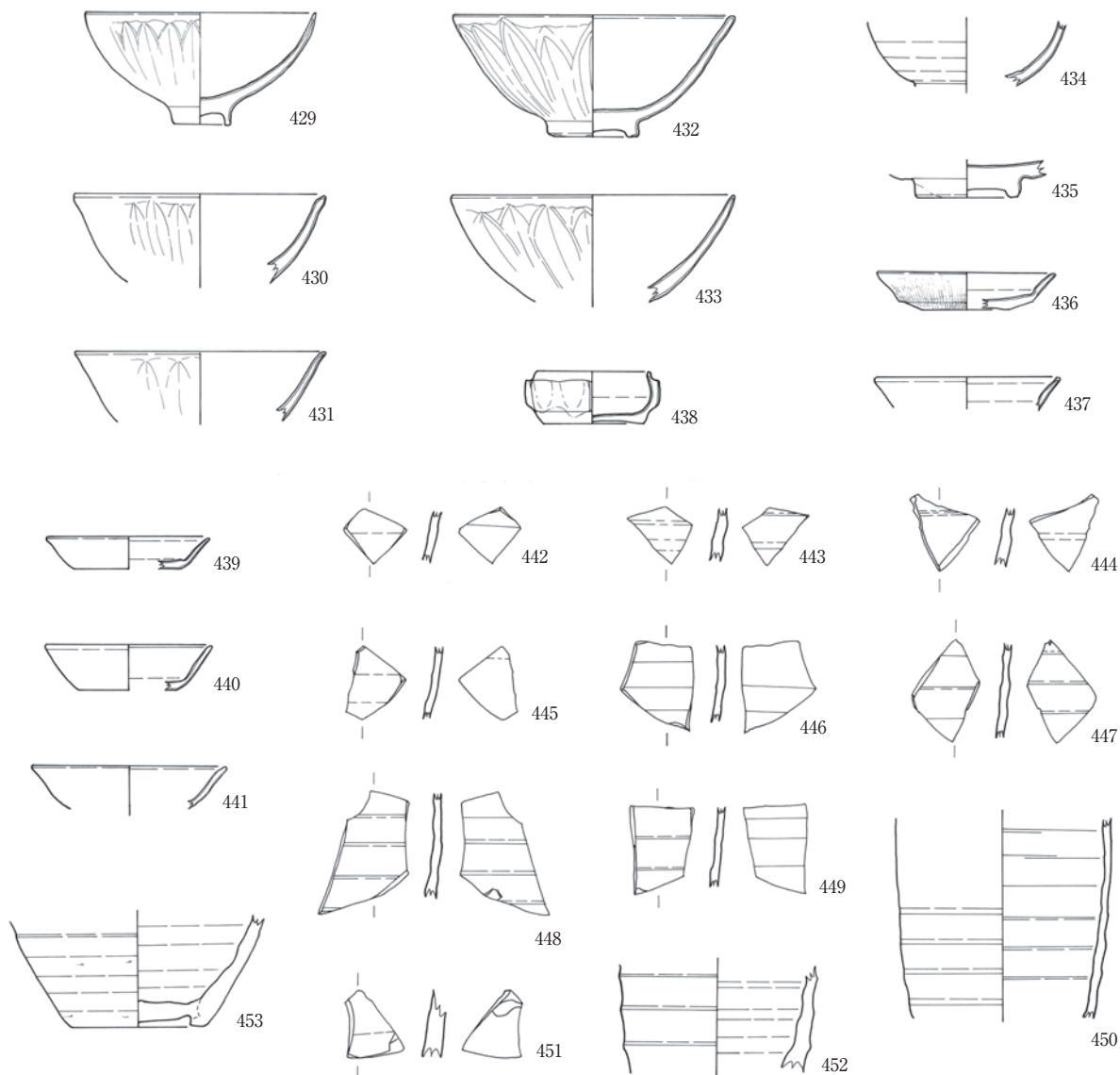


図90 08 - 2 調査区 包含層出土東播系須恵器、古瀬戸、常滑焼



機械掘削層+第0層：432
 第0層：430・433・435・440・441・449・450
 第0層+第1層：453
 第1層：429・431・434・436~438・442~448・452
 第2層：439
 北法面：451

図91 08-2調査区 包含層出土輸入陶磁器

青白磁

438(カラー写真図版7)は青白磁(影青)合子の身。外形は菊花形で、口縁端部は器の内面に沿って薄く短く立ち上がり蓋受けとなる。型づくり成形であろう。内面から体部外面までは施釉されているが底部外面は露胎である。素地は白っぽくほとんど夾雑物を含まない。第1層出土。残念ながら蓋は出土しなかった。

白磁

439~441は白磁皿。いずれも破片資料だが、口縁端部が口禿げである以外は現存する範囲では底部も含めて全面に施釉されている。胎土は灰白色で硬質である。

439の口縁部は短く直線的である。大宰府分類白磁皿Ⅸ-1 a類。第2層出土。440は439よりも口径が少し大きく深い。皿Ⅸ-1 b類。第0層出土。441は復原口径11.0cmを測り、皿Ⅸ-1 c類。第0層出土。これらの類例は13世紀後半~14世紀前半に多い。

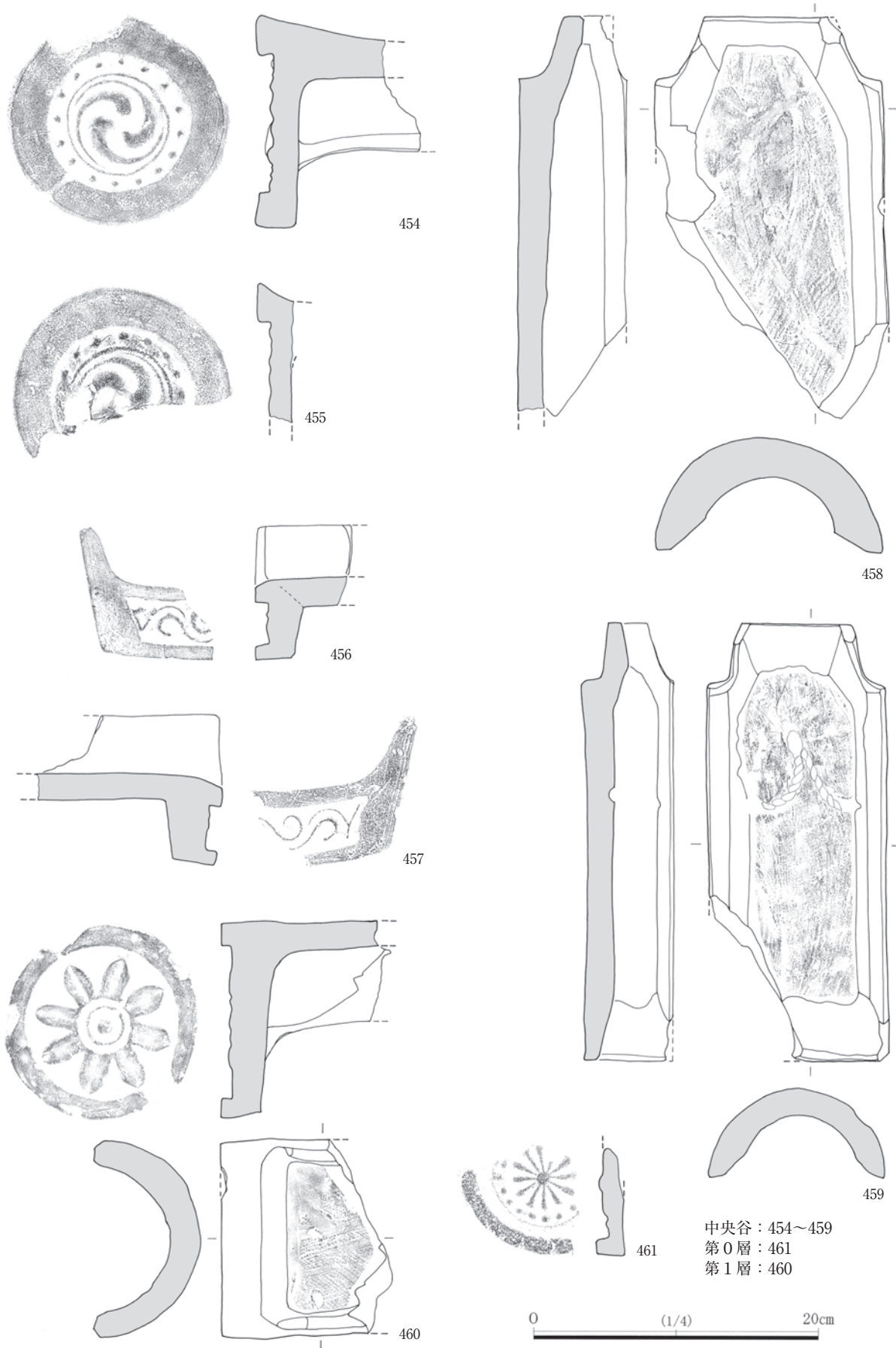


図92 08-2調査区 包含層出土中世の軒瓦、丸瓦

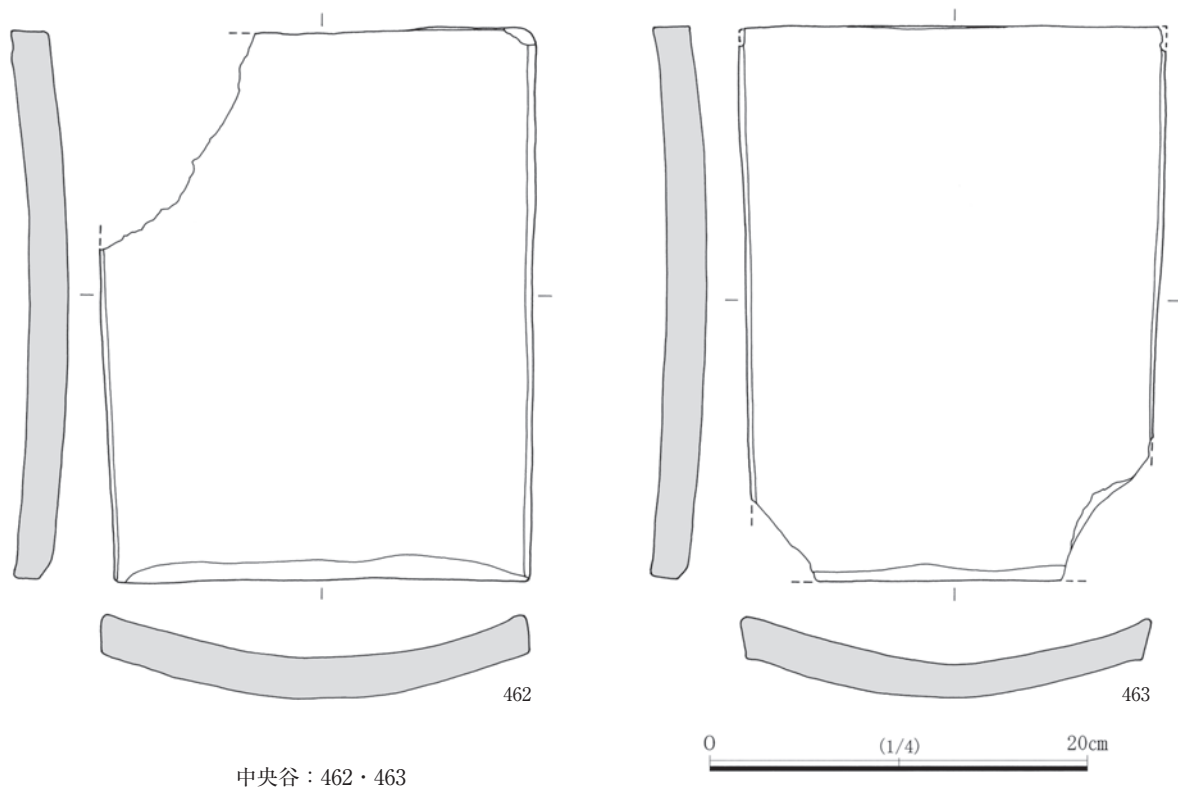


図93 08 - 2 調査区 包含層出土中世の平瓦

褐釉陶器

442～453(カラー写真図版8)は褐釉陶器。

442～450は胴部片、451・452は胴下部片で、外面はいずれも粗く回転ヘラケズリされ凹凸がみられる。器壁は5mm程度と薄い。453の底部は上げ底風になっており、外面のヘラケズリは粗い。胎土には黒色斑点が含まれる。大宰府分類陶器壺(無耳壺)Ⅳ類に属し、13世紀後半～14世紀前半の所産であろう。449・450は第0層、453は第0層と第1層の破片が接合、442～448・452は第1層、451は調査区北西部の法面から出土した。なお、口縁部や頸部は出土していない。

中世の瓦

図92-454(写真図版44)・455は巴紋軒丸瓦。2点とも中央谷からの出土だが、3建物出土の瓦と同じである。

456・457(写真図版44)は唐草紋軒平瓦。456は瓦当左側に縦棧が付く。中央谷出土。

458・459は丸瓦。中央谷出土。

460(写真図版44)は軒丸瓦。単弁八弁、葉研彫り。瓦当内区中心に半球状の珠点があり、その外側に圈線が巡る。13～14世紀の復古瓦か。第1層出土。

461は菊花紋軒丸瓦。3建物出土の図41-138～147と同範。第0層出土。

図93-462・463は平瓦。凹凸面ともにナデ調整を施す。中央谷出土。

石鍋

図94-464(写真図版44)は石鍋。口縁部10分の1周程度の破片資料で現存部には蔓取手穴はみられない。口縁部下に断面台形の鏝が削り出されている。木戸分類Ⅲ類-a-2に該当する。12世紀中頃～後半の所産。第1層出土。

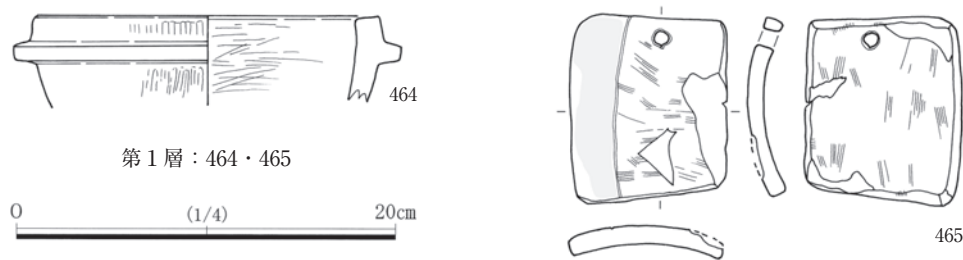


図94 08-2調査区 包含層出土滑石製品

温石

465(写真図版44)は滑石製石鍋を転用した温石。口縁部を活かし、平面台形に成形しているが、断面は元の石鍋の形状に沿って湾曲している。図示した上部には直径8mmの穴が開けられている。図中にアミフセしたのは鏝が削り取られた部分で、その下部には痕跡が線状に残る。鏝の位置からみて12～13世紀の石鍋を転用したものである。第1層出土。

火輪

図95-466は五輪塔の火輪。火輪としては比較的小振りで、下面の柄穴は深く角張っている。凝灰岩製だが、石英、角閃石、チャートが目立つことから二上山産ではなさそうである。遺存状況は悪く、半分しか残っていない上に上面の大半は剥落している。機械掘削層出土。

地輪

図95-467～図96-475(写真図版45)は五輪塔の地輪。機械掘削層から9基出土した。いずれも高さの低い直方体で、上面中央に水輪を受けるための半球形の柄穴がある。468の一側面は被熱している。全て弱片麻状黒雲母花崗岩である。

各地輪を採寸すると、

- 1：高さ5寸各辺7尺の467(高さ15～16cm、各辺21～22cm)・468(高さ約16cm、各辺約21cm)
- 2：高さ5寸各辺7尺の469(高さ約16cm、各辺26～27cm)
- 3：高さ約6寸5分各辺9尺前後の470(高さ約19cm、各辺26～27cm)・471(高さ約19cm、各辺約27cm)・472(高さ約20cm、各辺約26cm)・473(高さ約19cm、各辺約29cm)
- 4：高さ7寸各辺9寸の474(高さ約21cm、各辺26～27cm)・475(高さ約21cm、各辺約27cm)

に4分類できる。

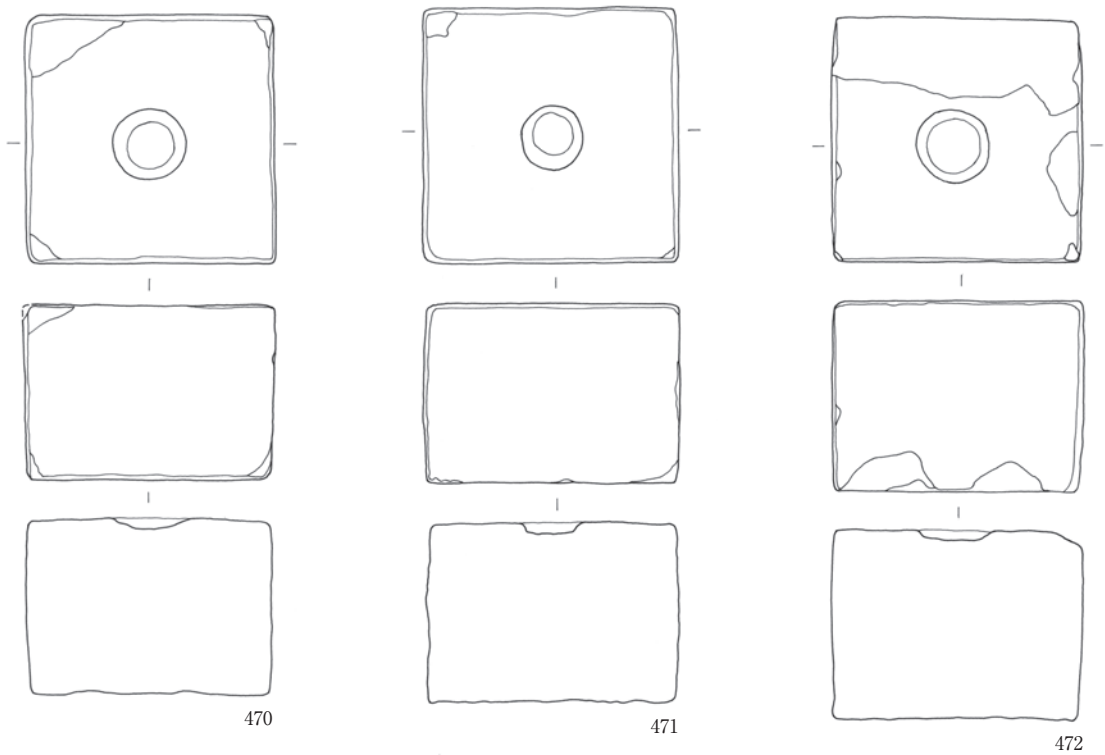
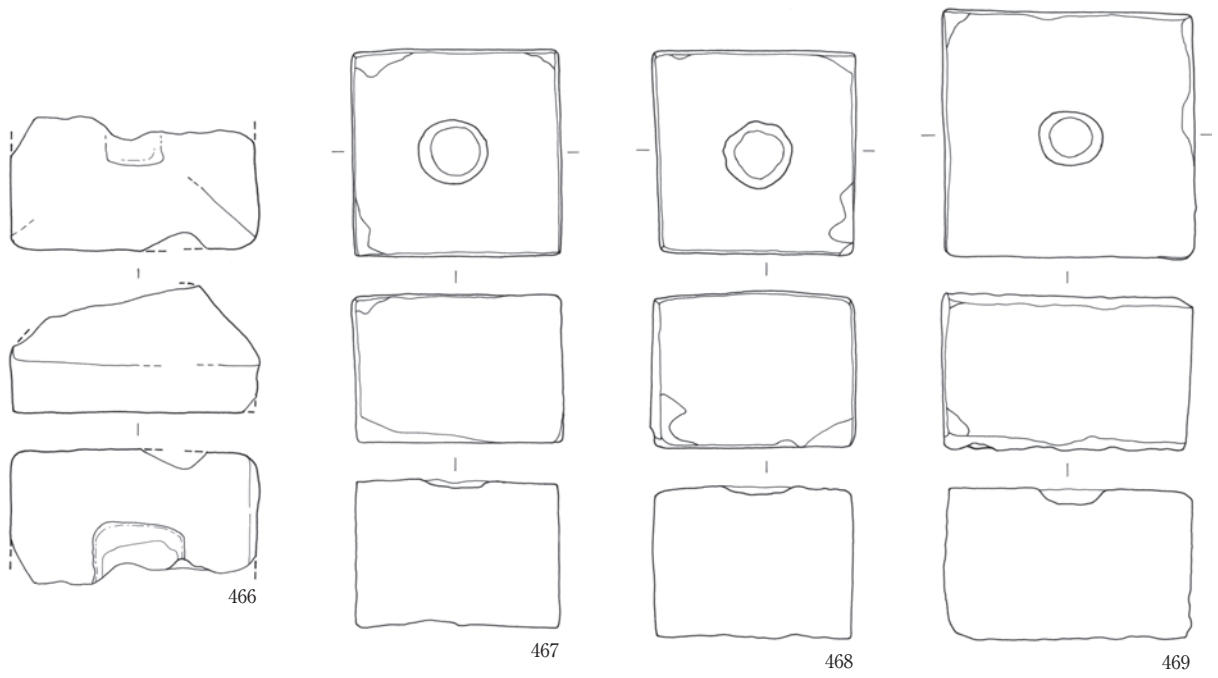
一般に五輪塔の地輪は低いものから高いものに変遷するとされるが、出土した9基の地輪は高さ5寸(約15cm)～7寸(約21cm)、各辺7寸～9寸(約27cm)の範囲におおむね収まり、時期は15～16世紀と推定される。

金属製品

図97-476～484は青銅製品。

476(カラー写真図版5)は唐の鏡を模倣し国産されたいわゆる唐式鏡の破片。縁は断面三角形に肥厚している。図示した背面側の左端が若干内側に屈曲していることから、八花鏡の可能性はある。全体に鬆が立っており铸造品としての質は悪い。8～9世紀のものと推定される。現状で12.7gを量る。機械掘削層出土。

477(カラー写真図版5)は青銅製の提子ひさげの提梁つるの座。上部から見ると金具の湾曲がほとんどない。環状部の左右にある直径2mmの穴に鉤を打ち本体に留める。向かって右側の穴には鉤が残っている。上



機械掘削層：466～472

0 (1/8) 40cm

図95 08-2調査区 包含層出土五輪塔火輪、地輪（1）

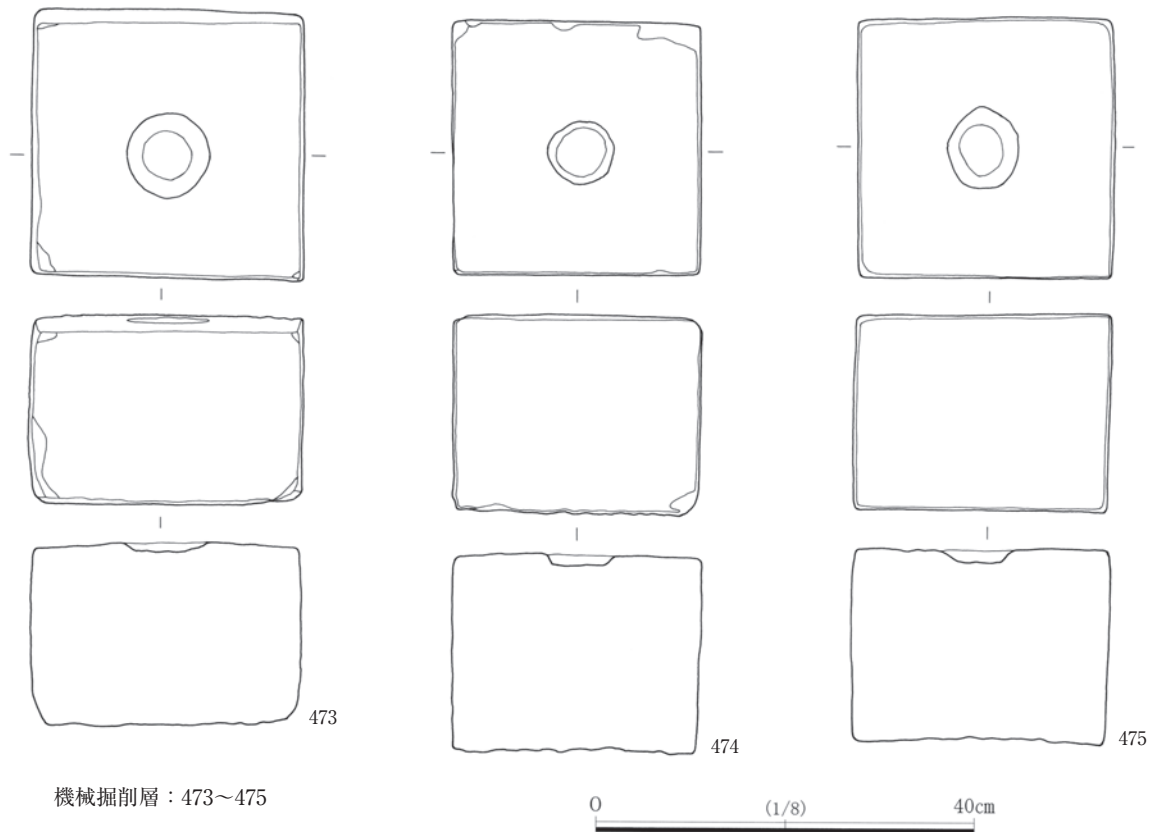


図96 08 - 2 調査区 包含層出土五輪塔地輪 (2)

部の直径5mmの穴で提梁と接合する。10.0g。15～16世紀に類例が多い。機械掘削層出土。

478～484(写真図版46)は銭貨。

478は開元通宝。2.1g。唐621年初鑄。第1層出土。この開元通宝には背面に文字が入っていないので、845年に補鑄したものではない。

479は和銅開珎。3.1g。日本708年初鑄。第2層出土。

480は神功開宝。1.6g。日本765年初鑄。第2層出土。

481は景德元宝。1.5g。北宋1004～1007年鑄造。機械掘削層出土。

482は紹聖元宝。1.7g。北宋1094～1097年鑄造。第1層出土。

483は聖宋元宝。2.3g。北宋1101年初鑄。第1層出土。

484は大観通宝。2.3g。北宋1107年初鑄。第0層～第1層(南法面)出土。

以上の7枚の他に、津田遺跡08-2区の調査では既に述べた第1面3建物の聖宋元宝1枚と大観通宝2枚、第1面の大観通宝1枚、第3面225落ち込みの天聖元宝1枚が出土した。

485～496は鉄製品。

485～493は釘。いずれも断面四角形のいわゆる和釘である。多くは頭部が犬状に変形している。485～490は機械掘削層、491・492は第0層、493は第1層から出土した。

494は鏝であろう。断面は長方形である。機械掘削層出土。

495は鑿と推定される。第1層出土。

496は鎌。刃長12.3cm。刃幅3.2cm。同一個体と考えられる茎も出土した。茎の刃部に近い部分の断面は長方形だが、柄の中に入る部分はさらに薄くなっている。第2層出土。

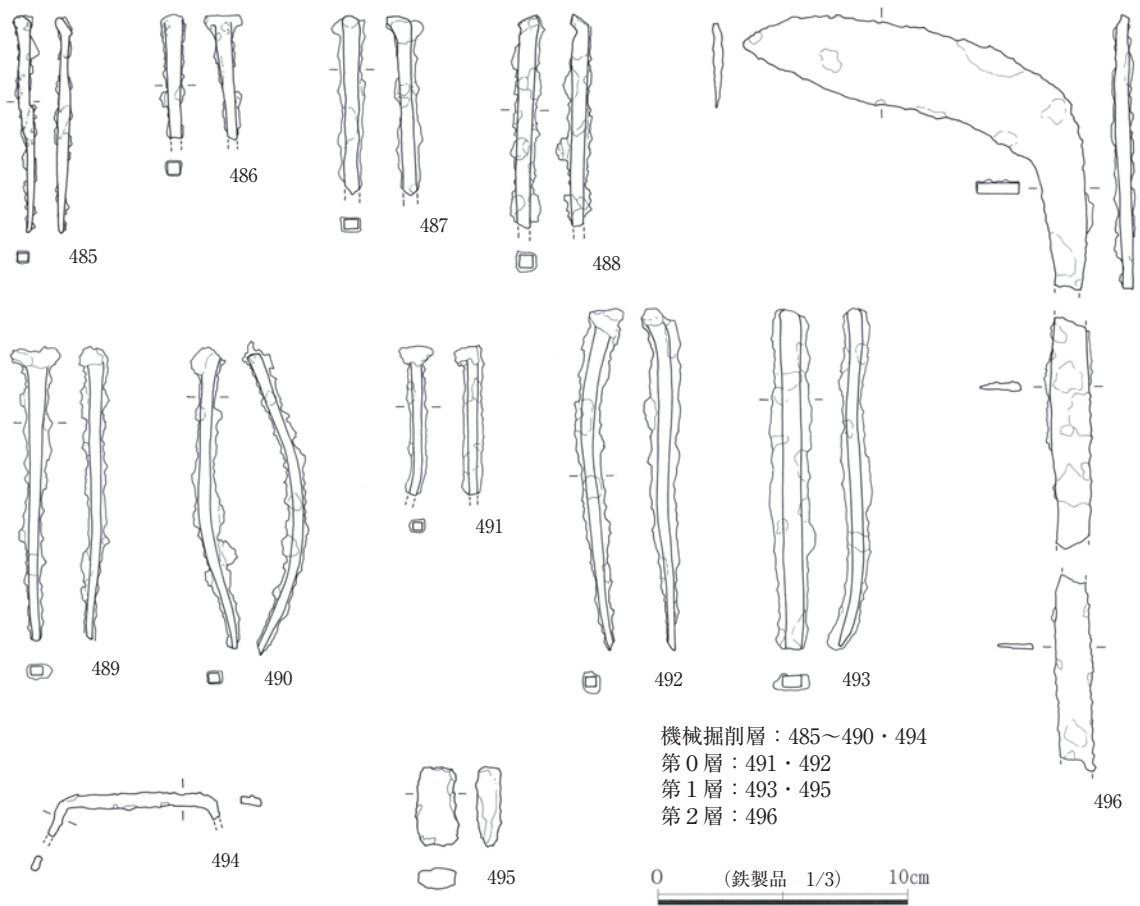
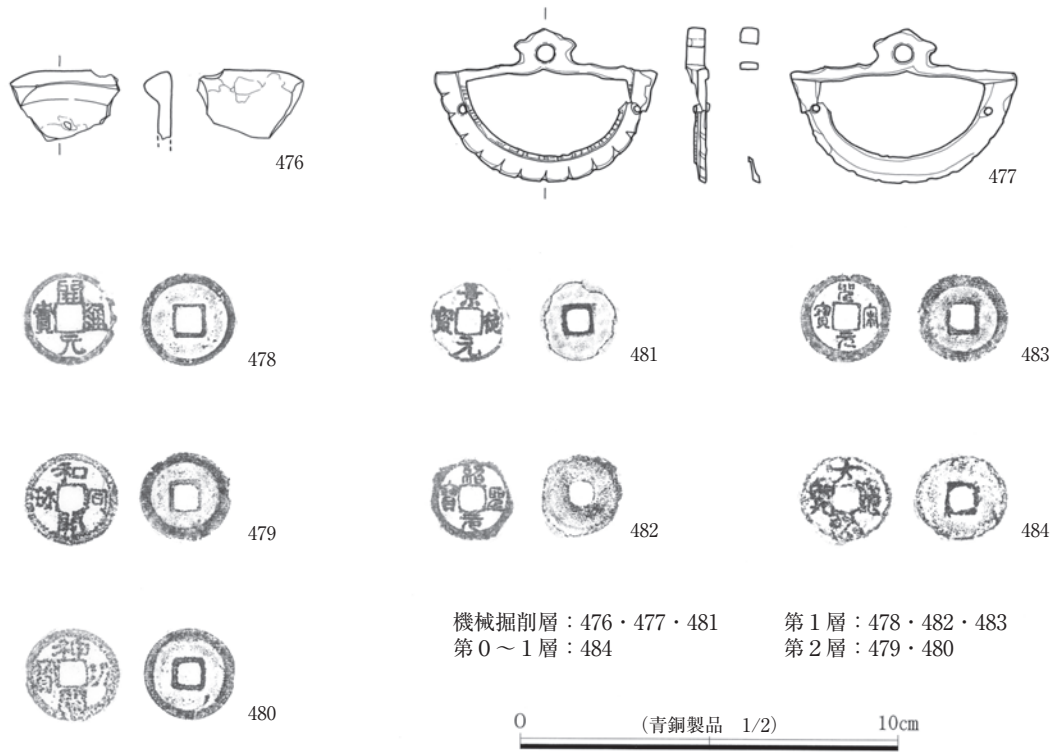


図97 08-2調査区 包含層出土金属製品

第8節 まとめ

第5章第3節～第7節で述べたように、08-2調査区では各遺構面で検出された遺構や包含層から出土した遺物は、傾向として上層が新しく下層が古い状況はみられた。しかし、斜面に立地するために上方からの流下や下方への転落、あるいは調査区内での自然と人為による削平や堆積が繰り返されたことによって、同一面で検出された遺構でも必ずしも同時期のものではなかった。

そこで、本節では出土遺物を手がかりとして各時代の遺構の変遷を整理しておく。

旧石器時代

第2層から、サヌカイト製の縦長剥片を素材とするナイフ形石器(図77-292)が出土した。ただし、風化が進んでおり原位置も保っていない。

縄文時代

第2層から、晩期の長原式土器がおそらく1個体分(図78-298～300)出土した。他に縄文土器と思しき土器片(301・302)も出土したが、時期や型式の認定はできなかった。

弥生時代

第2層から、中期の土器底部(図78-303・304)や石包丁(図77-296・297)が出土した。

以上、旧石器時代から弥生時代については、包含層からわずかな遺物が出土したが、遺構は伴わない。

古墳時代

遺構・遺物とも検出していない。

飛鳥時代～奈良時代(図98)

飛鳥時代から奈良時代の遺構は主に調査区北西部に分布し、具体的には第2面37・42・50・59・60・61・65・67・72・73土坑、43・83落ち込み、第2-2面134・136・159土坑、156落ち込みなど、土坑や落ち込みが多く、明確な建物などは見つからなかった。

なお、最下面にあたる第3面では、北西部では遺物を出土した遺構はなく、南東部の土坑やピットには中世の土器片が伴っており、わずかに225落ち込みの底に位置する227ピットから古代と思しき土師器片が出土したのみである。

遺構出土遺物としては、第2面83落ち込みの火頭形三尊埴仏(図71-282)と鋳型(283)が特筆される。火頭形三尊埴仏は7世紀後半の淀川水系などに類例がみられる。この83落ち込みからは、古代の土師器や須恵器なども多く出土した。また、第0層出土の土製鋳型(図79-305)や第2層出土の小形独尊埴仏(306)も、古代の仏教関連遺物として重要である。

第2面43落ち込みからは、7～8世紀の土器類、特に杯、蓋、壺、鉢、転用硯といった須恵器がまとめて出土した。

包含層からは、凹面に布目痕跡、凸面に縄タタキがみられる平瓦など(図80-309～図81-314)が、第1層をはじめ機械掘削層や第0層といった中世の土器を多く含む層から、散発的に出土した。想像の域を出ないが、調査区よりも斜面の上方に古代の瓦を使った建物があり、それが中世以降に流されてきた結果とも考えられる。

古代の土師器は包含層からの出土は少なかった。

須恵器(図83-318～図84-362)は、第1層と第2層から比較的多く出土したが、特に先述の第2面43落ち込み周辺に多かった。

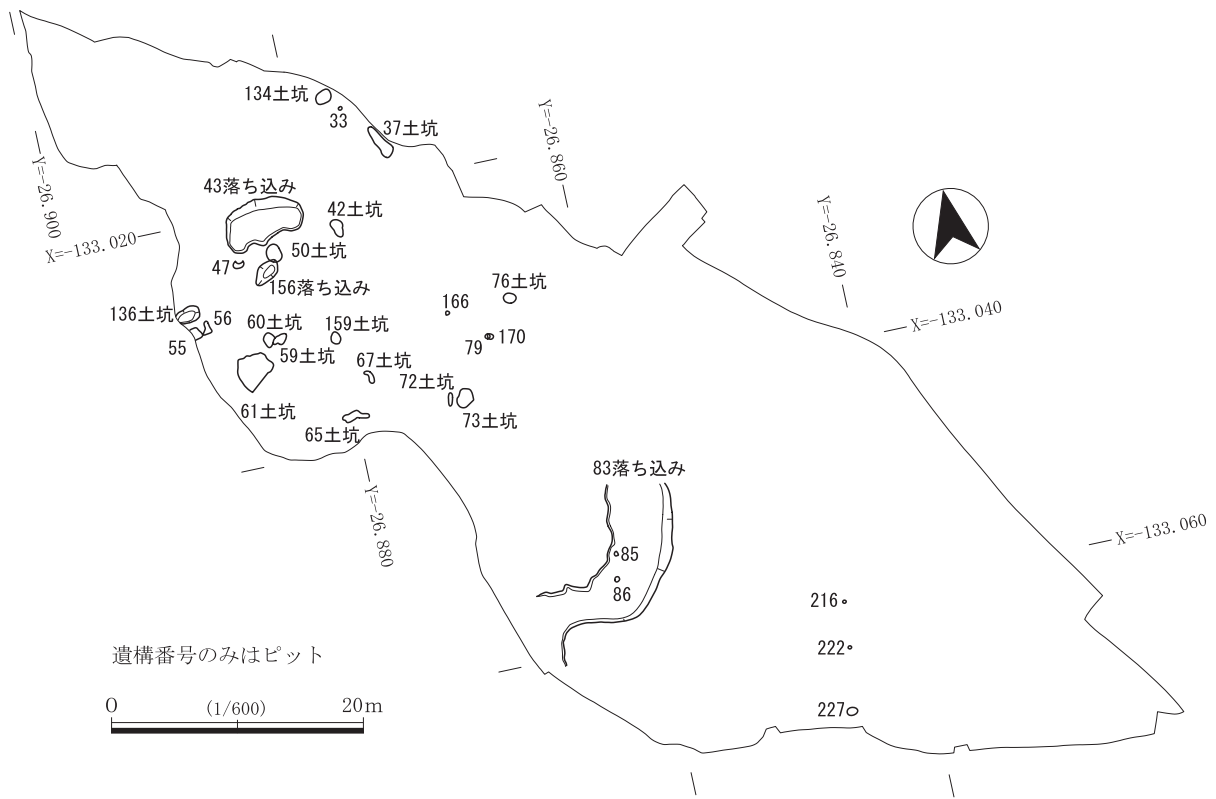


図98 08 - 2 調査区 飛鳥時代～奈良時代の遺構

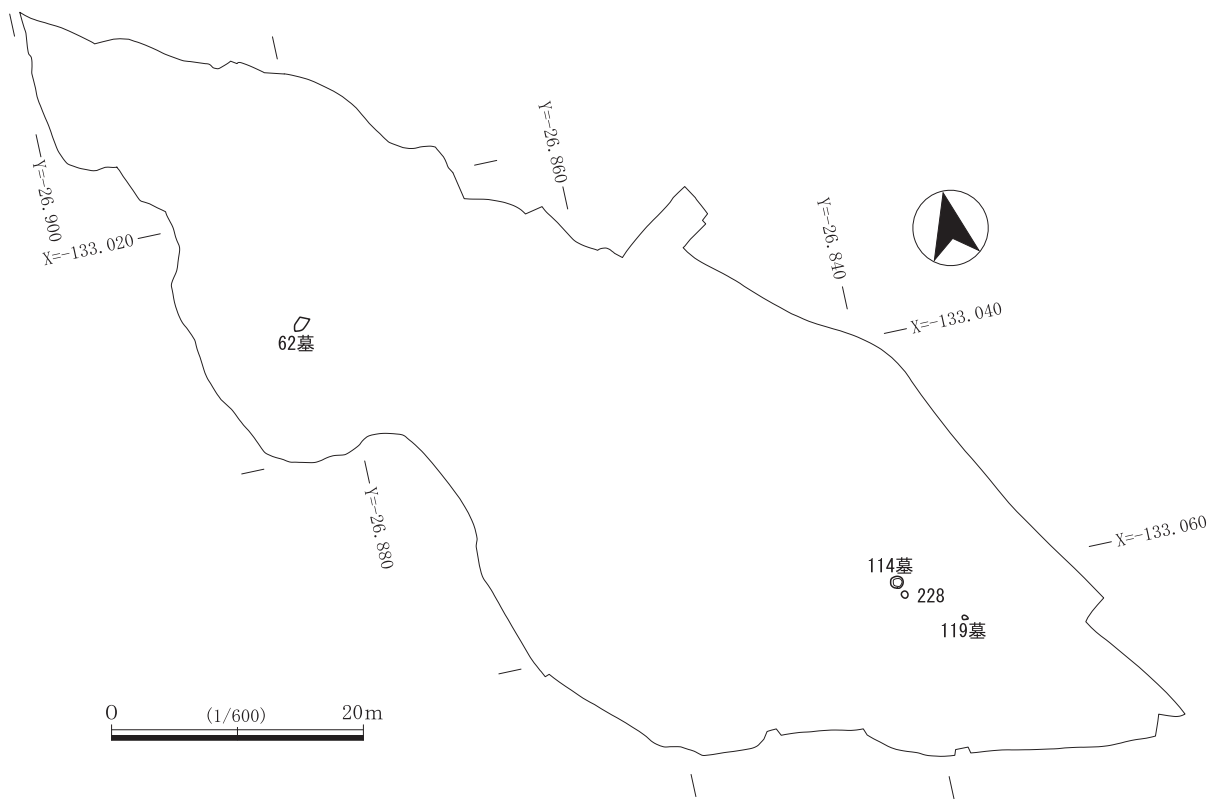


図99 08 - 2 調査区 平安時代の遺構

平安時代(図99)

平安時代の遺構としては、第2面62・114・119墓(図65)がある。

62墓からは、9世紀中頃～後半の尾張地域産の灰釉陶器四耳壺(図66-237)と、土師器や須恵器の小片、鉄釘、焼土塊、炭化物、微細な焼骨片が出土した。四耳壺内には焼けた藁のような植物遺体と炭化物、小石、土師器皿片が入っていた。

114墓からは、9世紀後半～10世紀前半の播磨地方に類例のある須恵器双耳壺(瓶)(図66-240)と、灰釉陶器小瓶、鉄製毛抜き、鉄釘、10世紀前半の土師器「て」の字皿、土師器片、炭片が出土した。

119墓からは、9世紀後半～10世紀初頭の灰釉陶器長頸壺(瓶)(図66-257)が出土した。壺の中に焼骨(写真図版48)が納められていた。

3基とも土器は口縁部が打ち欠かれ、逆位に据えられていた。出土状況と内部に焼骨片が納められていることから火葬墓と考えてよい。土器は9世紀中頃ないし後半から10世紀前半の所産で、62墓→119墓→114墓の順に構築されたと考えられるが、いずれも壺(瓶)が他地域産である点に注意を要する。

第3面228ピットからは、土師器「て」の字皿片が出土した。

包含層出土遺物では、10世紀後半の近江ないし美濃産と推定される緑釉陶器(図86-366～369)や灰釉陶器広口壺(瓶)(図86-370)、12世紀の東播系須恵器の片口鉢(図90-424)が注目される。

鎌倉時代(図100)

遺構の最も多い時期である。主に瓦器椀や輸入陶磁器を伴うことを根拠に鎌倉時代としたが、ピットなどについては瓦器片を含むものをこの時代と推定した。第1面検出の遺構群、調査区南東部の第2面と第3面の遺構群が該当する。代表的な遺構として、第1面2墓、18竪穴、235溝、31溝がある。

2墓(図48)は周囲を石列で囲った墓である。鉄釘が出土したことから、木棺が納められていた可能性がある。青磁碗2点、青磁皿3点、瓦器椀1点、鉄製短刀1振、鉄釘などの一括遺物(図49)が特に重要である。伏せた状態で重なって出土した青磁碗2点(図49-190・191)は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-4a類。3点の青磁皿(192～194)は龍泉窯系青磁皿I-2a類とI-3a類、同安窯系青磁皿I-1a類。瓦器椀(196)は楠葉型IV-1期である。青磁碗・皿は大宰府編年によると12世紀中頃～後半だが、瓦器椀と土師器皿は13世紀中頃～後半に属することから2墓はこの時期の所産であろう。

18竪穴(図50)は、その床面に作業台と思しき大石や小鍛冶炉と考えられる24炉などがあり、埋土から瓦器、土師器、青磁碗、鉄釘、滓、焼土塊、韃の羽口などが出土した。

18竪穴周辺の22土坑や25・30ピットからも、滓や焼土塊などが出土した。

以上の状況から、18竪穴は、13世紀後半の鍛冶工房であったと考えられる。

なお、第2面93焼土坑(図64)や調査区中央部の135焼土坑(図73)は、周囲が被熱し、焼土塊や炭片が出土する状況から、火化施設あるいは製炭窯と推定した。出土したわずかな土師器片を手がかりに93焼土坑を中世の所産とすると、鍛冶工房である18竪穴に炭を供給する製炭窯と考えられる。ただし、135焼土坑出土の少量の須恵器や土師器では時期が確定しがたく、先に述べた平安時代の火葬墓に伴う火化遺構であった可能性も否定できない。

31溝と235溝(図52)は、調査区北西部、第1面3建物の北方に位置する。調査時には安土桃山時代以降の3建物の雨落ち溝とも考えたが、出土した瓦器椀や土師器皿から鎌倉時代の溝と判明した。

この他に、第1面1石群(図54)、4石組(図55・56)、5石列、第2面32石群(図61)、89石群(図62)、84石囲い(図63)といった、この周辺に産する花崗岩や玢岩を用いて構築された遺構も、検出状



図100 08-2調査区 鎌倉時代の遺構

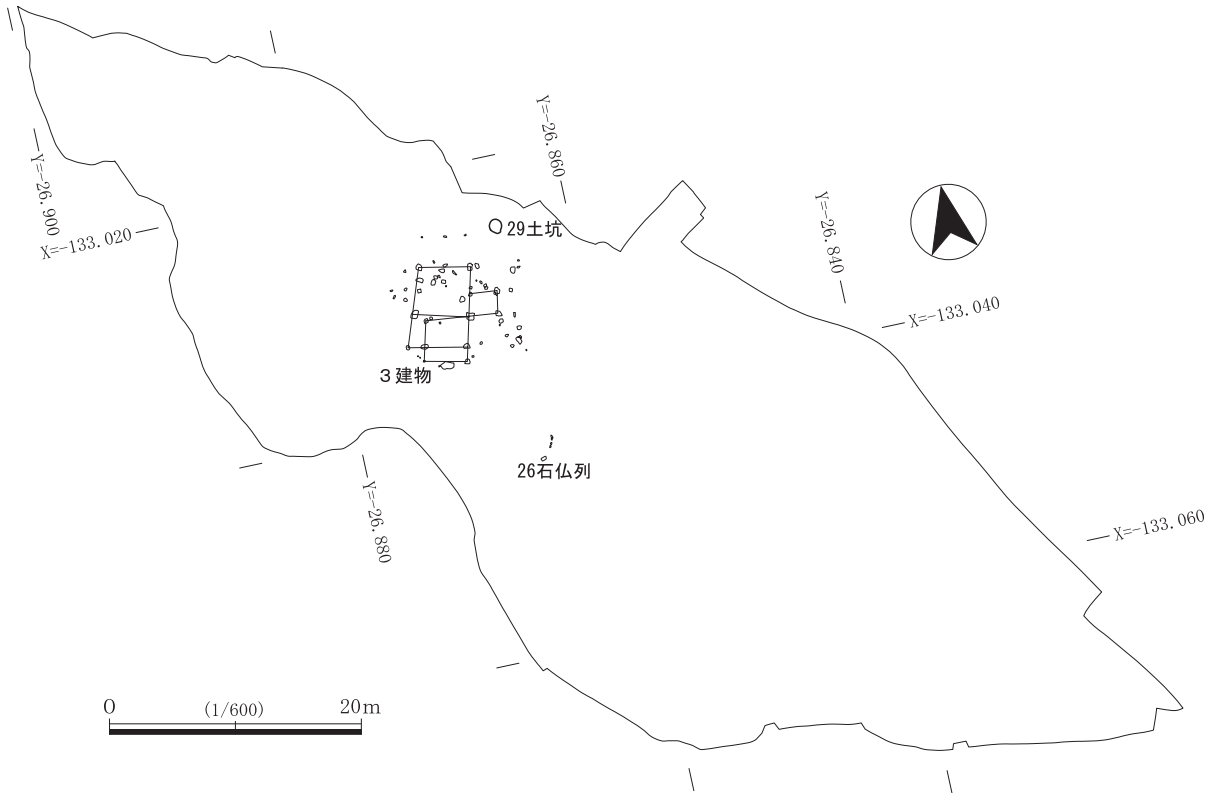


図101 08-2調査区 安土桃山時代の遺構

況や周辺から出土した遺物からみて鎌倉時代のものである可能性が高い。

包含層出土遺物には、瓦器や土師器の他に、東播系須恵器の片口鉢(図90-425・426)、常滑焼の甕(図90-428)、褐釉陶器(図91-442～453)などもみられた。

室町時代

遺構・遺物とも希薄であるが、包含層から古瀬戸後期様式の筒形容器(図90-427)が出土した。

安土桃山時代(図101)

寺と石仏列がみられる。

3建物(図29～32)は、礎石群と瓦などの多量の遺物で特徴付けられる。掘方のある8個の礎石を中心に復原すると、2間×2間の宝形堂などが想定できる。南側には沓脱石らしき石も存在し、その周辺の土は三和土のように締りが良い。

約5000片出土した瓦は、巴紋軒丸瓦、宝珠唐草紋軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、雁振瓦、文字瓦、隅木蓋瓦など16世紀後半のもの(図33-96～図40-137)が主体を占めるが、13世紀後半の小型菊花紋軒丸瓦や剣頭紋軒平瓦(図41-138～図42-158)も含まれる。土師器皿、石塔の相輪、鉄釘などもみられた。さらに、懸仏の尊像部(図43-169)、線刻十一面観音鏡像(170)、獅子嚙形鏝座(171)、金銅製の鈴(172)、取手(173)、覆輪(174)といった宗教色の強い青銅製品も出土した。

26石仏列(図45)の石仏は、16世紀後半の作と推定される阿弥陀如来である。調査時には4体が、顔を西に向け、南北に並んで立っていた。その南側で伏していた1体と機械掘削中に出土したもう1体と合わせて、6体が並んでいた可能性がある。

門、塔、鐘楼、経蔵、僧房などは検出できなかったが、以上の状況から一堂と阿弥陀仏列が認められ、安土桃山時代あるいはその後この地に寺院が存在したことが明らかとなった。

さて、調査地が面する円通谷とそこを流れ下る円通川はともに「エンヅ」と呼ばれている。地元ではこの地名はかつてこの地に存在した「円通寺」に由来すると言い伝えられ、『興福寺官務牒疏』なる古文書に記された天平3(731)年創建と記される津田寺がこれに相当するともいう。また津田の集落に現存する尊光寺所蔵の天和2(1682)年の文書と伝えられる『当郷旧跡名勝誌』には、平安時代に惟喬親王が猟遊した際この寺で休憩したということ、南北朝から室町期にはこの寺の衆徒も地元の豪族とともに争乱に加わったこと、つづく戦国末期の天正年間にはこの堂宇を破却してその材を転用して南河内の小山城を修築したこと、その後荒れるにまかせたままの状態となっていたが寛文9(1669)年に小堂が建てられたこと、それがやがて現在の場所に移されたことなどが記されている。

しかし、近年の馬部隆弘氏の研究(馬部隆弘 2004「城郭由緒の形成と山論-「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態-」『城館史料学』第2号 城館史料学会、同 2005「偽文書からみる畿内国境地域史-「椿井文書」の分析を通して-」『史敏』2005春号(通巻2号) 史敏刊行会、同 2008「椿井政隆による偽文書創作活動の展開」『忘れられた霊場をさぐる 3-近江における山寺の分布』栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団)などによると、『興福寺官務牒疏』は江戸時代の19世紀初頭に創られた偽書であり、その記述に基づく後世の文書類についても厳密な検討が必要だとされる。

ただし、今回の調査では、白鳳時代7世紀後半と思しき火頭形三尊塼仏、平安時代9～10世紀の火葬墓、鎌倉時代13世紀の菊花紋小形軒丸瓦と剣頭紋軒平瓦、安土桃山時代16世紀後半の礎石建物などが出土した。伝承や文書がそのままには信用できないとしても、この地に時代を超えて宗教や埋葬に関連の深い遺構・遺物が存在していたことは事実として認められる。

第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地

奥田 尚

はじめに

津田遺跡から出土した建物の礎石、石造物など、及び遺跡東方の山中にみられる石造物4体の石材を観察した。また、石造物の石材産地と推定される谷に分布する岩石の調査もした。清水谷に残る石切り場の石材調査については枚方市教育委員会と財団法人枚方市文化財研究調査会の方々の協力を得た。調査の結果について述べる。

石種の特徴

観察した石種はアプライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩、玢岩A、玢岩Bである。

アプライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が4～10mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が4～10mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2～3mm、量のごくごく僅かである。

このような岩相を示す石は当遺跡西方の清水谷の入口付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相に似ている。
黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が4～8mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～3mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は当遺跡から南に入る円通谷や西方の清水谷流域にみられる。
斑状黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～3mm、量が多い。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶をなす長石は、粒径が6～10mm、量が僅かである。基質をなす長石は、粒径が1～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～2mm、量のごく僅かである。

このような岩相を示す石は交野市森付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。
弱片麻状黒雲母花崗岩：色は灰白色で、微かに片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1.5～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で粒径が1～2mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は交野市森付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。
弱片麻状斑状黒雲母花崗岩：色は灰白色で、微かに片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～3mm、量が中である。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶をなす長石は、粒径が6～8mm、量が僅かである。基質をなす長石は、粒径が1～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～2mm、量が中である。

このような岩相を示す石は交野市森付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。
玢岩A：色は暗灰色である。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、柱状で粒径が0.5～1mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5mm、量が中である。石基はガラス質、やや粒状である。

このような岩相を示す石は岩脈として分布する石で、当遺跡の西方にある清水谷の入口付近にみられる。

玢岩B：色は暗灰色である。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が2～6mm、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1～3mm、量が僅かである。石基はガラス質、やや粒状である。

このような岩相を示す石は岩脈として分布する石で、当遺跡の西方にある清水谷の入口付近にみられる。

石材の使用傾向

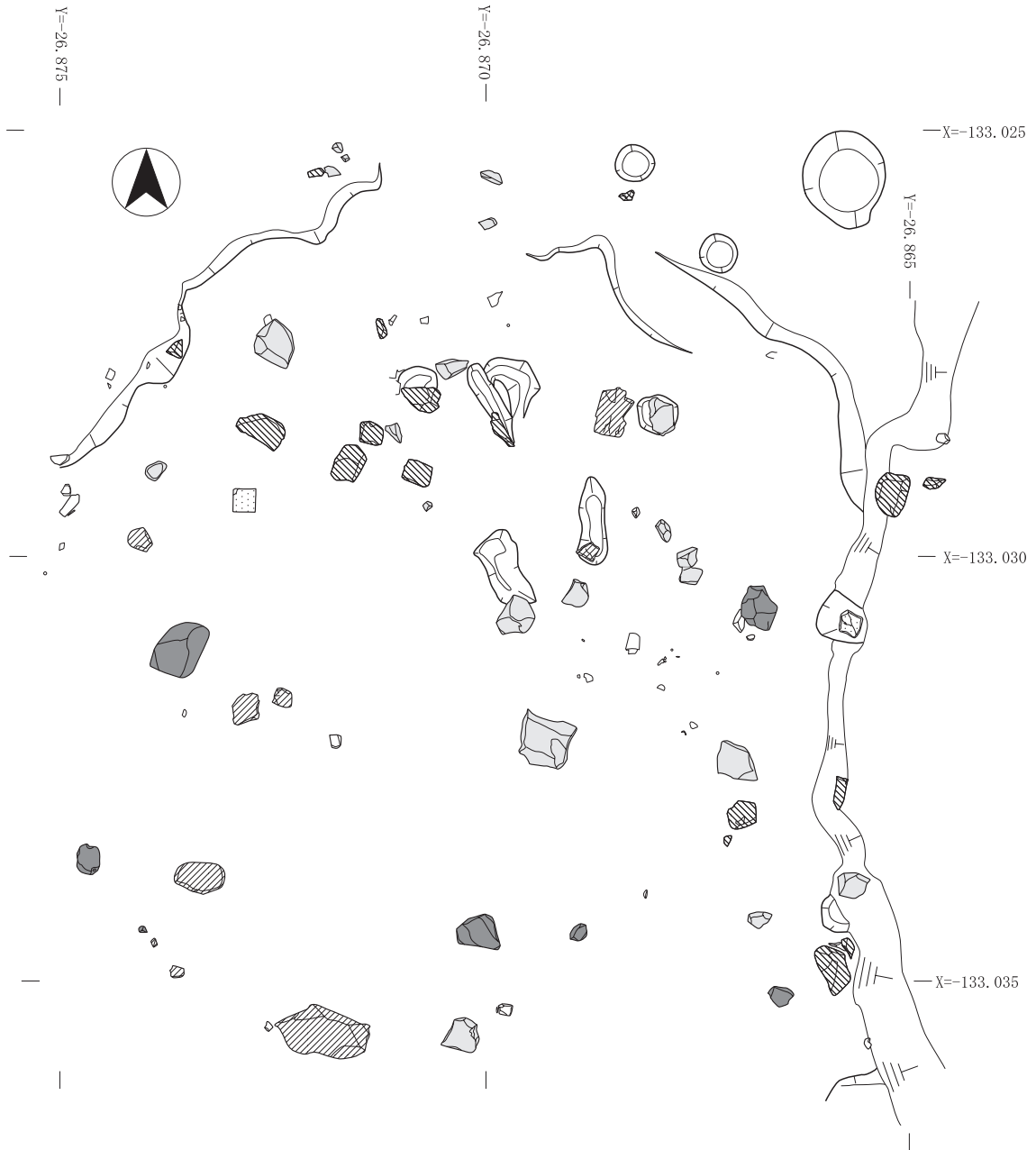
調査地に分布している自然石および自然石の礎石の石種はアプライト質黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、玢岩A、玢岩Bであり、石造物の石種は弱片麻状黒雲母花崗岩、アプライト質黒雲母花崗岩である(図102)。また、遺跡東方の山中にみられる石造物は片麻状斑状黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩である。

石仏・五輪塔など(第5章)のような加工された石材についてみれば、斑状黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩で、交野市森付近にみられる黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。しかし、礎石や散在する自然石のアプライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、玢岩A、玢岩Bは、清水谷入口付近で採石できる石であり、黒雲母花崗岩は遺跡の横にある円通谷の川原で採石できる石である。

清水谷中流域の西側斜面には石材を切り出した跡がみられる。枚方市津田の春日神社境内にある天保3(1832)年銘の石鳥居や天保8(1837)年銘の石橋は斑状花崗閃緑岩である。この石鳥居や石橋の石材は清水谷の石切り場跡にみられる花崗閃緑岩の岩相と似ている。石鳥居の石材は「清水谷から切り出した」と伝えられている。出土した現代の唐白の石材もこの石切り場跡にみられる黒雲母花崗岩の岩相と似ている。幕末の文久頃に築造されている楠葉台場跡にみられる石材にもアプライト質黒雲母花崗岩や黒雲母花崗岩と同質の石材が使用されている。また、吹田市の旧西尾家の庭にある4基の石燈籠もこの石切り場跡の黒雲母花崗岩と岩相的に似ている。このようなことから、清水谷の石切り場では近世末から近代にかけて盛んに採石をされていたようである。

加工された出土石造物に清水谷の石切り場跡付近の岩相を示す石材がみられないことから、近くではあるが、出土した加工石造物は清水谷の石切り場が稼行していた時期とは異なる時期の可能性がある。

編者注：奥田 尚氏には、図102に掲げた第1面3建物の石材以外にも、第1面26石仏列や包含層出土の五輪塔地輪等についても石材を鑑定して頂いた。それらの成果については、第5章の当該個所に記載している。



石材の石種の凡例

- アプライト質黒雲母花崗岩
- 黒雲母花崗岩
- 弱片麻状黒雲母花崗岩
- 玢岩 A
- 玢岩 B

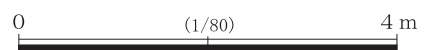


図102 08-2調査区 第1面3建物石材

表5 土器・瓦等観察表

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------------------|-----|------|------|----------|-------------------------|------------------------------|--|--|---|--------------------------------|
| 08 1 調査区 | 14 | 3 | | 砂質礫層 | 弥生土器 甕 | (17.2) — — | 外)2.5Y8/2灰白色 内・断)10YR8/3浅黄橙色 | 3mm以下の長石、石英、チャート、赤褐色粒、微細な雲母を多く含む | 外)粗い縦方向のハケメ 内)口縁部横方向のハケメ、体部はハケ後ナデ | 第Ⅱ様式 |
| | | 4 | | 2次堆積層 | 弥生土器 壺 | — — — | 外)10YR7/2にぶい黄橙色 内)10YR8/1灰白色 断)10YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、石英、微細な雲母を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む | 外)ナデか、櫛描直線紋2帯+(原体:7条/1.1cm幅) 内)エビオサエ | 第Ⅱ様式 |
| | | 5 | | 砂質礫層 | 弥生土器 壺 | — — 3.7 | 外)10YR8/3浅黄橙色 5Y2/1黒色 断)10YR8/3浅黄橙色 内)10YR4/1褐灰色 | 3mm以下の長石、2.5mm以下の石英を多く、2mm以下のチャートを少し含む | 外)摩滅のため不明 内)エビオサエ後斜め方向ハケ | 底部外面黒斑あり 弥生中期 |
| | | 6 | | 52落ち込み | 弥生土器 壺 | (33.2) — — | 外)10YR7/3にぶい黄橙色 内)10YR7/2にぶい黄橙色 断)10YR6/3にぶい黄橙色 | 3mm以下の石英、長石、微細な雲母を多く、2mm以下のチャート、赤褐色粒を僅かに含む | 外)エビオサエ、ナデ 内)エビオサエ後ハケ | 厚手、受け口状口縁、口縁部上端に黒斑あり 弥生後期か |
| | | 7 | | 50溝 | 土師器 杯 | (19.0) — — | 外・内・断)5YR7/8橙色 | 2mm以下の白色粒、微細な石英、長石、雲母を僅かに含む | 外)底部ヘラケズリ 内)放射状暗文 | 8と酷似 平城宮Ⅲ 8世紀前半 |
| | | 8 | | 50溝 | 土師器 杯 | (20.6) — — | 外・内)2.5YR5/8明赤褐色 断)10YR8/3浅黄橙色 | 1.5mm以下の石英、長石を少し含む | 外)底部ヘラケズリ後格子状ヘラミガキ 内)放射状暗文 | 平城宮Ⅲ 8世紀前半 |
| | 15 | 9 | 21 | 50溝 | 土師器 杯 | (13.2) 3.0 — | 外)7.5YR6/6橙色 内)7.5YR8/3浅黄褐色 断)7.5YR6/6橙色 2.5GY2/1黒色 | 1mm以下の石英、長石、チャートを少し、微細な雲母を多く含む | 外)エビオサエ、ナデ | 8世紀か |
| | | 10 | | 50溝 | 土師器 甕 | (23.2) — — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)5YR7/6橙色 断)10YR7/3にぶい黄褐色 | 3mm以下の石英、長石、微細な雲母を多く、1mm以下のチャートを少し含む | 外)横方向のナデ 内)口縁部は横方向のハケ後横方向のナデ、体部は横方向のヘラケズリか不明 | 8世紀か |
| | | 11 | | 50溝 | 土師器 甕 | — — — | 外)7.5Y6/4にぶい橙色 内)7.5Y7/6橙色 | 2mm以下の長石、石英、1mm以下の黒色粒、微細な雲母を多く、1mm以下のチャートを少し、3mmの長石を1粒含む | 外)格子叩き後カキメ 内)ケズリ | 8世紀 |
| | | 12 | | 50溝 | 須恵器 杯蓋 | (16.6) — — | 外・内・断)N6/0灰色 | 3mm以下の長石、石英を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む | 外)回転ヘラケズリ | 天井部僅かに焼け垂 飛鳥V 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 13 | | 50溝 | 須恵器 杯蓋 | (16.6) — — | 外)7.5Y6/1灰色 内)5Y7/1灰白色 | 1mm以下の長石、微細な雲母、2mm以下の黒色粒を多く含む | 回転ナデ | 古代 飛鳥V 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 14 | | 50溝 | 須恵器 杯 | 12.4 4.2 — | 外・内・断)7.5Y7/1灰白色 | 2.5mm以下の長石を多く、3mm以下の石英、1mm以下の赤褐色粒を少し含む | 外)底部回転ヘラ切り後ナデ | 平城宮Ⅰ 7～8世紀 |
| | | 15 | | 50溝 | 須恵器 杯 | (12.6) 3.5 — | 外・内・断)10Y7/1灰白色 | 2mm以下の長石を多く、1mm以下の石英を少し、2.5mmのチャートを1粒含む | 外)底部回転ヘラ切り後粗いナデ | 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 16 | 21 | 50溝 | 須恵器 杯 | 13.7 3.7 — | 外・断)N7/0灰白色 内)N7/0灰白色～N6/0灰色 | 2～3mmの石英、白色粒を少し、5mmのチャートを1粒、1mm以下の長石、石英を多く含む | 外)粘土紐巻上げ痕あり、 底部回転ヘラ切り後粗いナデ | 平城宮Ⅱ 8世紀前半 |
| | | 17 | | 50溝 | 土師器 杯 | (14.1) 3.2 (9.0) | 外・内)7.5YR7/4にぶい橙色 断)5YR6/6橙色 | 1.5mm以下の長石、石英、1mm以下の赤褐色粒を少し、微細な雲母を多く含む | 外)回転ヘラ切り | 須恵器の製作手法 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 18 | | 50溝 | 須恵器 杯 | — — — | 外・断)7.5Y7/1灰白色 内)N7/0灰白色 | 1.5mm以下の石英、3mm以下の長石を少し、微細な雲母を多く含む | 外)底部回転ヘラ切り | 平城宮Ⅰ～Ⅱか 7世紀末～8世紀前半か |
| | | 19 | | 50溝 | 土師器 杯 | — — — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内・断)7.5YR7/6橙色 | 3mm以下の長石、石英、チャート、赤褐色粒、微細な雲母を多く含む | 外)底部回転ヘラ切り | 須恵器の製作手法 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 |
| | 20 | | 50溝 | 須恵器 杯 | (17.5) 4.2 (12.8) | 外)N5/0灰色 内・断)N6/0灰色 | 2mm以下の石英、長石を多く含む | 外)底部回転ヘラケズリ | 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 | |
| | 21 | 21 | 50溝 | 須恵器 杯 | 15.5 4.1 11.4 | 外・内)N6/0灰色 断)N7/0灰白色 | 3mm以下の石英、長石、チャートを多く、2mmの花崗岩を1粒含む | 外)粘土紐巻上げ痕あり、 底部回転ヘラ切り後軽くナデ | 高台2箇所ひび割れ 平城宮Ⅱ 8世紀前半 | |
| | 22 | 21 | 50溝 | 須恵器 杯 | 15.2 4.6 8.8 | 外・内)5B6/1青灰色 断)10GY6/1緑灰色 | 2mm以下長石を多く、3mmの長石を1粒、2mm以下の石英を少し、微細な雲母を多く含む | 外)底部回転ヘラ切り後粗いナデ | 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 | |
| | 23 | | 50溝 | 須恵器 杯 | — — (8.2) | 外・内・断)N6/0灰色 | 1.5mm以下の石英、長石を多く含む | 外)底部回転ヘラ切りか、 体部回転ヘラケズリ後回転ナデ | 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 | |
| | 24 | | 50溝 | 須恵器 杯 | — — (12.4) | 外・断)N5/0灰色 内)N6/0灰色 | 3mm以下の石英、長石を含む | 外)底部回転ヘラケズリ | 平城宮Ⅰ 7世紀末～8世紀初頭 | |
| | 25 | | 50溝 | 須恵器 杯 | — — (9.6) | 外・内)N6/0灰色 断)N7/0灰白色 | 1mm以下の長石、石英、黒色粒を多く含む | 外)底部回転ナデ | 高台外面にひび入る 平城宮Ⅰ～Ⅱ 7世紀末～8世紀前半 | |
| | 26 | | 50溝 | 須恵器 杯 | — — 8.5 | 外・内)5Y7/1灰白色 断)7.5Y7/1灰白色 | 1.5mm以下の長石、石英、チャート、微細な雲母を多く、2.5mmの長石を1粒含む | 外)底部回転ヘラ切り | やや軟質 平城宮Ⅲ 8世紀前半 | |
| | 27 | 21 | 50溝 | 須恵器 杯 | (10.0) 4.5 6.4 | 外・内・断)7.5Y6/1灰色 | 1.5mm以下の石英、長石、微細な雲母を多く、3mmの長石を1粒含む | 外)回転ヘラ切り後軽く回転ナデ | 平安京Ⅰ新 9世紀前半 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------|-----|------|-------|---------|---------|-------------------|--|--|---|--|
| 08-1調査区 | 15 | 28 | | 50溝 | 須恵器壺 | | 外)N7/0灰白色 内)N5/0灰色 断)N6/0灰色 | 3mm以下の長石、石英を多く含む | 外)底部ヘラ切り | 7世紀 |
| | | 29 | | 50溝 | 須恵器壺 | — — (8.6) | 外)N5/0灰色 内・断)N7/0灰白色 | 2mm以下の石英、長石を少し含む | 外)底部コビオサエ、ナデ | 内底面に灰を被る 8世紀 |
| | | 30 | | 50溝 | 須恵器鉄鉢形鉢 | (18.0)? — — | 外)7.5Y5/1灰色 内・断)7.5Y6/1灰色 | 1mm以下の長石、石英を多く含む | 外・内)回転ナデ後疎らな横方向のヘラミガキ | 8世紀 |
| | | 31 | 21 | 50溝 | 須恵器壺歇脚 | | 外・内・断)7.5Y5/1灰色 | 3mm以下の長石、2mm以下の石英を少し、5mmのチャートを1粒含む | 縦方向のケズリ | 底面五角形状 古代 |
| | 16 | 32 | | 20溝 | 瓦器碗 | (10.9) — — | 外)2.5Y8/1灰白色 2.5YR7/2明赤灰色 内・断)2.5Y8/1灰白色 | 2mm以下の石英、1.5mm以下の長石、微細な雲母、赤褐色粒を多く含む | 外)体部に疎らな縦方向のヘラミガキか不明 内)疎らな横方向のヘラミガキ、暗文 | 炭素の吸着不良、被熱、内面に靱圧痕?あり 楠葉型IV-1~2期か 13世紀後半~14世紀前半 |
| | | 33 | | 50溝上層 | 土師器皿 | (7.4) 1.2 — | 外・内)10YR7/3にぶい黄橙色 断)10YR8/2灰白色 | 1mm以下の長石、石英、雲母を多く、チャートを少し含む | ナデ、口縁部横方向ナデ | 12~13世紀 |
| | | 34 | | 50溝上層 | 土師器皿 | (7.1) 1.2 — | 外)7.5YR6/3にぶい褐色 内)10YR7/3にぶい黄橙色 断)5YR7/3にぶい橙色 | 1mm以下の長石、石英、雲母を多く、チャートを少し含む | 口縁部横方向ナデ 外)底部コビオサエ、ナデ | 12~13世紀 |
| | | 35 | | 50溝上層 | 瓦器碗 | (13.9) — — | 外・内)N5/0灰色 断)7.5Y8/1灰白色 | 微細な石英、長石を少し、2mm大の石英を1粒、微細な雲母を多く含む | 外)粘土接合痕あり 内)疎らな線状暗文 | 楠葉型II-2~3期 13世紀前半 |
| | 36 | | 50溝上層 | 平瓦 | | 外・内・断)N6/0灰色 | 3mm以下の石英、長石、微細な雲母を多く、2mm以下のチャートを少し含む | 凸)コビキ痕、離れ砂、縦方向のナデ 凹)布目圧痕(6本/5mm)、離れ砂、端面取り幅7mm | 須恵質鎌倉時代 | |
| | 17 | 37 | | 51流路 | 須恵器杯蓋 | (16.0) — — | 外・内)N5/0灰色 断)2.5YR5/2灰赤色 | 3mm以下の長石、石英、黒色粒を多く、5mmのチャートを1粒含む | 外)回転ヘラケズリ | 外面に灰を被る 焼け歪大 平城宮III 8世紀前半 |
| | | 38 | | 51流路 | 土師器皿 | (7.2) 1.5 — | 外・内)10YR7/3にぶい黄橙色 断)10YR7/2にぶい黄褐色 | 1mm以下の長石、石英、微細な雲母を多く、2mm以下の赤褐色粒を少し含む | 外)コビオサエ、ナデ | 12~13世紀 |
| | | 39 | | 51流路 | 土師器皿 | (7.3) — — | 外・内・断) 10YR7/2にぶい黄褐色 | 1mm以下の長石、石英、チャート、赤褐色粒を少し、微細な雲母を多く含む | 外)コビオサエ、ナデ 内)工具の当たり? | 12~13世紀 |
| | | 40 | | 51流路 | 土師器皿 | (8.7)? — — | 外・内)7.5YR7/4にぶい橙色 断)7.5YR8/3浅黄褐色 | 1.5mm以下の石英、長石、赤褐色粒、微細な雲母を多く含む | ナデ | 12~13世紀 |
| | | 41 | | 51流路 | 瓦器碗 | | 外・内)N3/0暗灰色 断)N8/0灰白色 | 1mm以下の石英を少し含む | 外)口縁部に僅かにヘラミガキ 内)暗文 | 楠葉型II-3期~III-1期 12世紀後半~13世紀前半 |
| | | 42 | | 51流路 | 丸瓦 | | 外)N4/0灰色 内)N3/0暗灰色 断)7.5Y7/1灰白色 | 3mm以下の石英、長石、1.5mm以下のチャート、微細な雲母を多く含む | 凸)縦方向のナデ 凹)布目圧(4本/5mm) 玉縁面取り幅4mm、23mm、側面の面取り幅23mm | 室町時代 |
| | 19 | 44 | | 中世洪水砂層 | 土師器杯 | (15.4) — — | 外・内・断)5YR6/6褐色 | 1mm以下の石英、長石、黒色粒、雲母を多く、2mm以下の赤褐色粒を少し含む | 外)疎らな横方向のヘラミガキ 内)連弧紋、放射状暗文 | 平城宮II 8世紀前半 |
| | | 45 | | 中世洪水砂層 | 土師器杯 | | 外・内)5YR6/6褐色 断)5YR6/4にぶい橙色 | 2.5mm以下の白色粒、1mm以下の長石、石英、雲母、2mm以下の赤褐色粒を多く含む | 外)疎らな横方向ヘラミガキ 内)連弧紋、放射状暗文 | 平城宮II 8世紀前半 |
| | | 46 | | 中世洪水砂層 | 土師器杯 | (16.7) — — | 外・内)5YR7/6褐色 断)7.5YR7/6褐色 | 1mm以下の石英、長石、1.5mm以下のチャートを少し含む | 外)底部ヘラケズリ 内)放射状暗文 | 平城宮III 8世紀前半 |
| | | 47 | | 中世洪水砂層 | 土師器杯 | — — (13.0) | 外・内)5YR6/6褐色 断)5YR6/4にぶい橙色 | 3mm以下の長石を僅かに、2mm以下の石英、チャート、赤褐色粒を少し含む | 内)螺旋状暗文あり? | 平城宮IIIか 8世紀前半 |
| | | 48 | | 中世洪水砂層 | 土師器碗 | (11.6) — — | 外)10YR8/3浅黄褐色 内)10YR7/3にぶい黄褐色 断)10YR8/2灰白色 | 1mm以下の石英、長石、雲母、1.5mm以下のチャートを多く、5mm以下の赤褐色粒を少し含む | 外)ナデ 内)板状工具による横方向のナデ | 平城宮I 7世紀末~8世紀初頭 |
| | | 49 | 21 | 中世洪水砂層 | 土師器鍋 | (8.9) — — | 外)7.5YR8/3浅黄褐色 内)7.5YR8/4浅黄褐色 断)7.5YR7/4にぶい橙色 | 1.5mm以下の長石、石英、チャート、微細な雲母を多く含む | 外)コビオサエ、ナデ 内)横方向のハケ後ナデ | 8世紀後半 |
| | | 50 | | 中世洪水砂層 | 土師器鍋 | (19.2) — — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)7.5YR8/4浅黄褐色 断)7.5YR6/4にぶい褐色 | 1mm以下の長石、石英、黒色粒、雲母を多く、赤褐色粒を少し含む | 横方向ナデ | 8世紀か |
| | | 51 | | 中世洪水砂層 | 土師器鍋 | (24.0) — — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)10YR7/3にぶい黄褐色 断)10YR8/3浅黄褐色 | 2mm以下の長石、石英、微細な雲母を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む | 外)斜めないし縦方向のハケ 内)横方向のハケ | 口縁端部に黒斑あり 8世紀前半 |
| | | 52 | | 中世洪水砂層 | 土師器甕 | (19.4)? — — | 外・内)10YR7/4にぶい黄褐色 断)7.5YR7/4にぶい橙色 | 2mm以下の長石、微細な雲母を多く、1.5mm以下の石英を少し含む | 外・内)横方向のナデ | 8世紀か |
| | | 53 | | 中世洪水砂層 | 土師器甕 | (28.0) — — | 外)10YR8/4浅黄褐色 内)10YR8/3浅黄褐色 断)7.5YR8/4浅黄褐色 | 1mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く、赤褐色粒を少し含む | 外)体部は斜め方向のハケ後ナデ 内)体部は横方向のハケ | 8世紀 |
| | | 54 | 21 | 中世洪水砂層 | 土師器鍋 | | 外・内)7.5YR7/6褐色 断)7.5YR8/3浅黄褐色 | 3mm以下の石英、長石を多く、3mm以下のチャート、赤褐色粒を少し含む | 外)縦方向のハケ 内)コビオサエ後一部板状工具によるナデ | 把手貼り付け 8世紀 |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------|-----|------|--------|---------|------------------|--|---|--|---------------------------------------|---|
| 08-1調査区 | 19 | 55 | | 中世洪水砂層 | 土師器 甕 | | 外・内)10YR7/3にぶい黄橙色 断)10YR7/2にぶい黄橙色 | 1.5mm以下の石英、長石、雲母を多く、1mm以下の赤褐色粒を少し含む | ナデ | 把手外面に一部煤付着 平安京 I 8世紀終り～9世紀前半 |
| | | 56 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯蓋 | つまみ径:3.0 | 外・内・断)N7/0灰白色 | 1mm以下の長石、石英を少し、3.5mmの長石を1粒、2mmの石英を1粒含む | 外)回転ヘラケズリ | 外面に灰を被る 平城宮 II～III 8世紀前半 |
| | | 57 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯蓋 | (17.8) — — | 外)5Y7/1灰白色 内・断)2.5Y7/2灰黄色 | 2mm以下の石英、長石、チャート、微細な雲母を多く含む | 外)天井部回転ヘラケズリ | 平城宮 II 8世紀前半 |
| | | 58 | 21 | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯蓋 | つまみ径:3.0 | 外・断)2.5Y7/2灰黄色 内)2.5Y7/1灰白色 | 2mm以下の石英、長石、微細な雲母を含む | 外)天井部回転ヘラケズリ | 焼け至大、外面に直径11cm重ね焼跡 平城宮 II 8世紀前半か |
| | | 59 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯 | (10.6) 3.0 — | 外)7.5Y5/1灰色 内)7.5YR6/3にぶい褐色 断)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2.5mm以下の石英、長石、赤褐色粒を少し含む | 外)回転ヘラ切り後僅かにナデ | 平城宮 I 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 60 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯 | (12.4) — — | 外・内・断)N7/0灰白色 | 2mm以下の長石、石英を多く、1mm以下のチャートを少し含む | 外)回転ヘラケズリ | 口縁部1箇所ひび割れ 平城宮 II 8世紀前半 |
| | | 61 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯 | (20.6) — — | 外・内・断)N6/0灰色 | 1mm以下の石英、長石を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む | 外)回転ナデ、底部回転ヘラケズリ後ナデ 内)回転ナデ | 平城宮 II 8世紀前半 |
| | | 62 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯 | (17.8) 4.8 (12.2) | 外・内・断)N5/0灰色 | 2～3mmの長石、石英を僅かに、1mm以下の長石、石英を多く含む | 外)回転ヘラ切り後軽クナデ | 平城宮 III 8世紀前半 |
| | | 63 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 杯 | — — (8.0) | 外・内・断)N6/0灰色 | 1mm以下の長石、石英を多く、チャートを僅かに含む | 外)底部ヘラ切り後軽クナデ | 平城宮 IIIか 8世紀前半か |
| | | 64 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 壺 | — — (9.6) | 外)N5/0灰色 内・断)N6/0灰色 | 3mm以下の長石、石英、黒色粒を少し含む | 外)底部に粘土紐巻上げ痕あり、底部回転ヘラ切り後軽ク回転ナデ | 平城宮 I か 7世紀末～8世紀初頭か |
| | | 65 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 鉄鉢形鉢 | (18.0) — — | 外)5PB4/1暗青灰色 内)5PB5/1青灰色 断)5PB6/1青灰色 5RP5/1紫灰色 | 1mm以下の長石を少し、1.5mmの長石を1粒含む | 外・内)回転ナデ後疎らな横方向のヘラミガキ | 8世紀 |
| | | 66 | | 中世洪水砂層 | 土師器 皿 | (8.2) 1.2 — | 外・内・断) 7.5YR7/4にぶい橙色 | 1mm以下の雲母、赤褐色粒を多く含む | 外)底部ユビオサエ後ナデ | 12～13世紀 |
| | | 67 | | 中世洪水砂層 | 土師器 皿 | (13.2) — — | 外・内)10YR8/4浅黄橙色 断)10Y4/1灰色 | 2mm以下の長石、石英、1mm以下の黒色粒、微細な雲母を多く、2mm以下のチャートを少し含む | 外)ユビオサエ、ナデ | 12～13世紀か |
| | | 68 | | 中世洪水砂層 | 土師器 皿 | (12.8) 2.2 — | 外・内)10YR5/2灰黄褐色 断)5Y4/1灰色 | 1mm以下の長石、石英、雲母を多く含む | 外)ユビオサエ、ナデ | 13世紀か |
| | | 69 | | 中世洪水砂層 | 土師器 皿 | (12.8) 2.1 — | 外)10YR8/2灰白色 内)7.5YR8/3浅黄橙色 断)10Y4/1灰色 | 1mm以下の長石、石英を少し、1.5mm以下の赤褐色粒、微細な雲母を多く含む | 外)ユビオサエ、ナデ | 12～13世紀 |
| | | 70 | | 中世洪水砂層 | 土師器 皿 | (13.4) 2.4 — | 外・内)7.5YR8/3浅黄褐色 断)10YR8/3浅黄褐色 | 2mm以下の石英、長石、チャート、微細な雲母を多く、赤褐色粒を少し含む | 外)ユビオサエ、ナデ | 13世紀 |
| | | 71 | | 中世洪水砂層 | 瓦器 椀 | (13.6) — — | 外・内)2.5Y2/1黒色 断)2.5Y8/1灰白色 | 微細な長石、黒色粒を多く含む | 外)体部に疎らな横方向のヘラミガキ 内)やや疎らな横方向のヘラミガキ | 口縁部内面に沈線1条 大和型 III-A(新)期か 12世紀後半～13世紀前半 |
| | | 72 | | 中世洪水砂層 | 瓦器 椀 | (14.8) — — | 外・内)N3/0暗灰色 断)2.5Y8/2灰白色 | 1mm以下の長石、黒色粒を少し含む | 外)口縁部に疎らなヘラミガキ 内)やや疎らな横方向のヘラミガキ | 口縁部内面に浅い沈線1条 楠葉型 II-3期～III-2期 12世紀後半～13世紀前半か |
| | | 73 | | 中世洪水砂層 | 瓦器 椀 | — — (4.4) | 外)N4/0灰色 内・断)N8/0灰白色 | 2mm以下のチャートをごく僅かに、1mm以下の石英、長石を少し含む | 内)体部に疎らな圏線状暗文、見込み螺旋状暗文 | 楠葉型 III-3期 13世紀半ば |
| | 74 | | 中世洪水砂層 | 須恵器 鉢 | (25.0) — — | 外・内)2.5GY6/1オリーブ灰色 断)5GY6/1オリーブ灰色 | 1.5mm以下の長石、石英、チャートを多く、微細な雲母を少し含む | 回転ナデ | 体部下方内面は摩滅 第 III 期第 3 段階 14世紀後半 | |
| | 75 | | 中世洪水砂層 | 陶器 鉢 | — — (13.1) | 外)2.5Y7/1灰白色 内・断)2.5Y7/2灰黄色 | 2mm以下の長石、石英、微細な雲母を多く、3mmの長石を1粒、2.5mmの黒色粒を1粒含む | 外)底直上を横方向にヘラケズリ 内)横方向ナデ | 常滑 片口鉢 II 類 5 型式 13世紀前半 | |
| | 20 | 76 | 1溝 | 陶器 壺 | — — (6.6) | 外)N6/0灰色 内)5YR5/2灰褐色 断)N6/0灰色 5YR4/2灰褐色 | 3mm以下の石英、長石、チャート、赤褐色粒を多く含む | 外)体部静止ヘラケズリ、底部回転糸切り痕か 内)回転ナデ | 備前 お歯黒壺か 近世か | |
| | | 77 | 耕土層 | 瓦質 | — — (9.4) | 外)N4/0灰色 内)2.5Y5/1黄灰色 断)5Y6/1灰色 | 3mm以下の石英、長石、微細な雲母を多く、1.5mm以下のチャート、赤褐色粒を極少し含む | 外)ユビオサエ、ナデ 内)ハケ | 中世 | |
| | | 78 | 近世洪水砂層 | 須恵器 杯 | — — (12.2) | 外・内・断)10Y6/1灰色 | 2mmの長石、石英、雲母、黒色粒を少し、微細な長石、石英を多く含む | 外)底部回転ヘラ切り後軽クナデ | 平城宮 III 8世紀前半 | |
| | | 79 | 近世洪水砂層 | 土師器 甕 | (23.6) — — | 外・内)10YR7/2にぶい黄橙色 断)10YR7/3にぶい黄橙色 | 2mm以下の長石、石英、雲母を多く、1mm以下のチャートを少し含む | 外)体部縦方向の粗いハケ 内)口縁部横方向の粗いハケの後横方向ナデ | 8世紀 | |
| | | 80 | 近世洪水砂層 | 土師器 甕 | (28.0) — — | 外・内)10YR7/4にぶい黄褐色 断)10YR8/3浅黄褐色 | 3mm以下の長石、石英、微細な雲母を多く、4.5mmの石英を1粒、1mm以下のチャートを少し含む | 外)体部縦方向のハケ 内)頸部横方向のハケ | 8世紀 | |
| | | 81 | 近世洪水砂層 | 土師器 杯 | (15.0) — — | 外・内)7.5YR7/3にぶい橙色 断)10YR7/2にぶい黄褐色 | 微細な長石、石英、雲母を多く含む | 外・内)横ナデ、ヘラミガキ? 残存状態不良 | 平安京 I か 9世紀前半か | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 | |
|---------|-----|------|--------|---------|-------------------|-----------------------------|--|---|---|--|------------------|
| 08-1調査区 | 20 | 82 | | 近世洪水砂層 | 土師器皿 | (8.4) 1.3 — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)10YR8/3浅黄橙色 断)10YR7/3にぶい黄橙色 | 1.5mm以下の石英、長石、1mm以下の赤褐色粒、微細な雲母を多く含む | ユビオサエ、ナデ | 器壁が薄手 12~13世紀 | |
| | | 83 | 21 | 近世洪水砂層 | 土師器皿 | 8.1 1.3 — | 外)7.5YR8/4浅黄橙色 内)7.5YR7/3にぶい橙色 断)7.5YR8/3浅黄橙色 | 2mm以下の石英、長石を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む | ユビオサエ、ナデ | 底部外面に粘土接合痕 残 12~13世紀 | |
| | | 84 | | 近世洪水砂層 | 土師器皿 | (12.7) 1.9 — | 外・内)7.5YR8/3浅黄橙色 断)N3/0暗灰色 | 1mm以下の長石、石英、雲母を多く、チャートを少し含む | 外)ユビオサエ、ナデ | 12~13世紀 | |
| | | 85 | | 近世洪水砂層 | 瓦器椀 | (11.8) — — | 外・内・断)2.5Y8/1灰白色 | 1mm以下の長石、石英、雲母、黒色粒を少し含む | 表面摩滅のため詳細不明 | 楠葉型III-3期か 13世紀半ばか | |
| | | 86 | | 近世洪水砂層 | 瓦器椀 | (13.8) — — | 外・内)N4/0灰色 断)N8/0灰白色 | 1mm以下の長石を少し、1.5mmの黒色粒を1粒含む | 外)口縁部に粘土を貼り足した補修痕あり、体部に極僅かにヘラミガキ 内)やや密な圏線状暗文 | 口縁部内面に沈線1条 楠葉型III-1~2期 13世紀前半 | |
| | | 87 | | 近世洪水砂層 | 瓦器椀 | (14.1) 4.3 (4.9) | 外・内)2.5Y2/1黒色 断)2.5Y8/1・8/2灰白色 | 1mm以下の石英、赤褐色粒を少し含む | 外)口縁部にヘラミガキ 内)やや密な横方向の暗文 | 口縁部内面に沈線の 痕跡 楠葉型III-1期 12 世紀末~13世紀初頭 | |
| | | 88 | | 近世洪水砂層 | 瓦器椀 | (15.0) — — | 外・内)N4/0灰色 断)N8/0灰白色 | 1mm以下の黒色粒を少し含む | 外)体部ユビオサエ後軽く ナデ 内)細くて疎らな圏線状暗文 | 楠葉型III-2~3期 13世紀前半 | |
| | | 89 | | 近世洪水砂層 | 瓦器椀 | (12.3) — — | 外)N4/0灰色 内)N5/0灰色 断)7.5Y8/1灰白色 | 1mm未満の雲母、黒色粒を少し含む | 外)体部に粘土組接合痕 あり、口縁部に疎らなヘラ ミガキ 内)やや密な横方向のヘラ ミガキ | 表面摩滅のため不鮮明 楠葉型III-2~3期 13世紀前半 | |
| | | 90 | | 近世洪水砂層 | 瓦器椀 | — — (5.0) | 外・内)N4/0灰色 内)N8/0灰白色 | 1mm以下の黒色粒を少し含む | 内)体部に圏線状暗文、見 込み螺旋状暗文 | 楠葉型III-3期 13世紀半ば | |
| | | 92 | | 近世洪水砂層 | 瓦質土器甕 | (44.2)? — — | 外・内)N3/0暗灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 4mm以下の石英、3mm以下の長石を多く含む | 横方向ナデ | 14世紀前半 | |
| | | 93 | | 近世洪水砂層 | 磁器(染付)碗 | (10.0) 5.0 (4.2) | 外)5GY8/1灰白色 5BG4/1暗灰色 内)5GY8/1灰白色 断)10Y8/1灰白色 | 密 | 豊付は無軸 | 二重網目紋 高台内軸有 18世紀前半 | |
| | | 94 | | 近世洪水砂層 | 磁器(国産青磁)皿 | | 軸)2.5GY7/1明オリブ灰色 断)7.5Y8/1灰白色 | 密 | 施軸 | 内面に片切り彫りの紋様 18世紀前半 | |
| 08-2調査区 | 33 | 96 | 22 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | 軒丸径: 15.0 | 凸)N5/0灰色 凹)N6/0灰色 断)N7/0灰白色 | 3mm以下の石英を多く、長石、5mm以下のチャートを少し含む | 凹)布目、ヘラによるオサエ | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | | 97 | 22 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | 幅:14.8 | 凸)N5/0灰色 凹)N6/0灰色 断)5YR7/1明褐色 | 3mm以下の長石を多く含む | 凹)コビキ痕 | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | | 98 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 凸)N4/0灰色 凹)5RP4/1暗紫灰色 断)7.5Y7/1灰白色 | 2mm以下の石英を少し、3mm以下の長石を含む | 凹)布目 | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | | 99 | 22 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | 軒丸径: 15.0 | 外・内)5RP5/1紫灰色 断)2.5Y6/1黄灰色 | 3mm以下の長石、2mm以下のチャートを少し含む | ナデ | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | | 100 | 22 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 外)N5/0灰色 内)5P5/1紫灰色 断)10YR7/1灰白色 | 1.2mm以下の長石を多く、2mm以下の石英、チャートを少し含む | ナデ | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | | 34 | 101 | 22 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | 長さ:37.5 幅:15.2 | 凸)N5/0灰色 凹)5RP5/1紫灰色 断)10R6/1赤灰色 | 2mm以下の石英を少し、3mm以下の長石、1mm以下のチャートを多く含む | 凹)ヘラケズリ、布目、コビキ痕、吊り紐痕 | 左巻き三巴紋 16世紀後半 |
| | | | 102 | 22 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | 幅:15.1 | 凸)N6/0灰色 凹)5P6/1紫灰色 断)7.5YR7/1明褐色 | 3mm以下の長石、1.5mm以下の石英、チャートを多く含む | 凹)布目、吊り紐痕、面取り | 左巻き三巴紋 16世紀後半 |
| | | 35 | 103 | 23 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:29.0 幅:25.0 | 凸・凹)N4/0灰色 | 2mm以下の長石、1mm以下のチャート、0.5mmの雲母を少し、2mm以下の石英を僅かに含む | 凸)縦方向のナデ、木杵痕 凹)縦方向ナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| | | | 104 | 23 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:28.5 幅:25.0 | 凸・凹)N5/0灰色 | 3mm以下の長石を少し、1mm以下のチャートを多く含む | 凹)布目 | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| | | | 105 | 23 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 幅:25.0 | 凸・凹)N5/0灰色 断)N7/0灰白色 | 3mm以下の長石、1.5mm以下の石英、1mm以下のチャートを少し、0.5mmの雲母を僅かに含む | 凸)縦方向のナデ後横方向のナデ 凹)縦方向のナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| | | | 106 | 23 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | | 凸・凹)N4/0灰色 断)10YR7/1灰白色 | 1mm以下の長石、2mm以下のチャートを少し、0.5mmのシャモットを僅かに含む | 凹)縦方向のナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| | | | 107 | 23 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | | 凸)N5/0灰色 凹)N6/0灰色 断)10YR7/1灰白色 | 1mm以下の長石、チャート、3mm以下の石英を少し、0.5mmの雲母を僅かに含む | 凹)縦方向のナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| 108 | 23 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:28.5 | 凸・凹)N4/0灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 3mm以下の長石、石英、1mm以下のチャートを多く含む | 凹)縦方向のナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 | | |
| 109 | 23 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | | 凸・凹)N4/0灰色 断)7.5YR8/1灰白色 | 3mm以下の長石、1mm以下のチャートを少し含む | 凹)縦方向のナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 | | |
| 36 | 110 | 24 | 第1面3建物 | 丸瓦 | 長さ:30.3 幅:11.9 | 凸・凹)N6/0灰色 | 1.5mm以下の長石、チャートを含む | 凹)布目、吊り紐痕、コビキ痕 | | | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------------------|-----|------|------------|------------|-------------------|---------------------------------------|---|--|-----------------------------|----|
| 08 2 調査区 | 36 | 111 | 24 | 第1面 3建物 | 丸瓦 | 長さ:33.7 幅:14.3 | 凸・凹)N6/0灰色 | 1mm以下の長石を少し、2mm以下のチャートを含まむ | 凹)布目、吊り紐痕、コビキ痕 | |
| | | 112 | 24 | 第1面 3建物 | 丸瓦 | 長さ:35.0 幅:15.5 | 凸)N3/0暗灰色 凹)N4/0灰色 | 3mm以下の長石、2mm以下の石英、金雲母を含まむ | 凹)布目、吊り紐痕、コビキ痕 | |
| | | 113 | 24 | 第1面 3建物 | 丸瓦 | 幅:15.2 | 凸・凹)N6/0灰色 断)10YR6/1褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、石英、チャートを少し含まむ | 凹)ヘラケズリ、布目、吊り紐痕、コビキ痕、滑り止め付 | |
| | 37 | 114 | 24 | 第1面 3建物 | 平瓦 | 長さ:29.3 幅:22.5 | 凸)N5/0灰色 凹)N4/0灰色 | 3mm以下の長石、石英を多く、チャート、黒雲母を少し含まむ | 丹念なナデ消しの為調整不明 | |
| | | 115 | 24 | 第1面 3建物 | 平瓦 | 長さ:29.2 幅:22.5 | 凸)5YR6/1褐灰色 凹)N6/0灰色 | 3mm以下の長石、チャート、2mm以下の石英、黒雲母を多く含まむ | 丹念なナデ消しの為調整不明 | |
| | | 116 | 第1面 3建物 | 平瓦 | 長さ:29.0 幅:22.6 | 凸・凹)N6/0灰色 断)5YR7/1明褐灰色 | 2mm以下の長石、1mm以下の石英、3mm以下のチャートを多く、黒雲母を少し含まむ | 丹念なナデ消しの為調整不明 | | |
| | | 117 | 第1面 3建物 | 平瓦 | 幅:22.8 | 凸・凹)N5/0灰色 断)2.5YR7/1明赤灰色 | 3mm以下の長石、石英、2mm以下のチャート、0.5mmの雲母を少し含まむ | 丹念なナデ消しの為調整不明 | | |
| | 38 | 118 | 第1面 3建物 | 行基葺丸瓦 | 幅:14.7 | 凸)N6/0灰色 凹)N5/0灰色 断)5YR6/1褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、2mm以下の石英を少し含まむ | 凹)コビキ痕 | | |
| | | 119 | 25 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 凸)10YR6/1褐灰色 凹)N6/0灰色 断)10YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石を多く、チャート、2mm以下の石英を少し含まむ | 端面に竹管状工具による○印の刻印 | |
| | | 120 | 25 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 凸・凹・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石を多く、チャート、3mm以下の石英、1mm以下の雲母を少し含まむ | 端面に竹管状工具による○印の刻印 | |
| | | 121 | 25 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 凸・凹)N6/0灰色 断)2.5Y6/1黄灰色 | 1mm以下の石英を少し、3mm以下の長石、チャートを多く含まむ | 端面に竹管状工具による○印の刻印 | |
| | | 122 | 25 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 凸・凹・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石を多く、1mm以下の石英、チャートを少し含まむ | 端面に竹管状工具による○印の刻印 | |
| | | 123 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 凸・断)7.5YR7/2明褐灰色 凹)7.5YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石、チャートを少し、2mm以下のシャモットを含まむ | 端面に竹管状工具による○印の刻印 | | |
| | | 124 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 凸・凹・断)10YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石、チャート、3mm以下の石英を少し、1mm以下の炭化物を含まむ | 端面に竹管状工具による○印の刻印 | | |
| | | 125 | 第1面 3建物 | 隅瓦 | | 凸・凹)5RP5/1紫灰色 断)7.5YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、石英を少し、0.5mmの黒雲母を多く、金雲母を僅かに含まむ | 凸)縦方向のナデ | | |
| | | 126 | 25 | 第1面 3建物 | 面戸瓦 | | 凸・凹)N5/0灰色 断)10YR7/1灰白色 | 1mm以下の長石を少し、3mm以下のチャートを多く含まむ | 凹)布目 | |
| | | 127 | 第1面 3建物 | 面戸瓦 | | 凸)N3/0暗灰色 凹)N6/0灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 3mm以下の長石、5mm以下のチャート、2mm以下の石英を少し含まむ | 凹)布目、釣り紐痕 | | |
| | 128 | 25 | 第1面 3建物 | 面戸瓦 | | 凸・凹)N5/0灰色 断)10YR6/1褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、2mm以下の石英、チャートを少し含まむ | 凹)布目 | | |
| | 39 | 129 | 25 | 第1面 3建物 | 雁振瓦 | | 凸)N6/0灰色 凹)N4/0灰色 断)5Y7/1灰白色 | 3mm以下の長石、2mm以下の石英、4mm以下のチャートを多く含まむ | 凸)ナデ 凹)コビキ痕 | |
| | | 130 | 第1面 3建物 | 雁振瓦 | | 凸・凹)N6/0灰色 断)5YR7/1明褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、1mm以下の長石、3mm以下のチャートを少し含まむ | 凸)ナデ 凹)コビキ痕 | | |
| | | 131 | 第1面 3建物 | 雁振瓦 | | 凸)N6/0灰色 凹)N5/0灰色 断)10YR7/1灰白色 | 1mmの石英、2mm以下の長石を多く、5mmのチャートを1粒含まむ | 凸)細かいヘラケズリ、ナデ 凹)コビキ痕 | | |
| | | 132 | 第1面 3建物 | 雁振瓦 | 幅:23.9 | 凸)5Y7/1灰白色 凹)N6/0灰色 断)10Y7/1灰白色 | 2mm以下の長石、1.5mm以下の石英、5mm以下のチャートを含まむ | 凸)ヘラケズリ、ナデ 凹)コビキ痕 | | |
| | 40 | 133 | 26 | 第1面 3建物 | 行基葺丸瓦 | | 凸)N5/0灰色 凹)5YR7/1明褐灰色 断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石、3mm以下の石英、1mm以下のチャートを少し含まむ | 凸)文字ヘラ書き | |
| | | 134 | 25 | 第1面 3建物 | 瓦(水煙形) | | 凸)N5/0灰色 凹)5YR7/1明褐灰色 断)N6/0灰色 | 1mm以下の長石、石英、チャートを含まむ | ケズリ後ナデ | |
| | | 135 | 26 | 第1面 3建物 | 隅木蓋瓦 | タテ:22.2 | 外)N6/0灰色 内)5YR6/1褐灰色 断)N7/0灰白色 | 3mm以下の長石、石英を多く、5mm以下のチャートを少し含まむ | 内)ケズリ、強いナデ | |
| | | 136 | 第1面 3建物 | 平瓦 | | 外・内)N6/0灰色 断)7.5YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石を少し、3mm以下の石英を多く含まむ | 外・内)ナデ | | |
| | | 137 | 第1面 3建物 | 瓦 | | 外)N6/0灰色 内)N5/0灰色 断)7.5YR6/2灰褐色 | 3mm以下の長石を多く、1mm以下の石英、2mm以下のチャートを少し含まむ | 外・内)ナデ | | |
| 41 | 138 | 26 | 第1面 3建物 | 軒丸瓦 | 軒丸径:10.0 | 凸)N6/0灰色 凹・断)5YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、チャート、1mmの石英を少し、0.5mmの雲母を僅かに含まむ | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------|-----|------|---------|---------|-------------------------|---|---|---|-------------------------|-----------------------------|
| 08-2調査区 | 41 | 139 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 凸・凹・断)10YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、1mm以下の石英を少し含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 140 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 凸・断)10YR6/1褐灰色 凹)5RP6/1紫灰色 | 1mm以下の長石、2mm以下の石英を少し、0.5mmの雲母を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 141 | 26 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 凸・凹・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石を多く、石英、4mm以下のチャートを少し、0.5mmの雲母を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 142 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 凸・断)5YR6/1褐灰色 凹)N5/0灰色 | 2mm以下の長石を多く、石英を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 143 | 26 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 外・内・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石を多く、石英、チャートを少し、雲母を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 144 | 26 | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 外・内・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石、4mm以下のチャートを少し、3mm以下の石英を多く含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 145 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 外・内・断)10YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、1mm以下の石英を少し、4mm以下のチャートを多く含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 146 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | 幅:10.0 | 凸・断)10YR6/1褐灰色 凹)N7/0灰白色 | 3mm以下の長石を多く、1.5mm以下の金雲母、1mmの石英を少し含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 147 | | 第1面3建物 | 軒丸瓦 | | 凸)N6/0灰色 凹)7.5YR6/1褐灰色 断)10YR6/1褐灰色 | 3mm以下の長石、1mmの金雲母を多く、石英を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 小型菊花紋 山崎編年中世Ⅲ期 13世紀後半 |
| | | 148 | 26 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 幅:15.6 | 凸)N6/0灰色 凹)10YR6/1褐灰色 断)10YR7/1灰白色 | 0.5mmの長石、雲母、3mm以下の石英を少し、チャートを多く含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | | 149 | 26 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 幅:16.5 | 凸)7.5YR6/1褐灰色 凹)10YR6/1褐灰色 断)10YR7/1灰白色 | 3mm以下の長石を多く、1mmの石英を少し、シャモット、雲母、チャートを僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | | 150 | 26 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 幅:16.2 | 凸)N6/0灰色 凹)10YR6/1褐灰色 断)10YR7/1灰白色 | 3mm以下の長石、2mm以下のチャートを多く、シャモット、雲母を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | | 151 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:19.9 | 凸)10Y7/1灰白色 凹)10Y6/1灰色 断)5YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、チャートを少し、石英を多く含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | | 152 | 26 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:20.0 幅:15.5 | 凸・凹)N6/0灰色 断)10YR7/1灰白色 | 2mm以下の長石、石英、1mm以下のチャートを多く含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | | 153 | 26 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 幅:16.3 | 凸・凹)N6/0灰色 断)10YR7/1灰白色 | 3mm以下のチャートを多く、2mm以下の石英、長石、シャモットを僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | 154 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:19.9 | 凸)7.5Y6/1灰色 凹)10YR6/1褐灰色 断)7.5YR7/1明褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、2mm以下の石英、1mm以下のチャートを少し、斑粒の様なものを含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 | |
| | 155 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 長さ:19.8 | 凸)5YR6/1褐灰色 凹)10Y7/1灰白色 断)N7/0灰白色 | 3mm以下の長石、チャートを多く、石英、シャモット、雲母を僅かに含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 | |
| | 156 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | | 凸・凹)N6/0灰色 断)7.5YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石、石英、チャート、0.5mmの雲母を少し含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 | |
| | 157 | 26 | 第1面3建物 | 軒平瓦 | 幅:16.0 | 凸)N6/0灰色 凹)断)10Y6/1褐灰色 | 3mm以下の長石、石英を多く、チャートを少し含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 二次焼成あり 13世紀後半 | |
| | 158 | | 第1面3建物 | 軒平瓦 | | 凸)10YR7/1灰白色 凹)5Y7/1灰白色 断)2.5Y7/2灰黄色 | 3mm以下の長石、0.5mm以下の雲母を少し、3mm以下の石英、4mm以下のチャートを多く含む | 凸)ナデ 凹)布目痕 | 剣頭紋 13世紀後半 | |
| | 159 | | 第1面3建物 | 土師器皿 | (9.0) 2.1 — | 外)2.5YR7/3淡赤橙色 内)10R6/3にぶい赤橙色 断)5YR6/2灰褐色 | 1mm以下の長石、0.5mmの石英、雲母を少し、チャートを僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 16世紀 | |
| | 160 | 27 | 第1面3建物 | 土師器皿 | 6.6 1.4 — | 外・内)7.5YR7/2明褐灰色 | 2mmの石英を少し、1mm以下の長石、金雲母を含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ、 ナデ 内)ナデ | 油の炭化物付着、灯明皿 16世紀後半 | |
| | 161 | 27 | 第1面3建物 | 土師器皿 | 6.6 1.2 — | 外)7.5YR7/2明褐灰色 内)2.5YR7/3淡赤橙色 | 3mm以下のチャート、0.5mmの雲母を少し、1mm以下の石英、シャモットを僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ハケメ後ナデ | 油の炭化物付着、灯明皿 16世紀後半 | |
| | 162 | | 第1面3建物 | 瓦質土器火舎 | (16.5) 3.1 (17.6) | 外・内)N6/0灰色 断)7.5YR7/2明褐灰色 | 0.5mmの砂粒を含む | 外)ナデ?、ミガキ、2条沈線 内)ヨコナデ、ケズリ? | 14~15世紀 | |
| | 163 | | 第1面3建物 | 瓦質土器火舎 | — — (17.8) | 外・内)N6/0灰色 断)7.5YR7/2明褐灰色 | 0.5mmの砂粒を含む | 外)ヨコナデ、縦方向のミガキ、沈線? 内)ケズリ後ナデ、ユビオサエ | 14~15世紀 | |
| | 178 | 27 | 第1面29土坑 | 軒丸瓦 | 軒丸径:15.0 幅:14.3 | 凸・凹)N6/0灰色 断)5YR7/2明褐灰色 | 3mm以下の長石、2mm以下のチャートを多く、石英を少し含む | 凸)7mm間隔の非常に丁寧な縦方向のナデ 凹)布目、釣り紐痕 | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | 179 | 27 | 第1面29土坑 | 軒丸瓦 | 軒丸径:15.0 | 凸・凹)N5/0灰色 断)10YR7/2にぶい黄橙色 | 3mm以下の長石、石英を多く、チャートを少し含む | 凸)ナデ 凹)布目ナデ消し | 左巻き三巴紋 16世紀後半 | |
| | 180 | | 第1面29土坑 | 丸瓦 | 幅:15.7 | 凸・凹)N6/0灰色 断)7.5Y7/1灰白色 | 1mm以下の長石、チャートを少し、3mm以下の石英を多く含む | 凸)1.0cm弱間隔の丁寧な縦方向のナデ、細かい面取り 凹)布目、釣り紐痕 | | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------|-----|------|-------------|-------------|--------------------|---|--|---|--|---------------------------------------|
| 08-2調査区 | 44 | 181 | | 第1面 29土坑 | 軒平瓦 | | 凸・凹)5RP6/1紫灰色 断)10YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石を多く、2mm以下の石英、1mm以下のチャート、0.5mmの雲母を少し含む | 凹)布目 | 剣頭紋 13世紀後半 |
| | 49 | 190 | カラ13 | 第1面 2墓 | 青磁碗 | 16.8 7.5 6.2 | 外)5Y5/2灰オリーブ色 内)5Y6/1灰色 底)10YR6/2灰黄褐色 | 密 | 外)無紋 内)口縁部下に3条の沈線、飛雲紋、見込み部に草花紋 | 大宰府分類 龍泉窯系I-4a類 12世紀中頃～後半 |
| | | 191 | カラ13 | 第1面 2墓 | 青磁碗 | 16.0 7.0 6.0 | 外)5Y6/1灰色 内)5GY5/1オリーブ灰色 断)10YR5/1褐灰色 | 密 | 内)飛雲紋、見込み部無紋 | 大宰府分類 龍泉窯系I-4a類 12世紀中頃～後半 |
| | | 192 | カラ13 | 第1面 2墓 | 青磁皿 | 10.0 2.7 1.9 | 外・内)5G7/1明緑灰色 | 密 | 外)無紋、口縁一部打ち欠き | 大宰府分類 龍泉窯系I-2a類 12世紀中頃～後半 |
| | | 193 | カラ13 | 第1面 2墓 | 青磁皿 | 10.4 2.1 4.8 | 外)10YR7/1灰白色 釉)2.5Y7/1灰白色 | 密 | 無紋 | 大宰府分類 龍泉窯系I-3a類 |
| | | 194 | カラ13 | 第1面 2墓 | 青磁皿 | 10.0 2.1 4.6 | 外)7.5YR8/2灰白色 釉)5Y7/1灰白色 | 疎 | 無紋 | 大宰府分類 同安窯系I-1a類 12世紀中頃～後半 |
| | | 195 | | 第1面 2墓 | 青磁碗 | | 外・断)10YR6/2灰黄褐色 内)10YR5/2灰黄褐色 | 密 | 施釉 | |
| | | 196 | 29 | 第1面 2墓 | 瓦器碗 | 12.0 3.9 4.0 | 外)N6/0灰色 内)5PB6/1青灰色 | 2mm以下の長石を多く、0.5mmの金雲母を少し含む | 外)ヨコナデ、指頭圧痕、高台貼り付け後オサエ 内)細い圓線ミガキ、ハケメ | 楠葉型IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 197 | | 第1面 2墓 | 土師器皿 | (7.0) 0.9 - | 外・内・断) 7.5YR7/4にぶい橙色 | 1mm以下の長石、0.5mmの金雲母を少し含む | 外)ヨコナデ、ナデ 内)ナデ | 13世紀中頃～後半 |
| | | 198 | 29 | 第1面 2墓 | 土師器皿 | (11.6) 2.1 - | 外・内)7.5YR7/4にぶい橙色 | 2mm以下の長石を少し、0.5mmの金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ、ナデ 内)ナデ | 13世紀中頃～後半 |
| | | 199 | 30 | 第1面 2墓 | 土師器皿 | 10.6 2.1 - | 外)5YR7/3にぶい橙色 内)5YR7/2明褐灰色 | 1mm以下の長石、シャモットを少し、0.5mmの金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ、ナデ 内)不定方向ナデ | 内面に油の炭化物付着、灯明皿 13世紀中頃～後半 |
| | 51 | 205 | | 第1面 18竪穴 | 瓦器小碗 | (8.0) 3.0 (3.6) | 外)灰白2.5Y7/1灰白色 内)5YR6/1褐灰色 断)2.5YR6/1黄灰色 | 1mm以下のチャートを僅かに含む | 外)ヨコナデ、貼り付け高台 内)渦巻状の暗文 | 13世紀後半前後 |
| | | 206 | | 第1面 18竪穴 | 瓦器小碗 | (8.4) 3.0 (3.8) | 外)N3/0暗灰色 内)N5/0灰色 断)5Y8/1灰白色 | 0.3mmの長石を僅かに含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ、高台貼り付け時ナデ、沈線状のくぼみ 内)渦巻状の暗文 | 13世紀後半前後 |
| | | 207 | 30 | 第1面 18竪穴 | 土師器皿 | 8.2 1.3 - | 外)10YR6/2灰黄褐色 内)7.5YR5/1褐灰色 | 2mm以下の長石を少し、0.5mmの金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ 内)ナデ | 13世紀後半 |
| | | 208 | カラ17 | 第1面 18竪穴 | 青磁碗 | (14.0) - | 外)10Y5/1灰色 内)2.5GY5/1オリーブ灰色 断)5Y7/1灰白色 | 密 | 外)鑄蓮弁紋 内)無紋 | 大宰府分類 龍泉窯系II-b類あるいはIII-2c類 13世紀 |
| | | 211 | 31 | 第1面 31溝 | 土師器皿 | (7.0) 1.1 - | 外)10YR8/6黄褐色 内)10YR8/4浅黄褐色 断)2.5YR7/3淡赤褐色 | 0.5mmの長石を僅かに含む | 外)ヨコナデ、不定方向のナデ 内)不定方向のナデ | 13世紀 |
| | | 212 | | 第1面 31溝 | 土師器皿 | (11.2) 1.9 - | 外)7.5YR7/3にぶい橙色 内)2.5YR7/3淡赤褐色 断)5YR6/2灰褐色 | 0.5mmの長石、石英を僅かに含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ 内)不定方向のナデ | 13世紀 |
| | | 213 | | 第1面 31溝 | 土師器皿 | (11.8) 1.8 - | 外)5YR7/3にぶい橙色 内)7.5YR7/2明褐灰色 断)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2mmの長石、金雲母を僅かに含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ 内)不定方向のナデ | 13世紀 |
| | | 215 | 31 | 第1面 235溝 | 土師器皿 | 7.6 1.2 - | 外)10YR6/3にぶい黄褐色 内)5YR6/4にぶい橙色 | 1mm以下の長石を少し、2mm以下のシャモット、金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ 内)ナデ | 13世紀後半 |
| | | 216 | | 第1面 235溝 | 土師器皿 | (7.8) 1.0 - | 外・断)7.5YR7/3にぶい橙色 内)7.5YR7/2明褐灰色 | 0.3mm以下の長石、金雲母を僅かに含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ 内)不定方向のナデ | 13世紀後半 |
| | | 217 | 31 | 第1面 235溝 | 土師器皿 | 8.0 1.1 - | 外)5YR7/3にぶい橙色 内)5YR6/3にぶい橙色 | 1mm以下の長石、2mm以下の石英、金雲母を含む | 外)ヨコナデ 内)不定方向のナデ | 13世紀後半 |
| | 53 | 218 | 31 | 第1面 235溝 | 土師器皿 | 8.0 1.3 - | 外・内)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2mm以下の長石、石英、金雲母を含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ 内)ナデ | 口縁部に欠損あり 13世紀後半 |
| | | 219 | | 第1面 235溝 | 土師器皿 | (8.2) 1.1 - | 外・内)7.5YR7/3にぶい橙色 | 1mm以下の長石、2mm以下の石英、金雲母を含む | 外)ヨコナデ、不定方向のナデ | 口縁部に歪み、欠損あり 13世紀後半 |
| 220 | | 31 | 第1面 235溝 | 土師器皿 | 8.2 1.1 - | 外・内)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2mm以下の長石、石英、シャモット、金雲母を含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ | 口縁部に欠損あり 13世紀後半 | |
| 221 | | 31 | 第1面 235溝 | 土師器皿 | (11.6) 2.3 - | 外・内)10YR8/3浅黄褐色 | 1.5mmのシャモットを含む | 外)ヨコナデ、不定方向のナデ 内)不定方向のナデ | 13世紀後半 | |
| 222 | | 31 | 第1面 235溝 | 土師器皿 | 11.8 2.3 - | 外)5YR8/3淡褐色 内)2.5YR7/3淡赤褐色 断)2.5YR7/2明赤灰色 | 1mm以下の長石、0.5mmの石英、金雲母、砂粒を少し含む | 外)ヨコナデ 内)ナデ | 13世紀後半 | |
| 223 | | | 第1面 235溝 | 土師器皿 | (12.8) 1.8 - | 外)7.5YR7/3にぶい橙色 内)5YR7/2明褐灰色 断)7.5YR7/2明褐灰色 | 1.5mm以下の長石を僅かに含む | 外)ヨコナデ、コビオサエ 内)ナデ | 13世紀後半 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|------------|-----|------|-------------|---------------|--------------------|--|---|--|--|--|
| 08 2 調査区 | 53 | 224 | 31 | 第1面 235溝 | 瓦器 椀 | 11.0 4.0 4.0 | 外・内)N5/0灰色 | 密 | 外)ヨコナデ、ユビオサエ、 貼り付け高台 内)細い圏線ミガキ | 楠葉型IV-1期 13世紀後半 |
| | 58 | 231 | | 第1面 4石組 | 平瓦 | | 外・内)N6/0灰色 断)2.5YR6/2灰赤色 | 3mm以下の長石、石英を多く、チャート を少し含む | 凸)縄タキ 凹)布目 | 古代 |
| | | 233 | 30 | 第1面 15土坑 | 土師器 皿 | 8.0 1.3 — | 外)5YR7/4にぶい・橙色 内)7.5YR7/4にぶい・褐色 | 1mm以下の長石、シャモットを少し、 0.5mm以下の金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ナデ | 13世紀後半 |
| | | 234 | 30 | 第1面 16石群 | 土師器 皿 | 11.4 1.8 — | 外)5YR7/2明褐色 内)7.5YR7/2明褐色 | 2mm以下の長石、1mm以下の石英を 少し、0.5mmの金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ 内)ナデ | 13世紀後半 |
| | | 236 | 30 | 第1面 28ピット | 瓦器 椀 | 10.6 — — | 外・内)N5/0灰色 | 1mm以下の長石を少し、0.5mmの金雲 母を僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)圏線ミガキ | 楠葉型IV-2期 13世紀末～14世紀初頭 |
| | 66 | 237 | カラ ー4 | 第2面 62墓 | 灰釉陶器 四耳壺 | 11.2 20.5 11.6 | 外)10YR7/1灰白色 内)10YR6/1褐色 | 砂粒を少し含む | 外)ケズリ後ナデ、高台貼 り付け後底部ナデ、肩部 施釉 内)ナデ、底部指頭圧痕 | 一部自然釉付着、内面一 部炭により黒く変色 尾張地域 9世紀中頃～後半 |
| | | 240 | カラ ー4 | 第2面 114墓 | 須恵器 双耳壺(瓶) | — — 10.8 | 外・内・断)N6/0灰色 | 密 | 外)肩部に突帯が巡る、耳 2か所 内)ナデ | 9世紀後半～10世紀前半 |
| | | 241 | カラ ー4 | 第2面 114墓 | 灰釉陶器 小瓶 | — — 3.8 | 外)10YR7/1灰白色 軸)2.5Y7/1灰白色 | 密 | 外)ケズリ後ナデ | 外面一部に自然釉付着 9世紀後半～10世紀初頭 |
| | | 242 | | 第2面 114墓 | 土師器 皿 | (10.0) 1.0 — | 外・内・断)7.5YR7/3にぶい・褐色 | 密 | 外・内)ヨコナデ、ユビオサ エ | 10世紀前半 |
| | | 243 | | 第2面 114墓 | 土師器 皿 | (10.4) 0.9 — | 外)10YR5/1褐色 内)7.5YR6/3にぶい・褐色 | 密 | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ヨコナデ | 10世紀前半 |
| | | 257 | カラ ー4 | 第2面 119墓 | 灰釉陶器 長頸壺(瓶) | — — 8.0 | 外)2.5Y7/1灰白色 軸)10YR7/2にぶい・黄褐色 | 密 | 焼成後穿孔、口縁内面の 一部と外面頸部から体部 下方にかけて施釉 | 東濃(美濃東部)産 9世紀後半～10世紀初頭 |
| | | 258 | | 第2面 42土坑 | 須恵器 把手付甕 | — — (16.0) | 外)10YR7/1灰白色 内・断)7.5YR6/1褐色 | 3mm以下の長石、0.5mmのチャート を少し、2mm以下の石英を僅かに含む | 外)ケズリ後ナデ 内)ヨコナデ、不定方向の ナデ | |
| | 259 | | 第2面 61土坑 | 須恵器 平瓶把手 | | 外・内・断)7.5YR5/1褐色 | 2mm以下の長石を少し含む | 粘土紐を折り曲げ各角を 面取り | 平安時代 | |
| | 260 | | 第2面 67土坑 | 須恵器 杯 | (11.8) 3.7 — | 外)2.5Y6/1黄灰色 内)5Y6/1灰色 断)5Y5/1灰色 | 2mm以下の長石を少し、1mm以下の チャートを僅かに含む | 外)回転ナデ 内)回転ナデ | 7世紀 | |
| | 261 | | 第2面 73土坑 | 須恵器 鉄鉢形 | (21.8) — — | 外)10YR7/2にぶい・黄褐色 内・断)5Y7/1灰白色 | 0.5mmの砂粒を多く含む | 外)回転ケズリ後ヘラミガキ 内)回転ナデ | 8世紀後半 | |
| | 69 | 262 | 32 | 第2面 73土坑 | 土師器 器台(鼓形) | (8.6) 7.8 (9.6) | 外)5YR6/3にぶい・褐色 内)7.5YR6/3にぶい・褐色 断)7.5YR6/2灰褐色 | 3mm以下の長石、石英、0.5mmのシャ モットを少し、1mm以下のチャートを 多く含む | 外)タタキ 内)ナデ | |
| | | 263 | 32 | 第2面 86ピット | 土師器 甕 | (22.2) 22.7 — | 外)7.5YR6/2灰褐色 内)2.5YR6/3にぶい・褐色 | 1mm以下の長石、2mm以下の石英、 0.5mmの雲母を少し含む | 外)横方向のハケ後縦方 向の粗いハケメ 内)横方向の細かいハケメ | 8世紀 |
| | | 264 | | 第2面 95ピット | 須恵器 盤 | (24.0) 4.0 — | 外)N6/0灰色 内)2.5Y6/1黄灰色 断)5Y6/1灰色 | 1mm以下の長石を少し、3mm以下の 石英、1mm以下のチャートを僅かに含 む | 外)ヨコナデ、ケズリ 内)ヨコナデ、不定方向の ナデ | |
| | | 265 | | 第2面 105土坑 | 須恵器 杯 | (10.8) 3.2 — | 外)7.5Y6/1灰色 内・断)10Y6/1灰色 | 砂粒を僅かに含む | 外・内)回転ナデ | 7～8世紀 |
| | 70 | 268 | 32 | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (11.4) 2.3 — | 外・内・断)5B6/1青灰色 | 0.5mm以下の長石、石英を少し含む | 外)灰被り、降灰釉、前面 回転ナデ | 7世紀後半 |
| | | 269 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (18.8) 3.3 — | 外)7.5YR5/1褐色 内)2.5Y6/1黄灰色 断)2.5Y5/1黄灰色 | 3mm以下の長石を含む | 外)回転ヘラケズリ、回転 ナデ 内)回転ナデ | 7世紀後半 |
| | | 270 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (22.0) — — | 外・内・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石、1.5mm以下の石英 を少し、チャートを多く含む | 外)ケズリ、灰被り、ナデ 内)ナデ | 7世紀後半 |
| | | 271 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (26.2) — — | 外)N6/0灰色 内・断)N7/0灰白色 | 1mmの石英を僅かに含む | 外)ヘラケズリ、回転ナデ 内)回転ナデ後不定方向 のナデ | 8世紀 |
| | | 272 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯 | (12.8) 4.0 (7.2) | 外・内・断)N6/0灰色 | 0.5mmの砂粒を少し含む | 外)回転ナデ、貼り付け高 台、底部ケズリ後ナデ 内)回転ナデ | 7世紀 |
| | | 273 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯 | (16.2) 4.2 (11.8) | 外・内・断)N7/0灰白色 | 2mm以下の長石、チャートを僅かに含 む | 外)回転ナデ、貼り付け高 台、底部ヘラケズリ後ナデ 内)回転ナデ | 8世紀 |
| | | 274 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯 | (16.6) 4.2 (12.6) | 外)2.5Y6/1黄灰色 内)10YR6/1褐色 断)10Y6/1灰色 | 0.5mmの石英、1mm以下のチャートを 僅かに含む | 外)回転ナデ、貼り付け高 台、底部ヘラケズリ後ナデ 内)回転ナデ | 外面に自然釉付着 8世紀 |
| | | 275 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 杯 | (18.8) 3.8 (14.4) | 外・内・断)2.5Y6/1黄灰色 | 2mm以下の長石、1mm以下の石英を 少し、3mm以下のチャートを多く含む | 外)回転ナデ、貼り付け高 台、底部ヘラケズリ後ナデ 内)回転ナデ | 8世紀 |
| | | 276 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 | | 外)N5/0灰色 内)7.5YR6/1褐色 断)5PB6/1青灰色 | チャートを含む | 外・内)回転ナデ | 7～8世紀 |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|------------|-----|------|--------------|---------------|-------------------|----------------------------|--|---|-------------------------------------|-----------------------------|
| 08 2 調査区 | 70 | 277 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 壺 | 頸径6.2 — — | 外・内・断)N7/0灰白色 | チャートを僅かに含む | 外・内)回転ナデ | 外面に自然釉付着 7~8世紀 |
| | | 278 | | 第2面 43落ち込み | 須恵器 甕 | (20.4) — — | 外)10YR5/1褐灰色 内)10YR6/1褐灰色 断)2.5Y6/1黄灰色 | 3mmの長石、砂粒を含む | 外・内)回転ナデ | 7世紀後半 |
| | | 279 | 32 | 第2面 43落ち込み | 須恵器 鉄鉢形鉢 | (19.4) 12.4 — | 外・内)N7/0灰白色 | 1mm以下の長石、3mm以下のチャートを少し含む | 外・内)回転ナデ | 7~8世紀 |
| | | 280 | 32 | 第2面 43落ち込み | 須恵器 (杯) 転用硯 | タテ:11.3 ヨコ:5.2 | 外・内)N7/0灰白色 断)5RP6/1紫灰色 | 砂粒を少し含む | 外)回転ナデ、ヘラケズリ 内)回転ナデ | 7~8世紀 |
| | | 281 | 32 | 第2面 43落ち込み | 須恵器 皿 | 7.6 4.2 1.9 | 外・内・断)5YR6/1褐灰色 | 1.5mm以下の長石、2mmのチャートを多く含む | 外・内)回転ナデ | 口縁部内面に油の炭化物付着、灯明皿 時期不詳 |
| | 71 | 282 | カラ 1 5 | 第2面 83落ち込み | 火頭形三尊 埴仏 | 現況タテ: (4.3) ヨコ:(4.1) | 外・内)5YR3/1黒褐色 断)7.5YR3/2黒褐色 | 精良 | 外)ナデ、金箔が残る | 白鳳時代 7世紀後半 |
| | | 283 | カラ 1 5 | 第2面 83落ち込み | 三尊埴仏 鉢型 | 現況タテ: (9.7) ヨコ:(8.5) | 外・内)10R5/1赤灰色 5YR6/3にぶい 断)2.5YR5/2灰赤色 | 長石を少し含む | 外)ナデ | |
| | | 284 | | 第2面 83落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (18.9) 3.3 — | 外・内)5Y7/1灰白色 断)7.5Y6/1灰色 | 3mmの長石、石英を少し含む | 外)回転ヘラケズリ、宝珠 貼り付け後回転ナデ 内)回転ナデ | 古代 |
| | | 285 | | 第2面 83落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (13.8) — — | 外)5Y6/1灰色 内・断)N6/0灰色 | 1.5mm以下の長石を僅かに含む | 外)ケズリ後ナデ、回転ナ デ 内)回転ナデ | 古代 |
| | | 286 | | 第2面 83落ち込み | 須恵器 杯蓋 | (15.4) 1.5 — | 外・内・断)N7/0灰白色 | 精良 | 外)回転ナデ、ツマミ貼 り 内)回転ナデ | 古代 |
| | | 287 | | 第2面 83落ち込み | 須恵器 杯 | (14.6) 4.4 (11.1) | 外)5PB7/1明青灰色 内・断)2.5Y7/1灰白色 | 1.5mm以下の長石、1mmの石英、2.5 mm以下のチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、高台貼付 け後底部ナデ 内)回転ナデ | 灯明皿 内面に油の炭化物付着 8世紀 |
| | | 288 | | 第2面 83落ち込み | 須恵器 杯 | (10.1) 2.9 — | 外・内)2.5Y6/1黄灰色 断)5Y7/1灰白色 | 1mmの長石、黒色粒を含む | 外)ロクロナデ、不整方向 のナデ 内)ロクロナデ | 灯明皿 9世紀 |
| | | 76 | 289 | | 第3面 191ピット | 土師器 皿 | (11.4) 2.2 — | 外・内)7.5YR5/1褐灰色 断)7.5YR8/4浅黄褐色 | 0.5mmの長石を僅かに含む | 外)ヨコナデ、不定方向の ナデ |
| | 78 | 298 | 34 | 第2層 | 縄文土器 突帯文 | | 外・断)7.5YR3/2黒褐色 内)5YR6/1褐灰色 | 2mm以下の長石、1mm以下のチャートを少し、2mm以下の石英を多く含む | 外)2条突帯 | 長原式土器 |
| | | 299 | | 第2層 | 縄文土器 突帯文 | | 外)7.5YR6/2灰褐色 内)7.5YR6/1褐灰色 断)7.5YR5/1褐灰色 | 1mm以下の長石、石英を少し、1mm以下のチャートを多く含む | 外)縦方向にケズリ後ナデ | 長原式土器 |
| | | 300 | | 第2層 | 縄文土器 突帯文 | | 外・内)7.5YR5/2灰褐色 断)7.5YR3/1黒褐色 | 2mm以下の石英を多く、3mm以下のチャート、長石を少し含む | 磨耗著しく調整不明 | 長原式土器 |
| | | 301 | 34 | 第2層 | 縄文土器 | | 外・内・断)7YR7/2明褐色 | 2mm以下の長石、チャートを多く、石英を少し含む | 磨耗著しく調整不明 | 時期不詳 |
| | | 302 | 34 | 第2層 | 縄文土器 | | 外・内)7.5YR6/2灰褐色 断)5YR6/2灰褐色 | 1mm以下の長石、チャートを多く、石英、雲母を少し含む | 外・内)ハケメ | 時期不詳 |
| | | 303 | 34 | 第2層 | 弥生土器 甕底部 | — — 8.2 | 外)7.5YR7/3にぶい 内)2.5YR6/3にぶい 断)5YR6/2灰褐色 | 2mmの長石、雲母を含む | 外)縦方向のハケメ、底部 木葉痕 内)ニビオサエ、ナデ | II様式 |
| | | 304 | | 第2層 | 弥生土器 甕底部 | — — (7.4) | 外)2.5YR5/6明赤褐色 内)7.5YR6/4にぶい 断)2.5YR6/3にぶい | 2mm以下の長石、チャートを多く、石英を少し含む | 磨耗著しく調整不明 | 弥生時代中期 |
| | 79 | 305 | カラ 1 5 | 第0層 | 火頭形埴仏 鉢型 | 現況タテ: (6.7) ヨコ:(8.4) | 外・内)5YR6/3にぶい 断)5YR6/2灰褐色 | 粒が細かく揃っているが、焼きがあまり なく、砂壁のように表面がざらついて脆 い | 裏面、断面に粘土をこね、 成形した痕跡 | |
| | | 306 | カラ 1 5 | 第2層 | 小形独尊 埴仏 | タテ:4.0 厚さ:1.2 | 外・内)2.5YR6/4にぶい 断)N5/0灰色 | 粗い | 外)ナデ | 奈良時代 |
| | 80 | 307 | 34 | 機械掘削層 | 丸瓦 | 幅:13.5 | 凸・凹)N5/0灰色 断)10Y6/1灰色 | 3mmの長石を含む | 凸)ヘラケズリ、強いナ デ 凹)布目圧痕 | 古代 |
| | | 308 | 34 | 第1層 | 平瓦 | | 凸)5YR6/3にぶい 凹)5YR7/3にぶい 断)2.5YR6/3にぶい | 2mm以下の長石、チャートを少し、0.5 mmの雲母を僅かに含む | 凸)斜格子タタキ 凹)布目圧痕 | 古代 |
| | | 309 | 34 | 第1層 | 平瓦 | 長さ:35.5 — — | 凸)7.5YR7/2明褐色 凹・断)7.5YR6/2灰褐色 | 5mmの赤褐色粒、2mmの長石を含む | 凸)縄タタキ、指頭圧痕 凹)布目圧痕 | 古代 |
| | 81 | 310 | 35 | 第1層 ~第2層 | 平瓦 | | 凸)5YR4/2灰褐色 凹・断)10YR5/2灰黄褐色 | 3mmの長石、5mmの黒色粒を含む | 凸)タタキ、ケズリ 凹)布目 | 古代 |
| | | 311 | | 中央谷 | 平瓦 | | 凸)7.5YR6/3にぶい 凹)2.5YR7/4淡赤褐色 断)2.5YR6/4にぶい | 3mm以下の長石を少し、5mm以下の チャートを多く含む | 凸)タタキ 凹)縦方向に幅2cm程の筋 | 古代 |
| | | 312 | 35 | 第1層 | 平瓦 | | 凸・凹)N6/0灰色 断)5YR6/1にぶい | 3mmの長石を含む | 凸)縄タタキ痕 凹)布目痕 | 布目圧痕技法 奈良時代後半~平安時 代前半 |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 | |
|---------------------|-----|------|---------|----------------|-------------------------|---|---|--|---|----------------------|------------------------------|
| 08 2 調査区 | 81 | 313 | | 第0層 | 平瓦 | | 凸・凹)5YR7/3にぶい橙色 断)2.5YR6/3にぶい橙色 | 2mm以下の長石、3mm以下の石英を多く含む | 凸)横方向のナデ 凹)布目痕 | 古代 | |
| | | 314 | 35 | 第1層 | 平瓦 | | 凸)5PB6/1青灰色 凹)断)N6/0灰色 | 礫、0.5mmの長石を含む | 凸)縄タタキ痕 凹)模骨痕、横方向のナデ | 桶巻き作り 古代 | |
| | 82 | 315 | 35 | 第2層(上層) | 土師器皿 | 18.8 2.5 — | 外・内)10R6/4にぶい赤褐色 | 2mmの石英、0.5mmの雲母を僅かに含む | 外)ヨコナデ、コヒオサエ 内)ナデ | | 9世紀後半 |
| | | 316 | 35 | 機械掘削層 | 土師器甕 | (15.6) — — | 外・断)10YR6/3にぶい黄褐色 内)10YR6/4にぶい黄褐色 | 2mmの褐色礫、1mmの石英を含む | 外)縦方向のハケメ 内)横方向のハケメ | | 8世紀 |
| | | 317 | 35 | 第2層 | 土師器かまど | タテ:16.2 ヨコ:6.8 | 外・断)7.5YR7/3にぶい橙色 断)2.5YR7/3淡赤褐色 | 0.5mmの長石、チャート、雲母を少し含む | 外)ハケメ 内)ナデ | | 古代 |
| | 83 | 318 | 36 | 第0層 | 須恵器杯蓋 | 15.1 4.3 — | 外)N6/0灰色 内)7.5YR6/1褐色 | 1mm以下の長石、0.5mmのチャートを少し含む | 外)回転ナデ、ケズリ後ナデ 内)回転ナデ | | 7世紀後半 |
| | | 319 | | 第2層 | 須恵器杯蓋 | 18.4 — — | 外)5Y6/1灰色 内)2.5YR6/1赤灰色 断)5R6/1赤灰色 | 1.5mm以下のチャートを多く含む | 外)回転ナデ、ヘラケズリ 内)回転ナデ | | 古代 |
| | | 320 | | 第1層 | 須恵器杯蓋 | つまみ径: 2.6 | 外)2.5Y7/1灰白色 内)5Y7/1灰白色 断)10YR6/1褐色 | 1mm以下の長石、0.5mmのチャートを僅かに含む | 外)ケズリ、回転ナデ 内)回転ナデ | | 古代 |
| | | 321 | | 第1層 | 須恵器杯蓋 | (15.6) 2.5 — | 外)2.5Y6/1黄灰色 内)10YR6/1褐色 断)5Y6/1灰色 | 3mm以下の長石、0.5mmの石英を僅かに含む | 外)ヘラケズリ、回転ナデ 内)回転ナデ | | 8世紀初頭 |
| | | 322 | | 第2層 | 須恵器杯蓋 | (17.6) 2.4 — | 外)N6/0灰色 内・断)7.5YR6/1褐色 | 1.5mmのチャートを少し、1mm以下の長石、0.5mmの石英を僅かに含む | 外)ヘラケズリ、回転ナデ 内)回転ナデ | | 8世紀初頭 |
| | | 323 | | 第2層 | 須恵器杯蓋 | つまみ径: 3.2 | 外・断)N6/0灰色 内)5RP6/1茶灰色 | 2.5mmの長石を少し含む | 外)ヘラケズリ 内)回転ナデ、不定方向のナデ | | 8世紀初頭 |
| | | 324 | | 第0層 | 須恵器杯蓋 | (17.6) 1.7 — | 外)N6/0灰色 内)2.5Y6/1黄灰色 断)10YR6/1褐色 | 1mmの石英を僅かに、3mm以下のチャートを含む | 外)ヘラケズリ、回転ナデ 内)回転ナデ | | 8世紀後半 |
| | | 325 | | 第1層 第2層(上層) | 須恵器杯蓋 | (21.4) — — | 外)N7/1灰白色 内・断)N6/1灰色 | 3mmの長石、石英を含む | 外)回転ヘラケズリ、回転ナデ 内)不定方向のナデ、回転ナデ | | 上部に回転ナデらしい痕跡がありつまみの可能性 古代 |
| | | 326 | 36 | 第2層(上層) | 須恵器杯蓋 | (8.0) 3.1 — | 外・内)N6/0灰色 | 1mm以下の長石を少し、2mm以下のチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ、ナデ | | 口縁部に著しい歪みあり |
| | | 327 | 36 | 第2層 | 須恵器杯 | (11.8) 3.3 — | 外)10YR6/1褐色 内)2.5Y6/2灰黄色 | 3mmの石英、0.5mmの長石、1mm以下のチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、不定方向のナデ 内)回転ナデ | | 7世紀後半 |
| | | 328 | | 第2層 | 須恵器杯 | (12.2) 3.6 — | 外)10YR6/1褐色 内)7.5R6/1赤灰色 断)5YR6/1褐色 | 2mmの長石と黒色粒を含む | 外)回転ナデ、底部ヘラ切り未調整 内)回転ナデ、不整方向ナデ | | 7世紀後半 |
| | | 329 | 36 | 第2層(上層) | 須恵器杯 | (12.2) 3.4 (8.4) | 外)10YR6/1褐色 内)7.5R6/1赤灰色 断)5YR6/1褐色 | 3mm以下の長石、1mmのチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ | | 7世紀後半 |
| | | 330 | | 第2層 | 須恵器杯 | (12.0) 3.5 (6.0) | 外)N5/0灰色 内)5PB5/1青灰色 断)5YR6/1褐色 | 1.5mm以下のチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内)回転ナデ | | 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 331 | 36 | 第2層 | 須恵器杯 | (13.6) 4.4 (7.8) | 外・内)N6/0灰色 | 3mm以下の長石を少し、0.5mmの石英を僅かに含む | 外)回転ナデ、貼り付け高台、底部切り離し後ナデ 内)回転ナデ | | 7世紀後半 |
| | | 332 | | 第0層 | 須恵器杯 | — — (9.4) | 外・内)N6/0灰色 断)10YR6/1褐色 | 1mm以下のチャートを少し含む | 外)回転ナデ、貼り付け高台、底部ケズリ後ナデ 内)回転ナデ | | 8世紀後半前後 |
| | | 333 | 36 | 第1層 | 須恵器杯 | 15.2 4.4 11.0 | 外)10YR6/1褐色 内)2.5YR6/2灰赤色 | 4mm以下のチャートを少し含む | 外)回転ナデ、貼り付け高台、底部切り離し後ナデ 内)回転ナデ、不定方向のナデ | | 8世紀後半前後 |
| | 334 | | 第2層 | 須恵器杯 | (16.4) 4.0 (12.0) | 外)5Y7/1灰白色 内・断)7.5YR7/1明褐色 | 1mm以下の長石を少し含む | 外)回転ナデ、貼り付け高台、底部ケズリ後ナデ 内)回転ナデ、不定方向のナデ | | 8世紀後半前後 | |
| | 335 | | 第0層 | 須恵器杯 | (19.0) 4.9 (12.2) | 外・内・断)N6/0灰色 | 1mm以下の長石、石英を含む | 外)回転ナデ、高台貼り付け時ナデ、底部回転ヘラケズリ 内)回転ナデ | | 外面全体に灰を被る 8世紀後半前後 | |
| | 336 | | 第2層(上層) | 須恵器杯 | (14.3) 5.0 (9.8) | 外・内)N6/0灰色 断)N5/0灰色 | 0.3mm以下の黒色粒を含む | 外)回転ナデ、高台貼り付け後ナデ、底部ヘラケズリ 内)回転ナデ | | 8世紀後半前後 | |
| | 337 | 36 | 第2層 | 須恵器杯 | (15.0) 6.2 9.0 | 外)10YR7/1灰白色 内)7.5YR7/1明褐色 | 0.5mmの長石、1mm以下の石英、2mm以下のチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、貼り付け高台、底部ケズリ後ナデ 内)回転ナデ | | 8世紀後半前後 | |
| | 338 | | 第1層 | 須恵器杯 | (9.4) 4.2 (6.8) | 外)2.5GY6/1オリブ灰色 内)5YR6/1褐色 断)N6/0灰色 | 0.3mmの石英を僅かに含む | 外)回転ナデ、高台貼り付け時ナデ 内)回転ナデ | | 8世紀後半前後 | |
| | 339 | | 第1層 | 須恵器杯 | (10.0) 2.1 (6.0) | 外)5YR7/1明褐色 内・断)10YR7/1灰白色 | 1mm以下の石英をごく僅かに含む | 外)ナデ、底部未調整 内)ナデ | | 古代 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|-----|-----|-----------------------|-------|----------------------------|---|---|--|-------------------------------------|---------------------------------------|-------------------------|
| 08 | 2 | 340 | | 第2層(上層) | 須恵器杯 | (10.0) 2.2 (7.0) | 外・内・断)N6/0灰色 | 微細な長石、石英を僅かに含む | 外)ナデ、底部へラ切り後ナデ 内)ナデ | 古代 |
| | | 341 | | 第1層 | 須恵器杯 | (10.0) 2.4 (6.2) | 外・断)N6/0灰色 内)5PB5/1青灰色 | 2mm以下の長石を少し含む | 外)ナデ、底部未調整 内)ナデ | 外面に自然袖付着 古代 |
| | | 342 | | 第1層 第2層 | 須恵器皿 | (17.2) 3.2 (15.4) | 外)N4/0灰色 内・断)N7/1灰白色 | 2mmの長石、1mmの褐色粒を含む | 外)回転ナデ、底部切り取り後回転ナデ 内)回転ナデ | 古代 |
| | | 343 | 37 | 第2層(上層) | 須恵器杯 | 11.0 2.6 — | 外)2.5Y7/1灰白色 内・断)2.5Y7/2灰黄色 | 2mm以下のチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、底部に「萬」字へラ書き 内)回転ナデ | 灯明皿 内面に油の炭化物付着 古代 |
| | | 344 | カラー16 | 第2層 | 須恵器杯 | (10.2) 3.7 (7.5) | 外)2.5Y6/1黄灰色 内)5YR6/1褐灰色 断)10YR4/1褐灰色 | 0.3mmの黒色粒を含む | 外)ロクロナデ、底部へラ切り 内)ロクロナデ | 赤色顔料付着 9世紀 |
| | | 345 | 37 | 第2層(上層) | 須恵器(高杯)転用硯 | ヨコ:13.4 | 外・内・断)N6/0灰色 | 1mm以下の長石を多く、砂粒を少し含む | 外)回転ナデ 内)回転ナデ、中央部横方向ナデ | 古代 |
| | | 346 | 37 | 第1層 | 須恵器(蓋)転用硯 | タテ:8.1 ヨコ:6.5 | 外・内・断)N7/0灰白色 | 2mm以下の長石を少し、1mmの石英、0.5mmのチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ 内)回転ナデ、中央部横方向ナデ | 8世紀 |
| | | 347 | 37 | 第1層 | 須恵器(蓋)転用硯 | タテ:8.4 ヨコ:7.4 | 外・内)N7/0灰白色 断)5PB6/1青灰色 | 精良 | 外・内)回転ナデ | 古代 |
| | | 348 | 37 | 第1層 | 須恵器(蓋)転用硯 | タテ:9.9 ヨコ:7.3 | 外・断)N6/0灰色 内)N7/0灰白色 | 1mm以下の長石、砂粒を少し含む | 外・内)回転ナデ | 古代 |
| | | 349 | 37 | 第1層～第2層 | 須恵器(甕)転用硯 | タテ:7.6 ヨコ:6.2 | 外)5Y7/1灰白色 内・断)N6/0灰色 | 2mm以下の長石、砂粒を少し含む | 凸)タタキ後ナデ | 猿面硯 古代 |
| | | 350 | | 第1層 | 須恵器短頸壺 | (7.4) — — | 外)2.5Y6/1黄灰色 内)N5/0灰色 断)5PB4/1暗青灰色 | 3mm以下の長石を多く、0.5mmのチャートを少し含む | 外・内)回転ナデ、肩部接合痕 | 外面肩部、内面底部に自然袖付着 古代 |
| | | 351 | | 第1層～第2層 | 須恵器長頸壺 | — — (7.2) | 外)10Y3/1オリーブ黒色 内)7.5Y5/1灰色 断)N5/0灰色 | 1mm以下の長石を少し、0.5mmのチャートを僅かに含む | 外)ケズリ後ナデ、貼り付け高台、1条沈線 内)ヨコナデ | 7世紀 |
| | | 352 | | 第2層 | 須恵器壺 | — — — | 外)N6/0灰色 内)10R6/1赤灰色 断)10YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石を少し、2mm以下の石英を僅かに含む | 外)回転ナデ、1条沈線 内)回転ナデ | 自然袖付着 7世紀末～8世紀初頭 |
| | | 353 | 37 | 第1層 | 須恵器小形瓶 | — — 4.4 | 外・内・断)2.5Y6/1黄灰色 | 2mm以下の長石、砂粒を含む | 外)ケズリ、貼り付け高台、底部ナデ | 灰かぶり 8世紀末 |
| | | 354 | 38 | 第1層 機械掘削層 | 須恵器薬壺 | — — (11.5) | 外)10YR6/1褐灰色 内・断)7.5YR6/1褐灰色 | 0.5mmの長石、砂粒を多く含む | 外)ケズリ後ナデ、強いナデ、底部ケズリ 内)ヨコナデ、不定方向のナデ | 肩部に自然袖付着 古代 |
| | | 355 | | 第2層 | 須恵器水瓶 | (4.4) — — | 外・内)5PB4/1暗青灰色 断)5RP7/1明紫灰色 | 1mm以下の長石、石英を含む | 外)回転ナデ 内)回転ナデ、絞目 | 外面一部灰かぶり 8世紀 |
| | | 356 | | 第1層 | 須恵器水瓶 | (3.0) — — | 外)10YR6/1褐灰色 内)7.5YR6/1褐灰色 | 0.5mmの石英をごく僅かに含む | 外)ヨコナデ 内)ナデ | 自然袖付着 8世紀 |
| | | 357 | | 第1層 | 須恵器水瓶 | — — — | 外・内・断)10YR6/2灰黄褐色 釉)5Y4/2灰オリーブ色 | 1.5mm以下の長石を多く、1mm以下の石英を僅かに含む | 外)ヨコナデ 内)ナデ | 外面、内面上部施釉 8世紀 |
| | | 358 | 38 | 第1層 第2層 | 須恵器鉄鉢形鉢 | (18.2) 10.7 — | 外)2.5Y7/1灰白色 内)5YR7/1明褐灰色 断)7.5YR6/1褐灰色 | 1mm以下の長石を少し、0.5mmのチャートを僅かに含む | 外)回転ナデ、ケズリ、1条沈線 内)回転ナデ、ナデ | 7世紀後半～8世紀初頭 |
| 359 | | 第0層 | 須恵器甕? | (32.0) — — | 外)N6/0灰色 内)5YR7/1明褐灰色 断)5YR6/1褐灰色 | 長石、砂粒を含む | 外・内)回転ナデ | 古代 | | |
| 360 | | 第1層 | 須恵器甕 | — — (12.2) | 外)10YR6/1褐灰色 内・断)5Y6/1褐灰色 | 2mmの長石を含む | 外・内)回転ナデ、不整方向のナデ | 8～9世紀 | | |
| 361 | 38 | 第2層 | 須恵器甕 | (35.6) — — | 外・断)5Y6/1灰色 内)2.5Y6/1黄灰色 | 3mmの長石を含む | 外)頸部強いナデ、タタキ、沈線状のくぼみ 内)ナデ | 一部タタキ具が接触した 痕跡 古代 | | |
| 362 | 38 | 第1層 第2層(上層) | 須恵器甕 | (43.0) — — | 外)N5/0灰色 内)N6/0灰色 | 2mm以下の長石、砂粒を僅かに含む | 外)タタキ後カキメ 内)同心円タタキ後ナデ | 古代 | | |
| 363 | | 第1層 第2層 | 須恵器甕 | (22.6) (20.0) (13.6) | 外)10YR7/1灰白色 内・断)7.5YR7/2明褐灰色 | 2mmの長石を少し含む | 外)回転ナデ、把手貼り付け時ナデ後ハケ使用、ヘラケズリ 内)回転ナデ、把手貼り付け時ユビオサエ | 平安時代 | | |
| 364 | | 第1層 第2層(上層) 第2層 | 須恵器甕 | (26.0) (25.0) (16.0) | 外)5YR6/1褐灰色 内)7.5YR7/1明褐灰色 断)5Y7/1灰白色 | 3mm以下のチャートを多く、0.5mmの長石、雲母を少し含む | 回転ナデ | 平安時代 | | |
| 365 | | 第1層 第2層(上層) 第2層 | 須恵器甕 | — — (15.8) | 外)N6/0灰色 内)2.5Y7/1灰白色 断)2.5Y8/1灰白色 | 1mm以下の長石、石英、0.5mmの雲母を少し、2mm以下のチャートを多く含む | 外)ナデ、ケズリ後ナデ 内)ヨコナデ | 平安時代 | | |
| 86 | 366 | カラー16 | 機械掘削層 | 緑釉陶器 | — — — | 外)5GY5/1オリーブ灰色 内)10Y6/2オリーブ灰色 断)10YR6/2灰黄褐色 | 密 | 外・内)施釉 | 近江あるいは美濃産 10世紀後半 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|------------|-----|------|------|---------|--------------|------------------|---|--|---|---------------------|
| 08 2 調査区 | 86 | 367 | カラー6 | 機械掘削層 | 緑釉陶器 | | 外)5GY5/1オリーブ灰色 内)2.5Y6/2灰黄色 断)10YR7/1灰白色 | 密 | 外・内)施釉 | 近江あるいは美濃産 10世紀後半 |
| | | 368 | カラー6 | 第1層 | 緑釉陶器 | | 外)10GY6/1緑灰色 内)7.5Y7/1灰白色 断)5Y7/1灰白色 | 密 | 外・内)施釉 | 近江あるいは美濃産 10世紀後半 |
| | | 369 | カラー6 | 第2層 | 緑釉陶器 | | 外)5GY5/1オリーブ灰色 内)10Y5/2オリーブ灰色 断)10YR6/2灰黄褐色 | 密 | 外・内)施釉 | 近江あるいは美濃産 10世紀後半 |
| | | 370 | カラー6 | 第1層 | 灰釉陶器 壺(瓶) | — — (10.4) | 外・内)断)2.5Y7/1灰白色 | 1mm以下の長石、2mm以下のチャート を少し含む | 外)口縁部ナデ、ケズリ後 ナデ、貼り付け高台、底部 ケズリ取った痕跡 内)口縁部ナデ、底部ユビ オサエ | 東濃(美濃東部)産 10世紀後半 |
| | 87 | 371 | 39 | 機械掘削層 | 土師器 皿 | 7.0 1.4 — | 外)5YR7/3にぶい橙色 内)10R6/4にぶい赤橙色 | 1mm以下の長石、シャモットを少し、1 mm以下の金雲母を多く含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ、ユビオサエ | 13世紀前後 |
| | | 372 | 39 | 機械掘削層 | 土師器 皿 | 7.0 1.3 — | 外)7.5YR7/3にぶい橙色 内)5YR7/3にぶい橙色 | 1mm以下の長石、シャモットを少し含 む | 外)ヨコナデ、ナデ 内)ナメ方向のハケム痕 | 13世紀前後 |
| | | 373 | 39 | 機械掘削層 | 土師器 皿 | 6.6 1.9 — | 外)7.5YR7/3にぶい橙色 内)2.5YR6/4にぶい橙色 | 1mm以下の長石、0.5mm以下の金雲 母を少し含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 灯明皿 13世紀前後 |
| | | 374 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 7.8 1.1 — | 外)5YR7/3にぶい橙色 内)2.5YR7/4淡赤橙色 | 2mm以下の長石、石英、シャモット、 金雲母を含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ | 13世紀前後 |
| | | 375 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 7.8 1.0 — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)10YR7/4にぶい黄橙色 断)5Y5/3灰オリーブ色 | 2mmの長石を含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ヨコナデ | 13世紀前後 |
| | | 376 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 8.0 1.3 — | 外)7.5YR8/3浅黄橙色 内)2.5YR7/3淡赤橙色 | 1mmの長石、シャモット、金雲母を僅 かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 377 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 8.0 1.3 — | 外)10YR6/2灰黄褐色 内)10YR7/3にぶい黄褐色 | 3mm以下の長石を少し、0.5mmの金雲 母を多く含む | 外・内)ヨコナデ | 13世紀前後 |
| | | 378 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 8.0 1.4 — | 外・内)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2mm以下の長石、3mm以下の石英、 シャモットを含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 379 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 8.4 1.3 — | 外・内)断) 7.5YR7/3にぶい橙色 | 0.5mmの雲母を少し、2mm以下の長 石、シャモットを僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 380 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 8.0 1.5 — | 外・内)5YR7/4にぶい橙色 | 1mm以下の長石を少し、石英、0.5mm の金雲母を僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 381 | 39 | 第1層 | 土師器 皿 | 8.3 1.0 — | 外・内)断)2.5YR7/4淡赤橙色 | 0.5mmの長石、石英、金雲母を僅か に含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 382 | 39 | 第2層 | 土師器 皿 | 7.8 1.3 — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)断)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2mmの褐色粒を含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ヨコナデ | 13世紀前後 |
| | | 383 | 39 | 第2層 | 土師器 皿 | 7.7 1.1 — | 外)5YR6/4にぶい橙色 内)2.5YR6/6褐色 | 1mmの黒褐色粒を多く含む | 外・内)ヨコナデ、不定方 向のナデ | 13世紀前後 |
| | | 384 | 39 | 第2層 | 土師器 皿 | 7.6 1.1 — | 外)5YR7/6褐色 内)5YR6/4にぶい橙色 断)7.5YR5/2灰褐色 | 1.5mmの黒色粒、6mmの褐色礫を含 む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ヨコナデ、回転方向の ナデ | 13世紀前後 |
| | | 385 | 40 | 第2層 | 土師器 皿 | 8.0 1.1 — | 外)5YR7/4にぶい橙色 内)断)5YR6/4にぶい橙色 | 3mmの長石、1mmの黒色粒を含む | 外・内)ヨコナデ、不定方 向のナデ | 13世紀前後 |
| | | 386 | 40 | 第2層 | 土師器 皿 | 8.0 1.4 — | 外・内)断)5YR7/6褐色 | 1.5mmの黒色粒、0.5mmのシャモットを 含む | 外・内)ヨコナデ | 13世紀前後 |
| | | 387 | 40 | 第2層 | 土師器 皿 | 8.5 1.5 — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)7.5YR6/4にぶい橙色 | 1mmのシャモットを多く含む | 外・内)ヨコナデ | 13世紀前後 |
| | | 388 | 40 | 第2層 | 土師器 皿 | 8.3 1.2 — | 外)5YR7/4にぶい橙色 内)断)5YR6/4にぶい橙色 | 1.5mmのシャモットを多く含む | 外)ヨコナデ、不定方向の ナデ 内)ヨコナデ | 13世紀前後 |
| | | 389 | 40 | 機械掘削層 | 土師器 皿 | 9.5 1.7 — | 外)7.5YR7/3にぶい橙色 内)7.5YR7/2明褐色 | 0.5mm以下の金雲母を多く、1mmの石 英を僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ヨコナデ | 底部黒斑あり 13世紀前後 |
| | | 390 | 40 | 第1層 | 土師器 皿 | 12.4 2.6 — | 外)7.5YR7/4にぶい橙色 内)7.5YR7/3にぶい橙色 | 3mm以下の長石を少し、1mm以下の 石英、0.5mmのチャート、雲母を僅か に含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)磨耗の為不明 | 13世紀前後 |
| | | 391 | 40 | 第1層 | 土師器 皿 | 12.8 2.7 — | 外)5YR7/6褐色 内)7.5YR7/3にぶい橙色 | 2mm以下の長石、1mm以下のチャ ート、シャモット、0.5mmの雲母を少し含 む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 392 | 40 | 第1層 | 土師器 皿 | 13.2 2.1 — | 外・内)7.5YR7/4にぶい橙色 | 0.5mm以下の長石を少し含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ナデ | 13世紀前後 |
| | | 393 | 40 | 第0層 | 土師器 羽釜 | (31.0) — — | 外・内)7.5Y7/6褐色 断)10YR8/4浅黄褐色 | 4mmの黒色粒、3mmの長石、石英を含 む | 外)左方向へ調整の流れ、 ハケム痕 | 中世 |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|------------------|-----|------|---------|----------------------|-------------------------|-------------------------------|--|-----------------------------------|---|------------------------------|
| 08 1-2 調査区 | 88 | 394 | 41 | 第1層 | 瓦器 小碗 | 6.7 2.2 — | 外・内)N5/0灰色 | 密 | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ヨコナデ | 13世紀後半 |
| | | 395 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (6.8) — — | 外)2.5Y7/1灰白色 内・断)5YR7/1明褐色 | 砂粒を少し含む | 外)ヨコナデ 内)磨耗の為調整不明 | 13世紀後半 |
| | | 396 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (7.0) — — | 外)N6/0灰色 内)10R6/1赤灰色 断)N8/0灰白色 | 砂粒を含む | 外)ヨコナデ 内)磨耗の為調整不明 | 13世紀後半 |
| | | 397 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (7.0) — — | 外)7.5YR7/1明褐色 N6/0灰色 内)N7/0灰白色 断)10YR7/1灰白色 | 微細な長石、石英を僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ヨコナデ | 13世紀後半 |
| | | 398 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (6.0) 2.9 (3.2) | 外)N6/0灰色 内)5PB5/1青灰色 断)10Y7/1灰白色 | 密 | 外)ナデ 内)ヘラミガキ | 13世紀後半 |
| | | 399 | 41 | 第1層 | 瓦器 小碗 | (6.8) 2.8 (2.6) | 外)N5/0灰色 内)N6/0灰色 | 4mmのチャートを1粒、0.5mmの石英を 僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)暗文 | 13世紀後半 |
| | | 400 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (8.0) — — | 外)N6/0灰色 — 10YR7/1灰白色 内・断)5YR7/1明褐色 | 微細な長石をごく僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後不定方向のナデ 内)磨耗著しいが一部ミガ キが見える | 13世紀後半 |
| | | 401 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (7.4) 2.7 (2.6) | 外)N5/0灰色 内)N4/0灰色 断)5Y8/1灰白色 | 密 | 外)ヨコナデ 内)暗文 | 13世紀後半 |
| | | 402 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (7.8) 2.8 (3.0) | 外)10YR7/1灰白色 N4/0灰色 内)7.5R7/1明赤灰色 断)5YR8/1灰白色 | 0.5mm以下のチャートをごく僅かに含 む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)暗文 | 13世紀後半 |
| | | 403 | 41 | 第1層 | 瓦器 小碗 | 8.0 3.0 3.1 | 外)N5/0灰色 内)N7/0灰白色 | 0.5mmの砂粒、チャートを僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)磨耗著しいが一部暗 文が見える | 13世紀後半 |
| | | 404 | 41 | 第1層 | 瓦器 小碗 | (8.0) 2.9 3.1 | 外)2.5Y7/1灰白色 内)N6/0灰色 | 密 | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)暗文、底部と側面にハ ケメ | 13世紀後半 |
| | | 405 | | 第1層 | 瓦器 小碗 | (7.8) 3.3 (3.4) | 外)N3/0暗灰色 内)5YR7/1明褐色 断)5Y8/1灰白色 | 微細な石英をごく僅かに含む | 外)ヨコナデ 内)暗文 | 13世紀後半 |
| | | 406 | | 第1層 | 瓦器 碗 | 10.2 3.4 3.4 | 外)10YR7/1灰白色 N6/0灰色 内)N6/0灰色 断)10YR8/1灰白色 | 微細な金雲母を少し含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)ハケ後見込み部鋸歯状 暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 407 | 41 | 第0層 ～第1層 (南法面) | 瓦器 碗 | 10.2 3.7 2.5 | 外)N6/0灰色 内)N5/0灰色 | 3mmのチャートを1粒、微細な黒色粒 を含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)見込み部鋸歯状暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 408 | | 第1層 | 瓦器 碗 | (10.2) 3.7 (4.4) | 外・内)5PB5/1青灰色 断)10Y8/1灰白色 | 3mmの石英を1粒含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 409 | | 第1層 | 瓦器 碗 | 11.4 3.9 (4.7) | 外・内)N6/0灰色 断)N8/0灰白色 | 密 | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)暗文、一部磨耗 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 410 | 41 | 第1層 | 瓦器 碗 | 12.4 4.3 (4.5) | 外・内)N6/0灰色 | 砂粒を少し含む | 外)ヨコナデ、ユビナデ 内)鋸歯状暗文、一部磨 耗 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 411 | | 第1層 | 瓦器 碗 | 12.6 4.2 4.2 | 外)10YR7/1灰白色 N6/0灰色 内)2.5Y6/1黄灰色 断)10YR8/1灰白色 | 密 | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ハケ後暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 412 | | 第1層 | 瓦器 碗 | (13.2) 4.0 (4.0) | 外・内)N5/0灰色 断)N8/0灰白色 | 1mm以下のチャートをごく僅かに含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)鋸歯状暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| | | 413 | | 第1層 | 瓦器 碗 | 13.3 4.5 4.9 | 外・内)N5/0灰色 断)5Y8/1灰白色 | 2.5mmのチャートを1粒含む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 後ナデ 内)ハケ後暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 |
| 414 | 42 | 第1層 | 瓦器 碗 | 12.6 4.4 5.0 | 外・内)N5/0灰色 | 密 | 外)強いヨコナデ、ユビオ サエ 内)暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 | | |
| 415 | | 第1層 | 瓦器 碗 | 12.2 3.9 4.6 | 外・内)N6/0灰色 断)N8/0灰白色 | 1mm以下の長石、チャートを僅かに含 む | 外)ヨコナデ、ユビオサエ 内)暗文 | 楠葉型III-3期～IV-1期 13世紀中頃～後半 | | |
| 416 | | 第1層 | 瓦器 皿 | (8.0) 1.5 — | 外・内)N5/0灰色 断)N7/0灰白色 | 密 | 内)ヨコナデ、細いハケ後 ナデ、見込み部鋸歯状暗 文 | | | |
| 89 | 417 | 42 | 第0層 | 瓦質土器 三足鉢 | (14.2) 5.4 — | 外・内)5Y7/1灰白色 断)5Y6/1灰色 | 1mmの黒色粒を含む | 内)底部に細いヘラミガキ | 11～12世紀以降 | |
| | 418 | 42 | 南法面 | 瓦質土器 甕 | (29.6) — — | 外)N5/0灰色 内・断)10YR7/2にぶい黄褐色 | 2mmの長石を含む | 外)タタキ後クロナデ、平 行タタキ 内)横方向のナデ? | | |
| | 419 | | 第0層 | 瓦質 鍋 | (24.0) — — | 外・内)10YR7/1灰白色 断)N7/0灰白色 | 1mm以下の長石、雲母、砂粒を少し 含む | 外)ユビオサエ痕 内)横方向の細かいハケメ | 一部に煤が付着 | |
| | 420 | 42 | 機械掘削層 | 瓦質土器 釜 | (16.4) — — | 外・内)N4/0灰色 断)7.5YR5/2灰褐色 | 3mmの長石を僅かに含む | 外)貼り付け時ヨコナデ、 ナデ? 内)横方向ナデ | 体部外面に炭化物が厚く 付着 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|-----|-----|----------|----------|---------------------|-------------------|--------------------------|--|------------------------|---|---|
| 89 | | 421 | | 第1層 | 瓦質土器 三足釜 | (14.6) — — | 外)N4/0灰色 内)N5/0灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 1mm以下の長石、砂粒を含む | 外)強いナデ 内)ナデ | |
| | | 422 | | 第0層 | 瓦質 脚 | 脚の長さ: 20.3 | 外)5RP5/1茶灰色 内・断)7.5YR7/1明褐色 | 砂粒を少し含む | ヘラケズリ後ナデ | |
| | | 423 | | 第1層 | 瓦質土器 炉の台? | — — (38.6) | 外)10YR5/1褐色 内)7.5YR5/1褐色 断)7.5YR6/2灰褐色 | 1mm以下の長石を少し、砂粒、雲母を多く含む | 外)コピオサエ、ナデ、ミガキ痕 内)磨耗の為調整不明 | 円形の窓あり |
| 90 | | 424 | | 機械掘削層 第0層 第1層 | 東播系 須恵器 片口鉢 | (26.5) 10.1 (9.0) | 外・内・断)N6/0灰色 | 10mmの礫を含む | 外)回転ナデ、底部ヘラ切り未調整 内)不整方向のナデ | 森田分類第II期第1段階 12世紀中葉～後半 |
| | | 425 | | 第0層 第1層 | 東播系 須恵器 片口鉢 | (28.8) — — | 外)5Y7/1灰白色 内・断)7.5Y7/1灰白色 | 3mmの長石、2mmの黒色粒を含む | 外)回転ナデ 内)左上方向ヘナデ | 口縁部内面の一部被熱 |
| | | 426 | 43 | 機械掘削層 第2層(上層) | 東播系 須恵器 片口鉢 | (28.2) 10.4 (10.2) | 外)10YR6/1褐色 内)10YR7/1灰白色 | 礫が多く、7.0mmの長石を含む | 外)回転ナデ、マキアグ・ミズビキによる成形時のナデ、底部未調整 内)不整方向のナデ、回転ナデ | 第III期第1～2段階 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 427 | 44 | 機械掘削層 第0層 | 古瀬戸 筒形容器 | (13.0) — — | 外)5Y7/3浅黄色 内・断)7.5YR7/2明褐色 | チャートを僅かに含む | 施釉、沈線 | 後期様式 15世紀 |
| | | 428 | 43 | 第0層 第1層 第2層 | 常滑焼 (知多窯) 甕 | (22.5) 35.3 12.0 | 外)5Y6/2灰オリブ色 5Y3/1オリブ黒色 内)7.5YR4/1褐色 | 1mm以下の長石、チャートを少し含む | 外)ヨコナデ、ケズリ後ナデ、施釉 内)ヨコナデ、縦方向のナデ、施釉 | 中野分類3～4形式 12世紀後半～13世紀初頭 |
| | | 429 | カラー 7 | 第1層 | 青磁 碗 | (13.0) 6.2 (3.2) | 外)7.5GY6/1緑灰色 内)5GY6/1オリブ灰色 断)5Y6/1灰色 | 密 | 外)鑄蓮弁紋 内)無紋 | 大宰府分類 龍泉窯系III-2c類 13世紀中頃～14世紀初頭前後 |
| 91 | | 430 | カラー 7 | 第0層 | 青磁 碗 | (14.0) — — | 外)2.5GY6/1オリブ灰色 内)10Y6/2オリブ灰色 断)5Y7/2灰白色 | 密 | 外)鑄蓮弁紋 | 大宰府分類 龍泉窯系III-2c類 13世紀中頃～14世紀初頭前後 |
| | | 431 | カラー 7 | 第1層 | 青磁 碗 | (14.0) — — | 外)5GY6/1オリブ灰色 内)7.5GY6/1緑灰色 断)2.5Y7/2灰黄色 | 密 | 外)鑄蓮弁紋 | 大宰府分類 龍泉窯系III-2c類 13世紀中頃～14世紀初頭前後 |
| | | 432 | カラー 7 | 機械掘削層 第0層 | 青磁 碗 | (15.6) 6.8 4.2 | 外)2.5GY6/1オリブ灰色 内)2.5GY7/1明オリブ灰色 | 密 | 外)鑄蓮弁紋、削り出し高台 内)無紋 | 龍泉窯系II-b類 13世紀前半 |
| | | 433 | カラー 7 | 第0層 | 青磁 碗 | (16.0) — — | 外・内)10Y6/2オリブ灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 密 | 外)鑄蓮弁紋 内)無紋 | 龍泉窯系II-b類 13世紀後半 |
| | | 434 | カラー 7 | 第1層 | 青磁 碗 | — — (5.8) | 外)7.5Y5/2灰オリブ色 内)10Y6/2オリブ灰色 断)5Y6/1灰色 | 密 | 外)ヘラケズリの痕跡 | |
| | | 435 | カラー 7 | 第0層 | 青磁 碗 | — — (5.8) | 外)5Y5/1灰色 内)2.5Y5/2暗灰黄色 断)2.5Y6/2灰黄色 | 密 | 外)削り出し底部 | 龍泉窯系 |
| | | 436 | カラー 7 | 第1層 | 青磁 皿 | (10.0) 2.1 (4.8) | 外)7.5GY7/1明緑灰色 7.5YR6/2灰褐色 内)5GY7/1明オリブ灰色 断)10Y7/1灰白色 | 密 | 外)施釉、クシ目後ケズリ?、ナデ、飛鉋の跡 | 大宰府分類 龍泉窯系I-2a類 12世紀中頃～後半 |
| | | 437 | カラー 7 | 第1層 | 青磁 皿 | (10.4) — — | 外・内)7.5Y6/2灰オリブ色 断)7.5Y7/1灰白色 | 密 | 外・内)施釉 | 12世紀中頃～後半 |
| | | 438 | カラー 7 | 第1層 | 青白磁 (影青) 合子 | 6.2 2.9 5.6 | 外)5G7/1明緑灰色 10YR8/2灰白色 内)2.5GY7/1明オリブ灰色 | 密 | 外)菊花形 | |
| | | 439 | カラー 8 | 第2層 | 白磁 皿 | (9.2) 1.8 (6.0) | 外・内)5Y8/1灰白色 断)N7/0灰白色 | 密 | 外・内)施釉、口禿 | 大宰府分類IX-1a類 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 440 | カラー 8 | 第0層 | 白磁 皿 | (9.4) 2.5 (5.4) | 外・内)5Y8/1灰白色 断)2.5Y7/1灰白色 | 密 | 外・内)施釉、口禿 | 大宰府分類IX-1b類 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 441 | カラー 8 | 第0層 | 白磁 皿 | (11.0) — — | 外・内)N7/0灰白色 断)2.5Y7/1灰白色 | 密 | 外・内)施釉、口禿 | 大宰府分類IX-1c類 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 442 | カラー 8 | 第1層 | 褐釉陶器 壺 | — — — | 外・内)N6/0灰色 断)5RP6/1茶灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 443 | カラー 8 | 第1層 | 褐釉陶器 壺 | — — — | 外)N6/0灰色 内)5PB6/1青灰色 断)10YR6/1褐色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 444 | カラー 8 | 第1層 | 褐釉陶器 壺 | — — — | 外・内)N6/0灰色 断)2.5YR6/1赤灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 445 | カラー 8 | 第1層 | 褐釉陶器 壺 | — — — | 外・内)N6/0灰色 断)N5/0灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | 446 | カラー 8 | 第1層 | 褐釉陶器 壺 | — — — | 外・内・断)N6/0灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 | |

| 調査区 | 図番号 | 遺物番号 | 写真図版 | 出土遺構・層位 | 器種 | 口径器高底径(cm) | 色調 | 胎土 | 成形・調整など | 備考 |
|---------------------|-----|------|------|------------|-------|--|--|--------------------------------------|-----------------------|---------------------------|
| 08 2 調査区 | 91 | 447 | カラー8 | 第1層 | 褐釉陶器壺 | | 外)10YR6/1褐灰色 内)5YR6/1褐灰色 断)7.5YR6/2灰褐色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 448 | カラー8 | 第1層 | 褐釉陶器壺 | | 外)10YR6/1褐灰色 内)7.5YR6/2灰褐色 断)7.5YR6/1褐灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 449 | カラー8 | 第0層 | 褐釉陶器壺 | | 外・内)5YR6/1褐灰色 断)2.5YR6/1赤灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 450 | カラー8 | 第0層 | 褐釉陶器壺 | | 外・内)5YR6/1褐灰色 断)5RP6/1紫灰色 | 密 | 外)ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 451 | カラー8 | 北法面 | 褐釉陶器壺 | | 外)2.5Y7/1灰白色 内)10YR6/1褐灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 密 | 外)粗い回転ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 452 | カラー8 | 第1層 | 褐釉陶器壺 | | 外)7.5YR6/1褐灰色 内)N6/0灰色 断)10R6/1赤灰色 | 密 | 外)粗い回転ヘラケズリ 内)ヨコナデ | 13世紀後半～14世紀前半 |
| | | 453 | カラー8 | 第0層 第1層 | 褐釉陶器壺 | — — (7.6) | 外)2.5Y6/1黄灰色 内)10YR7/1灰白色 断)2.5Y7/1灰白色 | 黒色斑点を含む | 外)粗いヘラケズリ 内)ヨコナデ | 大宰府分類IV類 13世紀後半～14世紀前半 |
| | 92 | 454 | 44 | 中央谷 | 軒丸瓦 | 軒丸径:15.0 | 凸)N4/0灰色 凹)N5/0灰色 断)5Y7/1灰白色 | 3mm以下の長石を多く、石英を少し含む | 凹)布目 | 左巻き三巴紋 16世紀後半 |
| | | 455 | | 中央谷 | 軒丸瓦 | 軒丸径:15.0 | 外・内)N4/0灰色 断)7.5YR7/1明褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、石英、雲母を少し含む | 凸・凹)ナデ | 左巻き三巴紋 16世紀後半 |
| | | 456 | | 中央谷 | 軒平瓦 | | 凸・凹)N5/0灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 1mm以下の長石、2mm以下のチャートを少し含む | 凸・凹)ナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| | | 457 | 44 | 中央谷 | 軒平瓦 | | 凸・凹)N5/0灰色 断)5YR7/1明褐灰色 | 3mm以下の長石、1mm以下のチャートを少し、3mm以下の石英を多く含む | 凸・凹)ナデ | 宝珠唐草紋 16世紀後半 |
| | | 458 | | 中央谷 | 丸瓦 | 幅:16.0 | 凸)N6/0灰色 凹)N5/0灰色 断)5YR7/1明褐灰色 | 3mm以下の長石を多く、2mm以下の石英を少し、金雲母を僅かに含む | 凹)布目 | |
| | | 459 | | 中央谷 | 丸瓦 | 長さ:31.0 幅:12.4 | 凸・凹)N5/0灰色 断)2.5Y7/1灰白色 | 1mm以下の長石、チャートを少し含む | 凹)布目、吊り紐痕 | |
| | | 460 | 44 | 第1層 | 軒丸瓦 | 軒丸径:13.6 幅:13.8 | 凸)5PB6/1青灰色 凹)10YR6/1褐灰色 断)7.5YR6/1褐灰色 | チャートをごく僅かに含む | 凹)布目 | 13世紀～14世紀の復古瓦 |
| | 461 | | 第0層 | 軒丸瓦 | | 外)N4/0灰色 内)10Y5/1灰色 断)2.5Y7/3浅黄色 | 3mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む | ナデ | 菊花紋 中世III期 13世紀後半 | |
| | 93 | 462 | | 中央谷 | 平瓦 | 長さ:28.9 幅:22.7 | 凸・凹)5B5/1青灰色 断)5YR7/1明褐灰色 | 1mmの長石を多く、3.5mm以下のチャートを少し含む | 凸)粗いナデ 凹)縦方向のナデ | |
| | | 463 | | 中央谷 | 平瓦 | 長さ:29.3 幅:21.6 | 凸・凹)N6/0灰色 断)2.5Y8/1灰白色 | 3mm以下の長石、2mm以下の石英、0.5mmのチャートを少し含む | 凸)ナデ 凹)縦方向のナデ | |

写真図版



第1面北部(南から)



第1面中部(北から)



第1面南部(西から)



第3面全景(北から)



第3面全景(南西から)



空風輪出土状況(西から)



50溝土器出土状況(南西から)



調査区遠景(西から)



調査前状況(南から)



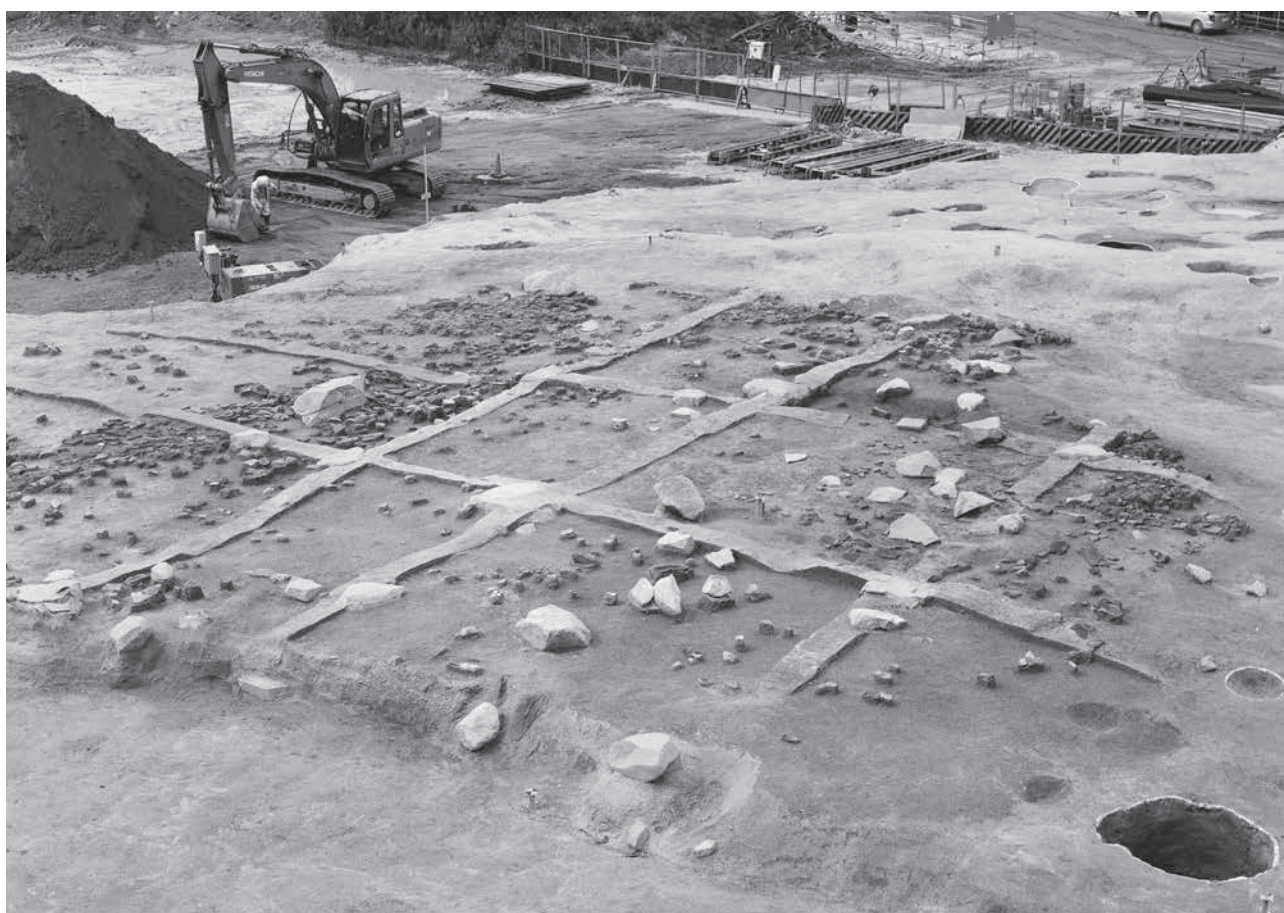
第1面全景(西南西から)



3建物(手前)と2墓(中央奥) (南から)



3 建物検出状況 (北東から)



3 建物遺物出土状況 (北東から)



3 建物大観通宝出土状況(南東から)



3 建物青銅製品等出土状況(南から)



3 建物遺物出土状況(南から)



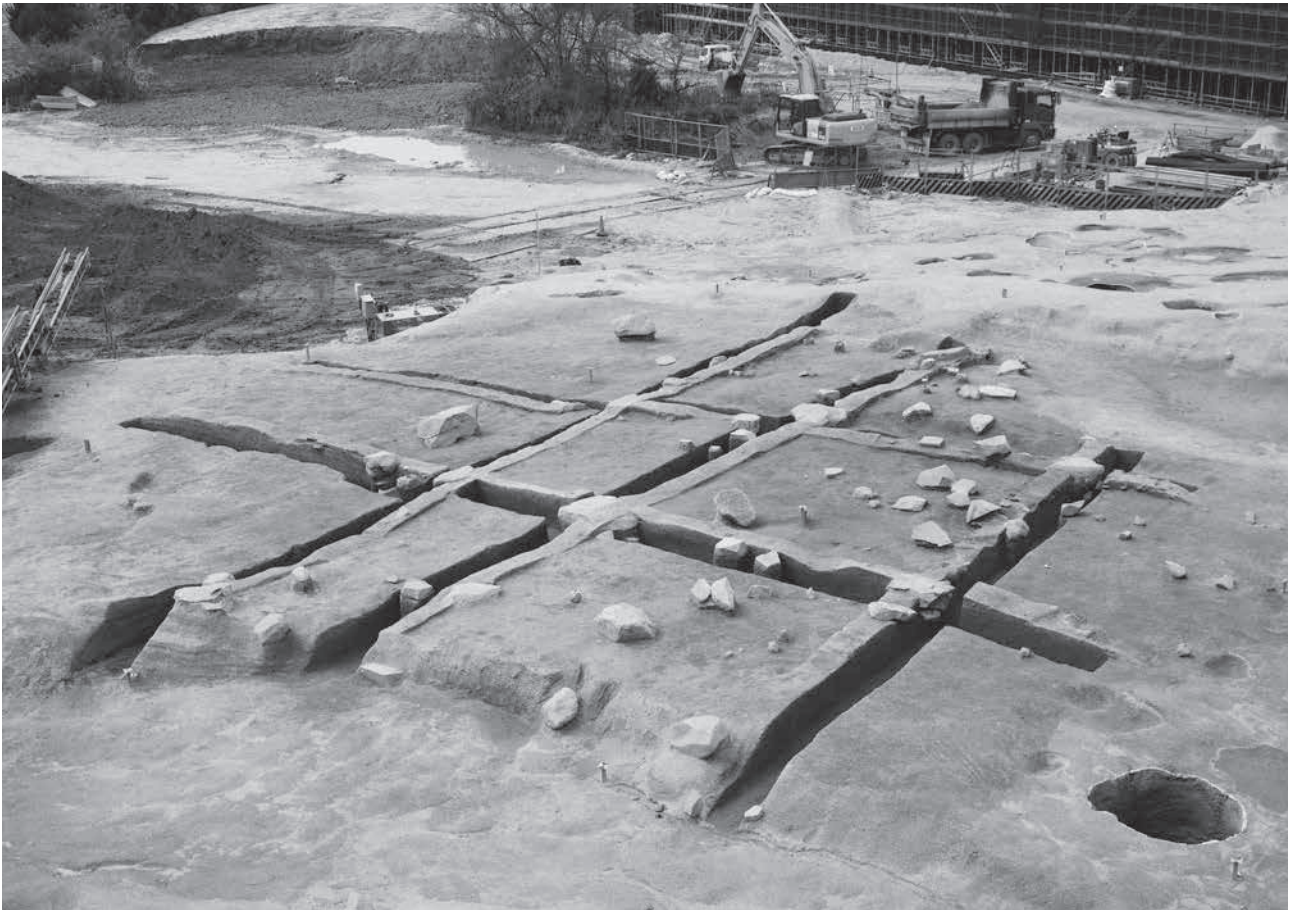
3 建物遺物出土状況(西から)



244 礎石断面(東から)



239 礎石断面(南から)



3 建物遺物取り上げ後状況(北東から)



3 建物完掘状況(北西から)



26石仏列(西から)



1石群(西から)



1石群断面(南から)



2墓検出状況(南から)



2墓完掘状況(南から)



4石組(南から)



4石組断面(南東から)



18 豎穴(北西から)



18 豎穴内24 炉(右)・25 ピット(左)断面(東から)



235 溝(南東から)



第2面全景(南西上空から)



第2面全景(西北西から)



32石群(北から)



32石群(南東から)



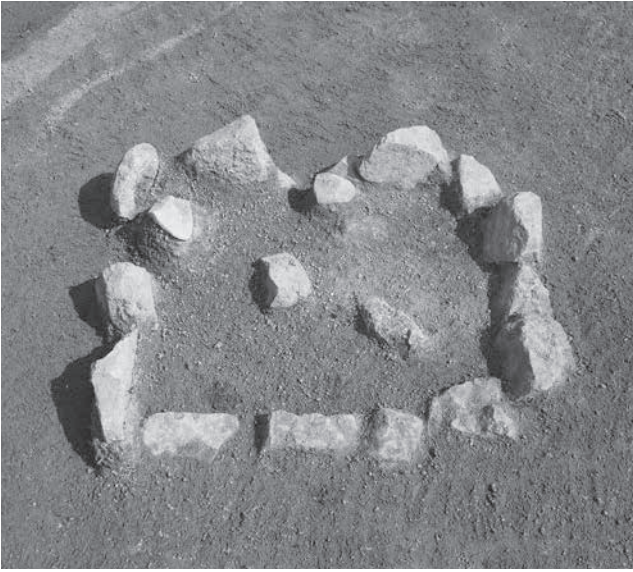
32石群断面(南西から)



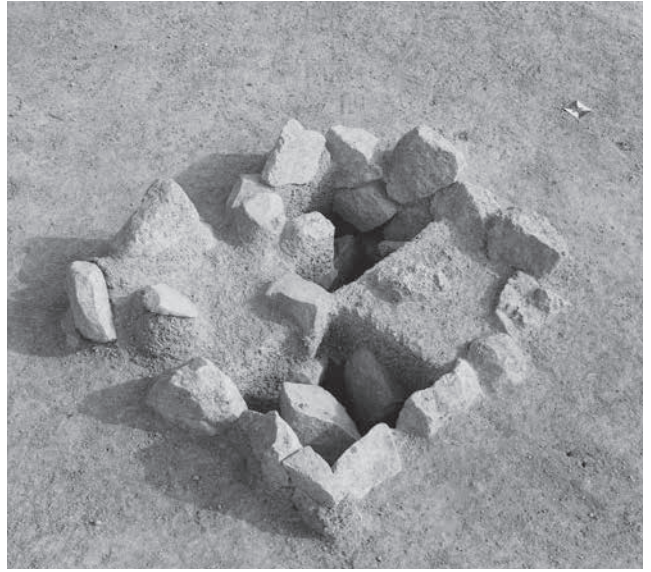
89石群(西から)



89石群(北から)



84石囲い検出状況(西北西から)



84石囲い断面(北北西から)



84石囲い石出土状況(南南西から)



84石囲い完掘状況(南南西から)



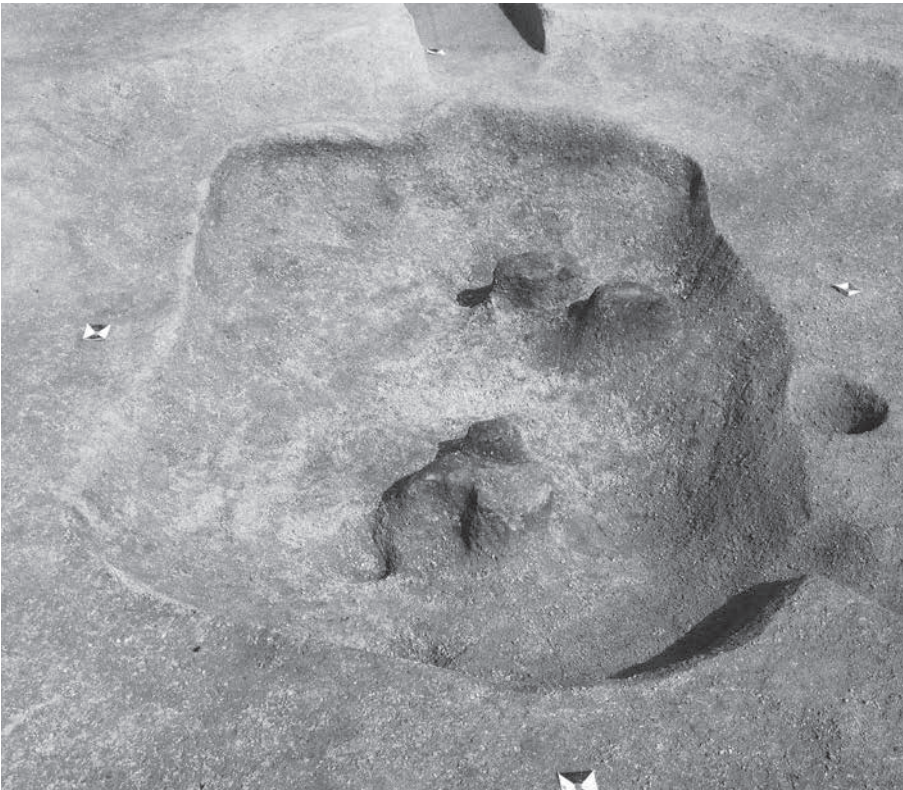
84石囲い完掘状況(北北東から)



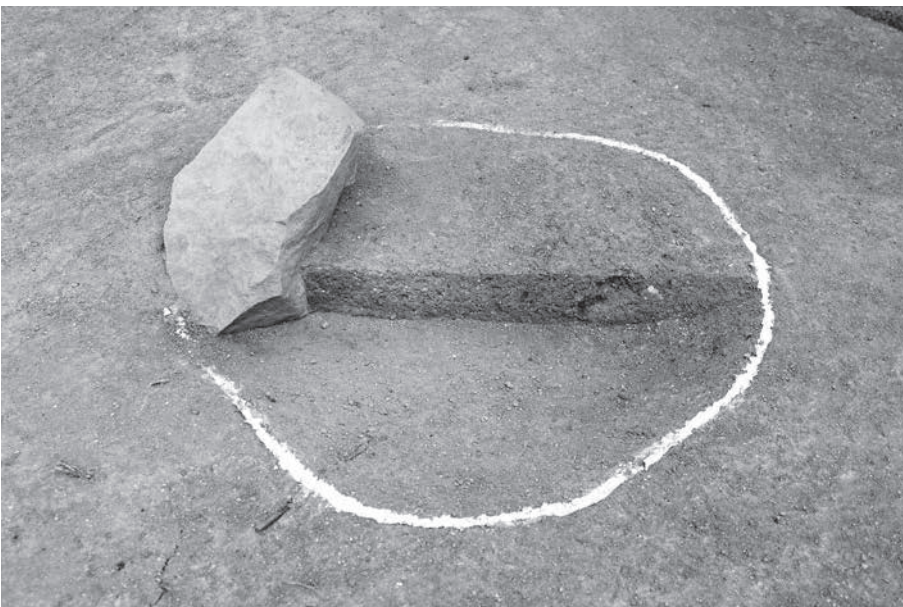
84石囲い掘方断面(北北西から)



(上左) 93 焼土坑断面(北西から)
(上右) 93 焼土坑断面(西から)



93 焼土坑完掘状況(西から)



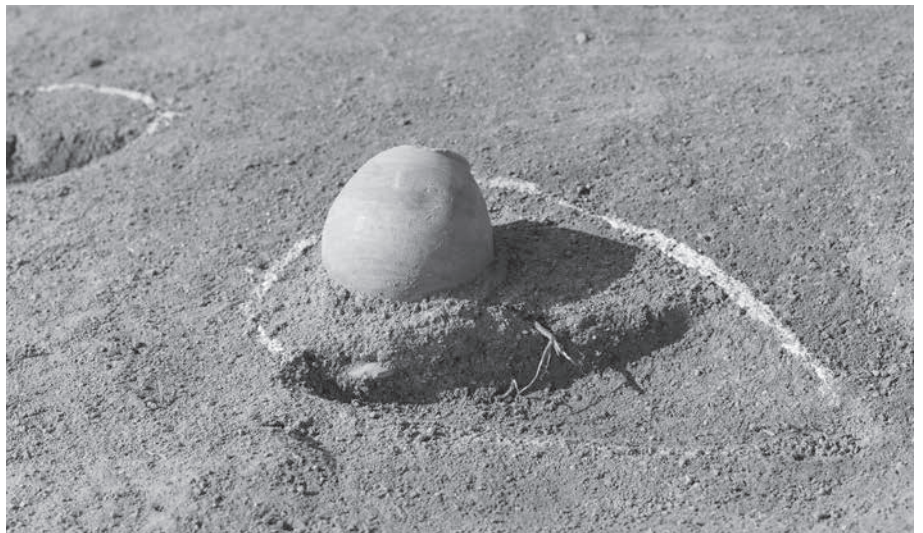
121 ピット(南から)



62墓(北から)



114墓(北から)



112墓(南から)



第 2 - 2 面北西部 (北東から)



第 2 - 2 面南東部 (南東から)



134 土坑(南西から)



135 焼土坑断面(東南東から)



135 焼土坑完掘状況(南南西から)



第3面北西部(東から)



第3面南東部(北から)



第3面50溝出土遺物



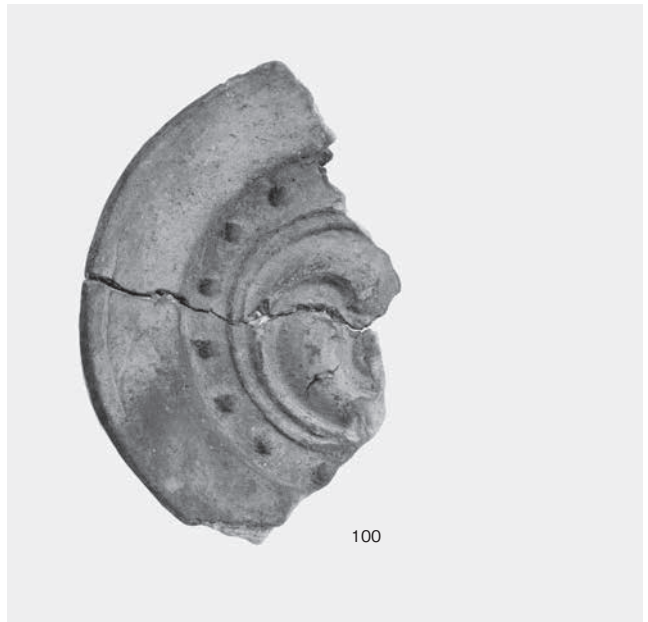
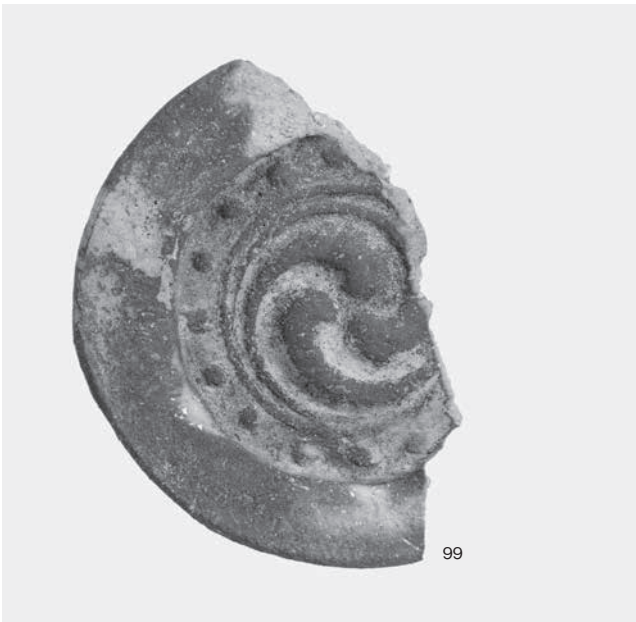
第3面出土五輪塔空風輪



中世洪水砂層出土遺物



近世洪水砂層出土遺物





103



104



105



106



107



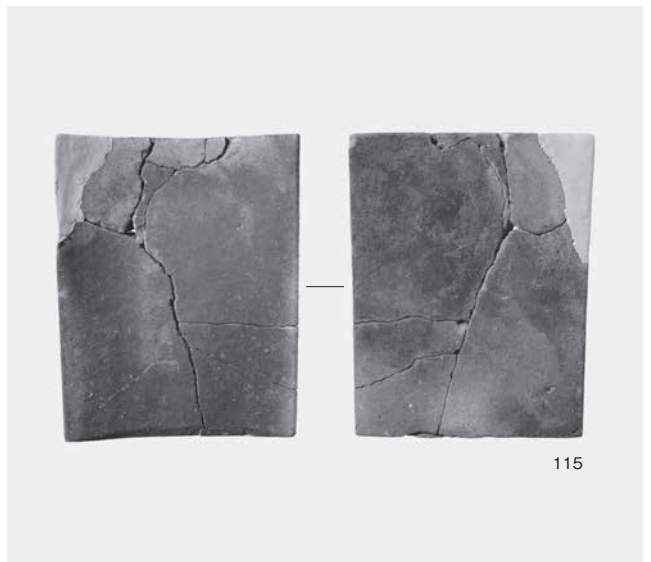
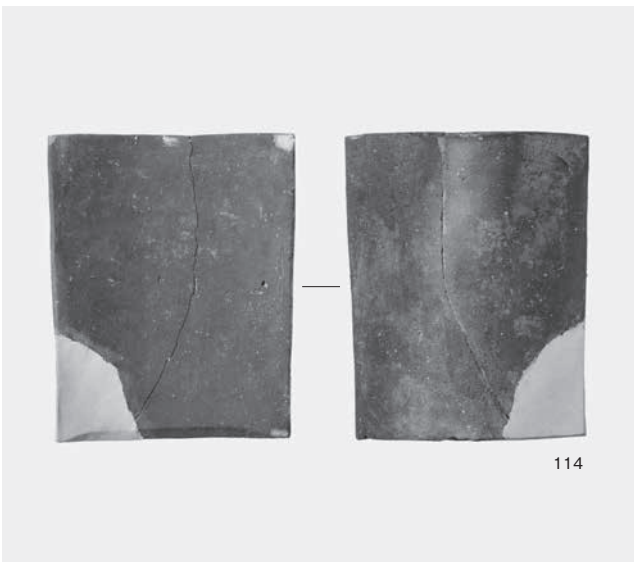
108



109



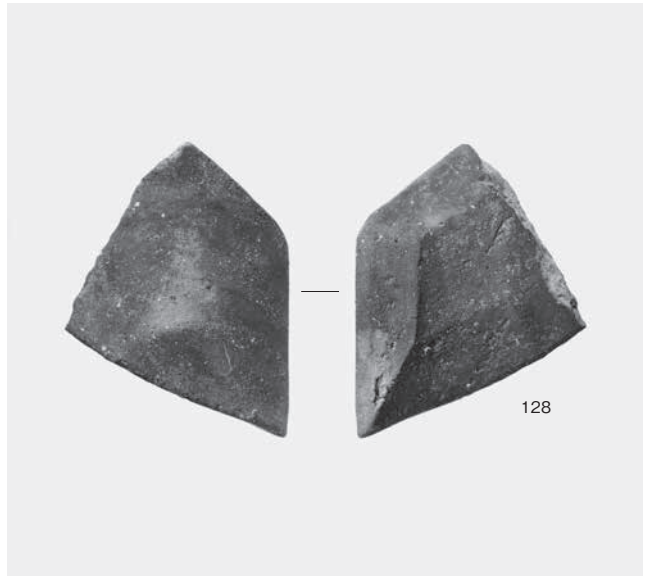
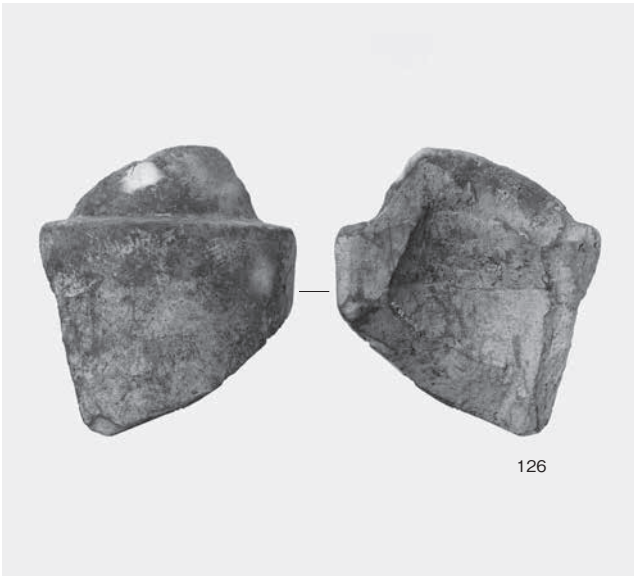
丸瓦



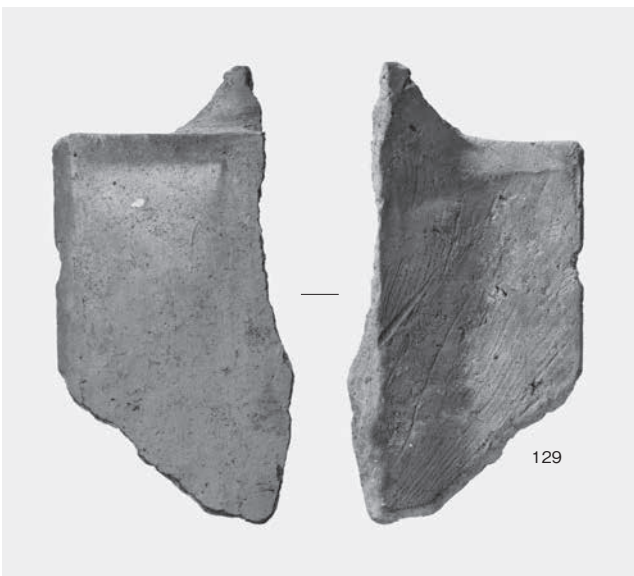
平瓦



竹管文のある平瓦



面戸瓦



雁振瓦

道具瓦



文字瓦



隅木蓋瓦



菊花文軒丸瓦



劍頭文軒平瓦



160



161



164



178



179

3 建物出土遺物

29土坑出土瓦



184



185

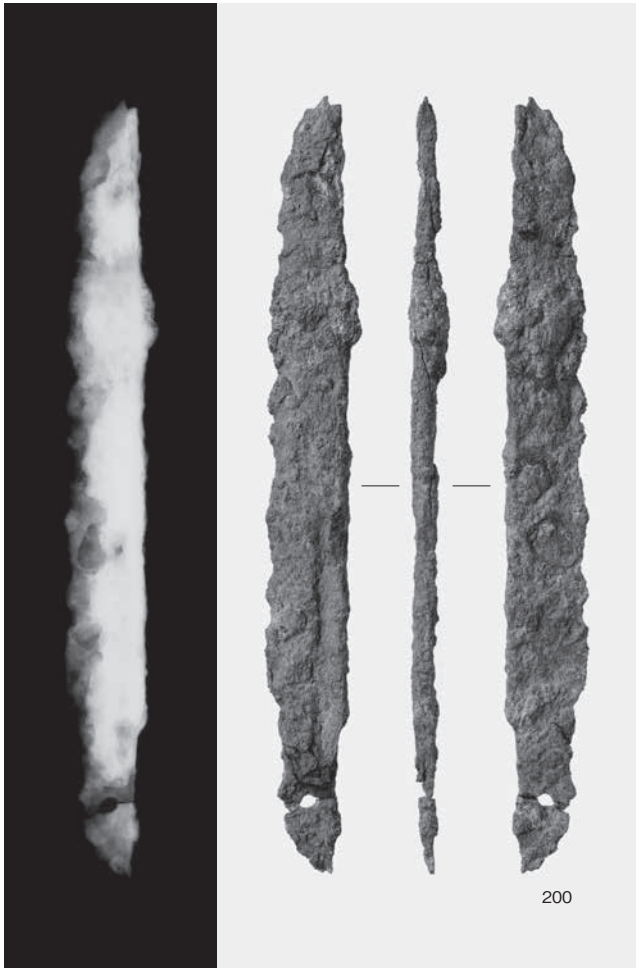
26石仏列(1)



26石仏列(2)



石仏





199

2 墓出土土器



207

18 豎穴出土土器



233

15 土坑出土土器



234

16 石群出土土器



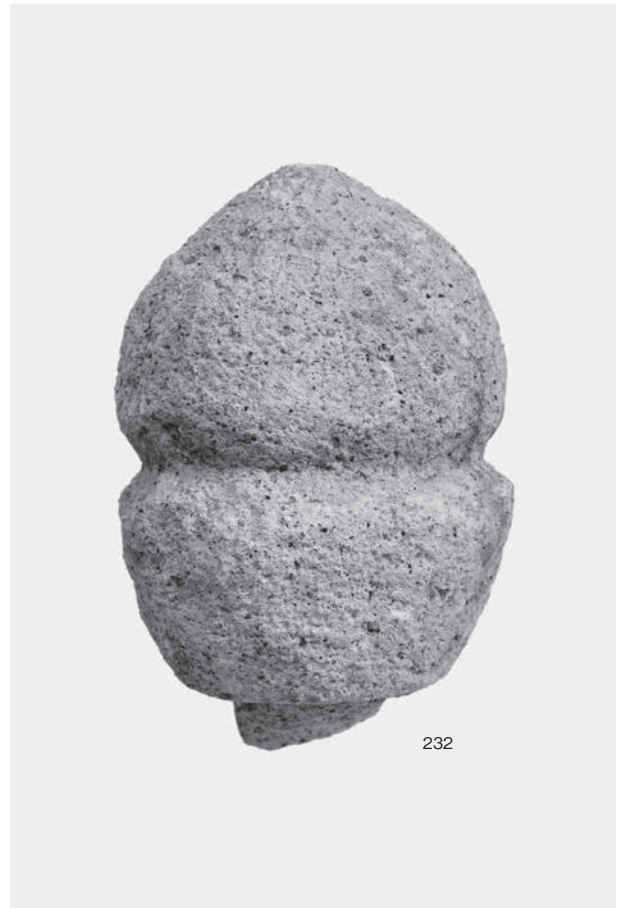
235

22 土坑出土石鍋



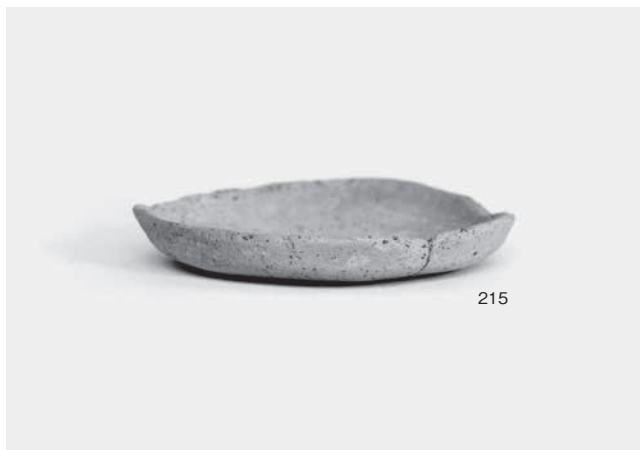
236

28 ピット出土土器



232

4 石組出土五輪塔空風輪



215



217



218



220



221



222



224



211

235 溝出土土器

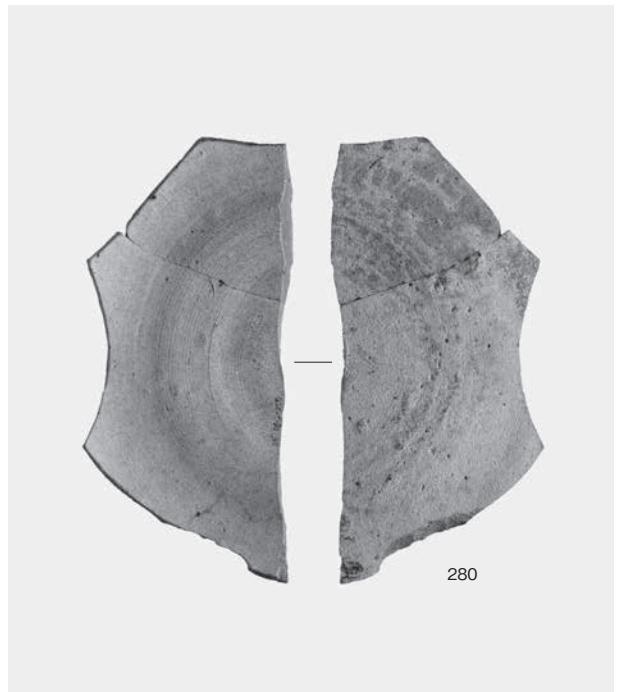
31 溝出土土器



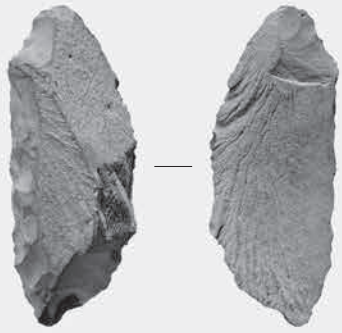
73土坑出土土器



83ピット出土土器



43落ち込み出土土器



292



293



294



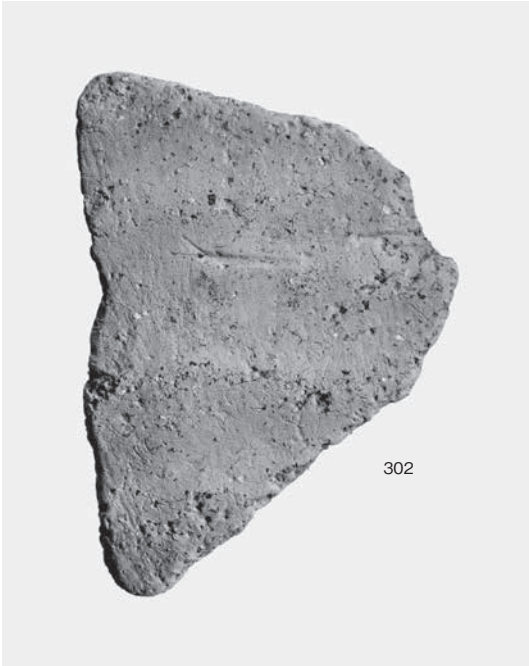
295



296

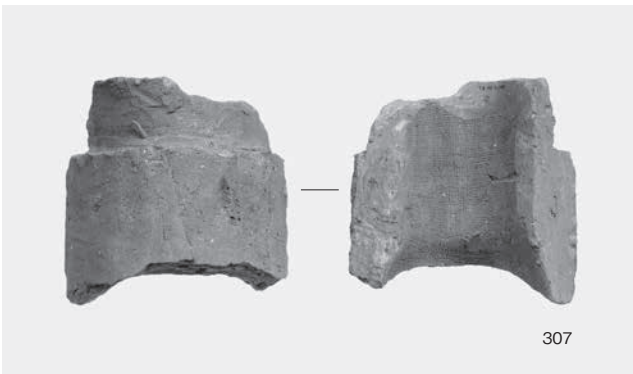


297

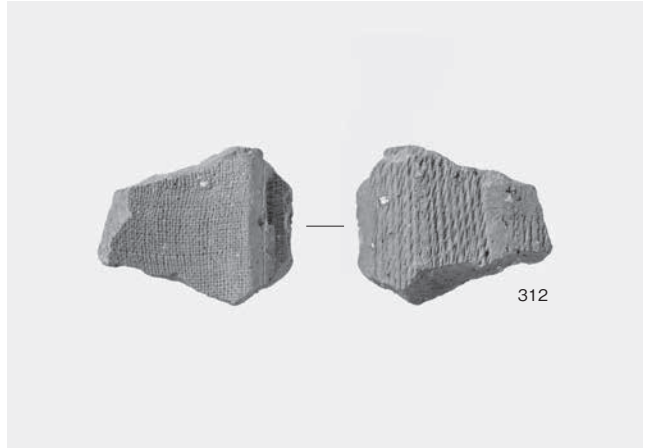
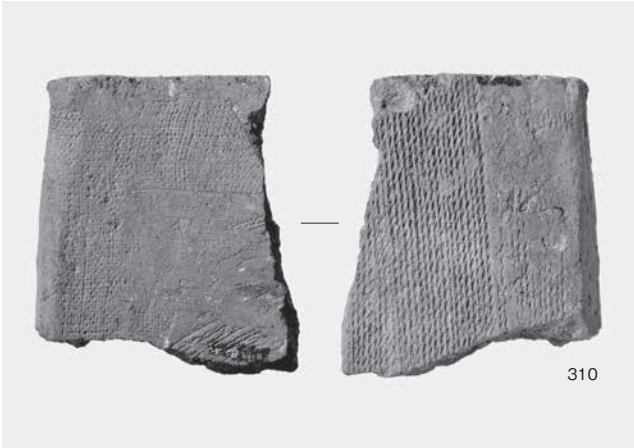


縄文土器

弥生土器



古代の瓦(1)

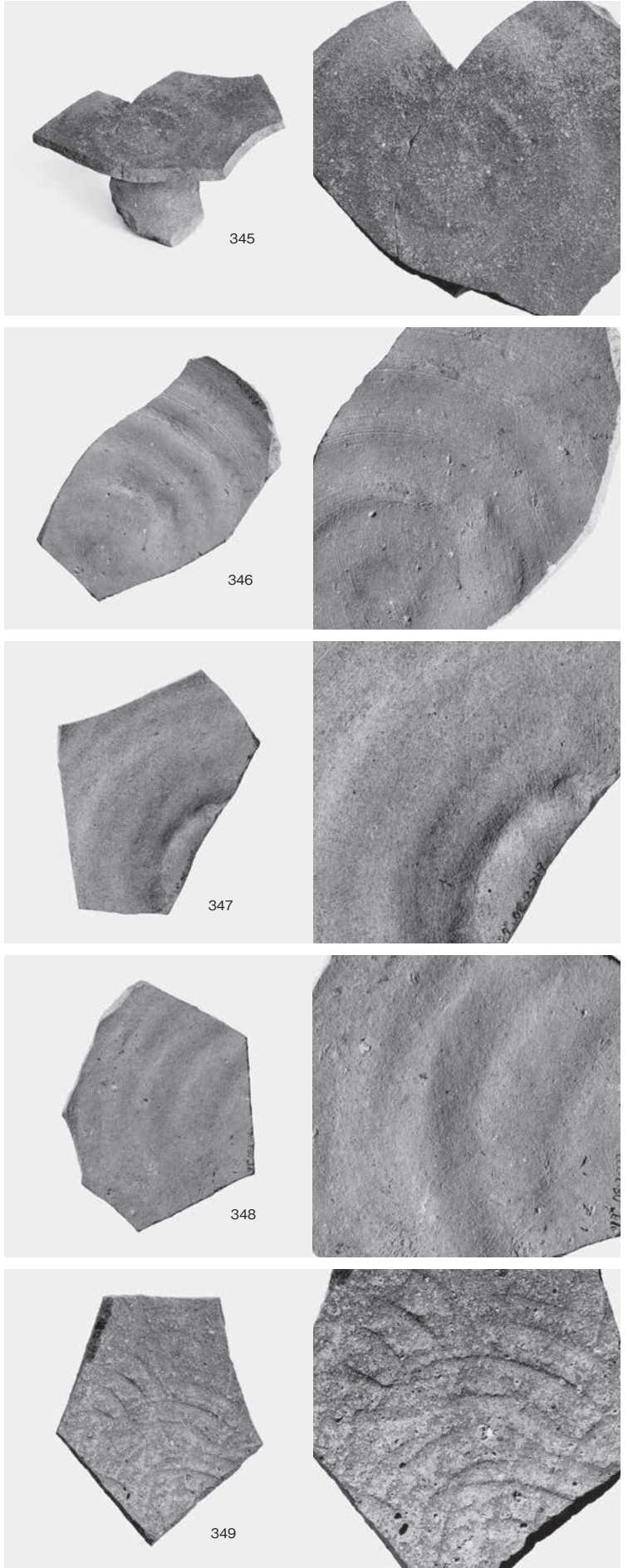
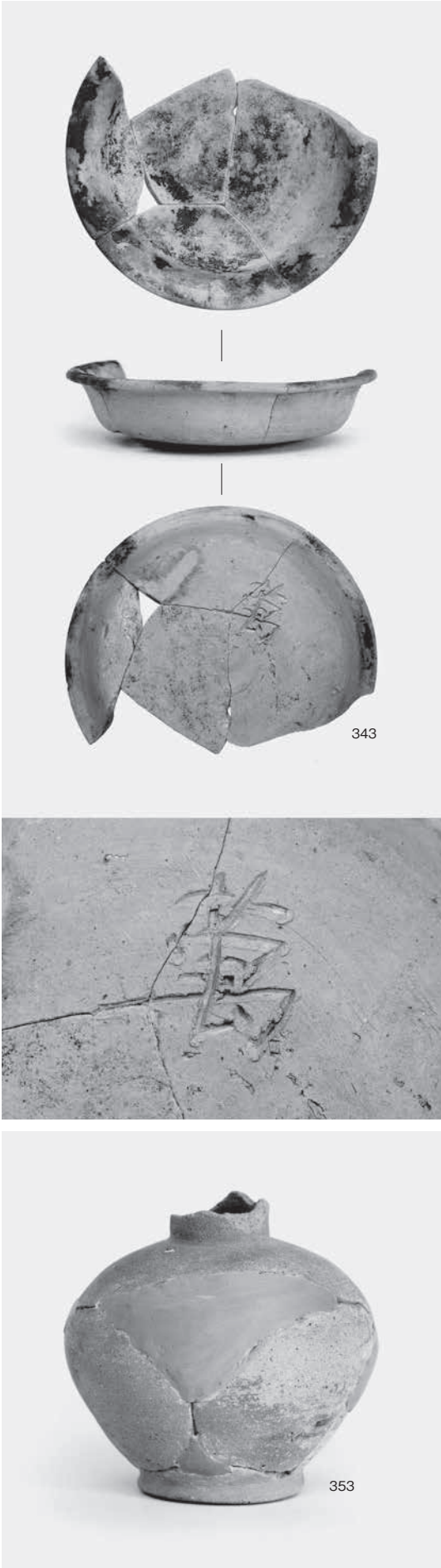


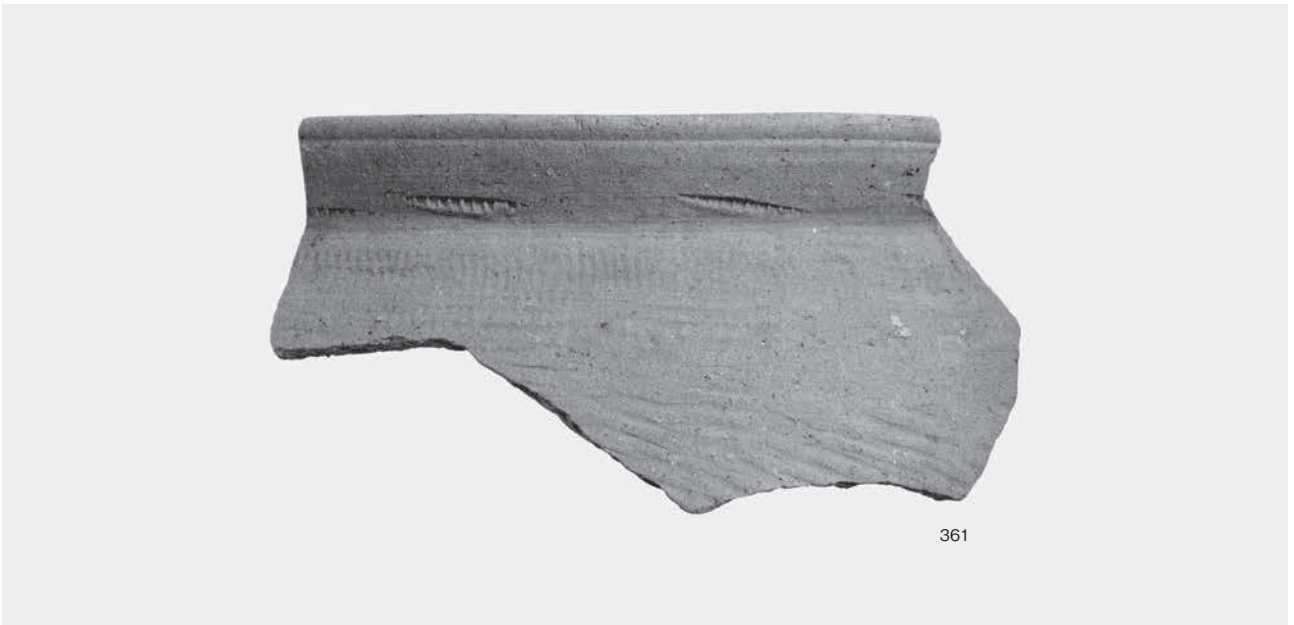
古代の瓦(2)



古代の土師器







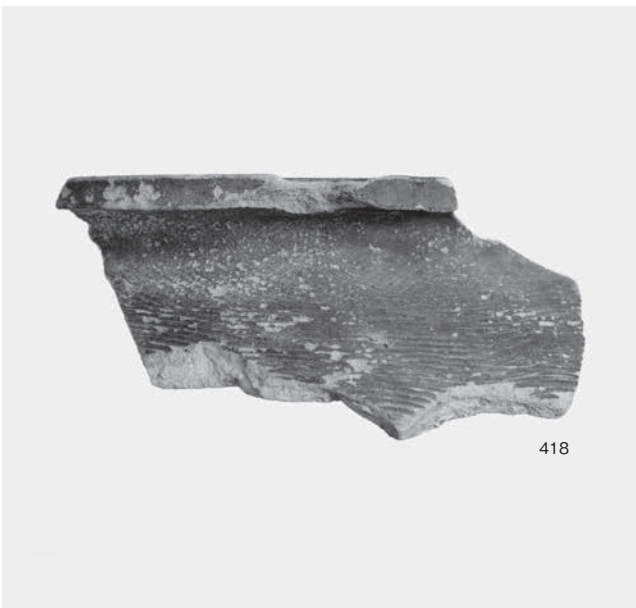








瓦器



瓦質土器



東播系須恵器



常滑焼



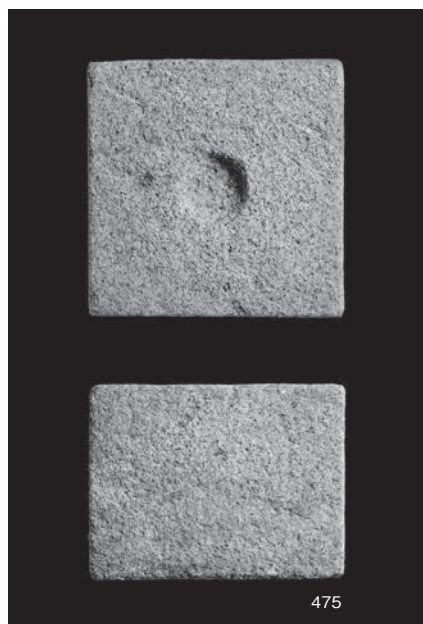
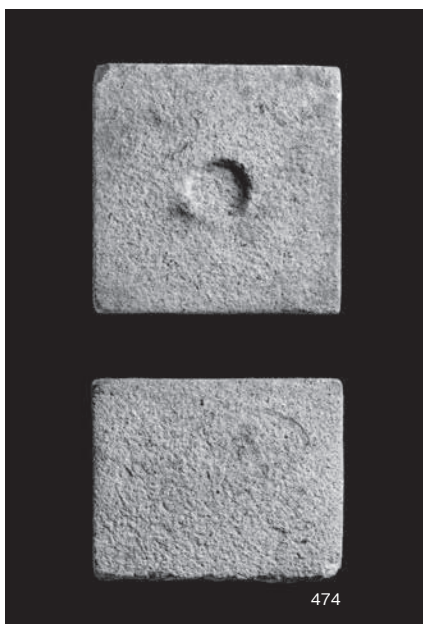
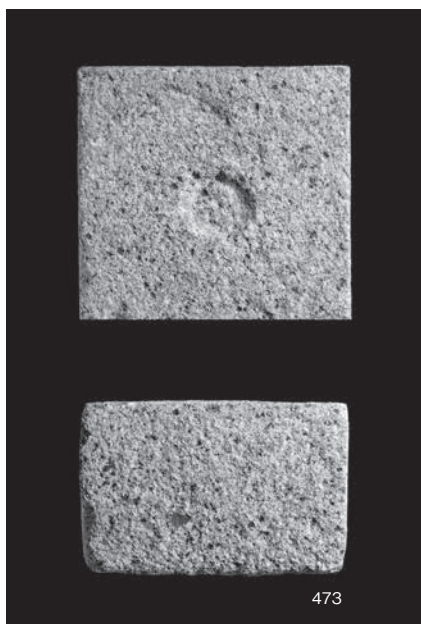
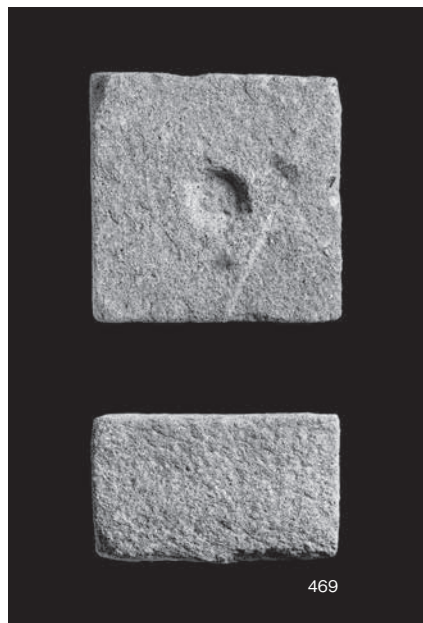
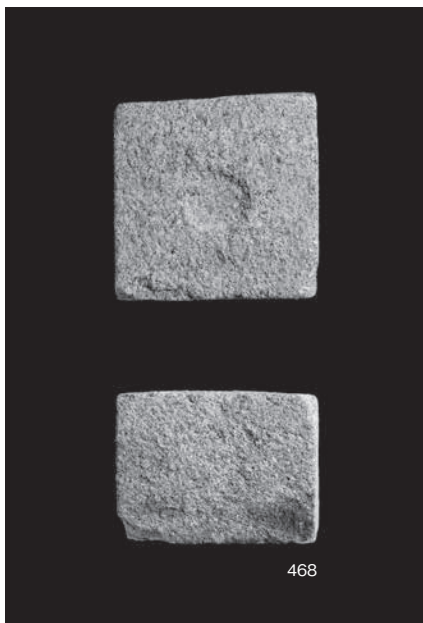
古瀬戸

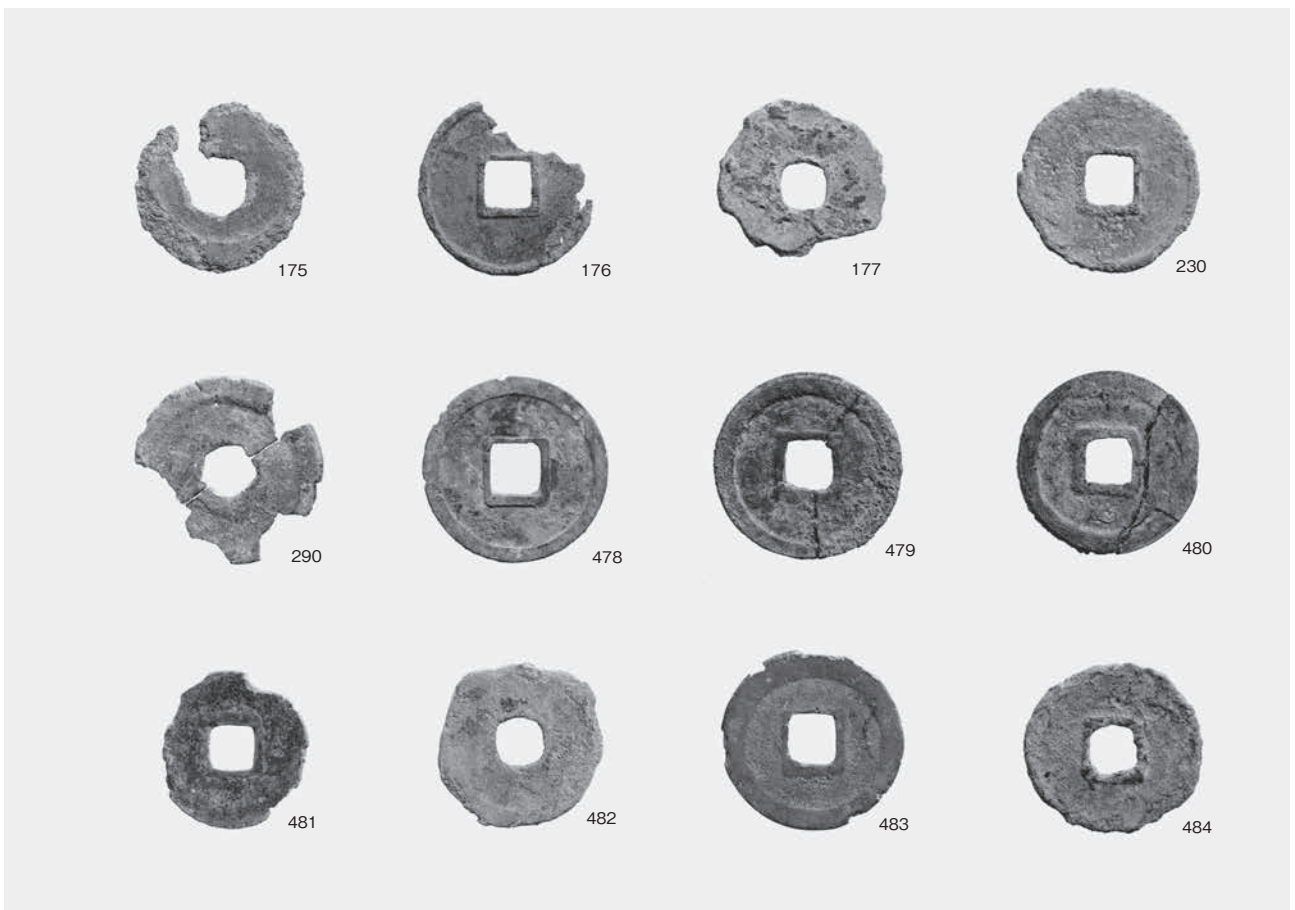
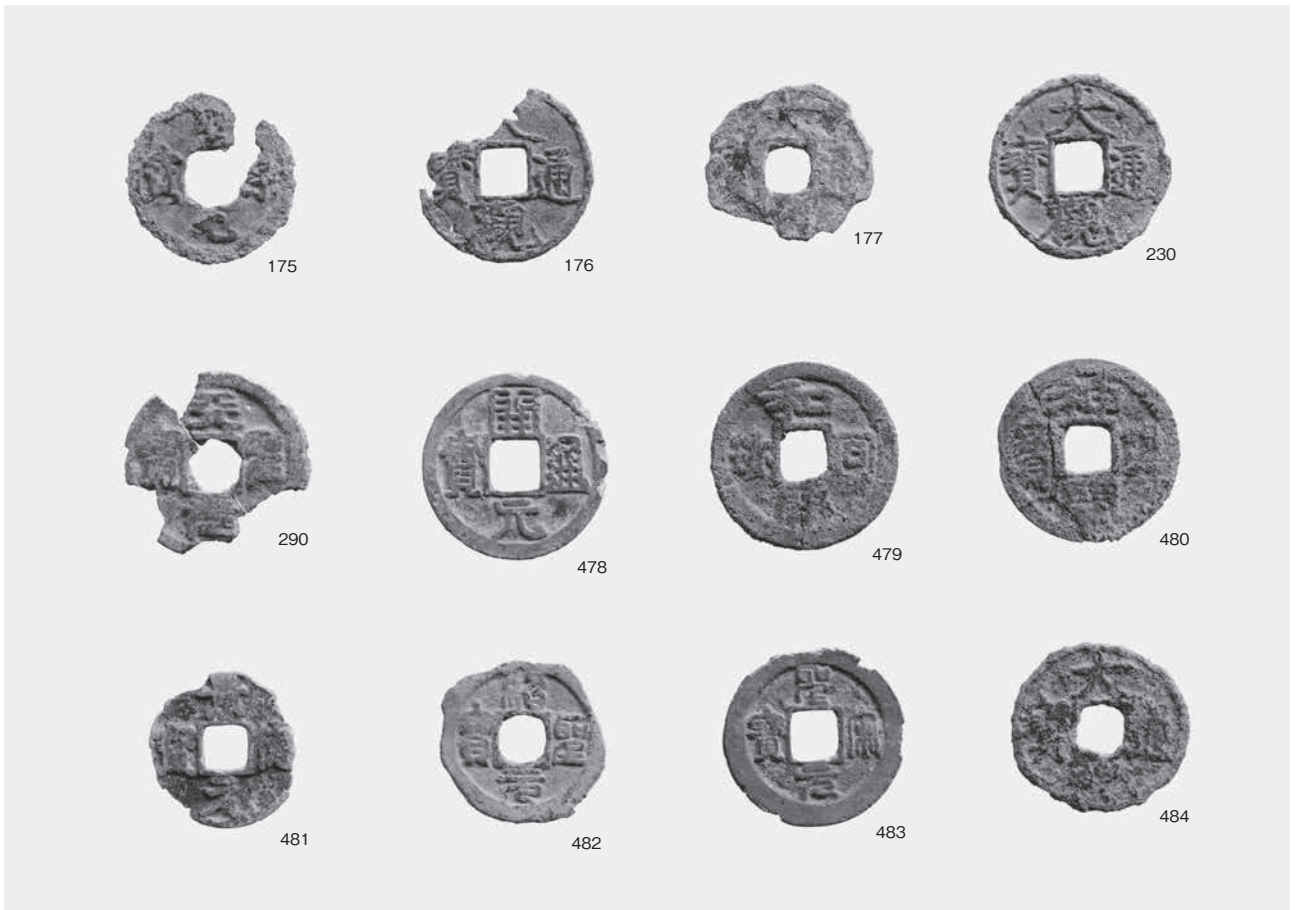


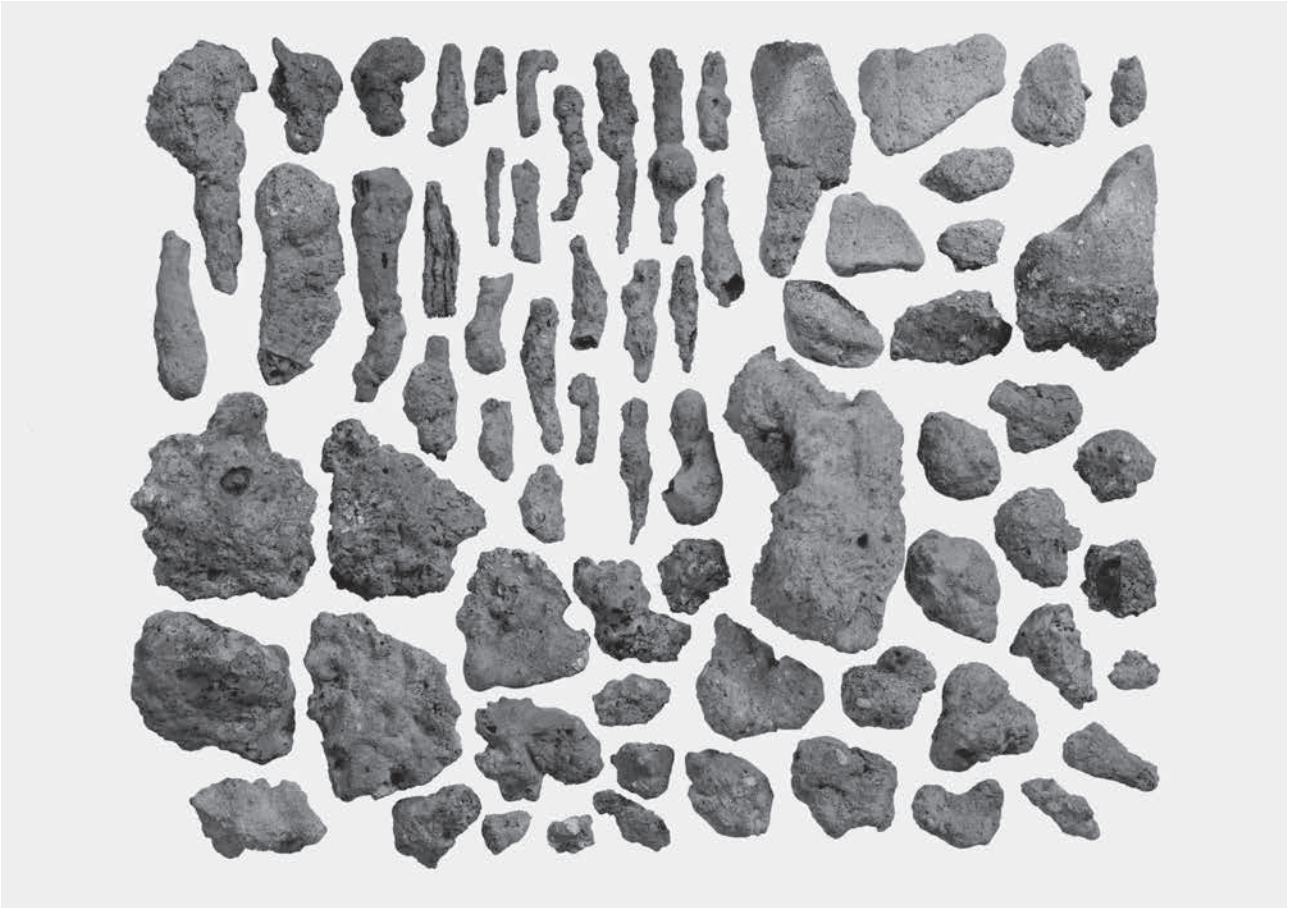
滑石製品



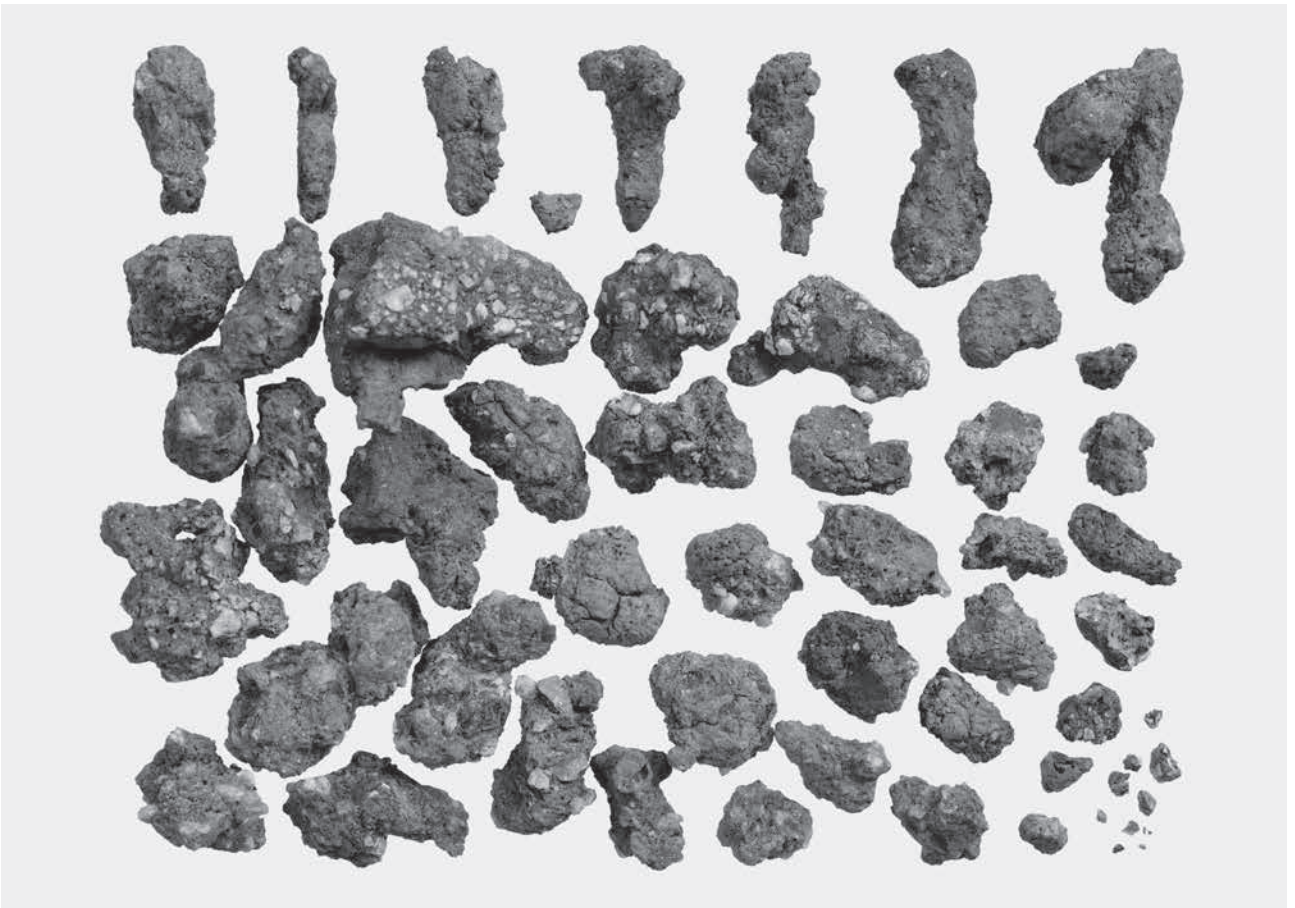
中世の瓦







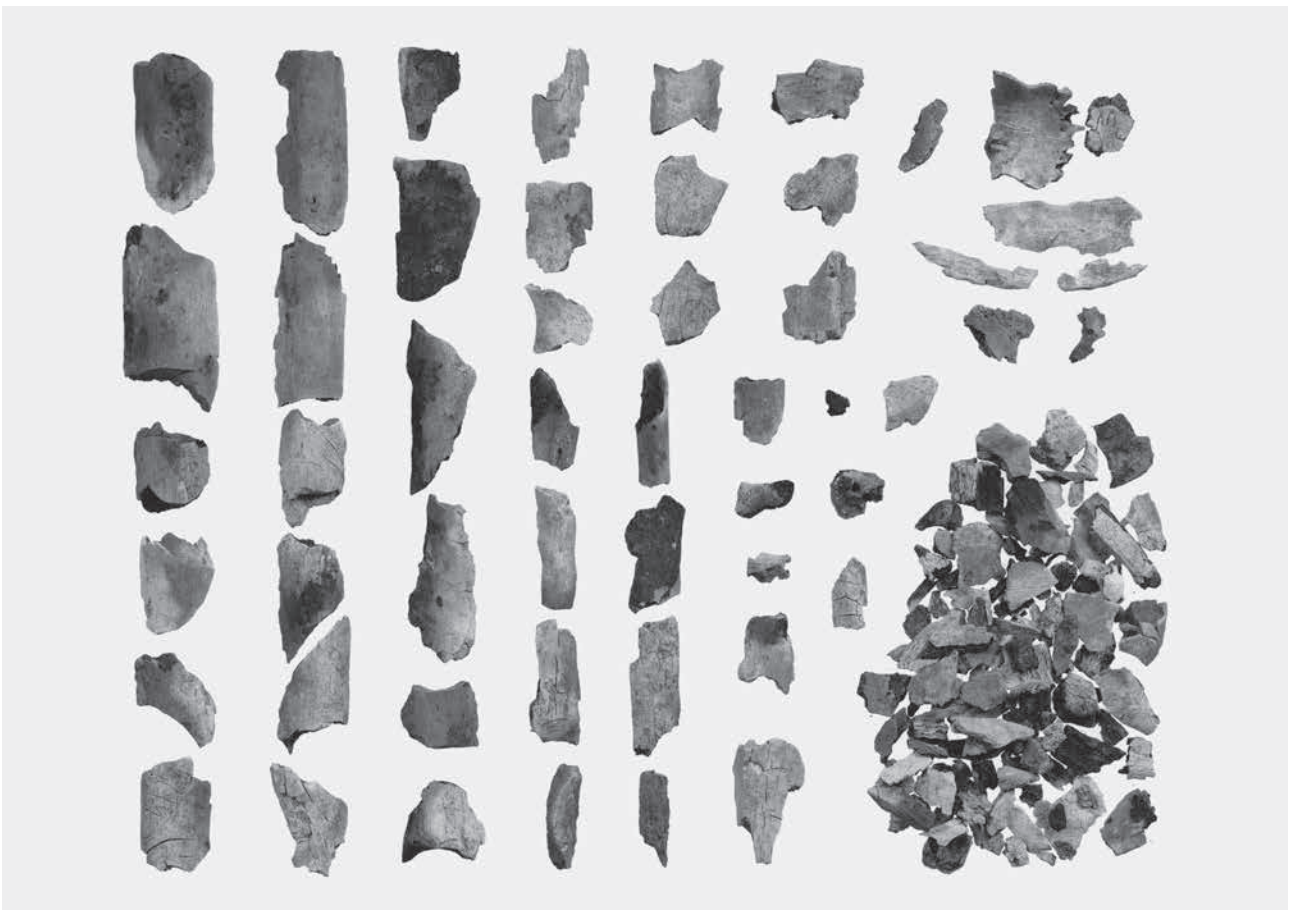
18 豎穴出土鉄釘・滓等



25ピット出土鉄釘・滓



22土坑出土鉄釘・滓等



119墓出土骨

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---------------|---|---|--------------|--------------------|--------------------|-----------------------------|-------|--|
| ふりがな | つだいせきに | | | | | | | |
| 書名 | 津田遺跡Ⅱ | | | | | | | |
| 副書名 | 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | (財)大阪府文化財センター調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第200集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 本間元樹 三好孝一 村上富喜子 奥田 尚 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 大阪府文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel 072(299)8791 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2010年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| つだいせき 津田遺跡 | おおさかひらかたし 大阪府 枚方市 つだみなみまち 津田南町1・2丁目他 | 27210 | 63 | 34° 48' 01" | 135° 42' 23" | 2008.6.20 ～ 2009.5.29 | 3826㎡ | 一般国道1号 バイパス(大阪 北道路)・第二 京阪道路建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 津田遺跡 | 散布地 | 旧石器時代 | | ナイフ形石器 | | | | |
| | 散布地 | 縄文時代 | | 長原式土器 | | | | |
| | 散布地 | 弥生時代 | | 弥生土器 石包丁 | | | | |
| | 集落 | 飛鳥～奈良時代 | 土坑 落ち込み | 埴仏 鋳型 須恵器 瓦 | | 火頭形三尊埴仏出土 | | |
| | 墓 | 平安時代 | 火葬墓 | 灰釉陶器 須恵器 | | | | |
| | 墓 | | 墓 | 輸入陶磁器 短刀 | | 青磁碗2点と皿3点出土 | | |
| | 生産 集落 | 鎌倉時代 | 鍛冶工房 溝 石群 | 鉄釘 滓 焼土塊 瓦器 土師器 | | | | |
| 社寺 | 安土桃山時代 | 礎石建物 石仏列 | 瓦 青銅製品 石仏 | | 懸仏 鏡像 阿弥陀如来 | | | |
| 要約 | 津田遺跡 | <p>旧石器時代以降の遺物と、飛鳥時代から安土桃山時代までの各時代の遺構を検出した。なかでも、次の各時代の遺構・遺物が重要である。</p> <p>飛鳥時代～奈良時代では、落ち込みや包含層から出土した火頭形三尊埴仏、小形独尊埴仏、鋳型が特筆される。須恵器をはじめ、土師器や瓦も出土した。</p> <p>平安時代では、3基の火葬墓を調査した。3基とも土器は、口縁部が打ち欠かれ、逆位に据えられていた。いずれも9世紀から10世紀前半の所産で、尾張、播磨、美濃といった他地域産である点に注意を要する。</p> <p>鎌倉時代は遺構の最も多い時期である。青磁碗2点、青磁皿3点、瓦器碗1点、鉄製短刀1振、鉄釘などの一括遺物を伴った墓や、床面に大石や炉のある堅穴などを検出した。さらに、溝や多くの石を使って構築された遺構も調査した。</p> <p>安土桃山時代には、寺と推定される礎石建物がある。多量の瓦に加え、懸仏尊像部や線刻十一面観音鏡像などの青銅製品も出土した。阿弥陀如来の石仏列もみられた。</p> <p>以上のように、各時代において宗教や埋葬に関連の深い遺構・遺物を調査した。</p> | | | | | | |

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第200集

津田遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2010年3月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町大字車木215番地